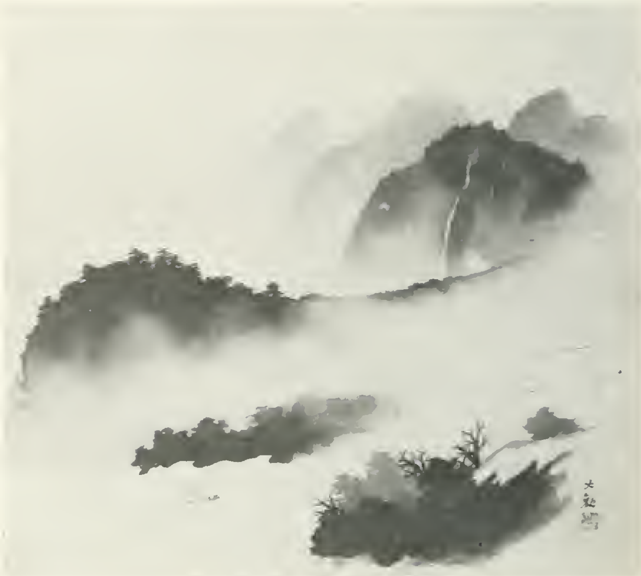


水上瀧太郎全集

一卷



明治四十二年三月二十八日撮影



水上瀧太郎に因みて　横山大觀畫

小說 一

目次

山の手の子

お屋敷の子と生れた悲哀を、沁み〻〻と知り初めたのは何時からであつたらう。一日一日と限り無き喜悦に滿ちた世界に近付いて行くのだと、未來を待つた少年の若々しい心も、時の進行に連れて何時かしら、何氣なく過ぎて來た歸らぬ昨日に、身も魂も投出して追憶の甘き愁に耽り度いと云ふ果敢無い慰藉を弄ぶやうになつてから、私は私に何時も斯う尋ねるのであつた。

山の手の高臺もやがて盡きようと云ふだらだら坂を丁度登り切つた角屋敷の黑門の中に生れた私は、幼き日の自分を其黑門と切離して想起すことは出來無い。私の家を終りとして丘の上は屋敷門の薄暗い底には何物か潛んで居るやうに、牢獄のやうな大きな構造の家が嚴めしい塀を連ねて、何處の家でも廣く取圍んだ庭には鬱蒼と茂つた樹木の間に春は梅、櫻、桃、李が咲揃つて、風の吹く日には何處の家の梢から散るのか見も知らぬ種々の花が庭に散り敷いた。そればかりではない、もう二十年も前に其の丘を去つた私の幼い心にも深く沁み込んで忘れられないのは、寂然した屋敷々々から、花の頃月の宵などには申合せたやうに單調な懶い、古びた琴の音が洩れ聞

えて淋しい涙を誘ふのであつた。私は斯うした丘の上に生れた。靜寂な重苦しい陰鬱な此の丘の端れから狹いだらだら坂を下ると、カラリと四圍の空氣は變つてせゝこましい、軒の低い家ばかりの場末の町が帶のやうに繁華な下町の眞中へと續いて居た。

今も靜に眼を閉て昔を描けば、坂の兩側の小さな、つゝましやかな商家がとびとびながらも瞭然と浮んで來る。赤々と禿た、肥つた翁が丸い鐵火鉢を膝子のやうに抱いて、睡た相に店番をして居た唐物屋は、長崎屋と云つた。其頃の人々には未だ見馴れなかつた西洋の帽子や、肩掛や、リボンや、種々の派手な色彩を掛連ねた店は子供の眼には寧ろ不可思議に映つた。其店で私は、動物、植物或は又滑稽人形の繪を切つて湯に浮かせ、つぶつぶと紙面に汗をかくのを待つて白紙に押付けると、其の獸や花や人の繪が奇麗に映る西洋押繪と云ふものを買ひに行つた。

「坊ちやん。今度はメリケンから上等舶來の押繪が參りましたよ。」

と禿頭は玻璃棚からクルクルと卷いたのを出しては店先に擴げた。子供には想像も付かない遠い遠いメリケンから海を渡つて來た奇妙な慰藉品を私は何んなに憧憬を以て見たらう。油繪で見る樣な天使が大きな白鳥と遊んで居る有と有ゆる美しい花鳥を集めた異國を想像して何んなに懷かしみ焦れたらう。實際在來の獨樂、凧、太鼓、そんな物に飽た御屋敷の子は、珍物好の心から

烈しい異國趣味に陷つて何でも上等舶來と云はれなければ喜ばなかつた。長崎屋の筋向の玩具屋の、私はいゝ花客だつた。洋刀、喇叭、鐵砲を肩に、腰にした坊ちやんの勇しい姿を坂下の子等は何んなに羨しく妬しく見送つたらう。何時だつたか父母が旅中御祖母樣と御留守居の御褒美に西洋木馬を買つて頂いたのも其の家であつた。白斑の大きな木馬の鞍の上に小さい主人が、兩足を踏張つて跨がると、白い房々した鬣を動かして馬は前後に搖れるのだつた。

「マア、玩具にまで何兩と云ふ品が出來るのですかねえ、今時の子供は幸福ですねえ。」

と御祖母樣はニコニコして見てゐらつしやつた。玩具屋の側を次第に下つて行くと坂の下には繪雙紙屋が在つた。此の店には千代紙を買ひに行く、私の姉のお河童さんの姿も屢々見えた。芳年の三十六怪選の勇しくも物恐ろしい妖怪變化の繪や、三枚續の武者繪に、乳母や女中に手を曳かれた坊ちやんの足は幾度もその前で動かなくなつた。就中忘れられないのは古い錦繪で、誰の筆か瀧夜叉姫の一枚繪。私が誕生日の祝物に何が欲いと聞かれて、彼と答へたので散歩がてらに父に連れられて行つた時「之は賣物では御座いません」と六ケしい顏の亭主が云つてから亭主を憎いと思ふよりも一層姫の美しい姿繪が懷しくなつた。其他其處らには吳服屋、陶器屋、葉茶屋、なぞがあつたやうだが私はそれらに付て懷しい何の思ひ出も無い。坂下も亦繪雙紙屋の側の熊野

神社、それと向合つた柳の木に軒燈の隱れた小さな煙草屋の外は矢張り記憶から消えて了つたけれども其の小さな煙草屋の玻璃棚が並べられて、僅に板敷を殘した店先に、私の幼かつた姿が瞭然と佇むのである。

私の生れた黒門の内は、家も庭もじめじめと暗かつた。さる旗本の古屋敷で、往來から見ても塀の上に蒼黒い樹木の茂りが家を隱して居た。可成廣い庭も、大木が造る影に全體苔蒸して日中も夜のやうだつた。それでも流石に春は植込の花の木が思ひがけない庭の隅々にも咲いたけれど、やがて五月雨の頃にでもならうものなら絶間もなく降る雨はしとしとと苔に沁みて一日や二日からりと晴ても乾く事ではなく、だゞつ廣い家の踏めばぶよぶよと海のやうに思はれる室々の疊の上に蛞蝓の落て匍ふやうなことも多かつた。物心つく頃から私は此の陰氣な家を嫌つた。そして時たま乳母の背に負はれて黒門を出る機會があると坂下のカラカラに乾き切つた往來で、獨樂廻しやメンコをする町の子を見て、自分も乳母の手を離れて、あんなに多勢の友達と一緒に遊び度いと思ふ心を強くするのみであつた。乳母は、

「町つ子とお遊びになつてはいけません。」

と瘦せた蒼白い顔を殊更眞面目にして誡めた。何故といふ事は無しに私は町つ子と遊んでは不可ないものだと思つて居る程幼なかつた。其頃私は毎晩母の懷に抱かれて、竹取の翁が見付た小さいお姫様や、繼母にいぢめられる可哀さうな落窪のお話を他人事とは思はずに身にしみて、時には涙を溢して聞きながら何時かしら寢入るのであつたが或晩から私は乳母に添寢されるやうになつた。

「もう直き赤さんがお生れになると、新樣はお兄いさんにお成になるのですから、お母樣に甘つたれてゐらつしやつてはいけません。」

と云ひ聞かされて、私は小さい赤坊の兄になるのを嬉しくは思つたが母の懷に別れなければならない事の悲さに涙ぐまれて冷い乳母の胸に顏を押當てた。

間もなく母は寢所を出ない身となつた。家内の者は何かしら氣忙しさうに、物言ひも聲を潛めるやうになり相手をして與れる事もなくなつた。私の乳母さへも年役に、若い女のともすれば騷ぎたがるのを叱りながらそわそわ立働いて居て私をば顧る事が少なくなつた。出産の準備に混亂した家の中で私は孤獨をつくづく淋しいと思つた。お祖母樣のお氣に入で夜も郞下續きの隱居所に寢る姉も、其頃習ひ初めた琴を彈く事さへ止められて、一人で人形を抱へては、遊び相手を欲

がつて常は疳癪を恐れて避けて居る弟をもお祖母様の傍に呼んで飯事の旦那様にするのであつたが、それも直きと私の方で飽が來てふいとしたことから腕白が出ては姉を泣かすのでお祖母様や乳母に叱られる種となつた。腕白盛の坊ちやんは「靜にしてゐらつしやい」と云はれて人氣の少ない、室の片隅に手遊品を並べても少時經つと厭になつて忙しい人々に相手を求めるので「ちつとお庭にでも出てお遊びなさい」と家の内から追ひ立てられる。

黑土の上に透間も無い苔は木立の間に形ばかり付いて居た小道をも埋めて踏めばじとじと音も無く水の湧出る小暗い庭は、話に聞いた種々の恐ろしい物の住家のやうに思はれ、自由に遊び廻る氣にはなれないので縁近い處で滿らなくすくむで居た。けれども次第に馴れて來ると未だ見ぬ庭の木立の奥が何となく心を引くので、恐々ながらも幾年か箒目も入らずに朽敗した落葉を踏んでは、未知の國土を探究する冒險家のやうに、不安と好奇心で日に日に少しづゝ繁つた枝を潜り〳〵奥深く進入るやうになつた。手入をしない古庭は植物の朽た匂ひが充て居た。數知れぬ羽蟲は到る所に影のやうに飛で居た。森閑として木下闇に枯葉を踏む自分の足音が幾度か耳を脅した。蜘蛛の巣に顏を包まれては土蜘蛛の精を思ひ出して逃げかへつた。然し斯うして踏馴た道を知らず〴〵に造つて私は遂に我家の庭の奥底を究めたのであつた。暗綠のしめつぽい木立を抜け

るとカラリと晴た日を充分に受けて、其處はまばらに結つた竹垣も何時か倒れては居たが垣の外は打立てたやうな崖で、眼の下には坂下の町の屋根が遠く迄晝の光の中に連つて居る。その果てに品川の海が眞蒼に輝いて居た。今迄思ひもかけなかつた眼新しい、廣い景色を自分一人の力で見出した嬉しさに私は雨さへ降らなければ毎日一度は必ず崖の上に小さい姿を現はすやうになつた。そして馴るに從つて日一日と何かしら珍しい物を發見した。熊野神社の大鳥居も見えた。三吉座といふ小芝居の白壁に幾筋かの贔負幟が風に吹かれて居るのを、一樣に黑い屋根の間に見出した時は殊に嬉しかつた。芝居好の車夫の藤次郎が父の役所の休日には私の守をしながら、

「乳母には祕密ですぜ。」

と云つては肩車に乘せて其の三吉座の立見に連れて行く。父母と共に行く歌舞伎座や新富座の緋毛氈の美しい棧敷とは打つて變つて薄暗い鐵格子の中から人の頭を越して覗いたケレン澤山の小芝居の舞臺は子供の目には反つて不思議に面白かつた。殊に大向ふと云はず土間も棧敷も一齊に贔負々々の名を呼び立て、若しか敵役でも出ようものなら熱誠を籠めた怒罵の聲が場内に充滿になる不秩序な賑やかさが心も躍るやうに思はせたのに違ひない。私は藤次郎の云ふまゝに乳母には隱れて度々連れて行つて貰つたものだつた。靜寂な木立を後にして崖の上に立て居ると芝居

の內部の鳴物の音が瞭然と耳に響くやうに思はれて彼の坂下の賑はひの中に飛で行き度い程一人ぼつちの自分がうら淋しく思はれた。

それは確に早春の事であつた。日每に一人で訪づれる崖には一夜の中に著しく延びて綠を增す雜草の中に見る限りいたいた草の花が咲いて居た。其草の中にスクスクと拔出た虎杖を取る爲に崖下に打續く裏長屋の子供等が、嶮しい崖の草の中をがさがさあさつて居た。小汚ない服裝をした鼻垂しではあつたが犬のやうに輕快な身のこなしで、群を作つて放肆に遊び廻つて居るのが遊相手の無い私には何んなに懷しくも羨しく思はれたらう。足の下を覗くやうに崖端へ出て、自分が一人ぼつちで立つて居る事を子供等に知つて貰ひ度いと思つたが此方から聲を掛ける程の勇氣もなかつた。全く違つた國を見るやうに一擧一動の掛放れた彼等と、自分も同じやうに振舞ひ度いと思つて手の屆く所に生えて居る虎杖を力充分に拔いて、子供達のするやうに靑い柔い莖を嚙んでも見た。しくしくと冷め度い酸い草の汁が蟲齒の虛孔に沁み入つた。

斯うした果敢ない子供心の遣瀨なさを感じながら日每同じ場所に立つ御屋敷の子の白いエプロンを掛けた小さい姿を、やがて長屋の子等が崖下から認めた迄には、如何にかして、自分の存在

を彼等に知せようとする瓦を積んでは崩すやうな取り止めも無い謀略が幼い胸中に幾度か徒事に延らされたのであつたが遂々何の手段をも自分からする事なく或日崖下の子の一人が私を見付てくれたが偶然上を見た子が意外な場所に佇む私を見るとさも吃驚したやうな顔をして仲間の者にひそひそと私語く氣配だつた。かさかさ草の中を潛つて居た子供の顔は人馴ぬ獸のやうに疑深い眼付で一樣に私を仰ぎ見た。

其の翌日。もう長屋の子と友達になつたやうな氣がして、何日もよりも勇んで私は崖に立つて待つて居た。やがてがやがや列を作つてやつて來た子供達も私の姿を見て怪しまなかつた。

「坊ちやん、お遊びな。」

と輕く節を付けて昨日私を見付けた子が馴々しく呼んだ。私は何と答へていゝのか解らなかつた。「町つ子と遊んではいけません」と云つた乳母の言葉を想起して何か大きな惡い事をしてしまつたやうに心を痛めた。それでも、

「坊ちやんお出でよ。」

と氣輕に呼ぶ子供に誘はれて、ついつい一言二言は口返へしをするやうになつたが惡戯子も、流石に高い崖を攀登つて來る事は出來ないので大きな聲で呼び交すより詮方が無かつた。

此様な日が續いた或日、崖上の私を初めて發見した魚屋の金ちやんは表門から町へ出て來いと云ふ智惠を私に與へた。暫時は不安心に思ひ迷つたが遊び度い一心から産婆や看護婦にまじつて乳母も女中達も産所に足を運んで居る最中を私の小さな姿は黑門を忍び出たのである。曾て一度も人手を離れて家の外を歩いた事の無かつた私は、烈しい車馬の往來が危つかしくて、折角出た門の柱に噛り付いて不可思議な世間の活動を臆病な眼で見て居るのであつた。

麗な春の晝は、勢よく坂を馳下つて行く俥の輪があげる輕塵にも知られた。甘まぐるしい坂下の町を暫眺めて居ると天から地から滿ち溢れた日光の中を影法師のやうな一隊が横町から現はれて坂を上つて來た。

「坊ちやんお遊びな。」

と遠くから聲を揃へて迎ひに來た町つ子を近々と見た時私は思はず門内に馳込んで了つた。汚ならしい着物の、埃まみれの顏の、眼ばかり光る鼻垂しは手手に棒切を持つて居た。

「坊ちやん、お出でな皆で遊ぶからよ。」

中では一番年增の金ちやんは尻切草履を引ずつて門柱に手を掛けながら扉の陰にかくれて恐々覗いて居る私を誘つた。坊ちやんの小さい姿は町つ子の群に取卷かれて坂を下つた。

間も無く私は兄になつた。其の當座の混雜は、私をして自由に町つ子となる機會を與へた。或は邪魔者の居ない方がかゝる折には結句いゝと思つて家の者は知つても默つて居たのかも知れない。

比較的に氣の弱いお屋敷の子は荒々しい町つ子に混つて負を取らないで遊ぶ事は出來なかつたが彼らは物珍しがつて私をばちやほやする。私は又何をしても敵ひさうもない喧嘩早い子供達を恐いとは思ひつゝも窮屈な陰氣な家に居るよりも誰に咎められる事も無く氣儘に土の上を馳廻るのが面白くて、遊びに疲れた別れ際に「明日もきつとお出で」と云はれるまゝに日毎に其の群に加はつた。

私達の遊び場となつたのは熊野神社の境内と柳屋と云ふ烟草屋の店先とであつた。柳屋の店には何時でも若い娘が坐つて居た。何と云ふ名だつたか忘れてしまつたけれども色白の肥つた優しい女だつた。私は柳屋の娘と云ふと黃縞に黑襟で赤い帶を年が年中して居たやうに印象されて居る。弟の清ちやんは私が一番の仲よしで町ッ子の群の中では小ざつぱりした服裝をして居た。そして私と清ちやんが年も背丈も誰よりも小さかつた。柳屋の姉弟にはお母さんが無く病身のお父

さんが、何時でも奥で咳をして居た。店先には夏と限らずに縁臺が出してあつたもので、私達ばかりか近所の店の息子や小僧が面白づくの烟草をふかしながら騒いで居た。

「彼奴等は清ちやんの姉さんを張りに來てやがるんだよ。」

と云ふ金ちやんの言葉の意味は解らぬながらも私は娘の爲に心を配はした。けれども果敢ない私の思ひ出の中心となるのは此の柳屋の娘ではなかつた。

都もやがて高臺の花は風も無いのに散盡す頃であつた。或日私は何時もの通り黒門を出て坂を小走りに馳下つた。其日に限つて私より先には誰も出て來て居ないので、私は暫く待つ積りで柳屋の縁臺に腰かけた。店番の人も見えなかつたが程無く清ちやんが奥から馳出して來る。續いて清ちやんの姉さんも出て來て、

「オヤ、坊ちやん一人ッきり。」

と云ひながら私の傍に坐つた。派手な着物を着て櫻の花簪をさして居た。私の頰にすれ／＼の顔には白粉が濃かつた。

「今日は皆遊びに來ないのかい。」

「エヽ、町内の御花見で皆で向島に行くの。だから坊ちやんは又明日遊びにお出で。」

娘は諭すやうに私の顔を覗き込んだ。

間もなく「今日は」と仇つぽい聲を先にして横町から町内の人達だらう、若衆や娘がまじつて金ちやんも鐵公も千吉も今日は泥の付かない着物を着て出て來た。三味線を擔いだ男も居た。

「アラ、今丁度出掛けようと思つて居た處なの。如何もわざ〳〵誘つて頂いて濟みません。」

清ちやんの姉さんはいそ〳〵と立上つた。私は人々に顔を見られるのが氣まりが惡くてもじもじして居た。

「どうも扮裝に手間がとれまして困ります。サア出掛けようぢやあがあせんか。」

と赤い手拭を四角に疊んで禿頭に載せたぢゞいが剽輕な聲を出したので皆一度に吹出した。

「厭な小父さんねえ。」

と柳屋の娘は袂を振上て一寸睨んだ。

どや〳〵と歩き出す人々にまじつた娘は「明日お出で」と云つて私を振向いた。

「坊ちやんは行かないのかい、一緒にお出でよ。」

と金ちやんが叫んだけれども誰も何とも云つて呉る人は無かつた。私は埃を上げてさんざめか

して行く後姿を淋しく見送つて居ると、人々の一番後に殘つて、柳屋の娘と何か私語を合つて居た、先刻「今日は」と眞先に立つて來た娘がしげ〳〵と私を振かへつて見て居たが小戻して不意に私を抱き上げて何も云はないで頰ずりした。驚いて見上る私を蓮葉に眼で笑つて其のまゝ清ちやんの姉さんと手を引合つて人々の後を追つて行つた。それが金ちやんの姉のお鶴だと云ふ事は後で知つたが紫と白の派手な手綱染の着物の裾を端折ツて、紅の長襦袢がすらりとした長い脛に絡んで居た。銀杏返に大きな櫻の花簪は清ちやんの姉さんとお揃ひで襟には色染の櫻の手拭を結んで居た姿は深く眼に殘つた。私は一人悄然と町内のお花見の連中が春の町を練て行く後姿が、町角に消える迄立盡したがそれも見えなくなると俄に取殘された悲しさに胸が迫つて來て思はず涙が浮んで來た。

多數者の中で人々と共に喜び共に狂ふ事も出來ない淋しい孤獨の生活を送る私の一生は御屋敷の子と生れた事實から切離す事の出來無い運命であつたのだ。小さな坊ちやんの姿は一人花見連とは反對に坂を登つて、やがて恨めしい黒門の中に吸はれた。

珍しい玩具も五日十日とたつ中には投出されたまゝ顧られなくなるやうに、最初の中こそ「坊

ちやん／＼と囃し立てた子供も、やがて烟草屋の店先の柳の葉も延び切つた頃には全く私に飽て了つて坊ちやんは最早大將としての尊敬は失はれて金ちやんの手下の一人に過ぎなかつた。

「何んでえ弱蟲。」

斯う云つて肱を張つて突かゝつて來る鼻垂しに逆らふ丈の力も味方も無かつた。けれども矢張毎日のやうに遊び仲間を求めて町へ出たのは小さい妹の爲に家中の愛を奪はれ、乳母をさへも奪はれたが爲に家を嫌つたよりもお鶴と云つた魚屋の娘に逢ひ度いためであつた。

子供の眼には自分より年上の人、殊に女の年齡は全く測る事が出來ない。お鶴も柳屋の娘も私には唯娘であつたとばかりで其年頃を明確と云ふ事は思ひも及ばない事に屬して居る。お鶴は烟草屋の柳の陰の緣臺の女主人公であつた。色の蒼白い脊丈の割合に顏の小さい女で私は今、そのすらりとした後姿を見せて蓮葉に日和下駄を鳴らして行くお鶴と、物を云はない時でも底深く湛ふ水のやうな涼しい眼を持つたお鶴とを殊更瞭然と想ひ出す事が出來る。

きら／＼と暑い初夏の日がだらだら坂の上から眞直に流れた往來は下駄の齒がよく冴えて響く。日に幾度となく撒水車が町角から現はれては、商家の軒下迄も濡して行くが、見る間に又乾き切つて白埃になつて了ふ。酒屋の軒には燕の子が嘴を揃へて巢に啼いた。氷屋が砂漠の綠地のやう

に僅に涼しく眺められる。一日一日と道行く人の着物が白くなつて行くと柳屋の縁臺は愈々賑やかになつた。派手な浴衣のお鶴も、街に影の落る頃きつと横町から姿を見せるのであつた。「今日は」と遠くから聲を掛けて若衆の中でも構はずに割込んで腰を下した。

「坊ちやん。此處にゐらつしやい。」

とお鶴は何時も私を其膝に抱いて後から頬ずりしながら話の中心になつて居た。私はもう汗みづくになつて熊野神社の鳥居を廻つて鬼ごつこをする金ちやんに從つて行かうとはしないで、よくは解らぬながらも縁臺の話を聞いて居た。勿論話は近所の噂で符徴まじりのものだつた。「お安くないね」「御馳走さま」と云ふやうな言葉を小耳に挾んで歸つて、乳母に叱られた事もあつた。若い娘の輕い口から三吉座の評判も屢々出た。お鶴は口癖のやうに、

「死んだと思つたお富たあ……お釋迦様でも氣がつくめえ。」

と一寸澄ましてやる聲色は「ヨウノ\梅ちやんそつくり」と云ふ若者達の囃す中で聞かされて私も時たま人の居ない庭の中などでは小聲ながらも同じ文句を繰返した。尾上梅之助と云ふ若い役者が三吉座を覗く場末の町の娘子をしてどんなにか胸を躍らせたものであつたらう。藤次郎の背に乘つた私は、「色男」「女殺し」と云ふ若者のわめきにまじる「いゝわねえ」「奇麗ねえ」と、感激

に息も出來ない娘達の吐息のやうな私語を聞き洩さなかつた。私も何時も奇麗な男になる梅之助が好きだつたけれど餘りにお鶴がほめる時は微かに反感を懷いた。

「下生着劑に振袖から、髷も島田に由井ヶ濱、女に化けて美人局……。ねえ坊ちやん。梅之助が一番でせう。」

と云つてお鶴は例のやうに頰を付ける。私は人前の氣恥かしさに、

「梅之助なんか厭だい。」

と云ふのだつた。實際連中は、お鶴が何時も私を抱いて居るので面白づくによく〱戲弄つた。

「お鶴さんは坊ちやんに惚れてるよ。」

私は何かしら眞赤になつてお鶴の膝を抜出ようとするとお鶴は故意と力を入れて抱締める。

「左樣ですねえ。私の旦那樣だもの。皆嫉いてるんだよ。」

「嫌だい〱。」

足をばたばたやりながら擦付ける頰を打たうとする、その手を取つてお鶴はチユツと音をさせて唇に吸ふ。

「ア、ア、私は坊ちやんに嫌はれて了つた。」

さも落膽したやうに云ふのであつた。

やがて今日も坂上にのみ殘つて薄明も坂下から次第に暮初めると誰からともなく口々に、

「夕燒小燒、明日天氣になあれ。」

と子供等は歌ひながら彼處此處の横町や露路に遊び疲れた足を物の匂ひの漂ふ家路へと夕餉の爲に散つて行く。

「お土産三つで氣が濟んだ。」

と背中をどやして逃出す素早い奴を追掛けてお鶴も「明日又お出で」と云つて、別れ際に今日の終りの頬擦をして横町へ曲つて行く。

私は何時も父母の前にキチンと坐つて、食膳に着くのにさへ掟のある、堅苦しい家に歸るのが何だか心細く、遠ざかり行く子供の聲を果敢ない別れのやうに聞きながら一人で坂を上つて黒門を這入つた。夕暮は遠い空の雲にさへ取止もない想を走せてしつとりと心もうちしめり譯もなく涙ぐまれる悲しい癖を幼い時から私は持つて居た。

玄關を這入ると古びた家の匂ひがプンと鼻を衝く。駄々廣い家の眞中に掛かる燈火の光の薄らぐ隅々には壁蟲が死絶えるやうな低い聲で啼く。家内を歩く足音が水底のやうに冷めたく心の中

へも響いて聞える。世間では最も樂しい時と聞く晩餐時さへ嚴めしい父に習つて行儀よく笑聲を聞くこともなく終了になつて了ふ音樂の無い家の佗しさは又私の心であつた。お祖母樣や乳母やに夜に聞かされたお化の話は總て我家にあつた出來事ではないかと夜は何時でも微かな物音にさへ慴え易かつた。自然と私は朝を待つた。町つ子の氣儘な生活を羨んだ。

カラリと晴れた靑空の下に物皆が動いて居る町へ出ると蘇生つたやうに胸が躍つて全身の血が勢よく廻る。早くも街には夏が漲つて白く輝く夏帽子が坂の上、下へと汗を拭き〳〵消えて行く。殊更暑い日中を擇んで菅笠を被つた金魚屋が「目高、金魚」と燒付くやうな人の耳に、涼しい水音を偲ばせる賣聲を競ふ後からだらりと白く乾いた舌を垂して犬がさも肉體を持餘したやうについて行く。夏が來た〳〵。其の夏の熊野神社の祭禮も忘れられない思ひ出の一頁を占めねばならぬ。

町内の表通りの家の軒には何處も揃ひの提灯を出したが屋根と屋根との打續く坂下は奇麗に花々しく見えるのに、塀と塀とは續いても隣の家の物音さへ聞えない坂上は大きな屋敷門に提灯の配合が惡く、反つて墓場のやうに淋しかつた。それぱかりか私の家なぞは祭と云つても別段何を

するのでもないのに引替て商家では稼業を休んでまでも店先に金屏風を立廻し、緋毛氈を敷き、曲りくねつた遠州流の生花を飾つて客を待つ。娘達も平生とは見違へる様に奇麗に着飾つて何かにつけてはれがましく仰山な聲を上げる。若衆子供は夫々揃の浴衣で威勢よく馳廻る。ワツショウ／＼／＼と神輿を擔ぐ聲はたゞさへ汗ばんだ町中の大路小路に暑苦しく聞える。斯う云ふ時に日頃町内から憎まれて居たり、祝儀の心附が少なかつたりした家は思はぬ返報をされるものだつた　坂上の屋敷へも鐵棒でガチヤン／＼と地面を打つて脅す奴を眞先に何れも酒氣を吐いてワツシヨイワツシヨイと神輿を擔ぎ込む。それをば、もう來る頃と待て居て若干祝儀を出すと又ワツシヨウ／＼と溫和く引上て行くが何時の祭の時だつたかお隣の大竹さんでは心付か少ないと云ふので神輿の先棒で板塀を滅茶々々に衝破られた事があつたのを、我家も同じ目に逢はされはしないかと限りなき恐怖を以て私は玄關の障子を細目にあけながら乳母の袖の下に隱れて恐々神輿か黑門の外の明るい町へと引上て行くのを覗いたものだつた。子供連も手々に樽神輿を擔ぎ廻つて喧嘩の花を咲かせる。揃の浴衣に黃色く染めた麻糸に鈴を付けた襷をして、眞新しい手拭を向ふ鉢卷にし、白足袋の足にまでも汗を流してヤツチヨウヤツチヨウと馳出すと背中の鈴がチヤラチヤラ鳴つた。女中に手を曳れて人込におど／＼しながら町の片端を平生の服裝で賑はひを見物す

るお屋敷の子は、金ちゃんや清ちゃんの汗みづくになつて飛廻る姿をどんなに羨しくも悲しくも見送つたらう。

やがて祭が終つても柳屋の店先はお祭の話ばかりだつた。向ふ横町の樽神輿と衝突した子供達の功名談を妬しい程勇ましいと思つた。若衆の間に評判される踊屋臺にお鶴が出たと云ふ事は限りなく美しいものに憧るゝ私の心を喜ばせたと共に自分がそれを見なかつた口惜しさもいかばかり深いものであつたらう。けれども私は直ぐさま我が羨望の的だつた繪雙紙屋の店先の瀧夜叉姫の一枚繪をお鶴と結び付てしまつた。お鶴の膝に抱れながら私は聞いた。

「お鶴さんは踊屋臺に出て何をしたの。」

「何だつたらう。當て御覽。」

「瀧夜叉かい。」

「エ、何故。」

「たつて瀧夜叉が一番いゝんだもの。」

お鶴は嬉しさうに笑つて又頬擦をするのだつた。眞實にお鶴が瀧夜叉姫になつたのか如何か。私の云ふまゝに、良い加減に左樣だと答へたものなのか私は知らないが、古い錦繪の瀧夜叉姫と

踊屋臺に立つたお鶴とは全く同一たつたやうに思はれて、踊屋臺を見なかつたにも拘はらず二十年後の今もなほ私はまざ〳〵と美しい繪にしてそれを幻に見る事が出來る。

土用の中は海近い南の濱邊で暮した。一時として靜まらぬ海の不思議が既に子供心を奪つて了つたので私は物欲い心持を知らずに過ぎた。けれども海岸の防風林にも無情い風が日に〳〵吹きつのり別莊町も淋しくなる八月の末には都へ歸らなければならなかつた。歸つた當座は住馴れた我家も何だか物珍しく思はれたが夏の緣に常よりも一層暗くなつた室の中に大人のやうにぐつたりと晝寢する辛棒も出來ないので私は又久し振で町をおとづれた。木蔭の少ない町中は瓦屋根にキラ〳〵と殘暑が光つて龜裂の出來た往來は通魔のした後のやうに時々一人として行人の影を止めないで森閑として了ふ。柳屋の店先に立つた私を迎へたのは、店棚の陰に白い團扇を手にして坐つて居た清ちやんの姉さん一人だつた。

「マア暫振りねえ。何處へ行つて居らしつたの。其樣に日に燒けて。」

娘はニコ〳〵して私を店に腰掛けさせ團扇で搧ぎながら話掛けた。

「誰も居ないのかい。淸ちやんも。」

「エヽ。今しがた皆で蟬を取るつて崖へ行つたやうですよ。」

「誰も來ないのかなあ。」

滿らなさうに私は繰返して云つた。

「誰もつて誰さ。ア、解つた。坊ちやんの仲よしのお鶴さんでせう。坊ちやんはお鶴さんでなくつちやいけないんだねえ。私ともちつと仲よしにおなりな。」

娘は面白さうに笑つた。

夕食の後、家内の者は團扇を手に緣端で涼んで居る中、こつそりと私は未だ明い町へ拔出した。早くも燈火のついた柳屋の店先にはもう二三人若者が集つて居た。子供達は私を珍しがつて種々、と海邊の話を聞きたがつたがそれにも飽ると餓鬼大將の金ちやんを眞先に淸ちやん迄も口を揃へて、

「お尻の用心御用心。」

とお互同志で着物の裾を捲り合つてキヤツ／＼と惡戲を始めたが了ひには止め度がなくなつてお使にやられる通りすがりの見も知らぬ子のお尻を捲つてピチヤ／＼と平手で叩いて泣かせる、若者は面白づくに嗾しかける。私は店先に腰かけて默つて見て居たが小さな女の子までも同じ憂

月に逢つてワアッと泣いて行くのを可哀さうに思つた。
　間もなく町は灯になつて見る間にあわたゞしく日が沈めば何處からともなく暮初て坂の上のほんのり片明りした空に星がチロリ／＼と現はれて烟草屋の柳に涼しい風の渡る夏の夜となる。
「お尻の用心御用心。」
と調子付いた子供の聲は益々高くなつてゆく。
「オイ／＼彼處へ來たのはお鶴ちやんだらう。」
斯う云つた若者の一人は清ちやんの姉さんが止めるのも聞かずに、面白がる仲間にやれ／＼と云はれて子供達に命令けた。
「誰でもいゝからお鶴ちやんの着物を捲つたら氷水をおごるぜ。」
　流石に金ちやんは姉の事とて承知しなかつたが車屋の鐵公はゲラ／＼笑ひながら電信柱の後に隱れる。私は息を殺してお鶴の爲に胸を波打たせた。夜目に際立つて白い浴衣のすらりとした姿をチラ／＼と店灯に浮上らせてお鶴は何時もの通り蓮葉に日和下駄をカラコロと鳴してやつて來る。やり過して地びたを這つて後へ廻つた鐵公の手がお鶴の裾にかゝつたかと思ふと紅が飜つて高く捲れた着物から眞白な脛が見えた。同時に振返つたお鶴は鐵公の頭をピシヤ／＼と平手でひ

つばたいてクルリと踵をかへすと元來た方へカラコロとやがて横町の闇に消えてしまつた。氣を呑まれた若者は白けた顔を見合せてをかしくもなく笑つた。私は強い味方を持てる氣強さと瀧夜叉のやうに凄い程美しい我がお鶴を堪らなく嬉しく懐しく思つたのであつたが待設けた人に逢はれぬ本意なさに未だ崩れない集りを拔けて歸つた。

暗闇の多い坂上の屋敷町は、私をして若い女や子供が一人で夜歩きすると何處からか出て來て生血を吸ふと云ふ野衾の話を想起させた。その話をして聞かせた乳母の里でも村一番の美しい娘か人に逢ひ度いとて闇夜に家を拔出して鎭守の森で待つて居る内に野衾に血を吸はれて冷めたくなつて居たさうだ。氷を踏むやうな自分の足音が冷え初めた夜の町に冴え渡るのを心細く聞くにつけ野衾が今にも出やしないかとビク／＼しながら、一人で夜歩きをした事をつく／＼悔いたのであつた。覆ひかゝつた柴柳に蒼澄んだ瓦斯燈がうすぼんやりと照して居る我家の黒門は、固くしまつて扉に打つた鐵鋲が魔物のやうに睨んで居た。私は重い潛戸を如何して這入る事が出來たのだつたらう。明い玄關の格子戸から家の内へ馳込むと中の間から飛んで出て來た乳母は緊りと私を抱き締めた。

「新樣貴方はマア何處に今頃迄遊んでゐらつしやつたのです。」

あれ程云つて置くのに何故町へ出るのかと幾度か繰返して云ひ聞かせた後、
「もう二度と町つ子なんかとお遊びになるんぢやありません乳母がお母様に叱られます。」
と私の涙を誘ふやうに掻口說くので、何時も私が云ふ事をきかないと「もう乳母は里へ歸つてしまひます」と云ふのが眞實になりはしないかと思はれて知らず／＼ホロリとして來たが、
「新次や新次や。」
と與で呼んでゐらつしやるお母様のお聲の方に私は馳出して行つた。

御屋敷の子と生れた悲哀は沁々と刻まれた。
「卑しい町の子と遊ぶと、何時の間にか自分も卑しい者になつて了つてお父様のやうな偉い人にはなれません。これからはお母様の云ふ事を聞いてお家でお遊びなさい。それでも町の子と遊び度いなら、町の子にしてしまひます。」
と云ふ母の誡を嚴かに聞かされてから私は又掟の中に囚はれて居なければならなかつた。暫は宅中に玩具箱をひつくり返して、數を盡して並べても「眞田三代記」や「甲越軍談」の繪本を幼い手ぶりで彩つても、陰鬱な家の空氣は遊び度い盛りの坊ちやんを長く捕へては居られない。私は又

雑草をわけ木立の中を犬のやうに潜つて崖端へ出て見はるかす町々の賑ひに果敢なく憧憬れる子となつた。

「何故御屋敷の坊ちやんは町つ子と遊んではいけないのだらう。」

斯う自分に尋ねて見たが如何しても解らなかつた。後年、此の時分の、解き難い謎を抱いて青空を流れる雲の行衛を見守つた遣瀬ない心持が、水のやうに湧き出して私は物の哀れを知初めると云ふ少年の頃に手飼の金糸雀の籠の戸をあけて折柄の秋の底迄も藍を湛へた青空に二羽の小鳥を放してやつた事がある。

崖に射す日光は日に日に弱つて油を焦すやうたつた蟬の音も次第に消えて行くと夏もやがて暮初めて草土手を吹く風はいとゞ堪へ難く悲哀を誘ふ。烈しかつた丈に逝く夏は肉體の疲れからも反つて身に沁みて惜まれる。木の葉も凋落する寂寥の秋が迫るに連れて癒し難き傷手に冷え／＼と風の沁むやうに何とも解らないながらも、幼心に行きて歸らぬものゝうら悲しさを私は沁々と知つたやうに思はれる。斯うして秋を迎へた私は果敢なくお鶴と別れなければならなかつた。

或日私は崖下の子供達の聲に誘はれて母の誡を破つて柳屋の店先の縁臺に母よりも懐しかつた

お鶴の膝に抱かれた。

「何故此頃はちつとも來なかつたの。私が嫌になつたんだよ憎らしいねえ。」

と柔かい頬を寄せ、

「私もう坊ちやんに嫌はれて滿らないから藝者の子になつて了ふんだ。」

と云つたお鶴の言葉はどんなに私を驚かしたらう。遠い下町の、華やかな淫らな街に賣られて行くのを出世のやうに思つて面白さうに嬉しさうにお鶴の話すのを私はどんなに悲しく聞いたらう。然しそれも今は忘れようとしても忘れる事の出來ない懷しい思ひ出となつて了つた。

お鶴は既に、明日にも、買はれて行く可き家に連れて行かれる身であつた。其處は鐵道馬車に乘つて三時間もかゝつて行く隅田川の邊りで一町内全體藝者屋で、藝者の子になると美味物が食べられて、奇麗な着物は着たいほうだい、踊を踊つたり、三味線を彈いたりして毎日賑やかに遊んで居られるのだとお鶴は云つた。

「私もいゝ藝者になるから坊ちやんも早く偉い人になつて遊びに來ておくれ。」

お鶴は明日の日の幸福を確く信じて疑はない顏をして云つた。平生よりも一層はしやいで苦の無い聲でよく笑つた。

「今度遊びに行つてい丶かい。」

と私が云つたのを、

「子供の癖に藝者が買へるかい。」

と囃し立てた子供連にまじつてお鶴のはれた聲も笑つた。そして何時もよりも早く歸へると云ひ出して別れ際に、

「私を忘れちや厭だよ、きつと偉い人になつて遊びに來ておくれ。」

と幾度か頰擦をした結局に野衾のやうに私の頰を強く強く吸つた。「あばよ」と云つて、蓮葉にカラコロと歩いて行く姿が瞭然と私に殘つた。

悄然と黒門の内に歸つた私は二度とお鶴に逢ふ時が無かつた。忘れる事の出來ないお鶴に就いて私の追想は餘りに屢々繰返へされたので、もう幼かつた當時の私の心持を其の儘に記す事は出來ないであらう。私は長じた後の日に彩つた記憶だと知りながら、お鶴に別れた夕暮の私を懷しいものとして忘れたい。

「お鶴は行つて了ふのだ。」

と思ふと眼が霞んで何も見えなくなつて、今迄にお鶴が私語いた斷々の言葉や、未だ殘つて居

る頬擦や接吻の澁さ柔かさも總て涙の中に溶けて行つて私に殘るものは悲哀ばかりかと思はれる。堪へようとしても浮ぶ涙を紛らす爲めに庭へ出て崖端に立つた。「お鶴の家は何處だらう」傾く日ざしが僅に殘る、一樣に黑い長屋造りの場末の町とて如何してそれが見分けられよう。悲哀に滿ちた胸を抱いて放肆に町へも出られない掟と誡めとに縛られる御屋敷の子は明日にもお鶴が賣られて行く遠い下町に限りも知らず憧がれた。「子供には買へないと云ふ藝者になるお鶴と一日も早く大人になつて遊び度い。」

見る見る落日の薄明も名殘なく消えて行けば、

「蛙が鳴いたから歸へろ〳〵。」

と子供の聲も黃昏れて水底のやうに初秋の夕霧が流れ渡る町々にチラ〳〵と灯がともると何處かで三味線の音が微かに聞え出した。ポツンポツンと絕え絕えに崖の上迄も通ふ音色を私は如何してもお鶴が彈くのだと思はないでは居られなかつた。そして何だか其の絃に身も魂も誘はれて行くやうにいとせめて遣瀨ない思ひが小さな胸に充分になつた。「お鶴は行つて了ふのだ」――一人ぽつちになつて了ふのだ」とうら悲しさに迫り來る夜の闇の中に泣濡れて立つて居た。

ふと私は木立を越した家の方で「新樣新樣」と呼ぶ女中の聲に氣が付くと始めて闇に取卷かれう

なだれて佇む自分を見出して夜の恐怖に襲はれた。息も出來ないで夢中に木立を拔けた私は緣側から座敷へ馳上ると突然端近に坐つて居た母の懷にひしと縋つて聲も惜しまずに泣いた。淚が盡きるまで泣いた。

あゝ思ひ出の懷かしさよ。大人になつて、偉い人になつて、遊びに行くと誓つた私は御屋敷の子の悲哀を抱いて掟られ縛められ僅に過し日を顧みて慰むのみである。お鶴は何處に居るのか知らないが過し日の果敢なき美しき追想に私はお鶴に別れた夕暮、母の懷に縋つて淚を流した心持をば、悲しくも懷かしくも嬉しき思ひ出として二十歲の今日も沁み沁みと味ふことが出來るのである。（明治四十四年四月四日―十二日）

もの丶哀れ

生れた家は暗かつた。嚴格な父は其の少年時に受けた儒教的教育と、其の青年時に修めた實利主義の學問と、殊に官界から野に下つて或會社事業に其後の一身を全くゆだねて、其の事業の爲には神に對する敬虔な牧師のやうに盡した自家の努力主義から、物質的に成功した人々の免れない著しい褊狹に陷つてゐた。「實業界の君子」と云ふ冷嘲的な響を持つ肩書は常に父の頭の上に置かれた。自分の制定した掟に反する者の面には唾する事を拒まない父の眼からはのらくら者の道樂仕事としか見えない文學、美術、それらのものをば罪惡とした。詩人、小説家、畫家、音樂家、彼らは正しき道を歩む人ではなかつた。斯くて「ねばならぬ」と云ふ掟の中に父の子は育てられたにかゝはらず新次は幼い時から禁園の毒草の烈しい芳香に心を誘はれ、そして知らず識らずに智慧の果實を吸つたのである。

　上手に箸も持てない頃から新次は筆を握つた。文字を知らない時分には好んで畫を描いた。他所の子供が喜ぶやうな鐵砲汽車汽船等の舶來の立派な玩具を貰つても左程にもてはやさないで日がな一日繪草紙を手本に鎧武者や姐様を紙に寫した。理由もないのであつたらうが芳年の「月百

姿」を殊に好んで一枚々々敷き寫しにした。それを見た人々は少なからず感心したが就中祖母は「新次はゑかきにするとい丶」と屢々繰返して幼兒の心をそ丶つた。最初の中こそ自分の子の天分を誇りを以て見てゐた父はやがて「お祖母様からそんな事を云つておだて丶眞實に畫工などになられては困ります」と云つて我子の筆を持つ事を嫌ふやうになつた。

間もなく學校へ通ふやうになつた。文字を知ると同時に少年の眼は輝いた。今迄祖母、母、乳母などから聽いた物語よりも直接紙から學ぶ方が強い興味を覺えしめた。小波山人の「お伽噺」と「少年世界」は月々取つて貰つて年を重ねて讀んだが父はそれさへも有害だとした。或夜晩酌の盃を手にしながら「根も葉もない昔話や讀物を聽かせたり讀ませたりすると子供の爲にならん」と云ふ父の錆びた聲を母の膝を枕にうつらうつらしながら聞いた。それからと云ふものは新次は父の前でそれらの本をば開かなくなつた。

薄暗い土藏の二階には黑塗の大きな本箱が幾個も並んで居た。其の蓋を取ると古い黴た紙の匂ひと紙蟲を防ぐ爲の樟腦の香が眼にしみた。文化十一年江戸大傳馬町丁子屋平兵衛板、柳川重信筆の插繪のある「八犬傳」百八冊は一冊宛取出されて殆んど半年の間其土藏の西向の窓のうすあかりで讀まれた。「太平記」「平家物語」「三國誌」。それから新しい物では「浮城物語」「谷間の姫百合」

る種類のものでも面白く讀み得たのであつた。

新次が十三の春の始め或内臓の疾患を得て祖母に連れられて相模の海邊のある寺に殆んど一年あまりを過した事があつた。既に七十に近い祖母は何を爲るともなく眠つたやうに一日を暮してしまふのであつた。時には白髯の長い和尙が茶をすゝりながら祖母に佛の道を說いてゐるのであつたがかゝる變化の無い生活は少年の耐へ得るところではなかつた。母の居る我家戀しと思ふ心から何故ともない涙をひそかに覺えた。まして晝も夜も寂寥の中にたゞ讀經の聲と香の匂ひの漂ふ大寺は早くも少年をして物思ふ事を覺えしめた。門前の貸本屋を日每新次の訪れたのも耐へられぬ心の淋しさに誘はれる思ひがしての事であつた。「雪中梅」「牡丹燈籠」「捨小舟」「鐵假面」「櫻の御所」「桑の弓」「三日月次郞吉」「奴の小萬」「鬼奴」「五重の塔」「髯男」「不言不語」「心の闇」「巴波川」「かくれんぼ」「梅曆」「十五少年」「寬政三勇士」「田沼騷動」「清水定吉」「五寸釘虎吉」「高橋お傳」。順序もなくそれからそれと貸本屋の店棚に並んだ本は總て讀んだ。三遊亭圓朝、尾崎紅葉、幸田露伴、爲永春水、ちぬのうら浪六、村井弦齋、黑岩涙香、松林伯知、齋藤綠雨、末廣鐵腸、森田思軒。これらの人の名を忘れ得ぬものとした。しかしそれらは唯面白かつたと云ふに止つて新次

をして身も魂も打込んで繰返へし／＼讀ませたのは汚ならしく幾多の人の手垢に染んだ文藝倶樂部に連載された泉鏡花の「誓之卷」であつた。

「十一の時母みまかり給ひつ。年紀十四の春のはじめ、其の命日に當りし日なりき。」

恁う云ふ冒頭の句が既に母戀しい少年の心を誘はないでは置かなかつた。新次は祖母から貰ふ小遣ひの幾片かの銀錢を文藝倶樂部七册に代へたのである。母の無い少年が年上の女に對する初戀の詩篇を單に物語として見る事は出來なかつた。幾度も幾度も繰返へして讀んだ。讀めば必ず家を離れ、母に遠ざかつて居る寂しい心の奥底から湧上る涙を誘ふのであつた。遂には、就中、氣に入つた節々をば暗んじて胸の迫る迄口吟んでは涙の浮んで來るのを悲しみ喜んだのであつた。

「然らぬだに、手向の水も涸れがちや、去にし月捧げたる、花の枯れしも果敢なきに、恁う荒れ果てし草葉の蔭の、母の亡骸も年經れば、あとも留めずならむかと、はやくも涙さしぐみぬ。」

新次は之を誦する度、亡母の墓に詣づる少年の心持に、全く自分もなり切つて、本堂の裏手の山腹の墓地へと日毎訪れた。未だ黃ばまない夏蜜柑のたわゝになつた樹の下の草の中に身を倒して大空を靜に流れる雲を見ても遣瀨ない悲しみに耐へられなくなる。遙に見える海の波もない沖を行く船の帆がやがて水平線へ消えるのを日が沈む迄見送る事も屢々であつた。

低うした日が續く中、山には櫻が咲いた。海の波はのたりのたりと寄せてはザアツと渚を濡らして引く。いゝ日和を毎日迎へたが春も次第に暮初めれば櫻の梢には早くも若葉が多くなり、寺の自慢の白木蓮も痛ましく地に散敷いた。自然の推移は少年の心にも何故とはわかちがたき哀愁を更に添へたやうに思はれる。

或夕暮の事であつた。寺の晩鐘も三方を圍む山々に響いて消えた。新次は寺の門の扉に背をもたせてぼんやりと、たそがれかゝる山際の夕燒空の夜になり行く變化を見ながら、取止めもない想ひを走らせてゐた。ところへ俥が一臺、砂氣の多い路を音もなく來て門前に止つた。車夫が大きな柳行李をかついで入る後から下り立つた人も續いて寺の門をくゞつた。若い女の顏は暮殘る薄明の中に際立つて白く新次の方を眺めて行つた。

庫裡の方では今來た人とであらう、和尙のしやがれた聲が聞えた。梯子段を上つて室の障子をあけると祖母は讀みさしの講談本を下に置いて眼鏡をはづした。

「新次や、まあ、今頃迄何處に行つて居たのだえ。」

とさも心配させられたと云ふやうに云ふ。

「お祖母樣、今、お客が來ましたよ。」

と新次は祖母には答へないで自分の話をするのであつた。

間もなく、二三人で梯子段を荷物を運ぶ音をさせて、壁一重の隣室へ持込んだ。ドヤ／＼と足音が又階下へと消えてゆくと靜になつた隣室では衣ずれの音にまじつて輕く咳入るのが聞えた。

翌朝、氣の輕い年寄は、洗面場でちかづきになつて來て壁越に「ちとお遊びにお出でなさい」と早くも誘つたのである。

「御免下さいまし。」

と廊下で云ひながら障子をあけて這入つて來た隣室の人は優雅に席に着くと一通りの挨拶を濟した後、低い含み聲で祖母と語るのであつた。

「私共はもう當地へ參つてからしばらくになります。いゝえ私では御座いません、此孫が少々加減が惡う御座いますので親達に代つて私がついて參りましたのですが。貴女は。」

と祖母も話相手の欲しかつたところでなれ／＼しく問ひかける。

「私で御座いますか。矢張り昨年の秋口から風邪が元で長びきまして未だに全快致しませんので御醫者樣の御すゝめで當地へ參りましたので御座います。」

「失禮ですが御病氣は。」

「あの、肋膜が少し。」

白いハンケチで口の邊りをかくしながら物靜に語る人であつた。

隣室の人は中井さんと呼ぶのであつた。年配は、新次の眼には二十二三に見えた。脊の高い、それ相應に肉置もある大柄な人ではあつたが蒼白い顏には多過ぎる程の髮を大きく束髮にした爲か、何處かに影のさしたやうた、病を持つ人の風情があつた。細く峰の立つた鼻。いつも燃えるやうな赤い唇。殊にうるみ勝ちの大きな眼は顏色が蒼白い丈際立つて見えたのである。祖母はこの病める女を「お茶がはいりましたから」とか「おたいくつでせうから」とか云つては話相手に誘ひ、自分からも「お邪魔します」と云つては出かけるのであつたが新次は「ちとお遊びにいらつしやい」と云はれても何かしら羞かしくて其人の室を訪れる事は出來なかつた。

雨上りの或日の午後。草生の露も日に乾いて風も無い空を白い雲が靜に北へ流れて行く。新次は「智之卷」を懷にして行き馴れた墓地上の草土手へと、一人裏山の細道を登つて行つた。此間迄咲揃つてゐた、たんぽゝの花は白い穗になつて、あるかないかの風に雜草の中に亂れ散り、かすかた音を立てゝ羽蟲の群は白く日に光つて飛んだ。

「十一の時母みまかり給ひつ。年紀十四の春のはじめ、其の命日に當りし日なりき。」

諳んじた冒頭の句を口吟みながら墓場を過ぎて何時もの岡へと上り切つた時、新次は自分が常に倚る草土手の同じ場所に、何か小形の書物を手にしながらチツト此方を見守つた中井さんの姿を見て思はず顔を赤らめた。「此方へ」とうなづいて見せるまゝ新次は中井さんの傍へおづおづと近寄つて同じ草の上に腰を下したが未だ馴染まない女性の身近に在るばかりかチツト見つめられるため自分の眼のやり場に困つて、遠い海の上の空を見てゐた。そして懐の一巻をば何故ともなく隠し度く、しつかりと手は胸を抱いてゐた。しかし女の眼はそれを見逃さなかつた。

「何を持つてゐらつしやるの。見せて頂戴な。」

と云ひながら柔い手は氣輕に新次の手を取つて「誓之巻」は引出された。

「まあ『誓之巻』ですね。恁ういふ小説を御覧になるの。面白う御座んすか。」

意外だと云ふ表情をして問はれるので新次はたゞうなづくばかりであつた。

「私も讀みましたよ。可哀さうなお話で御座いますねえ。何とか云ひましたつけ、あの少年が可哀さうで／＼私は泣けてしやうがありませんでした。」

ヒラ／＼と頁を繰りながら中井さんは今もなほ涙が湧くやうな、うるんだ眼で物語の一節を讀んだ。新次は、女の長く草の上に延した膝の上に伏せられた小形の本の表紙の、女の首に矢のさ

ゝつた珍らしい繪を見てゐた。其の下に朱で「みだれ髮」と書いてあつた。

「御覽なさい、奇麗な本でせう。歌ですよ。」

と云つて新次の手に渡した。恰度開かれてあつたところには恁う云ふ歌があつた。

この日ごろあやしきくせのつきそめてあらぬ反古にも胸さわぐかな

あまりに短い詩形なので新次には單に其の意味が解つたのみで別段興味を引かなかつたが何故だか此の一首の歌を長く忘れる事は出來なかつた。

其の日から新次が中井さんに對する態度は變つた。「誓之巻」に心を奪はれた彼は其作中の少年が年上の女に對する思慕の情を以て中井さんを見るやうになつた。流石に氣は臆しながらも誘はれるまゝに隣室へ遊びに行くと、窓近く据ゑた机の上には奇麗な本が積んであつた。「東西南北」「天地玄黃」「みだれ髮」「若菜集」「草笛」。それから雜誌「明星」が幾冊かあつた。よくは解らないながらも新次は一冊づゝ借りて讀んだ。中井さんは何時も机に對つてゐた。黑髮の重さに耐へないやうに、筆を持つ手に額を支へて何をか思ひわづらふ風であつた。新次が這入つて行くとハツとしたやうに筆を置いて狼狽しく机の上の紙片を手筺の中にかくすのであつた。

寺の池には蓮の花が咲いた。海に近いとは云へ流石に暑い夏の日中は山々を籠めた蟬の聲にヂ

り〳〵と汗をしぼられるので藥を飲む身にはいとゞ堪へがたいのであらう、中井さんは室の小窓に長い晝間を何するともなく疲れた風情で倚りかゝつてゐた。窓の下の日に燒けた庭には枯れた大木にからんだ凌霄花の紅い花が眞盛りであつた。

「私はあの花を見てゐると頭が痛くなつて眼が眩むやうです。」

と云ひながらも其の窓を離れなかつた。

流石に夏は避暑客が入込んで、寺にも他に二組三組の客があつた。暑い暑い日が續いても、氣分が惡いと云つて中井さんは室に垂れ込めてのみ暮らした。新次は濱の燒砂の上に、南風の日は、底迄も青み渡る海の浪に身を浮べる人々を飽かずに眺めたのであつたが秋は先づ海から訪れて空も水も灰色に光る九月に入れば又も淋しい寺の生活が深くも身に沁みて感じられるのであつた。自然と人なつかしい思ひから新次は中井さんに接する機會を、自ら、作る事をさへ努めたのである。或時は机の上につッ伏した女の姿を見た。女は泣きはらした眼をあげて、いかにもわざとらしい寂しい笑顔を見せた。

北風の寒い日が五六日續いたので人々は早くもネルを着初めた。中井さんは咳入る事が多くなつた。風の吹く寢られぬ夜半に、壁越に苦し氣に咳くのを屢々冴えた耳に聞いた。「昨夜もまた

眠られませんでした」と云つて泣いたやうにはらした眼をしてゐる事も多かつた。其の頃から祖母は室に中井さんの來るのを嫌ふやうになつた。顔を合はせては愛想よく言葉を替しても新次に對しては「お隣の人は恐ろしい病氣に違ひない。自分では肋膜だと云ふけれど肺病らしいから、あんまり遊びに行くのではないよ」とひそかに云ひ聞かせた。肺病？ 新次は中井さんに近寄り度いとは思ひながらも病氣の恐ろしさに心を痛めた。それでも逢へば逢ふ毎に女に「此の頃はちつとも私の所にはいらつしやらないのね」と云はれると大變悪い事をしたやうに自分を責めて誘はれるまゝに誘はれたのである。女は相變らず机に向つて筆を持つてゐた。長い手紙を書いて居るのをも見かけたが新次が行くと、きまつてそれを押しかくした。

晴れた日には屢々二人で裏山の草土手へ讀物を携へては出かけた。晝も草叢には蟲が鳴いて、何處ともなく山懷に風の音を聞く日が多かつた。「新さんは又『誓之卷』ですか」とからかはれる程それを繰返へしたのであつたが女が貸してくれる雜誌「明星」をも大概は解らないながらに愛讀した。女は其の雜誌の詩歌を細く高い聲で節をつけて口吟む。

何となく君に待たるる心地して出でし花野の夕月夜かな

と云ふのが新次も暗記した程誦された。たつた三十一文字の、ともすれば只事になりやすい短

歌が反つて長い言葉をつらねたものよりも、何時しか身に沁みて感じられるやうになつた。時には「私もかう云ふ歌を作りました」と中井さんは歌つて聞かせる事もあつた。新次は數多く耳にしたにもかゝはらず其の中の一首さへ滿足に覺えてはゐなかつた。「病める身は夕べの鐘も身にしみて」とか「枕冷めたき夜半の寢ざめに」などゝ切々にのみ記憶した。恁うしてうら／＼と秋晴の午後の日を浴びながら少年の夢は益々多くはぐくまれた。知らず識らずに近々と肩を並べて女の肉體の溫かさを知つて恐れた事もあつた。しつとりと黃昏に衣服もうちしめり山腹の鐘樓に晩鐘の鳴る迄も、詩歌小說の話を聞きながら中井さんと共に在る事を新次は喜んだのである。

或る月明の夜であつた。夕食後の散歩に出た二人は町から田圃路へと折れた。溝のやうな小川を渡る時女は新次の手を取つたが、渡り終へても川沿ひの葦中路をうね／＼と砂濱へ出る迄其のまゝ放さなかつた。柔い手に力の入る度、新次は何とも知れぬ恐怖に震へた。夏中は、素足では歩けなかつた燒砂も露に濡れて冷々と夜氣を傳へる。靜に月波の碎ける長い渚をヒタ／＼と踏んだ。其の夜、更けて寺へ歸つてから中井さんは烈しく發熱した。翌朝新次が其室を訪うた時、女は深々と夜着をかついで病ひの疲勞から眠り覺めなかつた。町の醫師は每日寺へ車を寄せた。

「新次や、とう／＼お隣りは眞性になつたのだよ。昨夜は澤山血を咯いたと云ふぢやないか。恐

ろしい。もう決して彼の室へ行くのぢやありません。」

と祖母は云つて眉をひそめた。

けれども新次は祖母にかくれて病める女を見舞つた。女は、頰のみ美しく紅潮した蒼白い顏に強ひて笑を浮べて迎へたが、あらたまつて枕邊にキチンと坐つた新次の顏を長い間見つめてゐた。

「新さん、私は肺が惡いんですつて。」

女は言葉を切つた。涙に聲が曇つたのであらう。

「あなたは、もう私の室へなんか來るのはおよしなさい。大事のお身體にもしもの事があるといけません。お祖母様が御心配なさいませう。」

と寂しい笑顏を新次に向けた。

中井さんの病氣は次第に惡くなつた。ある日暮方、東京から中井さんのお母さんと云ふ人が來た。寺から病氣の趣きを知らせたので直ぐと見舞ひに來たのである。小柄な、色の淺黒い男のやうな人で、應對もハキ／＼したものであつた。

翌日の午後二臺の車は寺の門を靜に出た。門前迄見送りに出た新次は、母なる人が中井さんを自分から奪つて行くやうに憎く思はれた。女は、祖母とは僅かながらも挨拶を取り替はし、新次

には「左様なら」と云つたのみであつたが、車の梶棒が上るとハンケチを顔に押當てた。
暖い小春日の町を輕く白埃を立てゝ靜に俥は走つて行つた。「中井さんは如何したらう」忘れ得ぬ人の一人として新次は後々迄、折につけて思ひ出すのであつたが必ず來ると思つて待つた手紙さへ女はよこさなかつた。たゞ女が立去つた後の室の机の曳出しに「みだれ髮」が殘してあつたのを、新次は中井さんが自分へ殘して行つたものとして、人知れずそれを自分の物にした。

其の後、新次は三田の塾に入つた。初めて登校した日に机を並べたのが松波冬樹と云ふ少年であつた。色の白い、眼のクリ／＼した、混血兒のやうな顏をしてゐた。彼は級中で一番ちひさかつたが太い眉に負けん氣を現はし、常に左の肩が稍々いかつてゐた。ガギグゲゴの發音に烈しい訛があつた。何時でも薄暗い教室の隅つ子に、隣りして席を占めてゐたが、無口の二人の馴染みは遲かつた。朝々顏を合せる時もお互ひに何の挨拶もしなかつた。十日、二十日と過ぎた頃、思ひ切つて口を開いたのは新次の方であつた。
「君は何處から通つてゐるの。」
「僕かい。僕は寄宿舍だ。」

力のある語尾を明瞭と答へて松波は口を結んだ。それぎり又も沈默が續いたが段々馴れるに從つて途切れ勝ちながらも語り合ふやうになつた。

「君の故鄕は何處。」

「僕は東京。君は。」

「僕は壹岐だ。」

さう云つて彼は寂しさうに笑つた。頰に深い片ゑくぼがある。

「壹岐？　夏休みには家に歸へるんだらう。」

「いや。どうだかわからない。家に歸つても誰も居ないもの、僕は兩親もなくなつたし、仲よしの姉さんは朝鮮に行つて了つて、故鄕には、今、叔母さんが居るばかりなんだ。大阪に兄さんが居るけれど僕は兄さんの家には行き度くない。」

彼の言葉が新次には意外の愕きと興味を與へた。壹岐の島が故鄕だとは嘘のやうにも思はれた。こんなちひさい少年が、そんな孤島から遙々一人で東京へ來ようとは思へなかつた。そればかりか松波は父も母もないと云ふ。兄があつても其の家には行かないと云ふ。新次は此の少年を他の多くの學生と同じに視る事は出來なかつた。夏の休暇中も松波は故鄕へ歸つたらうか、如何した

らうと絶えず心に掛けて居た。
九月の新學期が來た。松波は其の一月缺席して十月に入つてから學校に顔を出した。彼は一矢張り故郷に歸つた」と云つてゐた。二人とも一學期の成績は良好だつた。殊に國語、作文の點に群を拔いて居た。
「××の先生は駄目だねえ。『福澤先生々々々々』つて二言目には先生をかつぎ出すが下らない事ばつかり云つてるぢやあないか。」
太い眉を動かして松波はよく教師を罵つた。或日も何か字句の解釋について松波は教師と爭つた末フイと立上つたかと思ふと席を離れて教室を出てしまつた。次の時間に再び出席して、
「面白くもない講義を聞いてるより、これを見てる方がいゝぜ。」
と云つて彼は懷から小形の本を出して讀んでゐた。それは新次が忘れもしない歌集「みだれ髮」であつた。十五分の遊歩時間に二人は運動場の北隅の稻荷山へ行つて、崖の上から廣く枝を張つて大きな影を作る銀杏の根方の、草の上に腰を下した。
「君は『みだれ髮』を讀んでるのかい。僕も見た事があるぜ。」
「さうか。これは姉さんが朝鮮に行く時くれて行つたんだ。一生懸命で讀むけれども僕には解ら

ないのが多いよ。」
「僕は幾度も讀み返へしたんだけれど難かしいねえ。」
「君は小說も讀むのかい。」
「あゝちつとは讀んだ事がある。泉鏡花つて云ふ人のが一番好きだよ。」
「鏡花？　何んて云ふんだ。」
「『誓之卷』『照葉狂言』『黑百合』なんて皆面白いねえ。若し君が讀み度いなら貸さう。松波、もう時間ぢやあないか。」
「かまふもんか。休んじまはう。地理なんかつまらないぜ、此處で話をしてゐた方が面白いよ。」
さう云つて彼は動かなかつた。二人は思はず聲を高くして知つてる限りの幼稚な文學上の知識を交換した。

怪しい程力ある文學は、掟を破る面白さを添へて、新次と松波をして常に學校へ文學書を携へて行つて、學課を他所にして、それに耽らせ、教場の乾き切つた講義を避けてはエスケープの面白さを味はゝしめたのである。新次は近頃、母から貰ふ小遣錢のすべてを文學書に代へてゐた。嚴格な父が小說の有害な事を常に說き聞かすので、それらの本は皆自分の室と定められた二階の

一室の錠の下りる簞笥の曳出しにかくした。其の室へ松波を誘つて來ては飽く事を知らないで互に讀んだ物に就いての感想などを語合つた。我子がどんな友達と交際して居るかを注意する母は松波を喜ばなかつた。

「あの子は、ちつとも子供らしい所がないねえ。一體二人で何を話してゐるのです。」

「種々學課の解らない所があるものですから一緒に復習つてゐるんです。松波は可哀さうなんですよ、お父さんもお母さんも死んでしまつて、姉さんが居るけれど朝鮮にお嫁に行つてしまつたんですつて。」

新次は母の同情をひく事に努めるのであつた。

實際人づきの悪い松波は學校でも好かれなかつた。従つて新次との交情が愈々深くなると共に學校にでも、年長者にでも反抗して悔いなかつた。殊に自分の感情から、いやとなつたら教師は皆から別ものにされてしまつた。益々學校は面白くなくなつて來るので二人とも出席數が著しく減じた。其の結果は忽ちに現はれて、年末の成績があまりよくなかつたばかりか翌年四月の進級試驗には新次が尻から八番、松波が六番と云ふ、ひどい不成績で漸く及第した。二人があまり烈しい變りやうに驚いた者が多かつた。

其頃二人が最も愛誦したのは與謝野寛、晶子の詩歌集「鐵幹子」「紫」「みだれ髪」「小扇」。島崎藤村の詩集「若菜集」「夏草」及び雜誌「明星」等であつた。之等の詩歌は恐ろしい程少年の心を狂はしめた。之を歌ふ時は既に地上の人の子ではなく或る夢幻の境に導かれる思ひがして夢多き少年の日の喜びは限りないものであつた。けれども、たとへ如何に氣が合つたとは云へ二人の性狀が違ふやうに二人の嗜好も違つてゐた。小說に就いても、新次が鏡花の作品、鷗外の「即興詩人」に醉つてゐる時松波は、もつと暗いものを好んで讀んだ。「深刻小說」と云はれて特に社會の暗黑面をのみ寫した、廣津柳浪の「黑とかげ」「龜さん」「河内屋」「今戶心中」の如きは彼が口を極めて推稱したものであつた。

「僕は君とは境遇が違ふから如何しても全く一致すると云ふ事は出來ない。」

と彼は始終云つてゐた。

遂には二人とも、單に大家の作品を讀む丈では承知出來なくなつた。雜記帳の間々に少年の幼稚な感傷的な詩や歌が授業時間中にも記されるやうになつた。戀、想ひ、淚、泣く、恨む、と云ふやうな文字を好んで、思はず知らず學校の作文に迄も弱々しい句を並べるので、敎員室へ呼びつけられて頭から叱りつけられた事もあつた。

其の間に二人は雜誌を作る企てをして、やつと四五人の同好者を集めたのである。謄寫版を買ひ込んで新次が印刷を引受けた。誌名は「あかつき」であつた。一號を刷つたのが秋の事で、連中は新次の家に集つては胸を躍らせて語合つた。新次の「畫筆の恨み」と云ふ小說が卷頭を飾つた。ある嚴格な家の子が學業を嫌つて繪筆をのみ手にし、放逸に日を送つて、落第の結果退校されたので烈しい父の怒りに觸れて勘當され、遂に出入の大工の家で血を吐いて死ぬと云ふ筋であつた。松波は自敍傳を書いた。他の連中は何れも學校へ出した作文か、又は紀行文を書いたのみであつた。謄寫版の印刷はなか／＼忙しかつた。新次と松波は學校の教科書を見る事もなく其の方に熱中した。二號、三號と「あかつき」は印刷されたのであつたが、次第に一人へり二人へつて四號と出ない中に、筆を執る者は松波と新次ばかしになつて遂に止めなければならなくなつたが、其の春の學年試驗にも二人共揃つて落第して了つた。恰度故鄕に歸つてゐて其の結果を知らなかつた松波へ、新次は落第の報知をする時に威勢のいゝ事を云つてやつた。松波からの返事は、

「落第したと云ふ事は恥でも何でもない、怠けたから落第したので當然の事だ。吾々は學校なんか眼中に無いのだから及落も亦敢て意とするには足りないではないか。」

と云ふやうな事を並べた末、

「畫筆の恨みも亦面白からずや。」

と書添へてあつた。けれども新次の父の忿怒と母の繰言とは流石に平然と聞き流す事は出來なかつた。本郷の高等學校の寄宿舍にゐる勉強家の兄と華族女學校へ通つてゐた姉と妹は、白い限をして新次を見た。新次は落第した事よりも、其の爲めに受ける侮辱に泣いた。それでもそれがために奮發して勉強しようと云ふ氣は起らないで、わけもなく反抗のふてくされた態度を取るやうになつた。

「僕は我家が厭でたまらない。父も母も無い君が羨ましい。」

遂には松波へ恁うも云ひ送つた。

松波も、月々學資を送つてよこす兄から、ひどく叱られたと云つてゐたが、二人は何となく文學をやるには落第位、經驗しなくては駄目だと云ふやうな考へを抱いてゐた。時の大家尾崎紅葉、川上眉山、正岡子規、何れも大學を半途で退いた人達であつた。泉鏡花、小栗風葉、柳川春葉、徳田秋聲、それらの人は紅葉の玄關で筆を練つたのであつた。「勉強ばかりしてる奴に碌な奴は無いよ、いゝ加減年をとつて金でもためる位が一生の望みなんだ」と云つて眞面目な人を罵つた。

學校は益々怠けた。恰度、人の性狀の著しく變り易い年頃であつたからか、新次は事々に烈し

く感動した。父母、教師、學校、家庭、すべて自分を縛らうとするものに極力反抗したと同時に、ふと夕暮の空の色の次第に夜に移り行くのを眺めて、自分にも何故かわからない涙を流す事もあつた。一時の怒りから腕力を以て父や教師に抵抗するかと思ふと、かりそめに散る花の一片にさへ深き哀愁を覺えたのであつた。

「僕は子供の時から夕方は何故だか悲しくてしかたがない。二階の窓から日の沈んだ丘の上の空を見てゐると知らず〳〵涙が浮んで來るよ。」

新次は松波に其の不思議になつかしい心持を語つた。

或時は黄昏の町を何處迄も〳〵誘はれるやうに歩きながら盡きずに湧いて來る感傷的な言葉を限りも知らず互に交し、月明の夜などは、程近い古川の流に沿うて川上へと、遠く森の多い郊外迄も歩き廻つた。其の度に松波は寄宿舍に歸つてから門限時間に遲れた罪を舍監に責められた。時には又、愛誦の詩歌を聲を張つてうたつて居る中に感情がたかぶつて來て殆んど狂氣のやうに涙を流して喜び悲しむ事もあつた。

「今宵も亦いたく鼻血の出で候へば雨降る街を傘もさゝず頭より心地よく濡れつゝ歩み申候」

と新次が松波へ書送つたのも一度や二度、あつた事ではなかつた。

斯う云ふ二人の生活は長く續いた。兎に角二度目の二年級だつたから不成績ながらも及第したが平生は勿論の事、試驗前と云つても決して教科書を開いた事のなかつた新次は三年級で又落第した。小學時代の新次をのみ知つてゐる祖母は思ひもかけぬ驚きをした。父母の居ない折を見ては勉強せよと說き聞かせた。

「お前は如何する氣なのだ。一度ならず二度迄も落第するとは馬鹿にも程がある。そんな量見では碌な人間にはなれんぞ。俺なぞの若い時は夜眠る時間を惜んで勉強したものだ。一體お前は毎日何をして居る。」

　殊更に嚴かに云つて父は眼鏡越しに新次を睨んだ。

「お前は子供の時分は悧巧者で、小學校では何時も優等だつたぢやないか。ちつと勉強すれば人には負けないのだから、しつかりやらなければいけません。お父樣の子として羞かしくありませんか。」

　くど／＼と母は父の前をとりなしつゝかきくどくのであつた。

　それからと云ふものは新次の室は屢々母の覗ふところとなつた。でなければ姉や妹が何氣ない顏をしては、父母へ報告すべき何らか新次の落度をば探しに來るやうになつた。家の內の何處に

行つても自分の居る處には暗い影のついて廻る心苦しさを新次は常に感じてゐた。

一年は早くも過ぎてしまつた。翌年の春、松波は再度の落第を經驗した。彼は其の以前に拘束の多い寄宿舎の生活に耐へられないで下宿住居をして居たのである。或夜、新次は其の家を尋ねた。

「如何したんだい、眞暗(まつくら)ぢやないか。」

「一寸待ち給へ、今燈火(あかり)をつけるから。」

洋燈(ランプ)に灯がついた。松波は眞蒼な顔をして暗黒の室の机に對(むか)つてゐたのであつた。

「如何かしたのかい、大變顔色が惡いぜ。」

「いや、一寸むしやくしやしたんで酒を飲んでみたんだ。兄貴からひどく怒つて來てね。種々(いろいろ)聞き度い事も、云ひ度い事もあるから一先づ大阪へ來いと云ふ手紙をよこしたんだ。兄貴には僕の心持は解りつこないんだから逢つたつて無闇に怒るばかりだよ。まあ默つて居てやるつもりだ。」

松波は苦しい笑ひを強ひて見せてゐた。灯(ひ)にそむいては眼をしばだたいた。

それから五六日經つて新次は松波の葉書を受取つた。

「話があるから此の葉書着(つき)次第來てくれ。」

其夜松波は遲く迄殆んど一人で半生の物語をした。

「眞の兄弟ぢやあるけれど、如何してかうも違ふものかわからない。石炭の買込みと相場の變動の外兄貴の心を動かすものは何もないんだ。それ以外の事には一錢たりとも出し度くないんだから落第坊主の弟に金を送るのを拒むのも無理はないさ。親父は僕にだつて少許は殘して置いてくれた筈だけれどそれも兄貴の手にあるんだ。直ぐ大阪へ來いと云つて來たが僕は兄貴の家でこき使はれる氣はないんだ。學校も厭になつたから實は朝鮮にでも行つてみようかと思つてる。」

松波はホロ〳〵涙をこぼしてゐた。新次も誘はれて泣いた。靜な春の夜の暗い下宿の庭に隣家の櫻が塀越しに白く散つた。

其翌日は夕方から「東京見物」と云つて松波は新次を誘つた。しかし華やかな下町の灯の中を練るのでもなく滲んだやうな月の夜なのに山の手の高臺の杉垣のうち續く暗い小路をえらんだ。近い中には遠く別れてしまふ二人の胸の中には映つては消える種々の想ひがあつた。

時は暮れ行く春よりぞ
また短きはたかるらん
恨みは友のわかれより

更に長きはなかるらん

と藤村の「晩春の別離」を聲を合せて歌ひつゝ肩と肩とを押合ふやうにくつつけて歩いた。さうして遣瀨ない心もしめるやうな感じを二人とも抱いてゐた。

二日の後。一通の葉書は新次を驚かした。

「十分の後には東京を離れる身となつた。是非もう一度君に逢ひ度かつたが何故か自分も知らぬせき心は突然一個の風呂敷包みと共に僕を此處に連れて來て了つた。すべての物を旅費に代へた。下ノ關迄は汽車それからは船で朝鮮に渡る。

新橋停車場にて　冬樹」

新次は何事も手につかなかつた。放心した人のやうにがつかりして室に横たはつてゐた。

「無事」と云ふ手紙は京城から來た。其處には嫁いだ姉なる人が居るのであつた。

「姉の家は雜貨商だ、僕もやがて店に坐るだらう。」

などゝ書いてあつた。

別れたる二人をつなぐものは手紙であつた。新刊書を讀んで心の躍る時、拙いながらも自己の感情を詩歌の形式に盛り得た時、新次は直ちに筆を取つた。松波からも同じやうな事をつらねて

來るのであつた。

新次の成績は相變らず惡く家内(うち)のうけは益々惡かつた。優等で一高を卒業した兄は大學に入(はい)つても秀才の名が高かつた。これも華族女學校を一番で出た姉は既に他家に嫁いで居た。兄や姉の忠告を新次はあだに聞いてゐた。

「新さんは父上の子なる事を忘れ給ひしか。父上のかゞやかしき御名(おんな)に影つくる行ひし給ふはおんみに候。幼き日、すぐれて怜悧なりしおんみを姉は忘るゝ事能はざる故に又々文(ふみ)して申上(まをしあぐ)るのに候」

恁う云つた姉からの手紙も新次をして自らを悲しませるのみであつた。終ひには母も、兄も、姉も、妹も、家内の者のすべてが「新聞記者か小說家にでもなるんだらう」と云ふやうになつた。新次の家で小說家、新聞記者と云ふのは盗人、すり、たいこもち、に稍(いや)まさる職業であつた。此の短い言葉には深い絶望と大なる侮辱とが含まれてゐるのであつた。たこの出來る程此の侮辱の言葉を聞きながらも、人が試驗前だと云つて騷ぐ時、彼は平生と同じ態度で時間のある限り文學書を讀んだ。古い物と新しい物との區別もなかつた。西鶴、近松、馬琴、京傳、種彥、一九、三馬、其磧、春水、鯉丈。紅葉、露伴、鷗外、二葉亭、柳浪、眉山、天外、宙外、鏡花、風葉、春

葉、秋聲、水蔭、抱月、綠雨、一葉等の署名ある物をあさつた。藤村、泣菫、有明、寛、晶子等の詩歌集も殆んど全部(すべて)を讀んだ。殊に鏡花のものと云へば小說、小品ばかりか諸雜誌へ出る談話筆記をさへ手に入れなければ置かなかつた。何故(なぜ)から感じるのだらうと思ふ程、其筆には力があつた。思はず知らず涙を流した事も屢々であつた。「誓之卷」「照葉(てりは)狂言」「黑百合」「三枚續」「外科室」「夜行巡査」「海城發電」「葛飾砂子(かつしかすなご)」「白羽箭(はくうせん)」「起誓文(きしやうもん)」「舞之袖」「女仙前記」「後朝川(きぬぐぬがは)」などを新次は幾度讀んだか知れなかつた。恰度其頃、其の作者は逗子に住んで居た。何んでも車馬の通る往來の二階家だと聞いて或夏の末新次は憧憬(あこがれ)を止むる力を失つて一人逗子へ行つたのである。

「君よ、喜べ吾は我が泉先生の御姿(おんすがた)を拜し得たり。そは夏も早や相模あたりは涼しき風の吹く一日なりき。逗子驛に下り立ちし吾は角笛(つの)吹き鳴らし行く馬車の埃を浴びつゝ魂も身に添はざる憧憬の念と、あまりに並みはづれたる行爲なる事のやすからぬ心より震へつゝたど／＼と海の音する方(かた)へ步みぬ。君は其の折のわが心を知り給ふべし。槻(つき)の大木の影暗き、とある二階に吾は先生の御姿を拜し得たり。白き都團扇(みやこうちは)手にし給ひつ、書架並びたる床の前に赤き胸はだけたる體格偉大なる老人と烏鷺をたゝかはしゐたまひしなり。竹垣結へる御庭の花草の中にも白き桔梗をば殊更なつかしと吾は思へり。あゝ、されど先生は夢にも先生を忘るゝ事なくなつかしく思ひ參らせ、

他所ながらも御姿拝しまゐらせんとて遥々都より來たれるこの少年の在る事を露知り給はず、吾は喜びの底より湧來る悲しみに涙さしぐみたり」

と其の日の喜ばしさを新次は松波へ書き送つた。喜びも悲しみもすべて皆若々しいものであつたが次第に移り變つて行く新次の心と共に、彼は外界からも大なる打撃を受けなければならなかつた。

秋もやうやく深くなつた。思ふ事さへあれば松波へと書送る新次の手紙に必ず來た返へしが長い間來なくなつた。「君は如何にかしたまひし、わが數々の文をば一も見給はぬにや」と恨みごとを言つてやつても返事はなかつた。松波の他には友を求めなかつた新次は、僅かに二人の間の手紙のやりとりで慰んでゐたのである。その年も暮に近い或日であつた、久しぶりの松波の便りを新次は漸く手にしたのである。

「初めての朝鮮の秋風身にしみてか長きいたつきに臥し居候」

たゞそれ丈の短い句が反つて哀れであつた。

ほんの風邪のこじれだらうと思つてゐた松波の病氣は意外に重かつた。病名を知らせよと云つてもそれには答へがなかつた。新次の長い幾通かの手紙に對して、短い葉書がぽつり／＼と朝鮮

に病める友の消息をもたらした。かと思ふと時には又思ひがけない事を云つても來た。
「僕が君に望むのは學業をはげむ事だ。君よ若き日の熱情に馳せて一生の方針をあやまる勿れ。僕は一旦の感情から輕率に學校を去つた事を悔いてゐる。一度や二度の落第は長い生涯に取つては何んでもない。勉強してくれ、而して吾々を目して馬鹿、狂人と罵つた奴等を驚かしてくれ。僕も病氣が癒つたら再び東京で何處かの學校に入つて勉強するつもりだ。僕は落第のために受けた幾多の侮辱を默つて忍ぶのは殘念だ」

松波は何を考へて、こんな事を云つて來たのだらうと思ひながらも、新次は深くかゝる手紙にさへ心を動かされた。幾度讀返へしても云ふべからざる悲しい涙が紙の上にはふり落ちた。「勉強せよ」と云ふ言葉は必ず松波の手紙の中にあつた。彼が如何に落第のために甚だしい侮辱をうけたかはそれでも知られた。家内に於ける白眼と、父の子であるために殊に世間から受ける冷嘲に無闇と反抗し度かつた新次も試驗前には一通り教科書に眼を通すやうになつた。

松波の病氣は益々惡かつた。「何分熱があるので折角送つて貰ふ書物もなかなか讀めない、此頃はたゞ君から來る手紙が唯一の慰めだ」と云つて來るので新次は三日と云はず音信をした。或時は書く種がないため夜の町を何處迄も歩いて寫生文を作つて送つた事もあつた。其の年も寒い

冬になつた。今迄も少なかつた松波の消息は殆んど絶えて、新次はたゞ自分の方からのみ病友を慰めるための文を書送るのであつた。何となく新次には友は不治の病にかゝつたのに違ひないと思はれた。

雪は降つても降る傍から消えて、土が乾けば白埃の輕く上る早春に、意外にも長崎の病院から便りがあつた。

「御無沙汰しました。僕は此の地へ運ばれた。此頃は大變身體の具合もいゝから春には退院する事が出來るだらう。そしたら又東京で逢へる。僕はそればかりを樂しみにしてゐる。試驗も近いから勉強してくれ」

だが、春になつたら退院出來ると云つて、そればかりを樂しんでゐた松波は、又筆持つ事も許されぬ身となつた。

三月の試驗も終つて、新次が氣づかつた成績も存外よくて五年に進級した。「及第したから安心してくれ」と云つてやつても返事はなかつた。別れてから早くも一年は經つて了つた。二人が若い心を競はせて歌ひながら歩き廻つた山の手の町々には又櫻が咲いて散つた。行きて歸らぬ物の哀れを強く覺えしむる晩春は、かりそめの雲の往來にさへ心を痛ましむるものがあつた。窓近

き黄昏に白々と散る落花にも、終日しと／＼と軒端を傳ふ雨だれにも涙ぐまれる程心弱かつた。

かゝる時何時も心を去らないのは長崎の病院に横たはつて居る友達の事であつた。或時は烈しい幻覺に襲はれて、暗闇の夜の床に突然立上つた自分を見た。或時は、ふと、松波は死んだ、死んだに違ひないと感じて如何してもそれを打消す事が出來なかつた。一通の手紙を書く事も出來ない松波の枕邊には新次が送る文學書がうづ高く積まれたに違ひない。新次は松波はたとへ讀めないでも、身近にそれらの書がある事を以て少なからず慰む事を確く信じて疑はなかつた。

それは大變詳しい消息を傳へた松波の便りを得たのは、もう新綠の頃だつた。

「あゝ今日も亦雨だ。暗い海には各國の船舶が碇船して居る。家の無い水夫は此頃の五月雨に故郷の歌をうたつてゐるだらう。疲勞と倦怠とは彼等も僕も同じだ。だが僕は時に又、一日のあわたゞしく暮れてゆく大なる悲しみを聲をあげて泣く事がある。實際、僕はもう、とても助からないと思つた。始めて血を喀いたのは朝鮮の寒い／＼雪の日だつた。病院の白い床に滲んだ眞紅の血は苦痛の中にも美しいと見る事が出來た。しかし其後の疲勞と衰弱から全く淋しい日ばかりを迎へた。流石に大阪の兄も驚いて、姉と相談の上此地に僕を運んだのだ。文學が人を早熟にすると云ふけれど、病氣は一層甚だしい。僕は自分ながら若き日はもう過ぎてしまつたやうに思はれ

る。僕は未だ何も爲ないのだ。是非生きてゐる中に大なる仕事を爲たい。あゝ今日も亦たゞ寢て過ぎて了つた。港にはもう灯がついたらう」
長い手紙を病床で書いてゐる友の姿と、心持とがよく見えるやうだつた。
秋の初めには松波は大阪の病院に移された。
「途中何の障りもなく當地に來た。早速兄が見舞ひに來て『あんまり世話をかけるな』と云つた。段々心地よくなつてゆくから來春は東京で逢へるだらう」
松波の音信には「東京」の二字が多かつた。
「長い間の病院生活で僕が感謝しなければならないのは與謝野先生御夫婦だ。『明星』程氣持のいゝ雜誌はない。藥の香の沁みてしまつた『戀衣』『舞姫』は幾度繰返へしたか解らない。僕は東京に行つたら君と共に與謝野先生を御尋ねし度いと思つてゐる」
「與謝野先生」も「東京」と共に松波の手紙に必ず書かれたものであつた。
恁うして僅かに手紙の往復が二人を結んで居る中に秋も次第に暮れて行つた。四季の中、春よりも殊に秋を好むと云つた松波は新次を誘つては學校を休んで郊外を歩き廻つたものであつた。輕く風の渡る草原に疲れた身を倒してゆら〳〵と深く青む大空の雲の往來を仰ぎ見ながら「あひ

ぐき」―「武藏野」を語るのが常であつた。その秋が來ても松波は病院の床の中に玻璃戸の外の空を見得るのみの身であつた。新次は二人が行き馴れた草原へ折々出かけては病める友達を悲しんだが思ひ出したやうに暖い小春日も段々に寒くなつて、俄にあわたゞしく冬が來てしまふ。空の色の日に日に白けて行くのを眺めて友の身に寒さを氣づかふ頃、長い手紙は次第に短く、葉書に變つてやがて又松波の消息は絶えた。病氣が惡くなつたに違ひないと思ひながらも新次は書送る手紙の間々に彼の喜びさうな本を送る事を忘れなかつた。それでも松波の消息はなかつた。月のなかばに、

「明星十二月號有がたう御座います。けれども、發熱が烈しくて私は讀む事を許されません。その代りに東京パツクを見せてくれました」

冬樹と署名してはあつたけれど看護婦でも書いたのであらう、それは下手な女文字だつた。そのまゝ松波の消息はなかつた。

暮の二十三日。恰度第二學期の試驗を終へて家に歸つた新次は自分の室の机の上に一通の書狀ののつて居るのを見た。松波安三郎と冬樹の兄の名であつた。新次は、と胸を突かれた。

「愚弟冬樹儀永々病氣の處養生不相叶二十一日未明死去仕候生前一方ならぬ御恩顧にあづかり候

段探謝致候」

松波は死んだ。來年の春は「東京」へ出て、「與謝野先生」に是非逢ひ度いと繰返へして云つて居た松波は十二月二十一日のあかつきに死んで了つた。新次は暗闇のどん底に自分も落ちて行く心であつた。

殆んど彼の他に友達を求めなかつた新次は松波が死んでからは全くの孤獨であつた。毎日學校へ通つても教室の一隅に暗い顔をして坐つてゐた。それは今迄も同じなのであつたが、すべて心に張合がなくなつて了つたので其の淋しさに堪へられなくなつて來た。机に對つてもとりとめもない瞑想に耽り勝で、自分でも何を考へて居たのか、後でつかまへる事の出來ないことが多かつた。何をするのも面白くなく、うつけた日が毎日來ては過ぎた。松波が「東京で君に逢ふ」と云つた春も何時しか廻つて來て新次は中學部を卒業した。席順は尻から三番だつた。引續いて同じ學校の大學豫科に通つて居た。

其の間に世の中は烈しい推移を見せた。新次が禁斷の書を讀むやうになつてから知つた文壇も短い間に著しく變つた。尾崎紅葉、樋口一葉、正岡子規、齋藤緑雨等も死んだ。新次は其の人々

の死を〔十五字削除〕深く惜んだ。維新の際の騷擾を思はせるやうな有樣で自然主義が起つた。創作をする人は又盛んに議論をした。美しい名の下に黨同異伐が行はれた。硯友社の大家はすべて葬むられ、長く認められなかつた獨歩、花袋等と共に、詩を捨てた藤村も自然派の作家に數へられて一躍して大家になつた。名も知らなかつたやうな人々が揃つて打つて出て直ちに大家になる事が出來た。新次は主義の爲に闘ふ「武士道」の樣な人々を嫌つた。烈しい破壞の渦卷の中には種々の犧牲のある事を承認しても、すぐれたものゝ埋れて行くのを歎かないでは居られなかつた。新しい作家として數へられた藤村、花袋、獨歩、白鳥、青果、漱石の作品を喜ぶと共に、故もなく、感能の鈍い評家から古いと斥けられた鏡花を捨てる事は出來なかつた。彼は性分として理論から出發した作品や、理論を強ふる作品を嫌つた。直ちに感情に訴へるものに深い感激を與へられた。「現實暴露」「生の悲哀」と云ふやうな言葉は新次の淋しい心を痛ましめた。たとへ上手であると認めても情熱のない文字を並べて家常茶飯のたゞ事に強ひて意味を附した流行の小説を時の青年が聲を合せて嘆稱する時、新次はあれは「老人の小説だ」と思つてゐた。覺め易い夢でもいゝ、熱想に富む文字に彼はあくがるゝ若さをなほ失ひ切らない事を知つて居た。其點から新次は「明星」の廢刊をいたく歎いた。其の終刊號を手にした時「あゝ我戀は遂に亡びたり」と日記の一節に書添へ

た。「紫」の作者は遂に歌ふ事なく默してしまつた。新次も亦屢々ものうき自分をもてあつかつた。逝く春の花の散るのにさへ動いた心は次第に消えて行つた。あかるい心で明日を待つた昨日は暮れて過ぎし日のなつかしさのみが泣き度い程なつかしい。今日ももう暮れてゆくのだと思ふと氣が狂ふ程苦しい想ひに惱まされた。學校は相變らず新次の興味を引かなかつたが、それでも敢て落第を覺悟して怠ける程いさぎよい一本氣の時代は過ぎて居た。試驗前にさへ、一寸机に向へば人並の成績を得られると確く信じてゐて、そしてそれが實際の結果を示した。學期々々の成績が兎に角良好になつたので父母はひどく喜んだ。

「新次も此頃は如何かかうか勉強するやうになりまして。」

と來る人毎に吹聽した。新次は苦笑を禁じ得なかつた。其間に鏡花、藤村、漱石、花袋、獨歩、白鳥、青果等の作品は殆んど皆讀んでゐた。夜更け迄新次の室には其のための燈火が消えなかつた。それを見ても父母は「新次の勉強は度が過ぎる」と云つた。新次は年老いてゆく父母を今は哀れむ心であつた。禁斷の書は讀めば必ず新聞紙で包んで筆太に「經濟原論筆記」「法學通論ノート」などと書いて置いた。

少年の日はかくて終つて了つた。新次の心を支配するものは追憶であつた。苦しいと思ひ、悲

しいと思つた事さへ時をへたてゝは、唯なつかしいものとなつた。幼い時の記憶は痛い程明瞭に思ひ浮べられた。中井さんの事、松波の事、新次は現在よりも過去に多く住んでゐた。しかし其のなつかしいと云ひ、美しいと云ふのも亦淋しい、果敢ないものである事は否まれなかつた。かゝる心を抱いて居る新次は「亜米利加物語」一巻を携へて歸朝した永井荷風を喜び迎へたのである。四五年前「地獄の花」「夢の女」其他で名を知つて居た此作者は米、佛二國に遊んで歸つたのである。豐富なる詩想に、限りなき熱情を以て、遣瀬ない反抗と、追憶の無韻の抒情詩を歌つた。「監獄署のうら」「祭の夜語り」「蛇つかひ」「歡樂」「狐」「牡丹の客」「隅田川」すべて新次の喜んで言誦したものであつた。曾て「誓之巻」によつて泉鏡花に與へられた感激を更に又永井荷風によつて與へられ、其の作品を讀む時は、以前(むかし)の心持になることが出來た。折柄、「明星」の後身として「昴(すばる)」が出た。筆を執る人は新詩社出の人々であつた。「水沫集(みなわしふ)」の著者も其の若き一群の中に父の如く加はつてゐた。「明星」時代のなつかしさは引いて亡き友の事を苦しい程偲ばせた。「與謝野先生御夫婦に逢ひ度い」と云つた其の言葉が頭を去る時とてはなかつた。新次自身も同じ心であつたので遂に彼は押へ切れない憧憬の力を止める事が出來なくなつた。與謝野先生は其頃神田東紅梅町(ひがしこうばいちやう)に住んで居られた。一週に二日、文學講演會が催されてゐた。新次は思ひ決して或日學校の歸途(かへりみち)神田

へと廻つたのである。其の月の「昴」にも、

蛇狐火つけ盗人かどはかしをかしき名のみ我は貰ひぬ

と云ふ先生の歌があつた。世に誤解された人の門を潜る事は父の子として少なからず憚られたのみか、自分とは全くかけ離れた世界の人のみが集つてゐるやうに思はれる新詩社に學問も才能も劣る自分の立入る事が新次をして甚だしい羞恥を覺えさせた。小川町で電車を下りて駿河臺を上り春の日の照る町に黒い影を落すニコライ堂のかげを臆病に一戸々々の表札を注意して歩いた。「新詩社は何處ですか」と道行く人に聞く事も出來なかつた。教會の影を出離れるとパッと明るく眼の下が開けて、新次は石段の上に立つて居た。其の下の二階家の格子先に「新詩社」「與謝野」と二枚の表札が並んでゐるのを見た時、新次は故もなく身震ひした。二三度其家の前を素通りして如何しても格子へ手をかける事が出來なかつた。

四五日後、新次は再び紅梅町に足を向けた。暫く溝のふちにためらつた後思ひ切つて格子をあけた。鈴の音が鳴ると同時に玄關の障子をあけたのが寫眞で見知つて居る與謝野先生であつた。

新次は舌が自由に動かなかつた。

「講演を伺ひ度くて參りましたが……」

と途切れ／＼に云ふのを引取つて、
「あゝ左様ですか、私が與謝野です。お上りなさい。」
と先生は氣輕に二階へと導いた。八疊の室に塗板を据ゑて萬葉集の初めの歌が書いてあるのを座に居る人が手帖に寫して居た。上り口の六疊には書架や机の前に輪をつくつて聲高に語合ふ一群が居た。
「さあ此方にお這入りなさい。」
と云はれるまゝに新次は八疊の室の隅で先生の講義を聽いた。それが濟むと「みだれ髪」の作者の源氏の講義があつた。ありあまる黑髪を大きく束髪に結んだ方であつた。つゝましやかに低い聲で「桐壺」の巻をよまれた。新次は如何して自分が此の席に居るのかわからなかつた。羞しさ、恐ろしさ、嬉しさの入りまじつた心持で夢のやうに思はれた。其の日から新次は一週に二度づゝ新詩社へ通つた。同じ席で講演を聽く人は十人位であつた。其の人々は何れも自分の歌稿を携へて來ては先生の朱を乞うて居た。新次も自作の歌を懐にして行つた事があつたが、
「瀧田君は短歌はやらないのですか。」
と先生に聞かれて、

「やり度いと思つては居ますがどうも出來ません。」

と答へて了つた。其時の歌は松波冬樹を悼む二十首であつた。

十二月肺病院の窓あかり凍れる中に死にゝける人

韓の風身に沁むと云ふ消息のつぎにやまひを得つとおこせし

そんな歌を書いた歌稿は自分のひけめがちな性分を憎む心から其の日の歸途ずたずたに引裂いて道筋の川に流した。

新次は新詩社へ通ふ事を多くの人に祕し、殊に自家の者には堅く知らさないつもりであつたが或夜父母に尋ねられた時、かまふものかと思つて答へて了つた。其の時父は酒杯を手にしてゐた。酌をしながら母が聞いた。

「此頃はよく燈火がついてから歸つて來るけれども、學校はそんなに遲く迄ありはしまい。」

「えゝ、學校から他所に廻りますからつい遲くなります。」

「何處へ廻るのです。」

「實は與謝野と云ふ先生の所に通つてゐるんです。」

「與謝野先生と云ふのは何の先生だ。」

父の顔はもう赤かつた。
「國學者です。僕は字が下手な上に手紙さへ満足にかけませんから、せめて文章丈でも稽古して置き度いと思ひまして講演會のあるのを幸ひに此間から通ひ初めたんです。」
新次はさう答へて與謝野先生を知らない父を哀れまないではゐられなかつた。
「國語もいゝが少し英語を勉強した方がよからう。」
と父は存外満足して居た。それからは出入りの者や親類の者の來る度に父は、
「新次もやつと慾が出て此頃は學校もよくやるし、其外に神田迄通つて勉強してゐます。どうも此奴程親父を苦しめた男もなかつたがどうかかうかなるものですなあ。
と云つて心地よく高笑ひをするのであつた。さう云ふ父の前で新次は小説類を讀む事は氣ぶりにも見せなかつた。彼は勉強するのでもなかつたが學校の方もかなりの成績をさめてゐるので一頃の新次を知つてゐる者は誰しも驚きを以てたゝへた。「新聞記者になる氣だらう」と云ふ侮辱の言葉も忘れられて了つた。
その中に豫科も卒業した。本科へ進む時新次は文科に行き度かつた。新次の好む純文學の教授としては馬場孤蝶先生の外に聞えた人は一人もなかつた。生徒も三學年通じて十數人に過ぎない

上、語學を修めて中學の先生にならうと云ふやうな人が多かつた。それでも新次は文科へ行き度かつた。だが父は既に新次は理財科へ入るものときめてゐた。特に專門に學ぶ可き課目をさへ豫定してゐた。どうせ云ひ出しても許されぬ事として新次は其のまゝ理財科に入つて了つた。「經濟原論」「經濟政策」「經濟學史」「貨幣論」「銀行論」「財政論」「商業史」「民法總則」「債權法」「物權法」「商法」などの講義を聞かなければならなかつた。何れも面白いとは思へなかつた。眞面目らしく講堂に出て、試驗前に始めてノートに何が書いてあるかを知り、そして首席に近く及第するのが可笑しかつた。成るまゝに任せた自分のふがひなさを冷笑した。

其の間にも新詩社には通つてゐた。輕い口のきけない新次は先生に對しても思ふ事が云へなかつた。講義を聽く氣もなかつたので何も覺えなかつた。たゞ與謝野先生の所に出入りして親しく先生に接し得る事が嬉しかつた。一年半で秋のなかばに講義は終つた。それからは新詩社へ行くたよりとして新次は思ひ切つて歌稿を先生に見て貰ふ事にした。短歌會にも出席した。だが以前のやうな幼稚ながらも若々しい、華やかな歌は出來ないで、暗い、ふてくされた、自分自身でさへいまはしい歌のみが浮んで來るのを悲しまないではゐられなかつた。始めて新詩社詠草の中に十首ばかり加へられて「明星」に出た時は匿名ではあつたけれど人々の眼かはゞかられた。瀧田信二

と云ふ名を其の中に見出した時の心持を新次は忘れる事が出來ない。二度も三度も繰返へして自作の歌を誦した。毎號十首二十首づゝ先輩のゝ間にまじつて新次の拙い歌が雜誌の末に出るやうになつた。

或日、新次は兄からの手紙を受取つた。兄は大學卒業後妻を迎へて別居して居た。近頃新次が學業の成績のいゝ事を喜ぶ趣が先づ書かれた末に恁うあつた。

「一昨日銀行で或人が持つてゐた『昴』と云ふ雜誌を見たら新詩社詠草の中に瀧田信二と云ふ名を見出した。瀧田信二は瀧田新次であらう。小生は其の十數首の歌の巧みなのに不安を抱いた。折角眞面目に勉強するやうになつたのが再び邪路に入るのではないかと思はれる。素より小生は高尙なる趣味としての文學を排斥する者ではない、たゞ文學で身を立てようと思つてゐるならば飽くまで反對し度いのだ」

そして文學者の誰もが生活難に苦しんでゐる事、文士なるものゝ品性の下劣な事が長々と添へてあつた。

「私はかくさずに申上げます、仰せの如く信二は新次で御座います。けれども私は文學で身を立てようなどとは思つて居りませんから御安心下さい。又私が『昴』に歌を出しました事は父上母上

へは御話なきやう御願ひ致します。歌を詠むと云ふ事はかくさないでもいゝ事でせうが若し御両親につまらない御心配をかけては濟みませんから内聞に願ふのです」

直ちに新次は返事を送つた。

其の頃學校の文科には改革があつた。一人よがりで三田の山の上に納まつて居たのが新しい機運につれて永井荷風、小山内薫、小宮豊隆と云ふやうな新しい人を迎へた。「三田文學」が發刊されて永井先生が其の主幹であつた。先生の作品は毎號出た。新次の喜びは何とも云へなかつた。彼は牢獄を出た人のやうに理財科の講堂を抜けては文科の教室へ通つた。永井氏の「近代文學評論」馬場氏の「大陸文學紹介」小山内氏の「イブセン研究」小宮氏の「獨逸文學」の時間には今迄見馴れなかつた新次の姿を文科の生徒は不審の眼を以て見た。

「君は文科ですか。」

と尋ねた男もあつた。ちつとの間に文科の生徒の様子も著しく變つて來た。筆を持つてやつて行かうと云ふ人も多かつた。其の人々と新次は何時か憚からず口をきく間柄になつた。新しい「三田文學」に新しい作品を載せようと云ふので人々は心を躍らせてゐた。若樹末郎は「夏より秋へ」を書いた。井川滋は「逢魔が時」を出した。

「久保田君。來月のには君の創作が出るさうですね。」
「えゝ、つまらないものですが永井先生に見て頂きました。」
「松本さんもいゝ加減に發表しては如何です。」
そんな會話が毎日取替(か)はされた。
「瀧田君も何か書き給へ。」
と云つてくれる人もあつた。周圍のいき／＼した空氣は新次をして自分も何か書き度いと思ふやうにして了つた。彼は筆を持たないでは居られなかつた。新次は彼の半生を僞らず寫さうと云ふ企ての三部作の第一に筆を染めたが創作をする技巧の點に於て全く無經驗だつたゝめ頭を苦しめるばかりで紙は少しも進まなかつた。恰度學年試驗前だつたにもかゝはらず新次は毎日原稿紙に書いては書く傍から破いて捨てた。「自分には、とても書けない」と思つて腹立たしく筆を叩きつけたこともあつたが春の休暇に一生懸命で、やうやく一篇を仕上げたのである。題は「山の手の子」とした。二三の新しい友達がそれを讀んで「兎に角永井先生に見て貰ひ給へ」とすゝめてくれた。始めて書いたものをけなしてはと云ふ心から、おだてゝくれるのだと知りながらも新次は「山の手の子」を永井先生に差出した。十日程經つてから文科學生溜所(たまりしよ)で永井先生から、

「來月は瀧田君のが出ますぜ。」

と人々の前で云はれた時新次は顏を赤くしないではゐられなかつた。あんな下手なのを出すのではなかつたと思ふ底から、自分の處女作も印刷される事になつたと云ふ嬉しさも湧上るのであつた。それと共に若し此の事が家の者に知れたら如何しようと云ふ危惧も深かつた。

ビショ／＼と雨の降りつゞく六月も、なかばを過れば又第一學期の試驗が近く迫つて來る。早くも來るべき試驗の日の不安を語合つてゐる學生もあるのに新次は受驗科目のノートさへなかつた。勘定高い理財科の生徒は自分が汗を流して取つた口述筆記を他人に貸す事を喜ばなかつた。新次はやつとの事でそれを借りたが、一日も早く寫し取つて返へさなければならないので暑い夜も遲く迄あけはなした室の窓から暗い庭先へ燈火が流れた。

「昨夜も亦遲く迄起きて居たでせう。あんまりつめて勉強すると身體を惡くするから氣をおつけ。」

と母は幾度も注意した。

「試驗が近くなりましたし來年の一月迄には卒業論文も書かなければなりませんから忙がしいんです。」

と答へた。ノートが出來ると未だ試驗迄には二週間もあつた。新次は直ぐと「山の手の子」に次ぐ可き創作にとりかゝつた。夜更け迄机に向ふ事は變らなかつたので父母は矢張試驗準備をしてゐる事と思つてゐた。

或夜、新次は机に向つて原稿紙を一枚々々と染めて居るところへ女中が「旦那樣が御呼びで御座います。」

と云つて迎へに來た。

父は恰度寢酒の時であつた。猪口で燗酒を飲んではコツプで冷酒をあふつてゐる傍に母は團扇で風を送つてゐた。恁う云ふ場合に以前はよく小言を喰つたものであつたが、父は機嫌よく新次を迎へた。暗い夜の庭には泉水に落ちる清水の音と、蟲の音が更けてゐた。それをぢつと聞いてゐると間もなく父は盃を置いて口を開いた。

「實はお前も來年は卒業の順だが卒業後の方針を聞いて置き度いと思ふ。細かい事は云はんからお前が考へて居る事を大體云つてみるがいゝ。」

父は盃の手を休めて新次の返事を待つた。どうせ思ふ通りの事を云へば機嫌を損じるばかりで許しつこはないと知つてゐるから新次は何と云つていゝのかわからなかつた。

「この事に就いてはお父様も種々考へてゐらつしやるのだから何なりと自分の考へを云つてごらん。」

と母も促すのである。

「來年卒業は卒業ですけれど未だ實世間の事は何も知らないのですから少許も見當がつきません。お父様があれがよからうと指定して下さる事なら何でもやつて見ようと思つて居ます。」

「それはまだ世間の事はわかるまい、たがどんな事業を將來やり度いと云ふ考へはあるだらう。それを云つてみるがいゝ。」

「私は文學がやり度いのです」と新次は答へたかつた。そしてそれが國王になり度いと云ふのに等しい事を知つてゐた。新次が默つてゐるので父は言葉をつゞけ、

「まあ何をやらうと云ふ事は後にしても、第一に卒業後直ぐ何處かに勤めるか或は二三年洋行して來度いか、それをきめるがいゝ。正一は大學を出てから直ぐ洋行するよりも實務の方を少しでも知つてから行つた方がいゝと云つて銀行に這入つたが、扨て一度勤めて了ふといゝ機會かなくて何時外國へ行かうと云ふあてもなくなつてしまつたやうなわけだ、だからお前は學校を出て、直ぐ亜米利加へ行つては如何かと思ふ。」

「亞米利加へ行つて學校にでも這入るんですか。」
「それは如何でもいゝが、學校に居て學位を取つてから一二年銀行か會社へ這入つて實地を見て來るもよからう。此の間塾へ行つて聞いて來たがエールかハーバードなら無試驗で入學出來るさうだ。」
「ほんとに左樣云ふ事になると私も安心だよ、正一は銀行でも大變評判がいゝさうだし、お前も此頃は學校の出來もいゝのだから。」
と母はもう先きが見えたやうな事を云つた。
「新次には困らされたものだつたな、學校は怠ける、落第はする、あれではとてもものになるまいと思つたよ。」
父は聲高く笑つた。
「姉さんなんかよく云つたものでしたね、新次は新聞記者か小説家にしかなれないつて。」
さう云つて新次も一緒に笑つた。亞米利加のやうな野卑な殖民地なんか行き度くもないと思ひながら父に調子を合せてゐる自分を苦笑した。
「ほんに私もお前丈は如何なるものかと思つて居ました。まさか新聞屋にならうとは思ひもしな

かつたけれど、ちひさい時から小説や雑誌が好きだつたから小説家にでもなりはしないかと思はれてね。」

「まさか小説家なんかになりはしませんよ。」

新次は心苦しい聲を高くして云つた。

「小説家か。小説家程しまつの悪いものはないだらう。身持は悪いし、のらくらして遊んでばかりゐるし、それで何を書くかと思ふと下らん泣事を並べてゐる、何が面白いのだかわけがわからん。雑誌でもさうだ、經濟とか法律の雑誌はあれで有益だが文學雑誌程馬鹿らしいものはない。塾でも『三田文學』とかを出したさうだが、金が無い〳〵と云ひながら、つまらん事を始めるので困る。どんな雑誌だか讀んでみたか。」

苦り切つて父は云つてゐた。

「エ、一寸友達のを借りて見ましたがつまらないものです。」

と新次は父に答へた。來月は「山の手の子」が出るんだと思ふと共瞬間に此の父の子として禁斷の書に親しんで來た半生の自分と、一歩々々父が考へてゐるとは反對の奈落へと落ち行く自分の姿をはつきりと眼に見る事が出來るのであつた。(明治四十四年八月二十九日)

ぼたん

六歳の春の始め、私の家は麻布から芝に移つた。思ひ出の多い生れた家を去る事も、何の悲みをも誘はない程私は幼かつた。また普請最中から私は守につれられて、度々新しい家の出來上るのを見に行つた。なぞへに高く岡に續いた庭は、赤味を帶びた土の色に、日光の照りかへす中をカンカンと石を切る鐵槌や、木をひき削る鋸、鉋の音迄も生々した心持を與へ、風が吹く度におが屑が白く舞上ると木の香はツンと鼻を突くのであつた。私は陰氣な古家を一日も早く去る事を願つてゐた、その移轉の日が來たのである。四五日前から家具類は運んであつたが、愈々明日となつた晩には、燈火の下に家の者は、何となく沈んだ聲で語合つた。

「こんな家ですけれど、十幾年と住み慣れてみますと矢張り惜しいやうな氣がしますねえ。」

「ほんにもう此家に來てから十五年になりますからね。孝造が亞米利加から歸つて來た翌年でしたよ、麹町から越して來たのは。」

「左樣なりますかねえ、おばあ様はほんとによく覺えてゐらつしやいますこと、私なんか何んでも直ぐ忘れて了つて仕樣が御座いませんよ。」

「それから伸一の生れたのが其翌々年です、お前が初産なので何かと氣にかけて、あの寢所の窓の傍の柘榴の花を見ると眼が眩むつて伐らしてしまつてさ。」

「そんな事も御座いましたんですねえ。雪子、憲二、涼子と段々生れる度に平氣になりまして伸一の時の心配も忘れてしまひましたのですよ。」

「女はお産の輕いのが一番幸福ですからね、それに皆孫達が丈夫で何よりです。」

「伸一も雪子も學校に行くやうになりますし、早いもので御座いますねえ、何時の間にか私も四人の子持になりましたのですもの、年を取つた筈で御座いますねえ。」

と祖母と母はしんみりと、この古い家に就て想起す十五年の間の出來事を話してゐた、私は母の膝を枕に聞いてゐる中に、うとうと眠つてしまつた。

其日は晴切つた青空であつた。十臺の俥は黑門から威勢よく往來に引出した。乾き切つた街の上に車輪の音が高く響いた。麻布の高臺から見渡した町々の、屋根瓦のキラキラ光る向うには品川の海の白帆も見えた。母に抱かれた私は嬉しくつてたまらなかつた。眞先に父を乘せた抱車夫の藤吉が、勢よく人を拂つて行く次には妹と相乘りの祖母、其次が私の乘つた俥であつた。私は幾度となく後につらなる兄や女中達や小荷物を乘せた俥を、のびあがつては見返つた。飼犬のス

パイも長い舌を吐きながら後になり先になり俥と一緒に走つた。

坂を下ると芝だつた。赤羽橋を渡つて、廣い三田通りを拔けて、右に曲ると急に道幅の狹い寺ばかり並んだ町になつた。ある角寺(かつでら)の垣の中に大きな池が見えた時、私は麻布の家(うち)に大事の金魚を忘れて來た事を思ひ出した。廻りにいつぱい菖蒲の咲く小さい池に、私は澤山金魚を飼つてゐた。「明日は芝に持つて行くんだ」と藤吉にしやくはせて盥に入れて置いた。「桶に入れて坊ちやんと相乘りで持つて行きませう」と云はれたのを忘れてゐた。

「お母様僕の金魚は如何したの。」

私は遂に母に尋ねないではゐられなくなつた。

「金魚ですつて。金魚なんか持つて來られませんよ。」

「だつて藤吉が一緒に俥に乘せてあげるつて云つたんですもの。」

「金魚なんか芝にだつて賣つてゐますから又買へばいゝぢやありませんか。」

「だつて……」

私は引返へして取つて來ると云つてきかなかつた。遠くなると暗く霞んだ麻布の高臺が屢々顧みられて眼には涙さへ滲(にじ)んで來た。

「おかあへりイ。」

と藤吉は何時ものやうに叫びながら白い舗石の上をガラガラと玄關に曳込んだ。バタバタ廊下を踏んで、先に來てゐた者は手を突いて迎へた。

「藤さんはお歸りだつてさ。今日お引越なんぢやありませんか。」

と剽輕な女中の粂は、一番後の俥から下りると笑ひこけた。父も母も聲をあげて笑つた。

新築の祝ひの催されたのは花の頃だつた。殊に座敷の前の枝垂櫻の老木は地を擦る程の枝の先迄も咲揃つて、其の根方に立つて見上ると遙かの梢に青空はうす紅の花に霞んでチラチラ見えるばかりだつた。

早午飯を濟ませても家の内は客を待つ支度で取込んでゐた。多人數の膳椀を取揃へる爲に召使や手傳人は土藏の中へお百度を踏んだ。一人が器物を納めた箱の蓋に書き記した文字と中の器の數とをひき比べる傍から、他の一人は一々布巾で淸めるので、物と物との觸合ふ音が、喧い人聲や足音といりまじつて騷々しい中を、私は着せられた紋付の羽織で折目の正しい袴をシュウシュウいはせながらあちらこちらと跳廻つてゐた。

「憲様およし遊ばせ、又肩におつかまりになつて、若し此のお茶碗が割れたら如何致しませう。」

「一寸の間あちらで遊んでゐらつしやい。雪子様は何處にゐらしつたんでせう、探しておいで遊ばせ。」

うるさがる女中達の言葉に乘せられて私は姉を探しに行つた。座敷にもゐなかつた。應接間にもゐなかつた。父の書齋の襖をば私は一寸ばかりあけて覗いたが、火鉢の上に擴げた新聞を讀んで居た父が、物音に此方を見返つたので狼狽てゝバタバタ逃出してしまつた。私はかくれんぼをしてゐるやうな氣になつて、梯子に足音を忍びながら二階に上つて行つた。入口の障子が閉つてゐるので、恰度頃合ひの所をペロリと舌の先で濡らした上、指で突ついて穴をあけた。室の正面に据ゑてある大きな鏡臺の前に坐つた美しい晴衣を着せられた姉は一人でいろんな顔を鏡に映してゐた。ガラリと障子をあけて室の内に飛込んだ私は、

「おしやれ、しやれてもほれてがないよ。おしやれ、しやれてもほれてがないよ。」

と聲を張つてはやしながら、驚いて立上らうとする姉の肩を後からつかんでゆすぶつた。

「憲ちやんおよしつたら。折角着た着物がだいなしになつちまふわ。憲ちやんてば。」

「なんだいおしやれ。かまふもんかい。」

私はいきなり姉の結立ての稚子髷に手を掛けて滅茶滅茶にしてやつた。ワアツと泣伏した姉を

殘して二階を馳下りたが、人目を避けて大きな庭下駄を引ずりながら飛石を傳つて植込みの中にかくれてしまつた。

けれども、自分でも思ひのほか手荒だつたいたづらを悔る心から、直ぐと寂しさが湧いて來て私は又何氣ない顏をして緣を上るや立働く人の間にまぎれ込んだ。

「又いらつしやつたんですか。雪子樣はめつかりましたか。」

と問はれても私は答へる氣がしなかつた。

「憲二や、憲二や。」

と其折柄、長廊下を母の聲が近づいて來たと思ふと、其處に這入つて來たのは、母と母の袖にすがつてまだシクシク泣いてゐる姉であつた。

「憲二や、又おいたをして姉さんを泣かせたのですね、これ御覽なさい、折角奇麗に結つてあつた髮をこんなにしてしまつて、ほんとに仕方のない子つたらありませんねえ。それに此處に居ると皆の邪魔になるから應接間に行つて遊んでゐらつしやい。志滿や、憲二をつれて行つて何かして遊んでおやり。」

私は母に追はれて應接間で遊ばなければならなかつた。

姉や私のお相手だつた志滿は、縮毛の、頰ぺたの赤い、こまつちやくれた娘だつた。それを相手に私は遊んでゐたが、ドミノ、ハルマ、トランプと何をしてもつまらない、次第に集つて來る人々の、植込を距てた座敷の話聲が折々突拍子もない高笑ひをまぜて聞える度に、私は其人々の中に這入りたくてたまらなかつた。志滿もしきりに「あれは誰さんの笑聲だ」などゝ窓の所からのび上つて耳を傾けたり、ソワソワしてゐたが、

「一寸の間待つてゐらつしやい。」

と云ひながら室を出て行つた。重い音をさせて扉がしまると、廊下を小走りに踏んで行く志滿の足音が寂しく響いてやがて消えた。ドツと又座敷に起る笑聲が取殘された身には妙に悲しく聞えて、一人ゐる天井の高い窓は寂しく靜まりかへつた。いつかの晩母から聞いた、お姫様が惡魔の城の穴藏に押込められた話を思ひ出して、窓の外の遠い青空が賴りなく思はれて仕方がなかつた。私はつくづく姉を泣かした事を悔いたが何時の間にか涙が頰を流れて來た。

待つても待つても志滿は戾つて來ないので、たまらなくなつた私は扉を開かうと立上つた、その時靜に外側からあけられて眞白な白粉の顏が室を覗いた。フト消えて二度目には、はれやかに笑ひながら友染の姿が這入つて來た。

「坊ちやん、今日は。」

口々に云ひながら六人、おない年位の娘が私を取巻いた。見た事のない顔ばかりだつたが「藝者の子」に違ひないと思つた。

「坊ちやん、一人ぎりで何してるの、これ何。」

「ドミノ。」

「ドミノつて如何して遊ぶの、教へて頂戴な。」

「あら、これは何だらう。」

「西洋の骨牌でせう、ねえ坊ちやん。」

「トランプ。」

私はそれをパラパラと切つて見せた。

「トランプ?　如何するんでせう教へて頂戴な。」

私は「おふくろしよひ」と云ふのを教へてやつた。

「かうやつてホラ三と三、王様と王様と揃つたら捨てるの。それで一番後に一枚残つた者が負なんたよ。」

「マア、これが『おふくろ』？」
と云つて皆笑ひ出した、をかしくてたまらないと云つたやうに卓の上につッ伏して笑つた。
「ぢやあ、私は坊ちやんの組になるわ。」
なかでは一番大柄の、黒地に白い牡丹花を大きく抜いた友染のが私を強ひて膝に抱いた。
「僕は一人でいゝんだよ、組なんかいらない。」
「たつて、私まだよく解らないんだから教へて貰ふんだわ。ね、いゝでせう。」
云ひながら羞かしがつて身もだえしてる私の顔を覗き込む。白粉の頬がつめたかつた。
たわいのない遊びは笑ひに終つて、
「あゝあ、とうとう私がおふくろをしよつちやつた。」
とみそッ歯の子がさもがつかりした顔をして云つた。他の者は又皆、腹を抱へて笑つた。
「オ、嬉しい、坊ちやんのおかげで一番上り。」
近々と又頬を寄せる時、そつと扉のあく氣配がした。ほんの少しのすき間から、ちひさい姉の顔が出て引込んだ。
「憲ちやん一寸。」

姉は又顔を出して手招した。
「マア可愛らしいお嬢さんだこと。いらつしやいな皆で遊ぶから。」
一人が聲をかけると姉は又引込んで、
「憲ちやん一寸。いゝ事があるの。」
と扉のかげで呼んでゐる。私は女の手を逃れて姉に走つた。
「憲ちやん、早く此方にいらつしやい、藝者の子なんかと遊ぶんぢやないことよ。」
姉は聲をひそめてさゝやく。
「今ね、皆でトランプしてるんだから雪ちやんもはいらないか。」
「だつて藝者の子なんかと遊ぶものぢやなくつてよ。」
姉はしきりに手を引張つて連れて行かうとするところへ、
「お嬢さんもいらつしやいな、一緒に遊びませう。」
と云ひながら一人の子が顔を出した。姉は私の手を放してバタバタ逃出してしまつた。
「さあ、もう一度。今度こそ負けないから。」
みそッ齒が札を切つた。

「今度は私が坊ちやんの組よ。」
「イヽエいけないわ、私が組なんだもの。」
「だつて今度は私の方がいゝでせう、ねえ坊ちやん。」
「私の方ですねえ。ソラ御覽、私が仲善なんだわ。」
又賑やかに骨牌が始まらうとする處へ見なれない肥つた女が這入つて來た。
「お女将さん。」
「マア皆で何をしてるんだらう坊ちやんのお相手――それもいゝけれど、もうちつとしたらあつちのお座敷の方に來ておくれ、そろそろ始まるからね。」
「それぢやあ、もうよして又後でしませうね。」
何か互にさゝやきながら六人は立上つて、かはるがはる室の正面の大姿見の前で着物の襟を直し、髪に手をあてゝみて、
「又後で遊びませう。」
と云ひながら出て行つてしまつた。私は一人寂しく卓の上にちらかつた骨牌を見つめてゐたが、間もなく足音を忍びながら室を出て郞下をたどつて行つた。

座敷の有様がどんなだつたかは、すつかり忘れて了つたが、なんでも母に手を引かれて姉と一緒に大勢のお客にお低頭をして廻つた事をおぼえて居るばかりだ。

あかりがついた。私と姉は中の間にお膳を並べて誰よりも早く御飯を喰べてしまつたので、所在なさに手の空いてる者を探し廻つたけれど誰も相手にしてくれないので、座敷の様子を見ようと、二人手を引き合つて爪先で歩きながらそつと障子の際迄寄つた。そして少しの隙間から覗いたら、列をつくつて並べられた燭臺の灯あかりにまばゆい程の室の中を、紅に、紫に、チラチラと長い袂のお酌が動いた。中にもすぐれて美しい白い牡丹のゆらぎをば私は今も忘れない。

お客が皆歸つた後だつたか、誰一人歸らない前だつたかも、はつきりわからないがお女將さんと云ふ肥つた女に連れられて、お酌達が歸つて行くのを私は志滿と一緒に門前で見た。

白い牡丹の子は「ぼたん」といふ名だと其時はもう誰かに聞いて知つてゐた。そのぼたんが、

「坊ちやん、さやうなら。」

と云ふ時ツト寄つてうつぶせに頰を寄せた。

「さよなら。」

「さよなら。」

口々に他の子も云ひながら俥に乗ると梶棒が上つて、夜の街に若衆の掛聲勇ましく、提灯チラチラと遠ざかるのを何時迄も何時迄も遙かの町角に消える迄見送つた。

翌年の春の花見の時であつた。或商店の花見船が、溢れるやうに靑く日に光る隅田川を、四五艘で囃子も賑かに漕上る、その一艘に私は若い叔父と一緒に乗つてゐた。早くも醉つた人々は赤い顔を、あるかないかの川風に吹かせて陽氣な聲をあげてゐた。しやがむ事も出來ない程、眞黑に人を積んだ船には女もまじつて、川面いつぱいにあたる春の日に、人々の間に飜へる友染の袖が美しかつた。土堤の花はうす紅に、これも光つてまぶしかつた。

船は少し離れて二艘並んで行く。舷に腰かけて私は、ひたした手に觸れてサアと分れて行く川水を面白がつてゐたが、フト氣が付くと並んでゆく向うの船の舷にも、同じやうに水に手をさしのべた女が居た。白い手に絹のやうな水がまつはつては流れるのを、心地よささうに何時迄も何時迄も手を濡らしてゐるのがぼたんに違ひなかつた。

船は土堤に着いて、先を爭ふ人々は土堤つゞきの廣い草原に群つて行つた。叔父に手を引かれながら、馳廻る人の間を彼方此方と歩く間も、ぼたんは何處に居るだらうと其姿にあこがれた。

花火があがる。雲も無いゆらゆらと青く晴渡つた空にパツとうす煙を靡かすのを輕い風が來ては吹消して了つて、又元の青空になる。其下で人は一日の歡びをつくした。ちひさいお酌と鬼ごつこをしてキヤツキヤツと云はせてゐる足下の危ない人もゐた。故意(わざ)と手をつないで人ごみを突切つてゆく人もゐた。

天幕(テント)張(ば)りの、おでん、鮨、汁粉、麥酒(ビール)の模擬店が其處此處に出來てゐた。叔父は知人も少なかつたからか、私を引張りながら、人の少ない處少ない處と歩いてゐるやうだつたが、やがて麥酒屋の天幕の入口に立止つた。

「いらつしやい。」

と奥の方で叫んだ醉つた男の聲につれてツイと出て來たのはぼたんだつた。塗盆にのせた麥酒の大コツプのふちから白泡のあふれてゐるのを捧げて、叔父の手がコツプを取ると直ぐ又忙しさうに別の客へと走つて行つた。私は物足りなく其後姿を追つたが、又しても群つて來る客の中に急(たちま)ちに見失つて了つた。

そのまゝ叔父は私を誘つて此の花見の連中を拔けて土堤をブラブラ歩いて歸つた。兩側の櫻の梢から散りかゝる落花の中にも、私は今日のぼたんの赤前垂と、襟に結んだ櫻を紅(べに)で散らした花

見手拭を、あざやかに浮べて見た。

一夏を酒匂の宿に、父母姉妹と共に送つたのは私が十二三の頃だつた。海に近い砂地の、なぞへに高くなり、低くなりした廣い庭内に別莊建の離座敷を幾つも持つた宿屋であつた。スクスクと松の大樹は一様に山手へと靡きながら高い梢に空をかくす、其松原に一夏は、焼つく砂に油汗をしぼつて數限りもない蟬が鳴きしきる。障子と云ふ障子はすつかり取りはづして、父母は少しでも涼しい風を入れようと端近に身を横たへてゐる晝日中、私は大きな海水帽をかぶつて海邊川邊を漁り歩いた。客の中には同い年位の子供も四五人はあつたので長い間には濱邊や庭で顏を合せると何方からともなく馴染んで、連立つては遊び廻つた。朝凪の海の上へと濱の上捨船を押出して、赤銅色の額に腕に朝日を浴びながら、船頭は聲を競つて遥かの沖へ漕いで出る。午後からは、きまつて雲も無い水の果から南風が、此海岸に白波を寄せた。岸からドカ落に深い渚は、高くしぶきをあげて碎ける波頭物凄く、とても海に這入る事は出來ないので私達は酒匂川の淺瀬に出かけては終日水浸しになるのを常とした。夕暮はグツタリ疲れ切つた身體を父母の下に運ぶのに、越えて行く砂山が足の疲れを強く感じさせた。暑かつた日が箱根山の向うに沈んで行けば、

相模路は先づ山裾からたそがれて、踏んで歸る長い砂濱もう寸暗くつめたくなり、遠い海の沖ばかりが東の空の片明りに、わづかに夕日の色を止めてゐる、それも見る間に夜となれば、砂山の下り坂の細道から松原はトツプリ暮れて葉越に遠く思はれる宿の灯かチラチラと心細く見え初める。

「又明日遊ばう。」

「きつとだぜ。」

と誓ひ合つてはちりぢりに父母の下へと別れてゆく、此の夕暮が何故か寂しくてたまらなかつた。サクサクと自分の踏む砂地の足音がうそ寒く身に沁みて、私はきつと自分達の座敷へ這入ると、何時かしら眼に浮んだ涙に燈火をまばゆく思つたのである。

その夏も八月の中旬を過ぎれば、あわたゞしく一日は暮れてゆき、くれてゆく一日一日に宿の客も次第に減つてゆくのであつた。毎朝顏の合ふ子供仲間がポツリポツリと寂れてゆく頃、山も海も俄に秋めく日が多かつた。わけもない寂しさが絶えず胸を離れないで、私はぼんやりと砂山に海を眺めて暮す日もあつた。

そんな日が續いて早くも東京戀しく思ひ初めた或日、宿の玄關に新しい一組の客が着いた。其

一連の座敷は、私共の座敷の裏手の松の木立を距てた一棟だつた。恰度其方に面した室の窓からは、松の樹に邪魔されながらも、あけ放した其室の狀が見すかされるやうな位置にあつた。

其日から、その一連の騷ぎは、寂寞が影を投げた秋近い海邊の宿に、又思ひ切つた殘暑の日が歸つて來たやうに烈しかつた。

翌日の朝のこと、私は父母と一緒に海邊の散步から歸つて來る途中、小松原の透間もなく枝の茂つた小道の、出合頭に二人の男女に出合つた。お互に一寸視線が合ふと直ぐ、二人はうつむいて、松の枝に浴衣の袖を觸れるやうに、道を讓つて過ぎた。其女のチラとあげた瞬間の顏立に、私は何處かで見た人に違ひないと思つた。振向いて見ると、裸足で朝の濕つぽい砂山道を、早や向うに海手へ下りる男の肩から上と、その後に引添つた女の、恰度上り切つた小山の上に、まぶしい朝日をよけるやうに額に白い手をかざした姿が見えたが、それも直ぐさま海へ下りた。私は少し遲れた爲小走りに父母に追ひついた時、

「あれがさうですか。」

と云つて母は二人の姿を追ひ求めるやうに砂山の方を顧みた。朝日は母の白い顏にもあからさまに射した。

「一寸擦違つたばかりでしたからツイ氣がつきませんでしたが、あれがぼたんでしたかね、奇麗な人だとは思ひましたが。」

「彼の男が有名な香取のドラ息子だ。」

「ぼたんを落籍したつて云ふあの香取ですか。」

母は又あてもなく海手をふりかへつて見た。

私は父母の言葉で、今の女がぼたんだつた事を思ひ出した。もう四五年前の事だから何時の間にか記憶からうすらいでゐたのか、ほんの擦違つたばかりだつたからか、兎に角私の幼心にも美しく、なつかしい女として刻まれてゐたぼたんを、たゞ何處かで見た人とばかり、忘れてゐたのが物足りなく思はれた。

室に歸ると姉と妹はお手玉を取つてゐた。

「雪さんは知つてるでせう、うちの新築祝ひの時、ぼたんと云ふお酌が來た事があつたでせう。」

「私、どんな人たつたか忘れてしまつたけれどぼたんなら寫眞で見たわ。」

「貴女がそれぢやあ憲二なんかは知らない筈ね。」

と母は云つた。

それから、私は一人窓際に倚つて松の間に見えるぼたんの座敷を覗いた。それがいかにも悪い事のやうに息を殺してゐたのである。香取の息子と云ふのはヒヨロヒヨロ脊の高い、何處か疲れたらしい人であつたが、香取とぼたんの他にゐる四五人の若い男は、絶えず頓狂な聲をあげてゐた。食事時になると必ず聲を揃へて、

「お腹が空いたア、お腹が空いたア。」

と妙な節をつけて、湯呑茶碗のふちを叩きながらうたつた。

「武士の子と云ふものはお腹が空いてもひもじうない。」

と芝居の子役の針金聲を眞似る男もゐた。そんな騒ぎの聞える度に、父母は眉をひそめた。私もぼたんの周圍に、あんな野卑な男達がゐるのは氣づかひであつた。揃ひの浴衣を着て紅木綿の鉢卷をしたたいこもちは、晝の光に光る渚の曲りくねつた銀砂の上を、チラチラと遠く迄ふざけてゆく事もあつた。箱根の山間から雲が湧上つたと思ふ中に、廣い砂地を走る雨の足に、終日閉込められる折々は、その騒ぎは殊更ひどかつた。その間に取卷かれて、香取とぼたんは如何してゐるのだらう。私は何時も不安の念を持ちながら、密かに注意する事を怠らなかつた。私の眼には二人は取卷の騒ぎを逃れようとする人らしく見えた。或時には暮殘る砂山の上にうすら寒むさう

な姿をして海を見てゐる二人を見た。或時は松原の小道を、手を取合つてゆく二人を見た。けれども何時もその二人は、憂はしげに、ものうげに、寂しげに、悲しげに見えたのである。

もう九月に近い日の午過。今朝の雨にしつとり濡れた砂原の防風の色鮮かに、涼しい風は座敷の前の小松原を越えて海手から通つて來る。半分しめた障子の中では姉と妹がきしやごをサラサラと鳴してゐる。私は縁側の柱に背をもたせて、夏中の疲れが今發したやうに、ものうい足を投出してぼんやりと、砂山の向うの海の音を聞いてゐたが、氣が向いて下駄をつッかけると一人で海を眺めに出た。砂山の上にも未だ日ざしは殘つてゐた。著しく白けた日光の中をホロホロと砂が崩れる、そのなだらかな斜面に足を投出して海に面してゐると、初秋の海月の流れ寄る寒い潮が蹠に沁みるやうであつた。うす雲が淡く流れる水平線を暫走つた細い煙もいつしか消えてしまふと、沖には水鳥の影もなかつた。その遠い沖からはるばると、和田津海の波のうねりは岸近く次第に高まつて眞青なうらを返へして渚にドツと碎けて引く。その度にあがる潮煙は、風に飛んで横なぐれに砂濱を濡らすのである。私はそれをうつとりと何時迄も何時迄も見てゐた。フト衣擦の音がしたと思ふと、背に近く人がゐた。

「お一人ですか。」

と云つて寄添ふやうにしやがんだのは、思ひもかけぬぼたんであつた。私は振り仰ぐ事も出來ないで海を見つめてゐた。

二人は默つて砂山の上に風に吹かれてゐた。その下の汀を漁師の子らが手に手に目ざるを持つてヒタヒタと、寄る波に絶えせず濡れる砂を素足で踏んで通つた。何處迄も海に沿つてゆくやうに、長い汀を肩と肩とを押合ひながら、遙にちひさく距たつて行く、それも寂しい心を誘つた。

「何を見てゐらつしやるの、お寒くはありませんか。」

「いゝえ、寒くはありません。」

ぼたんは浴衣の上に黑縮緬の羽織を着た袖に胸を抱いた。初秋の日は次第に西の山かげに沈んでゆくと、黃昏は山からも海からもヒシヒシと迫つて來る。

「坊ちやんは餘程長く此宿にゐらつしやるんですか。」

「えゝ七月から。」

「左樣ですか。もう秋になりますのね、直き東京にお歸りになるんでせう。」

「九月から學校が始まるからそれ迄に歸るの。」

「よござんすねえ、お父樣やお母樣と御一緒で。」

云ひながらぼたんはそつと私の肩に手を置いた。私は息も出來ないで足下の砂の薄明りに崩れるのを見つめてゐた。其時、
「ヨウ、御新造さん此處にゐたんですか、私あいゝかげん方々探しましたぜ。」
黄色い聲を張上げて、松の間の小道から手拭で頰かぶりした、たいこもちが現はれた。
「でもねえ、此處にゐるといゝ氣持なの、風がつめたくつて。」
「戯談ぢやない、風を引いちまひまさ。おまけに一人でぼんやりしてると狐につまゝれますぜ。」
「大丈夫、私はこの坊ちやんと二人で、お話をしてたんだもの、しんみりとね。」
「戯談ぢやない、もうお膳が並んで待つてます、早くお出でなさいな。」
「今行くつて云つておくれ。」
「だつて私がお迎ひの大役承りでげせう、へイ只今ぢやあ、濟みませんや、ほんとにいゝかげんに行きやせうよ。」
男は大げさにしやべりたてゝ、「おゝ寒む」と身震ひまでして見せた。
「ぢやあ行きませう、坊ちやんも、もうお歸りなさいな。」
と私の肩に置いた手を放すと立上つて、迎への男の後から砂山を宿の方へ下つてゆく。私をも

「一緒に」と云ふやうに、一度見返つたが私は尙其處に一人寂しく殘つた。私はいつか浮んで來た涙に風の沁みるのを覺えた。

私は遣瀨ない思ひがして、今はもう暗くなつた海の波のほのぼのと白く碎けるのを眺めてゐると、單衣の肌に潮の寒さが骨迄も沁み通る。遠く近く小田原の灯がチロチロと見え初めると、始めてなつかしい父母の傍を思ひ出して、眞暗な松原を一散に馳出した。

夜はめつきり秋らしく、宿の庭の廣い砂地にも、蟲が細くしきりなく啼いた。チラチラと風にそよぐ燈火にも秋はまつはつてゐた。

「あまり遲く迄歸つて來ないのでとんだ心配をさせられました。」

と云ふ母の小言を聞きながら、一人で冷めたくなつた食事を濟ますと、私は裏座敷の窓に倚つて、燈火も無い暗い中に悄然とぼたんの室の方を覗いてゐた。どうしたのか其の室には人聲がしながら燈火がなかつた。それを賴りなく思ひながらも窓際を離れずにグツタリと身體を橫にしてゐた。

急にぼたんの室に火あかりが映つたと思ふと、それは松の木の間を透いて眞赤に燃えた。入りまじつた男の聲がドツと笑つたと思ふとたんに、火の色は紫に變つた。そのあかりでうつすりと、

座敷の中が繪になつた。此方を向いた緣端に白地の浴衣チラチラと、男達が電氣花火を弄んでゐるのであつた。火は紫から靑に移つて段々光が弱り、ポトリと最後の一點の火が砂地に落ちると又元の黑闇に、たゞガヤガヤと人の聲がする。續いて又新しい赤い火が燃えた。今度は其の火の中にぼたんの顏がはつきりと、火氣をうつして見えた。手づから火を持つたのであらう、見てゐる中に紫に、やがて物凄い靑い火が髮も、浴衣の胸迄も染めた。聲を揃へた男達の故意とらしい高笑ひと共にぼたんの姿も消えて闇になつた。一しきりシンとした庭には蟲の音か降るやうであつた。

フト表座敷の母の聲が耳に入つた。

「憲二はどうしたのでせう。」

「憲ちやんは六疊にゐてよ。」

と姉が答へた。

「どうしたんですねえ、あんな暗い處に。呼んでごらんなさい。」

母が云ふと直ぐ「憲ちやん、憲ちやん」と姉と妹が一度に呼んだ。

「ハイ只今行きます。」

云ひながら私は動かうともしなかつた。

「天の川が見えますねえ。」

と父に云ふ母の聲がしんみりと身に沁みて聞えた。

翌日ぼたんの一行は俄に東京へ引上げて行つた。私は終日砂山の上に、うす日を浴びて寢ころんでゐた。

それつきり私はぼたんを見た事がないが、一代の美妓とうたはれた人の身の、いゝにつけ惡いにつけ世の取沙汰に上るので、私はよく其後の日の悲境を聞知つてゐた。新川の酒問屋、香取の養子正太郎は金にあかしてぼたんを落籍した。けれども、旣に親にも家にも見放される迄の放埒の揚句であつたから、ぼたんを得たほかに彼は總ての物を失つた。

ぼたんが全盛の一しきりには、未だ繪葉書の流行らない頃の事だつたが、その寫眞は廣く行き渡つたもので、夜店で賣る小形の寫眞は所有種類の人の手に購はれ、「文藝俱樂部」の口繪には幾通りにも姿を變へた其人が現はれた。それも昔の事になつてしまつて、全盛のはれやかたつた丈、衰へは哀れにあわたゞしいものであつた。明治の紀文とはやされた香取正太郎の行衞と共に昨日

の話種となつたのであつた。

香取か本郷の芝居前にちひさな寫眞屋を開業したと聞いたのは餘程後の事であつた。「ぼたん後日物語」と云ふ標題で長々と、二人の身の上　新聞の續物になつた。「浮川竹の流れの出でありながら、年頃の不幸にも撓まず、あく迄夫に心中だてして、操を守るぼたんは、まことに人を悩殺する牡丹花の濃艶なるに比す可きに似たれど、亦泥中の白蓮の高潔なるにもたとへつべし」と云ふやうな結句を私は感慨深く見たのであつた。咲く花よりも散る花に深く誘はるゝ心は美しい人の衰へが他人事ならず身に沁みたのである。何時か一度は其の寫眞屋に行つて見ようと思ひながらソイそのまゝになつてしまつた。二三度、芝居を見に行つた時もあつたが、いたづらに青いペンキも斑に禿げた家の前を過ぎて、私は扉を開く勇氣がなかつた。そして何時となく私さへ、月日の經つと共に、ぼたんの名を思ひ出す事が少なくなつてしまつた。

日曜の朝のならひとして、私は正午近く起きた。中の間へ這入ると、其處には幾通りかの、今朝の新聞が廣げられてあつて、それを見ながら、泊りがけで來てゐる姉と、母とが話をしてゐた。

「憲さん、あのぼたんて名高かつた藝者を知つてるでせう、あれの御亭主がね、大火傷をしたんですつて。」

「どうして。」

私は思ひがけない消息(たより)をいぶかつた。

「あの人は寫眞屋になつたんですつてね、寫眞の藥でなんですつて、どの新聞にも出てゐてよ。」

「ほんとに人の運なんてわからないものだね、何時だつたか私達が酒匂に行つた頃は、隨分盛んだつた人が、心柄ぢやあるけれど、こんなに落ぶれたのだもの、ホラ、毎日取巻が騒いで、お父様が、よくうるさがつてゐらつしやつたつけねえ。ぼたんたつて彼(あ)の頃は、あれ程きれいな女は無い、と云はれたものでしたが。」

「でもお母さん。ぼたんは感心ぢやありませんか、藝者なんかには珍らしいゑ。ソウソウ、何時でしたか芝居に行つた時、幕が下りて廊下へ出ると、急ぎ足で前を通つた女の人があつたんですよ、それを傍の人が、あれが有名なぼたんのなれの果てだぜつて、話をしてゐた事がありましたつけ。それはもうみすぼらしい服裝(なり)をしてゐましたよ。」

「まあねえ、可哀さうに。」

母は云ひながら、火鉢にかざした自分の手の衰へをなげくやうに嘆息した。私は默つて新聞を讀んでゐた。ぼたんの夫、正太郎は寫眞に用ゐる藥品の爆發で、大火傷をしたと云ふのである。

薄暗い寂れた家の一間に、破薄團に横たはつた、傷つき倒れた正太郎にすがつて、泣きかこつぼたんと、その子供達が、マザマザと眼に見えるのであつた。

其處に、姉の子が二人廻り縁を傳つて馳込んで來た。

「母さん、正ちやんがいけません、私のお人形を取らうつて云つて、いけないつてもきかないんだもの。」

泣聲で、おかつぱの姉の方は後生大事にかゝへた人形と共に母に縋る、うしろからいたづらた弟がそれを取らうとむしやぶりつく。

「正雄、おいたをしてはいけません。」

叱られても二人は、こりないで座敷中を、追ひつ追はれつ馳廻るので、其處に廣げてある、哀れなぼたんの身の上を記した新聞も、滅茶滅茶にふみにじられてしまつた。

私はフイと家を出てしまつた。心は、よそながらでも其家を見舞つてやらうと云ふ方に走つて止まらなくなつてしまつたのである。昨夜からの雨のなほ降續く年の暮の町は、傘を持つ手もつめたかつた。

指を數ふるまでもない、まだあの頃は、ほつそりと、美しかつた母も昔の面影は僅に暗に偲ば

れるのみで、今は醜い迄に肥りかへつてしまつた。よく私と物爭ひをした姉さへ、あゝ通り三人の子持になつた。年月の激しい推移は、一代の美妓とうたはれたぼたんをさへも、そゝけ髮の貧家の世話女房にしてしまつたのであらう。私は電車の中の一時間をはかない追想に耽つたのであつたが、やがて本郷通りに車が停つたので、下りると直ぐぬかるみの、汚らしい町へと大通りを横に曲つた頃は、何の爲にこんな處迄出て來たのか、たとへよそながらでも逢へるにしても、寧ろ衰へを見ないで、永久に消える事のない、私の知つてる昔の、美しかつたぼたんをのみなつかしんでゐる方が幸福ではないかと思ひ初めて居た。何時か風さへ添つた雨の中を、最早や何の目的もなく、芝居前に出てしまつた時、私は遙々と遠い旅へ出た心持がした。（明治四十四年十二月十五日）

うすごほり

始めてお澄さんが東京に出て來た時、私はやつと六歳でした。其の二三週間も前から、
「もう直き名古屋からお澄さんと云ふ娘が來ますから、駄々をこねたり、あばれたりして、年雄は厭な子だと思はれないやうになさい。」
と母が云ひ聞かせたので、私は毎日々々お澄さんの來るのを待つて居ました。なんでもお澄さんには新しいお母さんが出來たから、東京へ來るのだと、母は教へてくれましたが、何故新しいお母さんが出來ると東京へ來るのか私には解りませんでした。
或日、「今日はお澄さんが着く／＼」と云ふので、母が指圖して、朝から二階を掃除して、
「マアこれでお澄のお室も出來ました。」
と祖母がニコ／＼していらつしやる。私と妹は、一刻も早くお澄さんが來ればいいと思ひながら、無闇に嬉しがつて家中を飛廻つて居ました。
「お澄さんは何時來るんだらう。」
待ちくたびれた私は、母の膝を枕にして、足をバタ／＼やつてゐました。

「もう直きですから、おとなしくしていらつしやい。」

母は私の頭を撫でながら、祖母と話をして居ました。

「貴方にはほんとに御迷惑だが、お澄も母無し子で可哀さうだから、目を掛けてやつて下さい。」

「イ、エどう致しまして、私で出來ます事なら何でも、お世話致します。」

「それと云ふのも、山田の心柄が悪いからです……」

祖母はしきりにクド／＼と云つて居られる。私は全く待疲れてウト／＼して了ひました。

フと目が覺めると耳に這入つた人聲の方へ、母の膝に眠つた私は、寢がへりました。すると母と祖母に對つて伏目に坐つた、ネルの着物を着た、見た事の無い娘が、チラと私を見ました。蒼白い顏が少し上氣してゐました。「お澄さんだ」と思ふと、私は眠つてゐたのが羞しくて、又元に寢がへりました。西日の充分にさし込んだ庭には、淺緑の若葉がキラ／＼反射する中に、うす紫の桐の花が寢起きの目を射して光りました。

當分のうち、羞しがりの私は「お澄さん」と呼ぶ事も出來ませんでした。母の手助をして、何彼と立働くお澄さんは、始終うつむきがちでしたが、それでもなほ私は、未だ馴染まない女の視線を避ける事につとめました。それでゐて私の方からはお澄さんの一擧一動に眼をひかれて居るの

でした。
「年ちやんはお温しいんですねえ。」
とお澄さんが笑つて見せても、私は母の背にかくれました。
「イ、ニやんちやで困ります、今に眞實の年雄が出て來ますとお澄さんなんか到底かなひませんよ。」
と云ふ母の言葉を恨みながら、鼻白むのでした。けれども私はお澄さんに、優しい聲をかけられるのを望んだばかりか、どうかしてお澄さんと仲善になりたいと思つてゐました。
お澄さんは草花が好きでした。庭の花壇には強烈な色彩の西洋花が咲く頃で、三色菫、金蓮花、麝香撫子。それからそれと紫に、黄に、紅に、咲いてはしぼむ草花に、如露の水をそそぐのがお澄さんの日課の一つでした。
「年ちやん、いらつしやい。お庭の花に水をやりませう。」
と誘つて呉れるのを私は待つてゐました。大きな庭下駄を引きずる私の手を、お澄さんが取つてくれます。その手から親しみが湧いたやうに思はれました。
お澄さんの室は二階の六疊でした。立居に音もさせない人だつたので、私も二階へ行く時は、

成丈足音のしないやうに梯子段を上つて行きました。西向の窓に机を据ゑてお澄さんは何時も其の上に本を開いて居ましたが、讀んでるのか、居ないのか、隣の寺の墓地をヂッと見詰めて居る時が多かつたやうです。

「アラ年ちやん。」

とお澄さんはハッとしたやうに眼を見張つて私を迎へ、傍に坐らせては後から抱くやうに、私の肩へ手を廻してピッタリと寄添ひながら、本箱からいろんな本を出してはお話をしてくれました。細く沈んだ聲で、涙を誘ふやうなお話ばかりでした。

「お銀小銀」と云ふ姉妹が繼母にいぢめられる話を、私は幾度も、せがんでは聞きました。

「又『お銀小銀』ですか。」

と幾度も幾度も同じ話を繰かへして語るお澄さんも、ツイ哀れな姉妹の身の上に誘はれて聲が震へてゆく。

「もう泣くのならお話はしませんよ。」

と云はれて居るのを、一生懸命で耐へようとしても、知らず／＼私の頬を涙が傳はると、お澄さんは其の胸に抱き寄せてハンケチで拭いてくれる、さうしてヂッと抱きしめて何時迄も何時迄

も動かない時もありました。私は女の懐の温い事を忘れる事は出來ませんでした。

その夏も漸くうつろへば、山の手の朝夕はスイ／＼と風が白く流れます。暑かつた土用の中、かよわいお澄さんは目に立つて痩せたやうに見えました、何時も眩暈がすると云つて食事もすすまない程でした。

「澄は身體が弱くていけない。あまり本ばかり讀んでゐないで、運動をして丈夫にならなくては駄目だ。」

と父は常に云ひました。

「第一、サウ小食ではいかん。伯母さんなんか、宅にお嫁に來た時から伯父さんの倍も喰べて驚かしたものだ。」

「嘘ばつかり。」

と云ふ母も氣づかはしさうにお澄さんを見ました。それでもお澄さんは閑暇さへあれば、二階の室の机に對つて、何かしら讀んでゐました。

蜩が高い梢で鈴を振ると、夕暮は窓に忍んで來る。お澄さんは讀みさしの本をそのままに、うすく黄昏れてゆく西の空を遠く眺めてゐるのでした。そんな時にはキツトお澄さんの目はうるん

でゐました。或時は暮れ切つた室内の薄明(うすあかり)に、泣き伏したお澄さんの襟足ばかりが、ほの〲と白く浮んでゐました。私の足音に驚いて顔をあげるお澄さんは、

「年ちやんですか。」

と云つては寂しく笑つて見せました。

「お澄さんは何故泣いてるの。」

私は其の膝に乗りながら尋ねました。

「何故でせう。私にも解りませんの。」

「ぢやあ悲しいんぢやないの。」

「イ、エ矢張り悲しいんですけれど……。私、夕方になると泣きたくなるんですよ、何故だか自分でも解らないくせに、馬鹿ですねえ。私は。」

お澄さんは云ひながら、私を抱絞(だきしめ)るのでした。

「夕方になると悲しい」と云ふ事は大きな謎でした。私は母に其の事を話しました。

「お澄さんは眞實(ほんと)のお母さんが死んで可哀さうな娘(こ)なんですから、お前も親切にして上(あげ)るんですよ。」

と母は云ふばかりでした。

それはもう秋の一夜の事。木立の多い庭の中にも月光が蒼白く流れて、暗い隅々には蟲の音がしきりでした。父の歸宅の遲い日で、縁端に蟲を聽く母に、私と妹が兩方から縋つてゐました。

「年雄や。お澄さんは如何したんでせう。二階には燈火がついてゐないぢやありませんか。一寸行つて見ていらつしやい。」

と云はれて私は二階に上つて行きました。室の内は疊も浮くやうな月あかりで、お澄さんは水底の人のやうに一際蒼白く見えました。

「今ね、お母さんがお澄さんはあかりもつけないで如何したんだか見てお出でつて云つたの。」

「私、どうもしやあしません。あんまりいいお月夜だから燈火をつけるのが惜しいやうな氣がしたのですよ。それぢやあ一緒に階下に行きませう。」

お澄さんは机の上の硯に蓋をして立上るとそのまま私の後から梯子段を下りて來ました。

「お母さん、お澄さんを連れて來ました。」

「伯母さん、どうも濟みませんでした。私、伯母さんに見て頂かうと存じまして歌のやうなものをこしらへて見ましたが、どうしても駄目なんで御座います。」

「どれ見せてごらんなさい。私も一首まとめたいと思ひながら、こんなに二人が取りついてゐるものですから爲方がないのですよ。」

母は懷に這入つてゐる妹の顏を指さきで一寸突きました。

「いいお月夜ですね、斯う云ふ晩にはいい歌が出來るでせう、見せてごらんなさい。」

「ハイ、でも駄目なんでございます。」

云ひながらお澄さんは手に持つてゐた紙片を渡しました。

「硯に水を入れますとそれにも月がうつりますのです、ほんとに奇麗ですこと。」

お澄さんは軒を仰いで月に顏を照らされました。母は小聲で歌を口誦んでゐました。

「よくマアこんなに澤山出來ましたね、皆面白う御座んすが、なかでも此の始めの歌が私は身に沁みるやうに思ひます。」

　母なくて汝もなくらん月あかりささぬ草葉にすだくこほろぎ

母は繰返へし繰返へし細い聲で、節づけて歌ひました。

「やさしい、哀れな歌ですこと。お澄さんのお歌を拜見すると、私迄悲しくなりますよ。」

しんみりと母の聲もしめつて聞えました。

「伯母さん、私には如何しても、悲しい歌つきり出來ません。」

お澄さんは云ひながら泣き出してしまひました。

翌年、お澄さんは上野の音樂學校に入學しました。毎朝芝から上野迄通ふのは大變だと云ふので小石川の叔母の家に移る事になりました。お澄さんは泣きながら俥に乘つて行きました。私はそれを遠い別れのやうに思ひました。

小石川に移つてからもお澄さんは、土曜から日曜にかけて、泊りがけで來ました。その度に私は、うるさい程お澄さんにつきまつはりました。

「お澄さんはお茶を飲むひまもありませんね、年雄がちつとも放さないんですもの。」

とよく母が云ひました。

或日曜日。朝のうちからお澄さんはお友達を二人連れて來ました。太田さんは脊の高い、よく笑ふ人でした。久野さんは小作りな、丸顏の愛嬌のある美しい人でした。祖母も母も若い女達を喜び迎へ、お澄さん迄が何時もよりも、はしやいでゐました。ふだんは彈手のない琴が持出されて、太田さんと久野さんが替る替る彈きました。

「皆さんがお上手になさるのに、澄は何も出來ませんで、意氣地が御座いませんね。」

と祖母が云ひますと、太田さんも、
「ほんとに山田さんも何かなさいな。」
とすゝめます。
「でも私、何も出來ないんですもの。」
「ぢやあ、お歌ひなさいよ。」
「私一人つきりで可笑しいぢやありませんか。」
「そんな事云つて私だつて一人でお琴を彈きましたわ。」
とうとうお澄さんも英語の唱歌を歌ひました。
「私には何の事だか少許も解りません、異人の歌なんか歌つて。」
と祖母が云つたので、皆笑ひ倒れました。
それから時々、お澄さんは太田さんと久野さんを連れて來るやうになりました。賑やかな事の好きな太田さんは、何時でも、わだかまりのない聲を張上げて笑ひました。太田さんの兄さんは有名な海軍の軍人で、小さな端艇で千島の果迄行つたと云ふので、其頃流行つた壯士節や、唱歌に迄うたはれてゐました。私の繪草紙の中にも、勇しい其人の姿は見られました。

「これが太田さんの兄さんですよ。」

と母から幾度も、その冒險談を聞かされました。次ぎの兄さんは大變偉い小說家でした。三番目の兄さんは、大學を優等で卒業した學者ださうですし、姉さんは矢張り音樂學校を一番で出たピアノの上手でした。

「太田さんの御兄弟は、皆さんお偉い方ばかり、太田さんも私達の學校では天才と云ふ評判の方なのです。」

とお澄さんが祖母に云ふのを聞きました。

「マア左樣かい。人は見かけによらないものだね、私は彼の人は、ただのお轉婆さんかと思ひましたよ。」

「イヽエ、活潑な方ですけれど、それはそれは親切な方なのです。太田さんも久野さんも私と同じやうに、早くお母樣がおかくれになつたので、三人でお話をして泣きました。それから姉妹のやうに仲善くしようと約束したのです。」

お澄さんは嬉しさうに、そんな話をしました。母の無い若い女達は、私の母の事を伯母さん伯母さんと、へだてなく呼んでゐました。私も太田さんや久野さんには隨分遠慮なく振舞ひました

が、何方かと云ふと私は、美しい久野さんの方が好きでした。それで三人の女の膝から膝へと渡されて行く時でも、久野さんの所に行きたいくせに、故意と太田さんに抱かれました。

「私の所にもちつとはいらつしやいよ。」

と久野さんが手を出しますと、

「いけません、年ちやんは私の弟です。」

太田さんは故意と眞面目くさつて云ふのでした。

三人の女はよく合唱しました。

「春の彌生の曙に」と云ふのは母も知つてゐました。

「今様ならば私も歌ひませう。」

と云つて膝の上で手拍子を取りながら、若々しい三人の聲にまじつて母も歌ひました。

「今度は年ちやんの番よ、私が教へて上げるからお唄ひなさい。」

恥しがつて逃げようとする私を捕へて、太田さんは無理に歌はせるのでした。

「サア、よござんすか、私の後からついて歌ふんですよ。」

寧樂の都のその昔

みやびつくして宮人の

と私はほめられるままに歌ひました。

月日が經つてお澄さんが音樂學校を卒業した頃は、私も尋常小學校の上級に通つてゐました。

太田さんは學校始まつてから初めてと云ふ成績で卒業し、久野さんも優等だつたと聞きました。

三人揃つて宅に來ました。祖母や母は皆に「お目出たう」を繰かへしてゐましたが、太田さんでさへも妙に改つて了つて、何時ものやうには騷ぎませんでした。私はもう以前のやうに、其の人達の膝に抱かれる程幼くはありませんでした。

間もなくお澄さんは鄕里にかへりました。その前一週間ばかりは、小石川を引拂つて宅に泊つてゐました。東京に來てゐる間、一度も歸らなかつた故鄕へかへるのに、お澄さんは浮かない顏をしてゐました。愈々たつと云ふ前の晩には、人目も憚らず泣きました。涙のひまにはかこちました。

「永々御世話になりましたが、私はもう伯母さんにもお目にかかれないかもしれません。」

「そんな事があるものですか、又何時でも出て來られますよ。」

云ひながら母も泣いてゐました。

翌日お澄さんは、私が學校に行つてる中にたつてしまひました。間もなくお澄さんは父東京に出て來ました。けれども、もう娘ではなくて人妻でした。夫は同じ郷里出身の法學士で、或專門學校に教鞭を執つてる人でした。二人揃つて來ましたが、頭髮をテカ／＼油で光らせて、父の前にかしこまつてゐるお澄さんの旦那を私は蟲が好きませんでした。

若杉――お澄さんの旦那は若杉と云ふのです――の家は大森にありました。

「私の家は停車場の傍で、緣先を汽車が通りますよ。」

お澄さんは、是非一度遊びにいらつしやいと誘つてくれました。私は祖母に連れられて行きました。春さきの事でしたから、大森邊の緣の草場に、れんげや菫が咲き揃つてゐました。停車場にはお澄さんが迎ひに出てゐて、直ぐに其の家に案內しました。若杉は留守で、若杉のお母さんと云ふ切髮のやさしさうなお婆さんが出て來ました。二階座敷の障子をあけると、室の中に充分、春の日が溢れる。欄干の下を、すさまじい音を立てて汽車が幾度も通ります。其の度に家中、地震のやうに搖れました。

「どうも此の物音と、煙の舞ひ込みますには困り切ります。」

若杉のお母さんは何か云ふ時にはキツト笑顏になる人でした。

「でも見晴しがよろしくて結構で御座いますよ。」
祖母の云ふ通り、青田の向ふの松原を越して、眞靑な海が見通しでした。
「ほんとに結構で御座いますよ。」
祖母は繰返して同じ事を云ひます。
「ハイ見晴しはマア御覽の通りで御座いますが、手狹ではありますし、先程のやうに汽車の通ります度、家中ガタガタ申しまして、未だ越して參りましたばかりには、夜中に地震かと存じまして飛起きましたので御座いますよ、今の中は、それでもマア宜しう御座いますがこれに赤ん坊でも出來ましたら越さなくてはならないかと存じます。」
お澄さんは顏を赤らめて下を向いて居ました。若杉のお母さんが立つて階下(した)に行くのを見送つて祖母が云ひました。
「お母樣がおやさしさうでお前も幸福(しあはせ)だよ。」
「ソウ申しては、なんですが、お母樣はあれでなかなかおきびしいんですよ。」
お澄さんは梯子の上り口を見かへつて、聲をひそめました。
其年の暮、お澄さんは男の子を生みました。前から少し癖のあつた、生際(はえぎは)が目に立つてうすく

なりました。子供を抱きながら、祖母や母の前で泣いてゐる事もありました。
「若杉のお母さんこそ見かけによらないつて云ふ人なんですね。」
「たから私は始めから、彼の人は愛想が好過ぎるつて、云つてたのですよ、いい年をして夫婦仲の好いのを嫉妬むなんてねえ。」
母と祖母のそんな話を聞いた事もありました。
お澄さんがお嫁に行つてから二年目の秋でした。或日學校から歸りますと、お澄さんが來てゐて、茶の間で泣きながら母と話をしてゐました。私は襖越しに次の間で聽耳を立てました。
「若杉さんがそんな事を云ふんですか。」
「エ、毎日のやうに醉つて歸つて參りまして、里の方か、それでなければ、伯父さんか伯母さんに話をして見ろつて申します。どうしてそんな事が父や伯父さんに願へますものか。私は、ぶたれたり、叩かれたり……」
お澄さんは烈しく泣き伏したやうでした。
其の事があつてから間もなく、或晩、若杉が醉拂つて來ました。父に對つて長い事、何か頼み込んでゐるやうでしたが、段々雙方の聲が高くなりました。

「それは貴方の勝手だ。もう澄にも宅へは來るなと云つて下さい。」

怒つた父の聲に續いて荒々しく襖をあけたてして若杉は歸つて行きました。

四五日後。お澄さんから長い長い手紙が屆きました。母はそれを見て泣いてゐました。

「マア、若杉が夜逃げをしたんですつて。」

祖母も袖口で幾度も眼鏡の曇りを拭きました。私にはよくはわかりませんでしたが、若杉には學生時代からの借金がある上に其後友達と連帶で借りて、投機を張つた金のかたがつかなくなつたのださうです。

……澄は夜逃げする身と成果て申候。東京を去る前に、一度はお祖母様、伯母様のお顏も拜し度、御膝に縋りて心ゆくばかり泣かせて頂き度存じながら、それさへも心恥しく、面目なくて思ひ止り候。何方へ落行く身か、私も存じ申さず、再び御目にかかる事さへ思ひも及ばざる身の上かと、ひたすら涙のみ流れて止み不申候。最早や一時の後には、行方知らぬ旅路に上り可申、何を申すも甲斐なき事ながら、澄が二十年は何故に、かくは憂き事のみ多かりしと、思へば更に悲しく歎かれ申候。私よりのお願ひとしては、澄は最早や世になき者と思召被下度候

お澄さんの手紙には祖母や母のみか、私も聲をあげて泣きました。

お澄さんの行方は暫く解りませんでした。「無事」と云ふ葉書が、大阪から私の家とお澄さんの實家とにあつたばかりでした。

年がかはつた春夏も過ぎてから、お澄さんの便りがありました。若杉は今は廣島の或學校に奉職してゐると云ふ事でした。上書にはただ廣島とあるばかりなので、此方からは手紙をやる術もありませんでした。それからは時折、消息がありましたが、それもただ時候見舞や、當方も無事だから安心してくれと云ふやうな、簡短なものばかりでした。「お澄さんは如何したらう」と人々の心に思ひ出るほか、何の話もなく幾年か過ぎました。其の間にお澄さんは三人の子の母になつたと聞きました。

まだ私が小學校に通つてゐる時でした。愛讀してゐた「少年世界」に小波さんの「伯林日記」が出て居ました。その中に伯林で日本の琴を聽いた記事が出ましたが、それは太田さんの事でした。留學を命ぜられて獨逸に行つた太田さんが振袖姿で琴を彈いて、外國人をも感動させたと云ふのでした。山中古洞さんの挿繪のあるのを、私は幾度も繰返して讀んだものでした。「あの久野さんは如何したらう」と折々思ひ出すのでしたが、未だお澄さんが大森にゐる頃、何處かに嫁に行

つたと聞いたばかり、其後何の消息（たより）もありませんでした。さうして、お澄さん、太田さん、久野さん達がよく歌つた頃から十年近い月日が何時か過ぎました。私の祖母はまだ壯健（たつしや）ですが、若杉のお母さんは廣島で亡くなつたさうです。私はもう中學を卒業しようと云ふ年配（とし）でした。

其頃妹がピアノを習つて居た、英吉利婦人が、故郷に歸つたので、誰か代りをと探して居ましたが或人の世話で、三並（みなみ）と云ふ女の先生が來てくれる事になりました。初めての稽古の日に、私が逢つたら、それは昔の久野さんでした。

「奧樣、おなつかしう存じます。」

と云つて久野さんは母の膝に縋つて泣いたさうです。久野さんがお嫁に行つた三年目に、夫はかりそめの風邪のこじれから肺炎になつて、一年半ばかりブラブラしてゐたが、夥しい血を吐いて死んでしまつたのです。家には姑と、夫が忘れがたみの女の子のほか、財産らしい財産も、ありませんので、久野さんは田舍の女學校の、唱歌の先生になつて、つゝましい生活を續けてゐたのださうですが、ツイ昨年から東京の女學校に轉任したのださうです。

或日。お稽古が終つてから、

「兄さん、三並先生が御目にかかり度いつて云つていらつしやつてよ。」

と妹が呼びに來ましたので、私は不思議な胸騷ぎを感じながら西洋間の扉を押しました。

「マア、年雄さんでいらつしやいますか。」

と云つたきりで久野さんはもう涙でした。ひつつめた束髮の毛も薄くなつて、汚點の出來た顏は長い間の苦勞を語つてゐました。服裝もみすぼらしく、地味な紫紺の袴の色も褪せてゐました。あの美しかつた久野さんの面影は、何處にも見られないで、物云ふ時、少し首をかしげる癖ばかりが、僅に殘つて居るのでした。

其後、一年ばかりは、一週二度宛本鄉から通つて來るのでしたが、妹が他家へ緣付いたので、ピアノの稽古もなくなりました。

「あの人も氣の毒な人ですねえ。」

と折につけては祖母や母の口から久野さんの噂は出るのです。

去年の秋上野の音樂學校の演奏會に行つた時です。獨逸から歸つて、學校に奉職してゐる間に、男のやうな氣性の人だつた太田さんさへ、音樂家には、ありがちな浮名をうたはれましたが、間もなく太田さんは其の人と結婚したと聞きました。其の日の目錄には太田さんの獨奏がありました。私にはよく解らないのですが、曲は中世の騎士の戀を歌つたものだと云ふ事でした。咽び泣

くやうな絃の音が、絶えようとしては又續いて漸く曲が終つた時に、聽衆は始めて眼が覺めたやうに、烈しい拍手を浴せました。一度消えた太田さんの華美づくりな姿を再び呼出さうとする滿場の、興奮した拍手の中に、私はうらさびしく伏目にひかへた久野さんの姿を見とめました。

その秋のなかばも過ぎて、久しく消息のなかつたお澄さんから、若杉が新潟へ轉任する事になつたと云ふ便りが來ました。其後又

……都は如何に候はん、ここらあたりは早や霙降る日のみうち續きて、夜もすがらうすきふすまをかこち居候。私は廣島に居りし頃より少々心地惡しく候ひしが、旅の障りにや發熱致候て、此の雨三日枕を離るる事かなはぬ身に御座候へば、萬々後便に讓り可申候へ共、やがて心地よく相成る日も遠かるまじく被存候へば御心配被下まじく候

と云ふやうな手紙が來ました。その手紙の終りに書いてあつた

さすらひて北の海邊に流れ寄る薄氷こそは悲しかりけれ

と云ふ歌には誰しも涙を催しました。而してそれがお澄さんの最後の便りになつてしまひました。その年の暮に、お澄さんは、日本海に面した、暗い北國の旅の果で死んだのです。(明治四十五年一月十日)

喙

藤野新三の創作「わかこしかた」が「三田文學」に出たのは、恰度同級の生徒が卒業論文の完成を急いでゐる頃であつた。

新三の創作はそれが二度目だつた。處女作の「麻布の家」を書く迄は、自分に小說が出來ようなどとは思ひも及ばなかつた。子供の時分から讀物が好きで、父母にかくれて讀耽つたが、小說家にならうとは考へた事さへなかつた。普通部を卒業して、大學に通ふやうになると父の意見に從つて溫和しく理財科に入つた。理智の力が多感なる情意を抑へる事の出來なかつた中學時代は、心の赴くがままに走つて、師の教へも父母の誡めも燃えあがる焰を消す丈の力が無かつた。種々の皮をかぶつてはゐるけれど、要するに功名と富貴は其の教へと誡めの目的であつた。そんなものに對して自己を強ふる丈の興味が彼には無かつたのだ。放縦なる生活の後には、落第の日が續いた。

けれども其の間に受けた種々の經驗殊に友情と戀愛との失敗から、彼は何時しか若き日に捨てられた人になつてゐた。心傷いた日には、なまじ世間に位置のある父の子と生れた事を不幸とし

て逃れようとした家。其の子の眞の性質を知らないで、自分達の意思を強ひんとする父母。利己心から割出した親切を押賣りする世間。すべて彼が捨てようとしたきづなに身を任す事を、今は口惜しいとも思はなかつた。「どうせなるやうにしかならないのだ。人の云ふままに暮すのが厭なら死ぬほかに道はない」と云ふやうな、佛教から淺いあきらめを得た意氣地の無い、うすつぺらな、こざかしい日本人の血がしきりに働いたに違ひない。何故ならば、彼も亦左程の努力無しに世間並の人間の生活に近付いて行く事が出來たからである。彼は始めは頭から嫌つた經濟や法律の本も讀んだ。馴染むとそれに少しは興味を見出す事も出來た。學年末の成績が良好で首席近い位置で及第すると、父も母も數多い一門親族も、さて又友達も、さも人間の値うちが上つたやうに思ふらしかつた。くすぐつたいやうな馬鹿々々しさを感じながらもほめられるのは罵られるよりもいい氣持だ。而して新三は學校の最上級になつた。もう卒業に三月の間も無いのである。

此頃、教室のストオブを圍む談話はきまつてゐる。

「オイ、如何だい。卒業論文は出來たか。君の題目はなんだ。」

「僕か。僕のは『企業聯合と企業合同』さ。種本は五六册いいのを目つけたが、どうも英文に譯すのが難儀だよ。なんだつて論文は英語でなけれやいけないつて云ふんだらう。誰一人滿足に書け

る者の無いづて事位、教師にもわかりさうなものぢやないか。」
「だけどねえ、英文の卒業論文を書いたつて云ふと卒業生の賣行きがいいんださうだ。」
「ヘエ、馬鹿にしてるなア。それぢやア英文でなかつたら二十五圓の月給が十五圓にでも下らうつて云ふわけか。いやだいやだ。」

毎日毎日同じやうな話題が同じやうな顏振れによつて繰りかへされるのである。新三も稀にはその人々の間に立つた。

「藤野君、論文は如何です。君なんか、もうとつくに出來上つてゐるんでせう。一體何を論じたんです。」

「僕はまだ出來ませんよ。怠けてゐるから駄目です。エ、題ですか。それもまだなんとつけていいか困つてゐるんですが、兎に角芝居の事を書かうと思つてゐます。參考書が少ないから困るんですよ。」

「芝居ですつて。どうも奇抜だな。」

又この變物が馬鹿氣た事をやるな、と云つたやうに眼と眼が幾つもかち合つてはうなづくのである。

實際、論文の後には又卒業試驗か續くので學生は皆忙しかつた。けれども新三には論文の苦勞が無かつた。彼の擇んだ「劇場經營論」は一年も前から出來上つてゐた。尤も卒業論文として書いたのではなく、自分自身の慾の無い興味から書いたのであつたから、寧ろくだくだしい迄に詳密だつた。それを短くきりつめて英文にすれば濟むわけなのだ。たから彼は落着いて「わがこしかた」の筆を執る事が出來た。

始めて小說「麻布の家」を書かうと思つたのは、全く友達にそそのかされたのであつた。ふとした機會から知己になつた四五人が何れも其のみちに色氣のある連中だつた。一人が書くと他の者も默つてはゐられなくなつて皆筆を執つた。新三も元より好きな小說であつたから、忽ち醉拂つたやうな氣持になつて處女作をしたのである。

「麻布の家」の時も、然うだつたが、創作を發表するのに唯一つの懸念は家にかかはつてゐた。今の世間の親として其の子が小說を書くと知つて喜ぶ者は恐らくあるまい。まして新三の父は、小說なんぞの存在はあく迄許し度くないと思つてゐる人の一人だつた。其の眼には小說家は社會道德に反する罪人位にしか映つてゐなかつた。新三は「小說家」にならうとは思はなかつたが、若しも父が自分が小說を書いたと知つたら、とりもなほさず自分をば「小說家」と目して了ふであら

う。さうすると折角「事なかれ」をモツトオとしてゐる此頃の自分が、又もや以前に立かへつて、靜かな家の內の空氣をかき亂さなければならなくなる。そんな面倒を避けるためには出來る丈ないしよにするに限ると思つて、それに就いてのあらゆる注意を怠らなかつた。それ故新三が、「瀑布の家」「わがこしかた」を雜誌に出したのを知つてるのは此頃つきあつてゐる四五人の他には居無い筈だつた。

新三は三田通りを一人歩いて行く。うす雲にかくれた午後の日は、僅に遠い空に弱い光りを投げかけてゐる。一直線に白い風がかけ過ぎる後から街（まち）の柳の黄に枯れた葉が散りかかる。

彼は福島書店の店頭に立つて、あてもなく雜誌の口繪などを引つくりかへして見てゐた。彼はおつとりした若い主人の顏か、上品な寡婦（おかみ）さんの顏を日に一度は必ず見ないでは氣が濟まないのであつた。と、後から默つて彼の肩を叩いた者があつた。

「ヤア、君か。誰かと思つた。」

其處に立つたのは松木と云ふ、組は違ふけれど、同じ理財科三年で、二人とない秀才だ。六七寸もあらうと云ふ脊の高い、思ひ切つて眉毛の太い男らしい男振りから、新三は好きな友達だつ

た。

二人は本屋を出て町を歩いた。

「暫、逢はなかつたぢやないか。『わがこしかた』は讀んだぜ。ちつとは反響があつたかい。」

「なあにあるもんか、××新聞で、ひどく冗長なものだつて叱られたばかりだ。」

「そのかはり學校ぢやァ大評判だよ。君は聞かなかつたかい。」

「少し風邪氣で寢てゐたもんだから一週間ばかり學校には御無沙汰しちやつた。何とか云つてたか。」

「山下松太郎なんて名にしてあるもんだから、君だとは知らない奴も居るんだが、第一教員室の評判になつてゐるさうだ。それについて君に話さうと思つたんだが、此間理財學會の茶話會があつた時、大分君の話が出たぜ。」

「驚いたなア。僕は先生達は『三田文學』なんか讀まないものかと思つてゐた。だが山下松太郎が僕だとは知らないんだらう。」

「イイヤ知つてるさ。原田さんがこりやァ藤野に違ひないつて云つたんださうだ。」

「あの先生には普通部の三年頃歴史を教はつたきりなんだが、如何してわかつたらう。」

「茶話會の時にも云つてたがね、『わがこしかた』の主人公のやうに、藤野も怠け者で困つたもんだつたつて、原田さんは話したさうだ。つまりあの小說は『自傳』として見られてゐるんだよ。」

新三は松木の話を聞いて昔の事を思ひ出した。それは今から考へると冷汗の出るやうな事ばつかりだ。エスケエプばかりしてゐて、教科書さへなくなしたまま買ひもしないので、たまさか教場へ顏を出すと、きまつて先生に叱られた。原田さんは東洋史を教へてゐたのだつたが「藤野さんは學校をやめた方がいいでせう」とよく云つたものだつた。叱られながらも新三は、何故か原田さんが一番好きだつた。だから「わがこしかた」の作者を自分に違ひないと云つたと云ふ事も、わけもなく嬉しく聞いた。

松木はなほつづけて

「それが可笑しいんだよ。理財科の先生達は、理財科の生徒でゐながら小說を作つたつて云ふ事に興味を持つたんだらう。大概讀んでるんだぜ。」

「しかし讀んでみてつまらないんでがつかりしたらうね。」

「さうでもないのさ。矢張り先生は先生らしいところに目をつけるものだね。あの主人公が理財科の課目を嫌つて文科に傍聽に行く一節が一番問題になつたんだ。太田さんなんかは、『藤野つて

男は怪しからん奴だ、理財科の獅子身中の蟲だ』つて云つてたよ。」

新三は一寸驚かされたが、松木が笑ひながら云つてるので輕い戲談として聞いた。

「それから理財學會にでも引張り出して一つ詰問してやらうぢやないか、なんて云つたつけ。」

その言葉の意味は新三には合點がいかなかつた。

「困るな、そんな風に讀まれちやア。小說の主人公が學校を怠けたからつて、作者も矢張り怠け者だとは云へないぢやないか。そんなら泥棒や人殺しや姦通の小說を書く人は牢屋に入れられなくちやアならない。」

さう云つて二人は笑つた。

「つまり君の『自傳』として見られてるんだよ。」

松木は同じ言葉を繰かへして。

「もつと可笑しいのは、誰だつたか忘れたが、『藤野つて男は好い男か』つて聞くんだ。何故ですつて云ふと、だつて大分可愛がられてるぢやないか、だとさ。」

「子供の時分は可愛らしかつたんだつて云つてくれりやアいいのに。」

新三は思はず吹出してしまつた。「わがこしかた」の主人公の少年が、年上の女に愛される一節

から、氣の早い人がそんな質問をしたのであらう、先生達がそんなに話をしてゐるものだから、生徒も「それぢやァ『三田文學』を買つて見よう」と云ふ者が多かつたさうだ。新三は厭な氣持がしたけれど、松木に聞いた話は戲談として忘れる筈のものだと思つて氣にも止めなかつた。

風邪の爲めに休んでゐた學校へ久しぶりで出る朝の事、新三は又三田通りの福島屋に立寄つた。三四人の學生が雜誌をひやかして居た。

「今月の『三田文學』はありませんか。」

中の一人がおかみさんに聞いた。

「おあいにくさまで御座います。つい品切れで。」

「それぢやァ、發行所に云つて一部取寄せて下さい。」

と云つて『わがこしかた』が讀み度いんだ」と一人言のやうにつけたした。その學生達は新三をその小說の作者だとは知らないらしかつた。新三もその顏に見覺えがなかつたから、ずつと下の級の生徒だらうと思つた。それでも顏を見られるやうな氣がしてしかたがなかつた。

朝の時間は堀江博士の「財政」だつた。二百人ばかりの生徒の集る廣い講堂に、彼は這入つて行

つた。心なしか誰もの眼が自分に向けられてゐるやうに感じられたが、何時もの通り隅つこの窓際に席を取つた。その近くには知らない顏ばかりだつた。未だ少し時間があるので、室内は無駄話に騷然としてゐる。ぼんやり窓の外を見てゐたが、フと自分の事を話してゐる聲を聞いた。それは直ぐ隣の列の机を中心にした四五人で、中の一人は「三田文學」を手に持つてゐる。

「藤野つてどんな奴だ。A組ださうぢやないか。」

「僕も知らないんだが、兎に角偉いな。」

「A組の奴に聞いたんだが、勉強家だつて云ふぜ。」

「いや、怠け者だけど頭がいいんださうだ。これを讀んでも怠け者たつて事はチャンと自分で書いてるよ。」

「さうかなア。だけど藤野の普通部時代からの友達の云ふ事なんだぜ。中學時代はいたづらつ子でしかたがなかつたが、近頃は勉強家になつたつて。」

「どんな奴だらう、見度いな。しかし教場になんか出ないかもしれないぞ。文科の教室にばかり行つてると書いてあるから。」

新三は不思議にくすぐつたい氣持で聞いてゐた。この人達も「わがこしかた」を小說として讀ん

ではくれないで、「自傳」として見たのだ。而して作中の主人公を自分と同一人として考へてゐるのだ。さうするとほんとの藤野新三の他に、人々の誤解が生んだ別の藤野新三がゐるわけだ。誰の作たつたか忘れてしまつたが、大陸の作家の小說の中に、此の世の中にゐもしない人間を、人の噂が作り上げてしまつたと云ふ話があつた。それは自分の場合とは違ふし、もつと恐ろしい話であつた。Aと云ふ男が人を殺したと云ふ噂が何處からとなく聞えて來た。村人は口から口にそれを傳へた。疾風のやうに此の噂は、村中を吹廻つて、巡査はその犯人を夜を日について搜さねばならなかつた。其處に不幸なる旅の乞食が、ある夕暮に此の村境に這入つて來た。巡査は其の乞食をAと云ふ男だと信じて疑はなかつた。乞食は村人の罵り騷ぐ中を縛られて引かれた。罪をにくむ人々の投げた石くれに額を碎られて、血にまみれつつトボトボと引かれて行つた。

新三はフと此間松木から聞いた、理財科の先生達の言葉を思ひ出した。自分がAと云ふ男で、先生は巡査ではあるまいかと、思ひ比べた時、あまりの馬鹿々々しさに、ツイ一人で笑つてしまつた。

時間が終つて博士が無雜作に本を引抱へて歸つて行く後から、學生は先を爭つて講堂をなだれ出た。別段急ぐ必要もないので、新三は一番後から教室を出ようとした。其時

「藤野君。」

と呼びかけて戸口に待つてゐる澤田と云ふ同級生の姿を認めた。

「暫、お見えになりませんでしたねえ。」

「エ、少し氣分が惡かつたもんですから、臥つてゐました。」

澤田は評判の腰の低い男で、誰にでも叮嚀な口をきいたが、新三には殊にそれがひどかつた。それが厭味つたらしく思はれる程なので、新三も此の男に對しては、故意と頭を下げるのであつた。

「それから先日は、あの本を送つて下さつてありが度う御座いました。おかげで論文も出來上ります。貴方はああ云ふ本を隨分澤山御覽になるんですね。」

「イイエ、それ程でもありませんが、今迄やつた學問の內ぢやア社會問題が一番面白いものですからちつとばかり本を集めて見たんです。實は Sweating System に就いて論文でも書かうかと思つて居たんです。しかし時間が無いものですからやめにして、とうとう芝居の方にきめました。」

「アアその事も伺つて居りました。劇場は面白いでせう。

「けれども論文らしく、ないんですよ。論じ出すと限りが無いから筋を並べたばかりなんです。──君は直ぐ御歸りですか。」

「エ、もう歸つてもいいんですが、一寸貴方の御耳に入れて置き度い事がありますので御待ち申して居ました。」

「左樣でしたか。そりやァどうも。ですが御用はなんです。」

「イイエ用つて云ふんでもありませんです。唯一寸聞き込んだ事がありまして──。如何です、地下室へでも行きませうか。ここはやかましくていけませんから。」

新三は、父澤田のくどい話を聞かされるのかと御難に思ひながらも誘はれるままにうす暗い地下室に這入つた。

「實は貴方の事なんですが。」

澤田はグッと聲をひそめて近々と顔を寄せて來た。

「もう御承知かもしれませんが『三田文學』に御書きになつた『わがこしかた』ですね。あれに就いて問題が起つたさうです。」

「問題ですつて。」

新三は何かしらギツクリした。

「それぢやァまだ御存じないんですね。一言にして云へば理財科の先生達が非常に怒つて居られるさうです。」

「だつて怒られる筋は無いぢやありませんか。」

「ですが、もう評判になつてますよ。理財科の生徒の癖に理財科の悪口を書くのは許す可からざる事だと云ふんでせう。」

「困りますね。僕は理財科の悪口なんか書きはしませんよ。唯、あの小説の主人公は、理財科に席はありながら、時間さへあれば文科に傍聽に行く、と云ふ丈なんですもの。」

「けれども先生方は、小説中の人物ではなく、貴方が理財科の生徒でありながら文科に行つてると思つていらつしやるんですから。」

「それだつて怒られる事はないぢやありませんか。實際は、行き度い行き度いと思ひながらも、時間が無いので、まだそれ程文科の教室へ顔を出した事もないんですが、たとへ傍聽に行つたからつて、それが學校の規則を犯す事でもないし、罰す可き行爲でも無いでせう。僕は島國根性が少ないので、理財科は理財科、文科は文科、と敵國のやうに區別して考へられないんです。福田

博士の居た頃には政治科にも傍聽に行きました。許してくれたら普通部の算術の時間にも出度いと思つてゐますよ。」

新三はリベラリズムをほこりとしてゐる學校の先生に、そんなわけのわからない事があるものか、とテンから疑はないのではあるが、澤田の言葉の馬鹿々々しさに、その「言葉」に對して思はず聲が高くなつたと自分でも氣がついたので、少し聲を低くして又續けた。

「成程、僕は屢文科の講堂に行きますよ。しかし教室に這入る事は殆んど無いのです。いつでも生徒溜所に遊びに行くんですが、それも差支へないと思ひますね。僕の友達は文科の方に多いから休み時間に話をしに行くんです。運動場で日向ぼつこしながら、往來で行きあふ女學生の評判を聞くよりも、文科の溜所で新刊物の批評を聞く方が、僕には興味があるんだからしかたがない。若し文科の生徒が『貴様は來ちやァいかん』とでも云ふのなら默つて引込みますけれど、文科の生徒は、そんな繼子根性は持つてゐませんから、距てなくつきあつてくれます。學校の方だつて同じですよ、決してわけのわからない事を云つてやァしませんよ。」

澤田はマジマジと新三の顔を見詰めて聞いてゐたが

「そりやアおつしやる通りですが、先生方は感情上面白くなく思はれるでせう。」

「そんな事があるもんですか。『わがこしかた』の中にだつて理財科を罵つた文句はありませんもの。」

「ですがねえ。生徒の中ぢやア評判なんです。太田先生なんか非常に怒られて、『藤野と云ふ男に迫害を加へてやらう』と云つたと云ふんです。」

新三は笑はないではゐられなかつた。

「迫害は大形ですねえ。噂なんてものは誰が作り出すのか知らないが、あてにはなりませんよ。僕がチブスで入院した時なんか、『藤野が死んだ』つて云ふ噂が立つて、おくやみを寄越した人がありましたぜ。しかし『迫害』とは思ひ切つて可笑しい言葉を使つたものですねえ。」

澤田は、自分が友達の身の上の一大事だと思つて、知らせてやつたのに、當人が意外に平氣なので少し物足りないらしかつた。

「イエ、若し噂丈とすれば結構ですが、僕はあんまり評判が高いから、貴方の爲めに御注意申さうと思つたのでした。」

「どうもありが度う御座いましたが、ほんとにそんな噂がたつてゐるとすれば、僕よりも先生達の方が御迷惑でせう。根も葉もない事を云はれちやア。」

新三は松木に聞いた茶話會の日の先生達の戲談があやまつて傳へられてゐるのに違ひないと思つた。澤田はいよいよ物足りない様子を見せて別れて行つた。

新三が病臥した一週間の、ノウトを借りて寫すのに忙がしい机の上に、今はその故郷にゐる友人からの手紙が開かれた。その友達は去年學校を卒業したのであつたが、學校時代には新三を勵ましたり、時には情熱に驅られ易かつた新三をなだめたりする質の人であつた。

「わがこしかた」拜讀、久しぶりにて貴兄に面接する心地致候。御卒業前の御勉強愈御忙しかるべき折柄、悠々文筆に親しまるる貴兄は、所謂英雄の胸中常に閑日月あるものか、ひたすら驚嘆致候。然しながら小生をして赤裸々に云はしむれば、學事にいそしまるべき身、殊に卒業間際の貴兄がかかる餘事にたづさはらるるは兄の爲め喜ばしからざる事と存候。既に貴兄にも御承知の事とは存候へども、由々しき一事をさる人より傳聞致候。と申すは兄の「わがこしかた」に就き、學校內に問題を生じ、某々先生の如きは貴兄を目して許すべからざるものと……………

新三は讀んで行くうちに又かと思ふ苦笑ひの起るのを禁じ得なかつたが、遠い田舍にゐる友達

は誰から聞いたのであらうと思ふと少し不安が湧いて來た。けれども考へる迄もなくそれも亦あてにならない噂の一片に過ぎないと思ひかへして安らかな心になつた。

既に書いてある論文ではあつたが、それを英譯するには十日もかかつた。清書して見たら殆んど洋罫紙百頁ばかりになつたのを、學校に提出すると流石に重荷を下したやうに感じた。續いて卒業試驗を受ける準備をしなければならないので、教科書と筆記帳とを今更らしく机の上に積んだ。參考書迄加へると自分の坐つた脊丈位あるヅッシリ重い經濟、法律の書物に新しい壓迫を感じないわけにはいかなかつた。「これだけ讀まなくてはならないんだ」と思ふと意氣地なくしよげもするが、「これだけ讀めば卒業出來る」と考へると何かしら奮ひ立つ底力を覺えもするのであつた。けれども論文に疲れた頭を休める爲めに、二三日は遊ぶ事にしようと思つた。

久しく文科の溜所にも行かなかつたので、或日、授業が終つてから、其處に顏を出した。ストオブの廻りには話が盛んだつた。

「どうしました藤野さん、ちつとも見えないぢやありませんか。」

「エ、ひどく勉強してしまひましたよ。論文は書いたし、ノウトの整理はしたし、これからは又

試驗準備です。」
「大抵ぢやありませんねえ。——時に理財科の方の評判は如何です。」
「相變らず勉強家で通つてゐますよ。」
「イイエ、『わがこしかた』のさ。大分騷ぎが大きいつてぢやありませんか。」
新三が戲談にしてゐるのをいぶかしさうに、心配して尋ねた人があつた。
「『迫害』を加へるつて云ふんぢやないんですか。」
「なあに、そんな事は嘘ですよ。だつて怒られるなんて、身に覺えがありませんからね。」
「たらうとは思ふんですが、私は理財科の人に聞いたんですよ。なんとか云ふ先生が大變怒つてゐるつて云ふぢやありませんか。」
「嘘ですよ。よしんばほんとにしても、『迫害』を加へる方法も無いぢやありませんか。」
「『迫害』つて云ふ言葉は可笑しみがあつていいな。」
誰かが斯う云つたので皆笑ひ出した。段々と戲談に尾ひれがついて、新三も自分からふざけてしまつた。
「マア『迫害』つて云へば點數をひくか、落第のほかはないさ。しかし落第はもうあきたから御免

からむり度いな。」

「戲談は別として一體何處が惡いつて云ふんです。」

と親切に氣にかけてる人もある。

「何處つて惡い處は無いでせう。だから評判は嘘つぱちだつて云ふんですよ。」

「然うですねえ。まづ理財科の生徒の癖に小說を書いたのがいけないつて云ふんでせうか。」

「そんな事を云やア、天下に森鷗外さん程不都合な人はありやアしない。陸軍軍醫總監醫務局長醫學博士で、小說も書けば脚本も書く、歌もよめば句もつくる。早速『迫害』を加へて免官にしなくちやアならない。一緒に並べてはもつたいない程遙かに品の下つたところではあの一人よがりの惡洒落の半可通の喜劇作者、太郎冠者も怪しかりません。保險會社の重役でありながら、『保險嫌ひ』と云ふ芝居を書いてゐるぢやありませんか。」

あとは賑かな笑ひになつてしまつた。別れ別れに散つて家路へと歸つて行く途中で、新三はフと太田先生に會つた。帽子を取つて叮嚀に頭を下げたが、先生は知らぬ顏で過ぎてしまつた。

彼は始めて疑惧の念の動き出したのを感じた。確かに人の噂の通り、太田さん始め理財科の先生は自分を「迫害」するのに違ひない。しかし如何なる理由で「迫害」するんだ。小說を書いたと云

ふ事は何の罪だ。如何なる處罰に値ひするんだ。そんな無法な事があるものか。女をたらしたかどで、退校處分を受けた男はあつた。手癖が惡くて退校になつた者もあつた。カンニングをして目付かつて停學になつた奴は數へ切れない。けれども、小說を書いて落第させられた學生があるだらうか。新三はふりかへつて太田先生の行方を見送つたが、しつきりない車馬の往來に、も早や其の姿は遠く人込みにかくれて見えなかつた。

「フン、馬鹿な。そんな事があるものか」思はず口に出さうになつたのを呑込んだ。嘘だ、嘘だ、矢張り噂に過ぎない。第一、そんな結論に到達する論料が無いぢやないか。それのみか、主義として自由を尊ぶ學校だ。ベイスボウルの試合に入場料を徵收したと云つて、新聞屋に攻撃されても、問題にもしなかつた程だ。其處に育ち、其處に教鞭を執る人だ。小說を書くと云ふ事を、一大事かなんかのやうに心得てる、田舍の女學校の校長さんとは違ふんだ。太田先生こそいい迷惑だ。田舍から出たてで、理由もなく人の行爲を束縛する中學校に育つて、まだ此の學校の校風に馴染まない學生かなんかの立てた噂にあやまられては氣の毒だ。ほんとに氣の毒だ。それにしても自分さへ、その噂に動かされて、ちつとでも先生を疑つたのは濟まなかつた。今、知らん顏して行つてしまつたのは、自分の挨拶したのに氣が付かなかつたのに違ひない。よくある事だ。さ

う云ふ風に考へて新三は足を早めた。けれどもなほ心中にわだかまる不安がゆらぐので、彼は松木の家を訪れた。

新三は松木にむかつて、此の頃しきりに聞く自分の噂の事實如何を尋ねて見た。長々と疑へば疑へる噂の種を述べ立てるのを、悠然と構へて聽いてゐた松木は、至極簡短に答へた。

「君にも似合はない馬鹿な心配をしてるぢやないか。此の間も僕が話した通り、先生達は戲談に、『藤野は怪しからん奴だ』とかなんとか云つたに過ぎないんだ。僕も學校で生徒の評判してるのを聞いたけれど、そんな事は無いつて打消してやつた。太田さんが挨拶しなかつたつて云ふけれど、太田さんは君を知らないんだぜ。『藤野つて云ふのはどんな男か』つて聞いたもの。大丈夫だよ。君にも似合はない心配をしてるぢやないか。」

落着きはらつた友達の賴母しい態度に、新三は輕率な自分を恥ぢた。

「然うだらうね、僕だつて信じはしなかつたけれど、あんまり噂が高いもんだからツイ變な氣になつちまつた。」

あやふやな事を云つて彼は松木の家を辭した。

何時の間にか、噂は彼の頭を去らなくなつて居た。學校へ出ても逢ふ人毎に意味ありげな眼で自分を眺めてゐるらしく思へる。その度に新三は「お前は落第だぞ」とささやかれるやうに感じるのである。成丈人と口をききたくない、知つた顔に逢ひたくない。さう思ひつつ放課時間を待つて、急いで校門の外に出ようとするのであつた。

「藤野、一寸待たないか。一緒に行かうぢやないか。」

と呼びかけて、後から馳足で追ひついたのは林と云ふ政治科の學生だつた。

「どうたい、近頃は。大變ないたづらをやつたぢやないか。」

「いたづら？　アアあれか。つまらないものさ。」

新三は又厭な氣持にならなければならないのかと、うんざりしてしまつた。

「そりやアつまらないにはきまつてるだらう。實はまだ讀んでも見ないんだが、馬鹿な眞似をしたぢやないか。ひどく先生が怒つてるさうだな。」

「そんな噂だがね、まさかそれ程の事もあるまいよ。別段惡い事もしないんだから。」

「惡い事をしないで怒られる奴があるものか。」

「だから嘘たつて云ふのさ。」

「しかし嘘ぢや、なささうだぞ。實は君に知らせてやらうと思つてゐたんだが、此間原田先生に逢つた時、先生が云ふのさ。『君は藤野を知つてるか』つてね。『エエ普通部時代には一緒に落第つた仲です』つて云ふと、『そんなら藤野に注意してやつてくれ』と云ふんだ。つまり太田さんが非常に怒つてゐるから、今度の試驗には人一倍必死になつて勉強しなければ駄目だ、と云ふのさ。」

「然うか、原田さんがそんな事を云つてたか。」

新三はもう爭ふ力がなかつた。噂を信じようとする心と、信じまいとする心とが、短い時間の間に烈しく紛れあつた。「ほんとに氣をつけないと駄目だぞ」と幾度も幾度も念を押して、林は別れ際にドシンと背中を叩いた。

「しつかりしろ。」

さう云つて彼は横町に曲つて行つた。

新三は家に歸ると机にむかつてぼんやりと坐つてゐた。今日から試驗準備に取りかからうと思つてゐたのだつたが、眼の前に積んである教科書を讀む氣力がなくなつた。ただの噂だと思つて打消してゐた「迫害」は、遂に事實だつたのか。學生ならばいざしらず、原田先生が云ふ以上は全く嘘でもないのだらう。そんなら自分は如何すればいいんだ。必死になつて勉強しろと云ふけれ

ど、果して「迫害」が事實なら、勉強してちつとやそつとよく出來たところが爲方がないわけだ。試驗の點數なんかは先生の手加減ひとつで如何にでもしようと思へば出來るのだから、にくまれてゐるのならあわてて勉強なんかするのは損だ。けれどもまさか先生だつて、そんな亂暴な事は出來ないだらう。採點は公平無私である可き筈なんだから。

彼は繰りかへし繰りかへし種々に考へて見て、とりとめもなく思ひ惱んでゐた。其處に襖をあけて母が入つて來た。ピタリと火鉢を挾んで新三に對つて坐つたかと思ふと直ぐ口を切つた。

「勉強中かもしれないが、一寸お前に聞いて置き度い事があつて。」

何時になく眞面目な母の聲の著しく變つてゐるのに先づ驚いた。

「お前は『三田文學』とか云ふ雜誌に關係してゐるのですか。イイエかくしてもいけません、誰も知るまいと思つてゐるのだらうが、私はチヤンと讀みました。」

新三はもう事の破れだと思つたがあくまで爭つて見ようと思つた。

「僕は『三田文學』なんて讀みもしませんよ。」

「嘘をおつしやい。名前こそ違つてゐるけれど誰が書いたか位の事はわかります。お父樣のお耳には入れないけれど、若し御覽になつたら如何するつもりです、つまらない事ばつかり書いて學

校の先生が大變怒つていらつしやるつて云ふぢやありませんか。」
　母は新三の心の狼狽を見つめて又續けた。
「もう、あと一月か一月半のしんぼうで卒業出來ると云ふのに、先生に嫌はれるやうな事をして損だとは思はないのですか。」
「一體お母さんは誰にそんな事を聞いたんです。」
「誰に聞いたつてよござんす。もう學校中の評判だつて云ふぢやないか。外聞の惡い。」
「けれども試驗の點數は先生の感情で左右されるものぢやないでせう。」
　彼は考へながら斯う云つて見た。旣に問題は自分が小說を書いた事をとがめるのは通り越して、卒業出來るか出來ないかにあるのだと思つたのである。
「それは理窟です。世の中つてものは、サウサウ理窟通りに行くものぢやありません。」
「そんな馬鹿な事があるもんですか。いやしくも人の師たる人が根も葉もない一片の感情から、無法な事をするなんて。大丈夫ですよ、一つウンと勉强して優等になつて見せますから。」
　新三はありもしない覺悟を勢よく述べたてて、なほもしきりに怒りと心配にわけのわからない事を云ふ母の口をふさいだ。

「ほんとに氣をつけなくてはいけませんよ。私たつてまさか先生が無法なさりやうをしようとは思はないけれど、先生たつて矢張り人に違ひはないのだから、ソラ人は感情のなんだとか云ふではないか。」

クドクドと母は誡めて室を出て行つた。

「如何して母が知つたらう。」新三はいくら考へてもわからなかつた。それよりも落第に對する不安が今はしきりだつた。折角近頃は謹愼して老さきの短い父母にも、成るべく心配させまいと思つてゐたのに、それももう駄目だ。だがいくら考へても嘘としか思へない。「わがこしかた」を讀んだ人は理財科の惡口なんか書いてないのを知つてるだらう。理財科の生徒で小說を書いたのが惡いと云ふなら、或職業に從事してる人は、その仕事以外には何も出來ないわけだ。そんなら學校の先生だつて碁や將棋をやるぢやアないか。あれも不都合だ。校長が謠曲に凝つてるのなんかは第一に問題にすべきだ。嘘だ、嘘だ、斷じて嘘だ。

しかし原田さんも心配してくれたさうだ。同じ先生の一人が云ふ事た。嘘ぢやない。俺は落第だ。確かに俺は落第だ。落第したらかまふもんか、又ふてくされの限りを盡して、親にも兄弟にも見放される迄あばれ拔いてやる。捨身になつた人間程自由に動けるものはないんだ。そいつも

面白いや。
　新三はこんがらかつた頭をかかへて「ハハハハハハ」と笑つた。けれどもなんだか力の抜けた聲が出たので、もう一度笑つて見た。
「馬鹿な俺は如何かしてゐる」と思つたがムシヤクシヤはつのるばかりだ。「アアア」と今度は腹の底から無理に嘆息して机の上に突伏して見た。其の時、うつむけた額に近く、勉強しようと思つて積んで置いた書物が、おつかぶさるやうに迫つてゐるのを見た。にくい憎い面をして經濟書法律書が傲然と坐つてゐやアがる。
　そいつを見ると新三はたまらなくなつて猛然と立上つた。
「馬鹿ッ。」
叫ぶと同時に足をあげて、机ごと蹴倒した。すさまじい音を立てて大部の本、インキ壺、小刀、ペン、鉛筆、いろんなものが疊の上に落ちてくたばつた。
「馬鹿ッ.」
　もう一度叫んで新三はそいつらを踏みにじつた。（明治四十五年二月五日）

この一篇はもとよりつくりものなり。
萬一この小說のために我が父の如く又母の如き學校及び先生に對して誤解を生むあらん事を恐れて念のため附記す。

賢さん

賢さんが死んだ。

賢さんは私の古い友人です。年は私の方が上でした。若し私が中學部の三年の時に落第しなかつたら、たぶん、知らない他人だつたのでせう。落第のおかげで同級になつたのです。

賢さんは美少年でした。金ボタンの制服がよく似合ひました。

私は何時も教場の一番うしろの隅ッこの机に席を占めてゐたので、前の方にゐる賢さんは授業中にチョイチョイ振かへつては、笑顔を見せました。それが大變可愛らしかつたものです。

休み時間になると賢さんは私の机にやつて來ます。少ししつッこい程身體をすりつけて來ます。

「うるさいな、彼方へ行つてろよ。」

と云ふと、いきなりしがみついて、力まかせに私を教場の壁に押つけるのがおきまりでした。

私の方が力が強いので、直ぐとあべこべにギューギュー云はせてやりました。けれども私は賢さんのしつッこくまつはつて來るのを何となく待つてゐたやうです。殊に壁に押つけられるのは

「よせッたら。」

い丶氣持がしたやうです。どうかして向ふからやつて來ない時は、此方から戰を挑みました。若い時分なんか汗を出してもみあひました。

賢さんは、其頃は未だ、左程怠けませんでした。があまり出來る方ではありませんでした。氣が弱くてカンニングは下手でした。それでも先生と喧嘩したり、エスケープばつかりしてゐた私よりは、い丶成績を取つてゐました。

「口惜しけれや學問で來い。」

なぞと、腕づくで負けるとよく云つたものです。成績表の附いてる通信簿を見せびらかしもしましたが、自分のだつて矢張り「不可」だらけなのでした。

其頃の私は今から考へると氣恥しい程あばれんぼで、學校でも先生に迷惑ばかりかけてゐました。一月の出席時間數が、缺席時間數よりも少ないのが當然になつてゐました。それで賢さんは私の事を、

「オイ親不孝。」

なんて呼ぶ事もありました。

中學部を卒業する時も、私はびりから三番でしたから二十六番の賢さんには散々嘘づかれまし

た。

私の性情に烈しい變化の起つたのは恰度その前後の事でした。ベースボールをしたり、相撲を取つたりしてゐた私かぼんやり、あてもない考へ事に耽るやうになりました。

「大將どうした。此頃ア馬鹿にぼけたぢやないか。」

と云つて賢さんはいやつて云ふ程背中を叩いたりしました。

「ウン失戀しちやつたよ。」

と私は相手にもならないのでした。

私はなんだか賢さんにあきたらなくなつて來ました。始終苦のなささうな樣子を見ると腹が立ちました。

自然とお互にうとうとしくなりました。

「駄目だよ、あいつは。變物だからね。」

なぞと大きな聲で賢さんは私の事を他の人に云つてゐました。

私と違つて賢さんは誰とでも交際へました。そして誰も賢さんを「いやな奴だ」と云ふ者はありませんでした。

一度遠くなりかけた距りは間もなく又近づきました。
「宮部とは一等古い馴染なんだからな。」
と賢さんは誰にともなく云ひました。
ただ二人とももう子供ではなかつたので力競べをするやうな事はなくなりました。色白でポーッと櫻色に頰の染つてゐた賢さんも口髯がうす青く見えるやうになりました。メキメキ脊が高くなつて私を越してしまひました。
賢さんは段々學問が嫌ひになりました。學校を休んぢやあ笛ばかり吹いてゐました。水野呂童の所に通つて壽洞と云ふ名まで貰ひました。
秋になると釣に行く爲めに怠けました。家が大森の海邊なので小舟を持つてゐて、お晝の御飯と尺八を携へて一人で沖に漕いで出るのでした。
朝、學校に出て來ても風と空ばつかり注意してゐました。
「ヤいゝ鰯雲が出たぞ。」
と筆記のペンの休みには窓の外ばかり見てるのです。かと思ふと、もう次の時間には影も見えませんでした。

「凪やアいゝぜ。」

と云ふのも賢さんの口癖でした。それ程釣が好きだつたのです。

「今度の經濟の時間には出ないと筆記がおくれるよ。」

と云つても、

「凪やアいゝぜ。」

と賢さんはすました顔をしてサツサと歸つて行くのでした。

私もヤツト少許は勉強をしてみる氣にもなりかけたので豫科の二年間に賢さんよりもづツといゝ成績ををさめました。

「だが俺あ未だ落第した事はねえんだ。」

と賢さんは負惜みを云ひました。

賢さんの言葉づかひは餘程變でした。恐ろしく叮嚀を極めるかと思ふと、馬鹿に亂暴なんです。

私にはその亂暴の方ので相手になつてくれました。

「チョツ、しよんねえなあ。」

と云ふのが癖でした。

私を呼ぶのにも大概は宮部とは云はないで「部さん」とか「部公」とか云ひました。私も負たい氣になつて「賢公」とか「賢的」とか呼ぶ事もありました。

夏の休暇には幾年と續けて二人ともキツト鎌倉へ行きました。私の家は海岸、賢さんの家は山手にありました。

そんなに毎年行くので自然と鎌倉丈の友達が、澤山出來ました。學生もあれば旦那衆もゐました。役者の加つた年もありました。

何時の夏だつたか町のおもちや屋の二階に三人の女學生が泊つてゐて、大分連中と知合ひになつた事がありました。その中の一人が賢さんにおぼしめしがあるに違ひないと連中は睨んだのです。

「賢さん。おもちや屋の二階はどうしたい。」

と云ふと、

「俺ア知るもんか。」

と眞赤になつてプンプン怒りました。其方のことにはチツトモ氣のない人でした。

賢さんは泳ぎが上手で殊に波乘の名人でした。大概の人が恐れて這入らないやうに波の高い日

を待つてゐるのです。風と雲と水とを觀測しては、

「明日は波が立つぞ。」

と云ふとキツト當る程でした。それで私達は賢さんの事を「呑海さん」と呼ぶやうになりました。易の大家高島呑象さんから思ひついた惡洒落なのです。

呑海さんの名は段々廣まつて、賢さんの名は知らない人にも呑海さんで通りました。連中の中に倹さんと云ふ人がゐて、字こそ違ふけれど呼び名がまぎらはしいため賢さんの方を呑賢さんとも呼んだものです。

賢さんは面倒な事が嫌ひなので萬事お手輕でした。

「部公ン家はやぢがゐるからおつかねえよ。」

と云つて私の家にはなか／＼上りませんでした。やぢは親父のおを略したので、どうかするとやぢきにもなりました。兄貴のきをくつつけたものらしいのです。

それで連中の寄合は大概賢さんの家でした。賢さんの家では兄さんと妹と弟の他には女中が來てゐる丈なので氣が置けないのです。長谷の町から山手へと出る横町を連中は鳴物横町と云ひました。

とつきの二階家に強い書生さんが居て、多數學生を集めては琵琶を鳴らしてゐました。その筋向うは竹本操太夫と云ふ軒燈の出てゐる家で土地の旦那や若い衆が夏だと云ふのに苦しい聲をしぼつてゐます。

その奥が尺八と琴で、尺八は賢さん兄弟、琴はお向うのお嬢さんでした。

「それや聞えませぬ傳兵衞さん」などゝいやな聲につれて三味線が響くかと思ふと「チニストー」と書生さんが怒鳴るのでした。

垣根の外から、

「オイ居るかい。」

と聲をかけると尺八の音が止んで、

「部公か。」

と賢さんは答へるのです。

賢さんはいつも裸で手拭を鉢卷にして暮してゐました。連中も皆肌抜ぎ位でつきあひました。

私が着物を着てゐると、

「部公は變なところに堅えたア。」

と云はれました。

花合せ、トランプ、碁、将棋、家族合せ、いろは加留多、なんでもかんでもやらかすのです。人數の多い時はそんな遊びが幾組にも分れて勝手に始まります。その間にプープーと尺八の音を入れる男もあるのでした。

前にも云つた通り賢さんは荒波好きなので、危險を知らせる赤旗が濱に立つ日に、反つて沖へ泳ぎ出るので、巡査や濱番に叱られた事もありました。

何時だつたか、小舟を借りて賢さんが友達と二人、沖へ漕出た事がありました。二人とも素裸（すつぱだか）なのにどう云ふわけか財布は船に入れて置いたのださうです。それでフイト氣が變つて江の島へ行つて、ゑびす屋かなんかに上り込んでしまつたのです。ところがそんな事とは誰も知らないし、濱邊に着物が脱いであるのに何時迄待つても其處いらに姿が見えないので皆心配し始めました。「河童の河流れぢやあないか」と思はないではゐられなかつたのです。とりわけ兄さんの心配つたらありませんでした。漁師を呼んで海底を網で探らうとまで云ひます。

そこに沖から小舟を漕いで賢さんはいゝ機嫌で歸つて來ました。皆の騒いだのを聞いても、

「チョツクラ死ぬものか。」

と平氣な顏をして云つてゐました。

一昨年の夏は溺れかゝつた人を助けようとして賢さんと私もとも〴〵に沖へ流された恐ろしい事もありました。どうしても潮流の力に敵しかねて最後に手を放した私は、其の當座その死んだ男の肌のぬくもりが掌に殘つてゐて氣味が惡くて仕方がありませんでした。

「鎌倉もケチがついたな。」

と賢さんがフトしみ〴〵云ひ出すこともありました。その溺死者を救けようと漁師町へ急を報じに走つた連中の一人、坂倉さんはその冬病氣で死にました。江の島へ行く電車が崖端で脱線しかけた騷ぎで賢さんは大事の大事の尺八をなくしてしまひました。そんな事を妙にかつかつで云つた言葉なのでした。

賢さんも私も豫科から本科に移る時、理財科を選びました。

同じ教室で顏を合せても、何百人が一堂に集るのですから、只もうガヤガヤしてゐてゆつたりした氣持にはならないので、學校ではあまり口もきかないやうになりました。そのかはりによく一緒になつて遊び歩きました。

賢さんは落語が好きで、小せんが一番ひいきでした。常磐木倶樂部の研究會の時は大概缺かさ

ないで出かけたやうです。

何時だつたか私ともう一人左二さんと云ふ友達と三人で聽きに行つたかへりに有樂座の名人會へ廻らうと云ふ事になりました。通り三丁目をブラブラ歩いて來ると、

「オイ部さん、あの家はなんて讀むんだか知つてるかい。」

と突然賢さんが指さすのです。それは大きな果物屋の看板でした。

「讀めなくつてさ、千疋屋(せんびきや)ぢやないか。」

「駄目だよ、そんな淺はかな讀方ぢやないと思ふんだ、左二さんはどうだい。」

「さうさね、千疋屋(ちびきや)でもあるまいし、百足(ひやくあし)なら百足(むかで)だが、千疋は小姑ぢやあないか。」

しきりに駄洒落が出始めるのでしたが賢さんはいきなりその家に這入つて行きました。

「矢張り部公の云ふ通りだつた。千疋屋(せんびきや)ぢやあ智恵がないぢやないか。たゞ聞くのも癪だからバナナを買つたぜ。」

賢さんは新聞包をかゝへて後から追ひついて來ました。そのバナナは有樂座の運動場で喰べましたが、左二さんも私も十三錢五厘づゝ割前を取られました。

賢さんは喰べ物にひどく興味を持つてゐました。日本橋の花村、駒形の鰌屋、天金(てんきん)なんかに足

が向いたのです。私と二人で歩いてゐても、壽司の屋臺に飛込んだり、そば屋の暖簾をくぐつたり、汁粉屋へつれ込んだりしました。今川燒やいりたて豆を懷に入れて銀座のうら通りを歩いた事も度々でした。

賢さんは文學なんか大嫌ひでした。小説を書いたり歌を詠んだりする人を總括して「惡者」と呼びました。私がしきりに「惡者」の本を讀むと、

「いゝ加減にしろよ。」

と云つてくれました。

賢さんはよく私に意見してくれましたがしちゝ面倒くさい事は云はないのです。

「部公、大概にしないと非道えめに合ふぞ。」

と云つた調子なのです。

呑氣な賢さんにとつても卒業論文の製造は非常な苦痛でした。此正月の十五日が期限で私は「劇場の建設と其の經營」と云ふ題で暮の内に仕上げたのに賢さんの「海運論」は大分行き惱みました。誰しもありもしない學問知識で書かなければならないのですから、無駄な時間と無駄な勞力とを費すのですが、賢さんもそのために學校を休んで完成を急いでゐました。月末になつて賢さ

んは出來上つた論文を持つて學校にやつて來ましたが大變顔色が惡いやうでした。
「腹具合が惡くつてしよんねえよ。」
と云つてゐました。翌日から又賢さんは休みました。どうしたんだらうと思つてゐましたが手紙は出すのも貰ふのも嫌ひなんでしたからそのまゝになつてゐました。四五日して一寸顔を出して、
「どうも腹が惡くていけないが、そろ／＼卒業試驗の準備をしなくちやならないから筆記を貸して下さい。」
と叮嚀な言葉を使つて私の商法のノートを持つて行きました。
最後に學校で逢つたのはそれから又四五日の後でした。病氣で熱があつたので寢てゐたと云つていやな顔色をしてゐましたが存外元氣でした。二人がゆつくり話をしたのもそれが最後で、その日の會話を私は忘れません。私は三四人の友人とたくらんでゐた「福島連」の勸誘をしたのです。
「賢さん、君は本は何處で買ふんだ。」
「僕ア本なんか殆んど買つた事がないや。」
「でもちつとは買ふだらう。實は五六人、友達と相談して三田通りの福島屋の他では本を買はな

いと云ふ連中をつくつたんだ。小泉、澤木、梶原、久保田つて云ふやうな連中なんだが追々人數をふやし度いと思ふので、小泉さんなんざ教員室で大分働いてるんだ。梶原さんは神戸に居ながらわざ〳〵福島屋へ注文狀をよこすつて云ふ熱度なんだよ。それでね、何故そんなに福島屋に肩を入れるかつて云ふと、福島屋程氣持のいゝ店は無いんだ。寡婦(おかみ)さんも、若い主人も氣に入つたし、第一お白粉(しろい)を塗つた化物が居ない。氣味の惡いお世辭が無い、默つてゐると何時迄たつても勘定書を持つて來ないぢやないか。無闇に氣に入つたんだよ。それなのに塾の生徒で福島屋をひいきにしないのは神經の鈍い事を表白してるんだと大に慨嘆したわけなんだ。」

「いゝ加減な事を云ふない。しかしそいつあ面白いや。」

「面白けれや連中になれよ。」

「なるとも、けれども僕ア本は買はないぜ。」

賢さんもこの計畫にはうれしがつてゐたのでした。けれども賢さんは二度と三田へ來る事も出來ない身體(からだ)になりました。

賢さんが東京病院に這入つたと聞いたのは二月十八日でした。

私は左二さんと二十二日に見舞に行きました。どうせたいくつしてるんだらうから今日は賑か

に病院を騒がしてやらうなどゝたくらんでゐたのです。受付で威張つた看護婦に隔離室へ廻れと云はれた時は意外でしたが消毒衣を着せられてもなんだか相手が賢さんだと思ふと景氣よくしたくなりました。

「賢公居るかい。」

と云つてガラリと戸をあけた私は一足内に入る(はい)とびつくりしました。眞白い寢臺に氷嚢を額にのせて見違へる程衰弱した賢さんが横たはつてゐました。左二さんと私は顔を見合せて其處に立ちすくみました。

「部さんかい。」

と病人が濁つた眼をうつすり開いて云つたのは暫時(しばらく)後でした。

「とうとうほんものになつちやつた。」

賢さんはだるさうに乾いた唇を動かしましたが低い聽取れない程の聲でした。

二人は何と云つていゝか言葉がありませんでした。二言三言看護婦に容體(ようだい)を聞いて、

「お大事になさい。」

と云つて病室を出ました。賢さんは眠つてしまつたのかうなづきもしませんでした。

病氣はパラチフスです。衰弱はひどくても御心配には及びませんと看護婦は云ひましたが、私は何となく暗い考へを浮べました。

そしてそれがほんとになつて賢さんは二月二十五日に突然死にました。

その日の朝は、

「お母さんに逢ひ度い。」

と云ふので大森の家から賢さんのお母さんが出て來る事になつてゐたのださうです。

賢さんは死ぬ迄、熱にうかされながら卒業論文と三月の試驗の事を云つては口惜しがつたさうです。枕もとの本やノートを手あたり次第に叩きつけた事もあつたさうです、「早く學校を出たい」とは平生賢さんが繰返へして云つた言葉でした。

お葬式の日はビショビショ雨が降りました。

賢さんを殊に可愛がつたお酒の好きなお父さんはさぞ苦しいお酒をめし上つて居らつしやるだらうと思ひます。(明治四十五年三月九日)

沈丁花

一

その日、美代子は學校から洋琴(ピアノ)の稽古に廻つた。

「お歸宅(かへり)遊ばせ。」

と内玄關に手を突いて迎へる氣に入りのさとに本包(つゝみ)を渡して中の間(ま)の襖を開けると、妹が三時のお茶の後の卓にむかつて居た。

「あゝお腹(なか)が空いた。」

美代子は見栄も無く其仲間に這入つて、お菓子に手を出した、ところへふゆが迎ひに來た。

「お嬢様、直ぐお座敷へ御出で遊ばすやうに、奥様の御召で御座います。」

「お客様？　誰(だれ)。」

「本庄様(ほんじやうさま)と、阪井様(さま)とお仰(つしや)る方で御座います。」

「阪井様(さん)？　誰だらう、私知らないワ。」

「でもお召で御座いますから。」
ふゆは然う云つて立上つた。美代子は、お茶を含みながら一寸首を傾げて考へて見た。
「だつて私、知らない方なんだもの、お勝さんも一緒にいらつしやいな、一人ぢや何だかをかしいワ。」
「私、もう先刻お辭儀して來たの。」
「さう。どんな方。」
「ハイカラよ。」
「もう一遍、一緒にいらつしやいな、惠美ちやんもいらつしやいよ。」
美代子は手早く自分の室で袴を脫いで、前髮に櫛を入れた。それから末の妹迄も誘つて、姉妹は手を引合つて座敷へ行つた。
「ヤア、美代子さん、お歸宅か。サアサア此方にお這入りなさい。」
何時もの通り本庄さんが、挨拶もしない中から大きな聲をかける、陶器の丸火鉢を引寄せてツルリと頭の禿た、肥つた老人を見ると、何時ものやうに何故ともなく姉妹は笑ひ倒れて了つた。
「この人達は如何したと云ふのです。未だ御挨拶も濟まない中から笑つてばかしゐて……。あの、

此娘が美代と申します。」

母の言葉に隨いて美代子は噴出し度いのを堪へながら叮嚀に頭を下げた。若い客も座蒲團を傍へ外して洋服の膝を正して低頭した。恰度額の眞中から奇麗に分けた頭髮を、美代子は珍らしいもの丶やうに見た。

「マア、何卒お敷き下さいまし。お洋服でゐらつしやるのですから、お平に。」

勸められて、阪井は半分蒲團に乘つたが、間の惡さうにうつむいて手持無沙汰な自分の指先を弄んで居る。その細くしなやかな指に指輪の光るのも美代子の眼には珍らしかつた。

でも兎角白け勝な座に居るのが氣恥かしくもあり、平生お客と云つても一寸御挨拶に顏出する丈なのであつたから、美代子は妹達と一緒に座を滑らうと思つた。

「お母様、私明日のお復習が……」

小聲で後から袂を引く。

「なんですねえ。お復習なら晩で宜いではありませんか。阪井様はツイ先頃迄外國にゐらしつたのですから彼地の御話でも伺つたら宜いでせう。――阪井様も何卒御緩りなさいまして。只今に主人も戻りませうから。」

夫人は美代子の言葉を奪つて、客の方へと話を向けるやうに努めるのである。

「ハ、、、相變らず美代子さんは勉強家だな。何しろ華族女學校隨一の優等生だから。」

本庄さんは得意の取つて付けたやうな大笑ひをして阪井にも聞けがしに云ふのである。

「それに琴は奥許。洋琴は俺には解らんがそれがまた上手い。達彌君は彼地で耳が出來てるだらう。——美代子さん、先日聽いたのは何の曲とか云うたね。兎に角好い音のものだ。どうです一ッ伺ひ度いですな。」

美代子は「本庄さんが又知りもしない癖に出たらめを云ふのよ」と妹に目顏で知らせたが、それは氣恥かしさを紛らす爲めでもあつた。

「どうです一ッ聽かして貰ひませうか。」

本庄さんが頻りに云ふ後から、阪井も愛想を云はねばならなかつた。

「是非伺ひ度いもので……」

「どう致しまして此娘なぞに何が出來ますものですか、御稽古に通ひ始めましてから未だ間も御座いませんし何かと休み勝の上に、先生が途中で變りましたり何か致しまして、まだホンの手を運かすばかりで御座います。それよりも阪井さんこそ、彼地で何か音樂もおやり遊ばしたのでは

御座いませんか。近頃は殿方でも皆さん趣味がおありですから。」

夫人の言葉に阪井は返答に困つたらしく、愈々うつむいて了ふのを美代子は盗み見た。頬の色の美しい子供々々した顔の人だと其時始めて知つたのであるが、フト相手の上げた瞳に觸れるとハツトして、又母の背にかくれた。

「實際ですな。若い人は器用だ、何か彼かやりますからな。イヤ恐らく先づ藝無しの大將は此處の先生と俺だらう。ハヽヽヽ」

「眞當に大澤は何一ッ出來ませんですからね。ですが本庄さんは謠を遊ばすでは御座いませんか。」

「イヤそれですよ。先日も大澤君に、オイ君も謠でもやらんか、君程藝の無い男もないぞ、と俺がやつた。すると先生曰く、謠は藝に非ずさ。ハヽヽヽ、酷くやられた。先生の說によれば謠は藝の部に這入らん、聽人を悩ます一種の運動だと云ふのです。ハッハッハヽヽヽヽ。どうも酷くやられた。」

本庄さんは大きな腹に波を打たせて、自分から面白さうに笑つた。

「マア大澤がそんな事を申しましたか、自身が何も出來ないので負惜みを申すので御座います

よ。」
夫人も阪井も一緒になつて笑つた。
主人の博士が會社から歸つて來たのは座敷に燈火のつく頃だつた。大澤修造は古い法學博士で、長い間今の會社の取締役をしてゐる。
「初めて御目にかゝります、貴方の御父樣には諸方で御目にかゝりましたが、實はこんな立派な御子息があらうとは知りませんでした。」
博士は簡短に初對面の挨拶を濟まして、好きな煙草を緩く、くゆらしながら、銹のある聲でポツリポツリと話を刻んでゆく。
「亞米利加も變りましたらう、何しろ私の行つたのは、最早二十幾年か前ですからな、で貴方は幾年位行つて居たのです。」
「恰度四年間です。」
「その位が適度でせう。餘り外國に長く居ると日本に歸つて融通が利かなくなる。横文字なら辯じるが、日本字では手紙もよくは書けないなぞと來ては困り者だ。」
しかつめらしい博士に對して阪井はかしこまつて應答をするばかり。本庄さんも急に眞面目く

さつて話の相手をして居るので、夫人は膳部の支度を指圖しようと立上ると、美代子もそれに隨いて座を外した。

二階は娘達の室になつて居た。美代子は机の上に先刻稽古から歸ると、そのまゝ置いて置いた本包を解いて讀本を開けて見た。明日の英語の時間には臨時試験があるので、小許の間も眼を通して置き度いと思ふと氣が氣で無い。で夜食も形ばかりにして、一人で二階の室に籠つたのである。何時ものやうに聲に出して復習ひ始めたが間もなく

「お嬢様々々々。」

と階下からふゆが呼ぶので妨げられて了つた。美代子は梯子の下り口に顔を出して、

「何か用？」

「ハイ、旦那様が一寸いらつしやるやうにとお仰います。」

何とはなくチョッと舌打してトントンと二階を下りた。

「美代は如何したのだ。」

と云ふ父の聲を聞きながら、靜に襖を開けて這入ると、

「美代子や、お客様にお酌をしてお上げ。」

つひぞ無い事だとは思つたが云はれるまゝに酒德利を取つた。

「お父樣のお仕込で修業が出來てると見えて手つきが眞物だ。ハヽヽヽヽ」

本庄さんは注げば注ぐ丈一息にグイと干すのである。

「私はどうも不調法で、もう眞赤になりました。」

「それやいかん。折角のお酌だ、もう少しはいゝさ。」

強ひられて阪井も盃を取ると、美代子はそれにも注いだ。

平生は無口の博士も酒の後は舌が滑かになつて、阪井を捕へて古い話を面白さうに語つて倦きなかつた。

本庄さんの高笑ひも、其夜更ける迄座敷に聞えた。

客が歸つた後で、美代子は机に坐つて又讀本を開いたけれども、勉強に氣が入らないで、顏がほてるやうに思はれるのである。夙に床に這入つた勝子と惠美子のスヤスヤ寢入つて居るのを見て、「今日はお客樣のおかげで勉強が出來なかつた」と美代子は心の中で恨めしくも思つた。

博士は毎晩寢際には、酒を缺かさなかつた。夫人や娘達に交々酌をさせてチビチビ味ふのであ

る。殆んど用事以外には言葉を知らないと云はれる博士も、此時ばかりは嬉しさうに相手の眠たさうなのも構はず、夜深くなる迄語つて倦まないのである。重苦しい笑談も時には酒が云はせるのであつた。

美代子は其夜も母と一緒に父の側におとなしく坐つて居たが、妹達は早く寝かされて、今しがた十時の打つのを聞いてから自分も急に眠氣を覺えるのであつた。

「お母様、私、お先きにおひけにしていゝでせう。」

と重たい瞼に甘えた色を見せた。

「實は、今晩は貴方にお父様からお話があるのですよ。」

夫人は云ひながら博士の顏を見て促したが、博士が見向きもしないで、黙つて手酌で飲んで居るので自分から言葉を續けた。

「遅生れではあるけれど、貴方も今年は十七でせう。さう何時迄もねんねの氣持では居られません。良い御縁があつたら他家に嫁かなければならないのですから……」

夫人は少し傍道へ行きさうな言葉を捨てゝ、

「實は、或方が貴方を是非貰ひ度いと云ふのですが、私は未だ早いかとも思ふけれど、お父様は

良い縁だとお仰るし、考へて見れば私なんか、お嫁に來たのが十六の年ですからね。兎に角貴方の考へも聞いて見ようと思つて。――けれども一生の大事なのですから、よく／＼考へて御返事をしなくてはいけませんよ。」

どう云つたら宜いかと迷ひながら、やつとこれ丈云ひ終へて、娘の様子を打目守つた。

美代子は耳の根迄も上氣してうつむいて居る。小さい胸には、種々の想像が入亂れて、影のやうに後から後からと起つては又消えて行く。其間にも、一體自分を貰ひ度いと云ふのは誰だらうと頻に思ひ廻らされる。

「其方は昨日いらしつた阪井さんの息子さんだがね、私は初めて御目に掛つたのだけれど溫順さうな方だと思ひます。お父様も彼の人ならとお仰るし、阪井さんならお家も立派なのですから。」

美代子は昨日の客が自分を望むのだと聞いて、一層顏がほてるのである。次第々々にうつむいて恐ろしいやうに息のはずむのを耐へようと努めもするのである。

「ですが私は決して貴方が厭だと思ふのを無理にと云ふのではありませんよ。ですから、ようく考へて御返事をなさい。」

夫人は又ヂツと、娘を見目守るのであるが、美代子は譯もなく恥かしくて、何を考へる力もな

かつた。
「今のお母さんのお話の通りだが、何も今直ぐ返事をするには及ばない。よく自分で考へて見るが宜い。お父さんやお母さんは、悪いと思ふ所へお前をやらうとは思はないが、お前も最早自分の考へがあつてもいゝ年齢だから、自分の判斷に聞かなければいかん。」
盃を手にしたまゝ博士はさとすやうな態度で云つた。暫時、三人とも違つた心持で押默つて居た。美代子は父母に自分を見守られて居る事が辛く感じられた。何でもいゝ、早く何とか返事をし度いとも思ふ程であるが、纏つた考へと云つたら、切片さへも捕へる事が出來なかつた。
「私は父とない御縁だと思ふけれどね。」
夫人は無言に耐へられないやうに、娘の返事を促すのである。
「でも私未だ學校がありますもの。」
美代子は思ひ切つて口を開いたが、自分ながら泣きさうな聲が出たので悲しくなつて了つた。
「學校？　學校はもう澤山ですよ。後は仕事、お料理、其様なものを一通り覺えた方が爲めになりますよ。」
「でも私、もう一年で卒業出來るんですもの。」

口の中で美代子はつぶやいた。

「それや學校も大切だが、しかし良緣と云ふものは一度外すと又と無いものだ。それに阪井の方では貰つてからでも、學校へ通はしてもいゝと云ふのだから。」

それから又博士と夫人は、今日迄にも方々から、欲しいと云ふ口はあつたけれど、未だ早いと思つて斷つて居たが、今度のは至極良緣だと思ふから別に異存が無いなら嫁つては如何かと、すかすやうに娘の心を問ひ試みた。美代子は阪井の姿を胸に描いても見た。餘り早急なのがかすかに物足りないやうでもあつて、學校も心殘りがした。それでも父母がこれ程迄に云つて吳れるのだから惡い緣ではないに違ひないと考へた。

「お父樣やお母樣が嫁けとお仰るなら。」

かすかな聲で美代子は半分迄云つたが、脣が乾いて言葉が千切るやうに思つた。同時に涙が眼に浮んで來た。

美代子は長い秋の夜を此頃初めて沁々と感じるのである。罪も無く眠つて居る、枕を並べた二人の妹を見ると、其の年頃の自分の姿が懷しく思ひ出された。眠られぬ夜は種々の想ひに小さい

胸を苦しめた。今迄見も知らなかつた男と女とが結婚する、それが不思議な事であつたけれども、結婚と云ふ事自體さへ、美代子には十分解らなかつた。如何して結婚するのだらう、フトそんな事を寢覺めに考へて或る恐ろしい光景に想ひ到る事もあつた。何かしら上せるやうな、胸苦しい氣分の中に、美代子は自分の肉體に就ても今日迄知らなかつた力を覺えた。「結婚の樂しさ」とは物の本で見て、朧氣に幼い想像を色付けては居たのであるが、今はもの恐ろしい事のみが考へられた。さうして白々と夜の明ける迄、取り止めもなく想ひ續ける事が多かつた。

間も無く阪井の父親が大澤家を訪れた。美代子は母に呼ばれて座敷へ出るのに、臆し易い心を強ひなければならなかつた。母の後に隱れるやうにして挨拶する時も、自分の顏の色の變つたのが眼に見えるやうに感じられた。デップリ肥つた赤い顏の無髯の老紳士は手の置き方にも眼を付けて居るらしく思はれて仰ぎ見ることも出來なかつた。ハッハッハッハアと、きまつて笑ふのも、故意とらしく、意地惡く聞えた。

阪井が二度目に來たのは日曜の事であつた。夫人は恰度湯に入つて居る時だつたので、接待を美代子に命けた。

「だつて私一人ぢやあ……」

「そんな事を云つて、お父様はお留守だし、お客様をうつちやらかしても置けないぢやありませんか。私が直ぐ行くから兎に角お茶をあげてお話のお相手をして居らつしやい。」

暫時拒んでも見たけれど、反つてそれも恥かしくなつて美代子は茶を運ぶふゆの後から勝子惠美子を連れて、手づから菓子器を捧げて出た。

姉妹は膝を並べて揃つてお低頭をした。阪井も默つて頭を下げた。若い二人はお互に視線を合せる事が出來なかつた。

「いゝお天氣ですな。」

と思ひ出したやうに阪井は云つたが、誰も返事をしなかつた。沈默が長く續いて姉妹は人形のやうに並んで居た。

勝子は疊の面ばかり見詰めて居る若い客の樣子が可笑しくて堪らなくなつて、同意を求めようと思つて、ソツと隣席の美代子を見ると、姉はうつむいて袂をいぢつて居る。「姉さんは可笑しくないのかしら。」いぶかりながらソツと膝の邊を指で突いて見たが振向きもしない。惠美子はと見ると、これは何とも譯は解らないのではあるが、勝子の眼元が笑つて居るので自分も笑つて見せた。二人は眼を見合せてうなづき合つた、それが又笑ひを奧底から誘ひ出した。耐へよう耐

へようとしても可笑しくて堪らない勝子は流石に妹の袖を引いたり眼で示したりして笑ひを止めようと努めるのであつたが、自分から又噴出し度くなるのである。惠美子は「何がそんなに可笑しいんだらう」と思ひながらも遂々クスリと聲に出して笑つて了つた。それに誘はれて勝子も袂を顔に當てゝ笑ひ出したが、急に立上つたかと思ふと二人ともバタバタ座敷を逃出した。阪井はハツとしたやうに顔を上げると、恰度同じやうな美代子の眼と合つたので、

「ハヽヽヽヽ」

とさも困つたらしく顔を赤くして笑つた。

美代子は益々頭が下るのであつたが、座の白けたのを恥る心を紛らさうと、これも苦しい笑ひを口元に浮べて見せた。

夫人が湯上りのいゝ顔色をして、平生着の上に黒縮緬の羽織を着て現はれた時、二人はまだ行儀よく向合つて坐つて居た。沈默はそれ迄も續いて居たのであつた。

「大層お待たせ致しました。お茶も冷たくなりましたでせう。美代子や、新しいのに代へてお上げ。」

と云ふのを機會にして立つた。

奥では妹が待受けて居て、

「あゝ可笑しかつた。私もう、如何しようかと思つてよ。だつて惠美ちやんが噴出してしまふんですもの。苦しくつて苦しくつて涙が溢れちやつたワ。」

「小姉さんこそ初めに笑ひ出したくせに。」

「でも私耐へて居たんだワ。だつて彼の人つたら、いゝお天氣ですねつて云つたきり默つてるんでせう。あゝ、可笑しかつた。——姉さんは偉いわね、私が袂を引張つても笑はないんですもの。」

「だつて、お客樣の前で笑ふなんて失禮ぢやありませんか。」

「でも可笑しいんですもの、ねえ惠美ちやん。」

「それでも失禮たワ。おまけにバタバタ逃出したりなんかして、私眞實に泣き度くなつてよ。」

しかし美代子は妹を強く窘める事は氣がさした。

其日は本郷の學校の寄宿舍に居る長男の一郎も歸宅つて來た。

阪井は一週に一度は必ず遊びに來るやうになつた。

「姉さん、又彼のハイカラさんがいらつしやつたの。」

「私もう、彼の人の顔を見ると可笑しくつて詮方がないワ。」

何も知らない妹達の言葉が、美代子には泣き度い程強く響いた。

しかし誰もが阪井をば、美代子の夫になるべき人として取扱ふやうになつたのも間もない事であつた。結婚の式を擧げるのは來年の春と云ふ事さへ確められた。

「阪井さんは今に姉さんの旦那様になる方ですから其積りでゐらつしやい。」

と初めて母から聞かされた時、勝子はシクシク泣き出した。

「私姉さんにお詫びしなくちやならないの。阪井さんの事を知らないでハイカラさんだの、可笑しい人だのつて云つたんですもの。」

すゝりあげながら切々に繰返しては泣き詫びるのであつた。

年が改まると大澤家の人々には、今日は昨日よりもあわたゞしく暮れ行くのみであつた。

美代子は旅立つ前に經驗する落着かぬ心持を始終抱いて居た。小石川の阪井の家にも父母と共に行つた。達彌の父の總三郎が、東北の某藩の低い身分の家に生れて、教育もなく貧しく育ちながら、昔は殿様の身近に仕へた人々が、明治の世になると恰も先を爭ふやうに零落してしまつた

のに引かへて、刻苦と勉勵の賜として巨富を積んだ長い年月の辛勞をもつぶさに聞知つた。其人を夫として、共に骨身を力業に迄も惜まずこきつかつたと云ふ達彌の母は、今は痼疾の僂痲窒斯で家の內の立居も不自由な人であつた。

「私は此方を深切にいたはらなくてばならない。」

と、美代子はそれを勇ましい女の務と思つて、姑になる人の身體の不自由なのが、樂しみでもあつた。金に飽かした建築や、無暗と大きい石を使つた庭を案內された美代子は、此家に自分の住む事を少なからぬ滿足を以て迎へたのであるが「家でも庭でも下等な好みだ」と父のつぶやくのを聞いては、又內心に恥を感じた。

達彌に弟と妹があると聞いた時、先年に我家に居た女中で嫁に行つた女が「小姑が辛い」と云つて母の前に泣いて居たのを思ひ出して、恐ろしい氣もしたけれど、達彌に似て優しい顏立の、自分よりも年下の二人を見ると、反つて懷しいと思はれた。

春は山の手の家々の塀の內にも訪づれた。霜に荒れた庭の柔らかい土を破つて水仙の芽が勢よく現はれると、垣根の際の連翹が久しく灰白んで居た庭の中にさきがけて目覺しい色に咲く。梅、椿、一時に咲揃ふと、美代子が嫁く日は

もう間も無かつた。

同じ東京の麻布と小石川の距離ではあるけれども嫁ぎ行く身には異郷へ赴く悲しさがあつた。美代子は十八の今日初めて、沁々と身にしみて父母の家の懐しさを知つた。其處に生れ、其處に育つた我家に就て、今迄氣の付かなかつた執着を見出した。初めは全く應接間として用ゐられて居たのであつたが何時か自分達の遊び場となつてしまつて、洋琴は元より琴の稽古も其處でする西洋間の壁にかゝる父の肖像畫に見入りつゝ過し日の回想に耽る時もあつた。その父の畫の眉から頬へかけて、一線細い傷の目立つのは、何時か畫面の汚れを取らうと、母が濡手拭を手にしてるのを奪ふやうにして自分が代つた時、あやまつて記けたものであつた。其時泣いた涙が今も眼の底に漂つて居るやうな氣もした。畫の出來たのがもう十年近い昔になつてしまつて、畫面によれば半白だつた父の頭髪も殘りなく白くなつた。美代子はそんな事さへ今更に果敢なまれた。

父母の言葉に從つて未練のあつた學校も退つた。仲善の友達に、近く退校事を話した時も何故とは云ひ兼ねて、唯「父母のすゝめで」と云つたばかりであつた。別れを惜む友達は深く原因を尋ねもしないで手を取合つて泣いた。

支度は母夫人のみ忙しがる中に大方整つてしまつた。「美代子はほんとに張合の無い子だ」とつ

ぷやかせた程であつた。それと云ふのも自分には、唯夢見るやうな事のみが打續くとのみ思はれたからである。母が自慢で室の内に廣げては出入りの者や召使ひに見せてゐる晴衣も他人の物のやうに眺められた。

　庭に夥しい櫻、李の梢も蕾を持ち初めた。美代子が結婚の日も確定して人々は心に餘裕も無い有様である。其中に美代子自身は成可く人目を避けて室に籠つて居た。一時でも多く馴れた机を離し度くなかつた、長い間には幾度喧嘩したか知れない妹達にも出來る丈優しくしたければ氣が濟まなかつた。手を引連れて庭の内を歩く事もあつた。青空の色の日に日に深くなつて行くなぞは、つひぞ心づかぬ事だつたのに、フト雲の往來さへ、取り止めない想ひを增す事があつた。

　或日も美代子は勝子を誘つて庭内を歩いて居た。日あたりの梢には最早一重櫻が白く輝いて居た。父の自慢の枝垂櫻の下に立つて地面に屆きさうな枝の先に縋つても見た。何處となく沈丁花の蒸すやうな花の香が周圍に漂つて居た。

「お勝さんとももう直きお別れねえ。」

　美代子は改まつた言葉で胸にあまる感慨をもらしてみた。

「だつて何時でも遊びに來られるでせう。達彌さんと一緒に毎日だつて來られるんでせう。」

「お勝さんには解らないのねえ。」

美代子はあつけない妹の言葉が本意なかつた。何かもつと引止めて呉れなくては物足りなかつた。

「貴方にだつて今に解るワ。キツト思ひ當つてよ。」

そんな事を一人でつぶやいて見たが、自分の聲の少し震へたのが身に沁みて、涙のせぐり來るのを止める事が出來なかつた。美代子は傍の沈丁花の花の中に身を埋めて泣いた。

本庄さんの媒妁で、美代子が阪井に嫁つた後は何かしら重い責任を果したやうに滿足の裡に物寂しさが伴つた。勝子と惠美子は急に頼り無く思はれて來たが、それよりも他家の人となつた姉の身の上が氣づかはれた。目出度い目出度いと繰返して云ふ人々の言葉に送られて行く美代子は、晴衣を着せられたまゝ止度なく泣いた。勝子も惠美子も誘はれて姉に縋つて泣いたのであつた。

「お母樣、姉さんは彼樣に泣いて行らしつて如何したんでせう。」

勝子はそれが氣がゝりで詮方がなかつた。

「お嫁に行く時は誰でも泣くものですよ、皆に別れて知らないお家へ行くので悲しくなるのです

けれど彼方に馴れると直ぐに忘れてしまひます。お母さんだつてお父様の處へ來る時は泣いたのですものねえ。」

「アラお母様も左様なの。」

勝子は譯は解らなかつたが、母も泣いたのだと聞くと、何となく心が安んじた。

里歸りの日に、美代子ははれがましい顏はしながらも左右から取縋る妹や女中達に、絕えず笑顏で接してゐた。勝子はそれが又不思議に考へられた。

達彌が福島縣の阪井の炭坑へ赴くやうになつたのは、其翌年の春である。それまでは東京の店に出て居たが、父の命令に從つて炭坑の監督に行く事になつたのである。美代子が其の事を傳へに來た時は博士も夫人も少なからず不滿を感じた。

「俺は田舍へ娘をやらうとは思はなかつた。」

つひぞ愚痴を溢した例の無い博士さへ、美代子が歸つた後ではつぶやいて居た。夫人は眼をうるませて長く想ひ惱んだ。福島縣と云へば夫人には想像も出來ない遠い田舍であつた。子供の頃聞いた蝦夷が其處ではないかとさへ思はれた。夫の行く處に何の疑ひもなく、意外に溫順しく從つて行く娘を見るとけなげに思はれる丈いぢらしいのであつた。

美代子も流石に出發前には里に來て、母や妹と一緒に終日泣いて行つた。母と向あつた折にはたゞならぬ身になつた事さへ告げた。

「よく〳〵身體を大切にしてね。」

夫人はもうそれ以上に言葉を續ける事が出來なかつた。力任せに美代子を抱いて抱きしめたりした。

其當座、夫人は氣落ちしたやうになつて、

「福島はどんな所でせう。」

と來る人毎に尋ねた。殊に炭坑が恐ろしい光景を胸に描かせた。

其の年の秋、美代子は福島で男の子を生んだ。其の初孫を見る事も適はぬ夫人は、これも心中同じ不滿を抱いて居る博士に幾度となく掻き口說いた。

けれども再び春が廻つて來た時に、達彌夫婦は乳呑子を抱いて上京した。

「清や、清や。」

夫人は孫に頰擦りしては嬉し涙を溢した。

「貴方もどんなにか變つたらうと思つて居たのに、少許も變らないので安心しましたよ。」

なぞと美代子をしげしげと眺め廻した。
二週間の滯在は又悲しい別れを齎して、達彌等は福島へと歸つて行つた。夫人は明暮彼の地の事のみを案じ煩つた。

或日、珍らしい客が大澤の家に見えた。

「誰かと思つたら吉田さんですね。さアお上りなさい、何時御歸朝でした。」

夫人は自身玄關に、若い海軍士官を出迎へた。吉田は少年の時から大澤家に出這入りした男で中學校時代からの秀才で長く海外へ留學を命ぜられて居たのであつた。勝子惠美子も馴染みなので、取圍んで聞いて居たが、吉田は兎角話の進まない様子を見せた。それでも燈火のつく迄、もてなしの麥酒に少し興が湧いて來て四方山の物語をして居たが、夫人の他に誰も座に居なくなつた時、彼は小聲ではあるが思ひ切つた態度で尋ねた。

「先刻程から伺はうと思つて居ましたが、美代子さんは如何なさつたのです、少許もお見えになりませんな。」

「ア、貴方には未だ御知らせしませんでしたね。あれも一昨年、良い御縁があつて、阪井と云ふ家にやりましたよ。」

「しまつた。一歩遲れたわい。」

吉田は突然醉が發したやうに、眞赤な顏をして叫ぶと同時に高く笑つた。しかし其聲音に帶びた震へをかくす事は出來なかつた。

「實はお恥かしい次第ですが、日本に歸つたら一つ思ひ切つて美代子さんを頂戴し度いと願つて居ようと思つて居たんです。僕が外國に行く以前に、未だ子供だと思つて居たのに、最早他家の奧さんになつて居ようとは思ひがけなかつた。」

吉田はあけすけに云ひ放つて又苦しさうに笑つた。

「奧さんどころですか。もうお母さんですよ。今は阪井と一緒に福島に行つて居ますがね。」

夫人も吉田が美代子に執心だつたとは思ひも及ばなかつた。

「そんなら然うと、早く私に丈け云つて置けばよかつたのに、貴方が意氣地無しだからいけないんですよ。」

故意と輕い調子でなぐさめても見た。

「イヤ實際失敗つた。」

男らしく、未練は無いと云ふ態度を示さうと努める樣子を見ると、夫人は哀れを催した。心配に

なる程醉つて吉田が歸つて行つた後で、夫人はフト、美代子を吉田にやればよかつたと思ふ心が起つた。吉田に嫁つたら福島になんかやらないでも濟んだと思はないわけにはいかなかつた。けれども亦「そんな恐ろしい事を考へては濟まない」と強ひて思ひ返へして此の事は誰にも云ふまいと一人で誓つた。

二

勝子も人の目を引く年齢になつた。姉の美代子程美しくはなかつたが、思ひ切つて脊の高い上に色白で、髮が勝れて美事だつたので、途行く人々の振返つて見送るのも無理ではなかつた。姉・は華族女學校だつたが、妹二人は、佛蘭西の舊教徒の建てゝ居る女學校に通つて居た。母夫人は、初め耶蘇學校と聞いて氣が進まなかつたけれど、博士が華族女學校を嫌つて小人數の學校が良いと主張る上に、家から近いと云ふ事も納得するよすがとなつた。

長い月日の間には、地味な大澤の家にさへ著しい推移があつた。一郎は高等學校を卒業して大學に通つて居た。父に似て學問の好きな彼は、何時も俊等を續けて居た。本郷に下宿して居て月に一度か二度歸宅つて來るばかりであつた。福島に居る美代子は二人の子の母になつた。ツイ此

の間迄、おさげで男の子のやうに馳けずり廻つて居た勝子の目に立つて女らしくなつたのを、夫人は驚異の眼を以て見る事もあつた。

世間も激しい變化を見せた。

戰爭はあらゆる物を狂はしめたかと思はれた。靜寂な屋敷町も、號外の鈴に動かされて、何となく活氣付いて居た。

大澤夫人は種々の婦人會の役員になつて奔走した。今迄家庭にのみ働いて居た自分の氣づかなかつた職分と、それに應ずる才能が自分にもある事を悟つた。篤志看護婦會の幹事としては、親しく畏きあたりの方々にも接し得た。武家出の夫人には、然う云ふ事が大きな誘惑であつた。今迄は博士の送り迎ひの時か、稀に來る來客の俥のみ引込まれた門内の敷石を、絕えず車輪が勇ましく鳴つて、出つ入りつした。

「お母様はどうしたんだ。此頃は顏色から聲迄變つたぢやないか。」

一郎が妹に私語た程、夫人は俄にはしやいで來た。派手なおつくりをさせて、勝子を集會の場所に連れて出る事も多くなつた。婦人會の會員、新聞雑誌の記者、さう云ふ人々も出入りするやうになつた。長く交際て居た人々も、一層近しく尋ねて來た。單に遊びに來る若い男客も殖えた。

戰爭に行く、門出の別れに來る人もあつたが、吉田は某艦に乘組んで、これから戰場へ行くと云ふ端書を一枚寄越したばかりであつた。夫人は人知れず、彼の爲めに涙を流した。

博士は大の戰爭嫌ひではあつたが、それでも朝々の新聞の戰報を夫人や娘に說明してやつた。號外の鈴を聞くと、あわたゞしく書齋から馳出して來て、皆に朗讀して聞かせた。

その號外の中に吉田の戰死が傳へられた。夫人も娘達も女中迄も一室に集つて、聲をあげて哭いた。けれどもそれは誤電であつた。次の報知は吉田が砲彈の破片に當つて負傷したが、生命には別狀の無い事を告げた。一同は其の幸運を祝したりしたが、夫人の心の奧底に感じる濟まないと思ふ念を、打消す事が出來なかつた。強ひて身を敵彈の的として持つて行つたやうに思へて詮方がなかつた。

家内がはればれしくなつた爲めか、一郎もよく友達を連れて歸宅するやうになつた。もう直き學士にならうと云ふ人達であつた。夫人は勝子や惠美子をも、その仲間入りさせて、自分も若々しい聲をして歌留多を取つたりした。勝子は斯うして男達の前で琴も彈かされた。洋琴も彈いた。馴れるに從つて若い人々は、一郎の歸らぬ日にも單獨で遊びに來るやうになつた。中でも外交官になると云ふ浦上は繁々と通つて來た。

「小姉さん、又浦上さんよ。」

恵美子迄が然うした口をきいた。勝子は又かと云ふ表情をしながらも座敷へと立つて行く。

「今日は一寸妙香園に行きましたから。」

などゝ云つて銀紙で莖を巻いた花束をくれたりした。勝子を相手にしては西洋の文學、美術、音樂等の話をした。

「日本にも沙翁が出なくては、劇は永久に無智の徒輩の娯樂にしか過ぎません。」

「けれども、私共には古いお芝居が反つて面白いので御座いますよ。忠臣藏でも先代萩でもほんとによく出來てると存じまして。」

夫人は然う云ふ古い芝居の義理人情に泣く心持をよく知つてゐた。

「それやさうですとも、ですから私は芝居などもこれからは西洋の良い所を取つて日本の悪い所を捨てなければ完全は期し難いと申すのです。」

そんな話を聞きながら勝子は浦上の言葉には何の力も無いやうに思つたのであつた。

「何方かと云ふと私共は、新派の歌なんか好みません。矢張り古今集が優美でよろしう御座います。」

夫人が歌を詠むと聞くとそんな事も云ふのであつた。

「あの人はお世辭がよすぎて氣味が惡いワ。」

勝子は母の前でも屢口に出して云つた。何時も油でテカテカ光る頭に、几帳面に櫛の齒を入れた頭を傾げて、妙に口をつぼめて笑ふ樣子を惠美子と二人で眞似をしては笑ひものにした。

進藤と云ふ男爵の子も足繁く訪れた。苦味走つた顏立から小氣轉の利いた人と知られた。「小母さん、小母さん」と、打解けて夫人に話かける。

「進藤さんはほんとに心持の可愛らしい人だ。」

夫人は一人言のやうにつぶやいて、聞かせた。

戰捷の飛報に、人々が氣狂ひのやうに熱して居る裡には泣き暮らす人もあつた。大澤家の知人の中にも戰爭で死んだ人は二三人に止まらなかつた。吉田の他にも傷ついて日本へ送還された人もあつた。

岡部中尉が南山の役に負傷して、今は麻布の赤十字に居ると知つた時、夫人は直ぐに俥を走らせて行つた。中尉は一郎の幼な友達で、其後志した方向が違つた爲め、自然音信も絶え勝であつ

た。

「傷は大した事は無いのだよ。大腿部と胸部に彈丸の破片が殘つて居るのですつて。それよりも不思議な事かあるものだねえ、家で出した慰問袋が岡部さんの手に這入つたのですつて、御禮の手紙を出したが如何して屆かなかつたらうつて云つてゐらしつたよ。」

夫人は病院から歸つて來て家内に話して聞かせた。

岡部は左程の負傷でもなかつたので、間もなく退院して再び麻布の聯隊に勤務する事になつた。

その報知を兼ねて彼は大澤家を訪うた。

勝子は母に命令られた通り紅茶を運んで出た。

「岡部さん此娘を誰たか御存じですか。」

夫人は微笑ながら勝子をかへりみて云つた。

「何人でしたか、御目にかゝつたやうでもありますし……」

首を傾げて考へながら、しげしげと見るので勝子は困つてうつむくのみである。

「失禮ですが如何も解りません。」

「アラ此娘が勝子ぢやありませんか。」

夫人は嬉しさうに高く笑つた。

「お勝さんでしたか。どうも暫くでした。」

中尉は又あらためて挨拶して

「すつかり見違へました。私が一郎君の所に遊びに上つた頃は未だおかつぱさんでしたつけ。實は美代子さんかしらとも思ひましたが、何時かお嫁にいらつしやつたと聞いて居りましたので。しかしお勝さんとは思ひませんでした。」

「ほんとにお久しいんですものねえ。貴方だつて膝つきりの筒袖を着て陣取りをしにいらつしやつたのが、何時の間にか立派な軍人さんなんですもの。ですがいくら軍人でも戰爭は恐いものでせうね。」

「それや初めて砲聲を聞いた時は實際震へました。けれども段々膽が坐つて來ますと、何ともありませんです。ヒユウヒユウつと頭の上をかすめて行く彈丸の行方を面白いと思つて見て居ます。」

戰場に於ける生活、砲火の間に起つた幾多の悲慘な物語り、それから南山の役に夏の日のイライラ燒けつく高粱畑に敵彈を受けて倒れた迄を夫人や勝子や、何時か座に來て聽いて居た恵美子

等に詳しく物語つた。

其の夜から又岡部も、度々大澤家を訪ふやうになつた。浦上や進藤と落合ふ事もあつた。折柄であつたから、岡部の軍事談は誰にでも受けた。岡部の話は、叮嚀な言葉使ひと軍人に似合はない物柔らかな態度とを失はなかつた。時には博士も顔を出してフンフンとうなづきながら、感服して聽いて居た。

日當りのいゝ、庭の花壇には秋の花が咲いた。勝子はチヤキチヤキと日に光る鋏の刃を鳴らして、紫苑、ダアリア、コスモス等をきつてゐた。

「お嬢様、お客様で御座います。」

と女中が呼びに來た。

「何人？　岡部さん？」

「否、お氣の毒様、浦上様でいらつしやいます。」

云ひ捨てゝともゝは眼も鼻もなくなして、笑ひながらバタバタ馳けて行く。

「いやなともゝ。」

けれども勝子は唇に浮んで來る微笑をかくし切れなかつた。

浦上は西洋間に通されて夫人の話相手になつて居た。未だ法科の學生だのに正服は着ないで背廣を着て居るのである。

「勝子さん、先日の繪端書は如何でした。」

「はァ大層結構で御座いました。」

勝子は母の傍の椅子に掛けた。

「ア、すつかり忘れて居た。これは宅の庭のですが、今年は相應に花を持ちましたから切つて參りました。いゝリボンがありますといゝのでしたが。」

浦上は思ひ出した風をして、胸にさして來た秋薔薇の花束を取つて、一寸匂ひをかいでから勝子に渡した。細い淡紅色のリボンで結んであつた。

「これが、御庭に咲きましたのですか。大層美事で御座いますこと。」

夫人も愛想よく鼻に近寄せてみた。

「反つて幅の廣いリボンの方がよかつたかもしれませんでした。勝子さんは平生どんなリボンがお好きです、拜見させて頂けませんか。」

「なんですか掛けもしないのに澤山持つて居りまして箱から出しては並べて喜んで居ります。」

勝子は母に云はれて「いやな事だ」とは思ひながら、リボンの箱を持つて來た。

「近頃は段々廣いのが流行(はや)りますやうですね。」

一々卓上に並べてゐたが、その中の眞紅の一條(すぢ)を取上げて、

「ネクタイにしてもいゝやうですね。」

と云ひつゝ、自分の紫つぽいのを脱(はづ)してそれを、代りに手際よく自分の襟に結んだ。夫人も流石に返事もしないで見守つてゐたが、勝子は泣き度い程口惜しかつた。

其の日は岡部も來た。少し遅れて一郎も進藤を連れて歸つて來た。

「オヤオヤ、此家(こゝ)に居ようとは思はなかつたよ。今、一郎君と一緒に君の家にも寄つたんだ。」

「さうか、それは失敬したね、一寸此方の方面に用事もあつたものだから。」

「よく用事のある男だな。」

進藤は何時も手ひどく浦上に當るのが例(つね)であつた。

「君はひどく目立つネクタイをしてるぢやないか。」

進藤は直ぐと卓(テーブル)の上のリボンの箱に眼が付いてゐた。

「どうだい、似合ふだらう。」

浦上は困つた様子を見せまいとするらしく、笑つて見せた。

「只今頂戴いたしたのですが、此の薔薇は浦上さんの御邸に咲きましたのですつて、美事ぢや御座いませんか。」

夫人は面白くない其場を繕はうと、勝子が花瓶にさして其處に置いた花束を眞中に直した。

「へエ、これが、浦上君の所に咲いたんですか、僕はつひぞ見た事がなかつた。」

「否、ツイ此間植ゑたばかりだ。」

浦上は熱心に答へた。

「ハ、、、、」

何と思つたか、突然岡部が笑ひ出したので、何故ともなく夫人も勝子も誘はれて笑つた。

春は又何時となく廻つて來た。

其の夜も若い男客が集つたが、人々の立歸つた後、なほ燃え盡きない暖爐の前に椅子を引寄せて、勝子は一人殘つて居た。窓をあけると未だ春先の星あかりも冷たい空に、室の内に立籠めた

濃い煙草の煙が白く流れて行く。談笑に疲れた後に迫つて來る寂しさを、勝子はフトうそ寒く感じたのである。

「貴方は未だ其處に居たの。」

扉を開けて靜に夫人が這入つて來た。何時も客に出る時、平生着の上にはおる黒縮緬の羽織をまだ脫がないで、少し上氣した顏が寧ろ艶かしく見えるのである。二人は暫く無言のまゝ、チロチロと靑い舌を出す炎を眺めて居たが、夫人は思ひ切つたと云ふやうに、

「昨日進藤さんの來たのを知らないでせう、如何したのかお酒に醉つて來て、小母さん、僕はお願ひがあつて上りましたつて云ふのだよ。」

云ひながら勝子はと見ると、同じ態度で暖爐の火を見つめて居る。

「お願ひとは何ですつて云ふと、小母さん、僕に勝子さんを下さいませんか。直ぐに返事を聞かして下さいつて、私の顏を見詰めて居るの。私も困つてしまつて、そんな無理な事を云つて、當人の心も父の意見も聞いて見ないでは御返事は出來ませんて云ふと、そんなら何れ又伺ひますつて云つたきり歸つてしまつたのだがね、今迄に何か直接にでも貴方にそんな事を云つた事でもあるのかい。」

勝子は自分の胸を靜める事が出來なかつた。年暮に歌留多會があつて、進藤の家に一郎と一緒に呼ばれて行つた時、母に云はれて居たので、一同よりも一足先きへ俥で歸らうとするのを、玄關に送つて出た進藤が、これを歸つてから讀んで下さいと、無理に手渡した手紙を、此の暖爐で燒捨てた、其の事を思ひ出して居た。それは生れて初めて見た艶めかしい文言であつた。必ず返事を呉れと云ふのを、勝子は如何しても筆が執れなかつた。母に見せたものか、見せないものか、夜一夜考へたあげくが、翌日人知れず灰にしてしまつた。今も亦その事を母に云はうか云ふまいかと思ひ惱んだが、一層打明けてしまひませうと心を決めた。

「別に何にもお仰りはしませんけれど、たつた一度お手紙を下さつたヮ。」

「マア手紙なんか寄越したのかい。どんな事を書いて？」

「どんな事つて別段何にもなかつたヮ。で私、御返事も上げなかつたんですもの。」

勝子は母には云はない方が矢張りよかつたと思ひながら言葉を濁してしまつた。

「さうさ、それは上げない方がよかつたけれど、何故私に見せませんでした。今後は誰かそんな手紙を寄越したら、直ぐ私に見せなくてはいけませんよ。」

夫人は靜に言葉を續けたけれど、初めて娘に就いて不安を感じたのである。

「進藤さんはお酒もあがるさうだし、學校の方も餘りよく出來る方ではないさうだけれど蟠りの無い、深切な、いゝ人だと思ふけれど……こんな話はお父様に申上るよりも當人が第一だから、先づ貴方の心持を聞いて見ようと思つてね。美代子を遣る時分には、お互に氣心も知れない同志だつたのだけれど、私は今になつて可愛さうだつたと思つてね。幸に阪井がいゝ人で、幸福に暮して居るからいゝけれど、お互に交際つて見て、氣心を知合はなくては安心して嫁かれもしないし、遣れもしません。進藤さんなら貴方もよく知つてる方だから、いゝとか惡いとか考へがつくでせう。」

勝子は母の言葉の間に返辭を考へては居たけれど、何と答へていゝか確然とは決めかねた。で、ツイ云つてしまつた。

「でも私、まだお嫁になんか行き度くありませんもの。」

「いゝえ、今直ぐ返事をしないでもいゝのだから、ようく考へて御覽なさい。」

何時か燃え盡きた火のほとぼりもさめかゝつて來た。夫人は勝子を促して立上つた。

湯上りの肌には、日光にあつたまつた、木立をもれる風が心地よかつた。

勝子は昨夜、父母の前で、進藤に嫁く事を斷つてしまつたのに、未だ心に殘るものがあつた。進藤は嫌ひではない、見たところから一郎の友達の中で一番立派ではあるし、母の氣にも入つて居る。深切な人らしくもある。自分に對して熱烈な戀文を吳れた人ではないか。けれども進藤の樣子には飽足らぬ所が多くある。一郎の話では大變なお酒飮みだと云ふし、學校も去年落第したと云ふ。それに自分に吳れた手紙だつていやらしい事である、よく考へて見ると反つて賴みがたい氣が起つたのであつた。

だが自分も今年十八になつた。學校もこの四月で卒業すれば早晩嫁に行かなければならない身體だ。見ず知らずの人の所に嫁くよりは、矢張り多少なりとも知つてる人の方がいゝ。それなのに自分は進藤さんの方を斷つてしまつた。そんな悔もかすかにあつた。しかし更に或事に想到つた時、勝子は遣瀨ない自分の胸に觸れるのが恐くなつた。

西日の當る庭の土は乾いて、勝子の踏んで行く足下に落ちる眞赤な椿の花から、濃い花粉が鮮かに散る。沈丁花もそろそろ赤ばむ頃であつた。勝子はフト姉の事を思ひ出した。美代子が嫁に行つたのも十八の春であつた。よく自分と手をつないで此處を步いたものだつた。もう、結婚の日もきまつてからの事、恰度此の圓く刈込んだ沈丁花の花の蒸すやうな中に顏を埋めて泣いた姿

が眼に浮んで來た。「お勝さんには解らないのねえ」と云つた姉の言葉さへ不思議に思ひ出された。其の言葉の意味も今日初めて自分にも解つたやうに思はれた。

勝子は其の時姉がしたと同じやうに、半身を花に埋めて見たが、未だ固い蕾は甘い香を有(も)つて居なかつた。

勝子はしきりに姉が戀しくなつた。始終一緒に居る惠美子は賴りなくて詮方(しかた)がなかつた。久し振りで姉に手紙を書いて送らうと思つた。姉を懷しく思ふ自分の心持を傳へようと思つて、一生懸命になつて書いて行く中に、平生(ふだん)心にも無い心細い、悲しい事さへ書いた。

五六日經つと福島からも返事が來た。美代子も東京に行つて皆に逢ひ度くてしやうがないと云つて來た。二人の母になつては、なかなか思ふに任せない、如何しても父母(ちゝはゝ)の家程戀しいものはないなど丶書いてあつた。

……お庭の櫻もそろそろ咲くでせうね。あの枝垂櫻の下に蓆(ござ)を敷いて貴方と飯事(まゝごと)をした頃が忘れられません。花が咲いたら一片(ひら)でもい丶から手紙の中に入れて送つて下さい。

勝子はそんなのを讀むと、愈々遣瀨無い心地になるのであつた。

月の良い夜が來た。

勝子は此頃屢々夢を見る。今迄つひぞ無かつた男の夢を見るのである。それが岡部の事もあり、進藤の事もあり、浦上である事もあつた。爲すがまゝに身を任せて、男の腕に抱かれた淺ましい夢も見た。眼が覺めても、なほ流れる氣味惡い汗を男の肌かと感じて驚いた事さへあつた。それが又晝の心にも深い惱みを與へて、勝子は其の人々に逢ふ時に、思ひ出しては、ひとりでに顏が赤らむのであつた。

此頃一番足繁く來るのは岡部である。

「お孃樣は岡部さんだといそいそしてゐらつしやいますね。」

と或時ともが云つた言葉に勝子は恥を感じたが、又それをば忘れないで幾度となく胸に繰返して見た。

其の夜も窓の外の庭に漲る月光の青む中に、櫻が際立つて白く木立の上に浮いて見える、座敷にも一組客があつて、夫人は其方の接待に專らである。惠美子は三四日前から風邪氣で寢て居るので、一人つきり卓を挾んで、岡部に對つて掛けた勝子は話の途切れには、夜の景色に眼のやり

場を求うたければならなかつた。

「勝子さんは最早卒業ですね。」

岡部は強ひて話題を求めるらしく、時折何か問ひを掛けるのであるが、勝子は母の居る時とは違つて極めて口數が少ないのである。黒い肋骨の服のしつくり合つた身體を正して居る岡部の視線が眩いのであつた。

「良いお月夜ですこと。」

てれかくしに云ひながら椅子を離れて、窓際に立つて、勝子は戸外を眺めた。

「櫻が奇麗ですな。」

と岡部も立上ると大股に歩いて、勝子の後に近々と肩を並べたのである。熱い男の息が頸元に觸れるやうに思はれて、勝子は身動きも出來なかつた。暫くの間、直ぐ玻璃窓の外の月明りに白々と散る櫻を上氣して霞んだ眼で見詰めて居た。

「勝子さん。」

突然、岡部の聲がたゞならず耳近く聞えた。勝子は全身に水を浴びたやうに震へた。

「勝子さん。」

と再び岡部の聲を聞いた時、右の肩に重い男の手を感じた。二人とも窓際の長椅子に並んで掛けた。

「實は、私は貴方に聞いて貰ひ度い事があつて。」

岡部は著しい努力を以て口を開いたらしかつたが、咽喉がつまるやうな聲になつて、度々途絕えつゝ、

「私は貴方を愛して居ます。どうか私がこんな事を云ひ出した心中を察して下さい。私は決して浮いた氣で云ふのではない。貴方が承諾さへ下されば、直ぐに御兩親にお願ひするつもりです。」

勝子は身體を堅くして、聞いて居た。火を呑んだやうに胸が燃えた。しかし、それは待つて居た言葉を聞くやうな氣がしないでもなかつた。

岡部はせりふめいて來る自分の言葉を考へる丈の餘裕も無いらしく、幾度となく、かう咳をしながら云ふのであつた。其の間一言も無く、化石したやうな勝子は強ち男から逃れようとする意思もなかつた。

言葉よりも強い力。いきなり男の手は女の手を取つた。勝子はそれでも身動きさへしなかつた。男の手は後から女の肩を抱いた。勝子は一層身をすくめたが、なほ爲すがまゝに任せた。

更に其の手は頸を巻いた。熱い接吻を勝子は乾いた唇に受けた。

進藤の艶事が新聞の三面に三日續きで出た。赤坂の有名な藝者との間柄を主として、其の他にも誰某の娘、何爵の姫を犯したと云ふやうな事が書いてあつた。夫人は博士に對しても、召使人に對しても、世間に對しても恥かしかつた。今迄清淨な顏をして、小母さん小母さんと云つて來たのが口惜しかつた。殊に其の藝者の繪葉書を勝子にあてゝ寄越した事もあつたのが、今になつて見ると、可笑しい程腹が立つた。

「あんな人に娘をやらないでよかつた。」

夫人は幾度となく胸の中でさうつぶやいた。

「進藤の息子の事ばかりではない、若い男がのべつに出入りするのは、世間體もよくない、毎晩のやうに遲く迄騷がれては八釜しくて堪らん。せめて土曜とか日曜とか、決まつてゞも居ればまだしもだが、制限無しに出這入りはさせないがいゝ。若い娘も居る家だ、若しもの事があつた時、お前は如何するのだ。」

今は然う云ふ恐怖を夫人も抱いて居た。博士の云ふ事が一々尤もだと思はれた。しかし勝子は

父の言葉を靜かな心で聞く事は出來なかつた。父の鑄果てた聲、嚴めしい言葉つきが無情のみ聞かれた。

進藤は足が遠くなつた。浦上も卒業試驗の準備に忙しいので、一頃程繁々來る事はなくなつた。たゞ夫人、勝子、惠美子とかはるがはるに宛名を變へて、繪葉書などを寄越した。岡部ばかりが一層近しく出入りするのであつた。博士の酒の終る迄も座敷に談笑の聲の絶えない事もあつた。酌人の無い酒を嫌ふ博士は幾度となく客を憎む言葉をもらした。

勝子は始めて男性の力ある手に抱かれて、接吻を受けた夜の事が忘られなかつた。それを思ひ出す度に恐ろしくなりもしたが血の湧かへる身體を、もう一度強く抱きしめて貰ひ度いと、そゝられるやうな氣になつて、自分自身で胸をしつかりと抱いたりした。大鏡の前に立つて自分の裸體を寫しても見た。寫眞帖に挾まつてゐる岡部の寫眞に頰を觸れないではゐられないやうな氣もした。

すべての感覺が驚かれる程鋭くなつた。湯槽の中で、重く肌にまつはる溫い湯はくすぐつたく血をそゝり、新綠の若葉の匂ひが眼も眩む程鼻を突いた。掛け浦團に壓される胸の苦しい快感、時には天鵞絨の夜着の襟に赤くなる程頰を擦りつけた。

一郎は卒業すると直ぐ獨逸に渡航した。伯林の大學に入(はい)つて、法律を研究する爲めであつた。其の祝ひや喜びに續く準備の爲めに、夫人が氣忙しく汗を流した夏も終つて、朝夕の風が涼しくなつて來た頃岡部は大尉に昇進した。その心祝ひをするから、是非來て呉れと云はれて、夫人は勝子と惠美子を連れて、ツイ先頃岡部が住込んだ家に呼ばれて行つた。兩親も兄弟もない彼は婆やを使つて暮して居た。壁の色もまだ生々しい、二階建の小さい家に、勝子は少なからぬ興味を感じた。主人の机の上に何時か送つた縮緬の肱つきのあるのも見た。

何時からか勝子は一日を耐へられぬ程長く思ふのである。秋深くなるに從つて、心寂しく感じるのが今年はわけて深かつた。心に待つて居る事の、なかなか現はれて來ないのが不安になつて來た。日曜には必ずと約束した岡部が、演習や週番で來られない事もあつた。其の人の來る日にも、母や妹が座を去らないので思ふ事を云ふ機會(をり)も少なかつた。何時もぢれつたい心地で、岡部の歸つて行くのを見送らねばならなかつた。

或日勝子は匿名の封書を受取つた。故意(わざ)と細々と書いてはあつたが、まぎれもなく岡部からのであらうと直覺して、母の眼に觸れない中に自分の手に入(はい)つた事を喜んだ。それには愈々御兩親に、

結婚の事を申込んだから、その積りでゐてくれと云ふ旨が、極く簡短に書いてあつた。勝子は幾度となく繰返へして讀んだ。

今か今かと、やがて起る事を期待心を抱いて勝子は其の夜二階の自分の室に居たが、平靜と落着いてはゐられなかつた。幾度か自分を呼ぶ母の聲を空耳に聞いた。父の晩酒の始まる時刻は、まぎらす事の出來ない不安に襲はれてしまつた。先きに床に入つた惠美子の、顏の半分は夜具にかくれて、苦もなく眠つてしまつたのを見すますと勝子はもう坐つてはゐられなくなつた。梯子段を下りる足音は自然と忍ばれた。廊下を歩いて行くと中の間の父母の聲が直ぐと聞えた。勝子は思はず立止つてしまつた。

母の聲でクドクドと何か云つてるのが、一つ一つの言葉としては聞取れもしないのに、如何しても自分の事を云つてるとしか思はれなかつた。

「俺は元來〔三字略〕大嫌ひだ。」

突然父の聲が明瞭と聞えた。

「〔四字略〕などゝ云ふものは、自分より目下の者は頭から怒鳴りつけるが上役と見ると諂ひ度がるものだ。否、俺は岡部の事を云ふのではない、たゞ〔三字略〕娘はやり度くないのだ。」

冷い壁に身を寄せて立聞く勝子はワナワナと全身が震へた。暫時盃の物に觸れる音のみがすると、何時からか鳴いて居た床下のこほろぎの聲が聞えた。又搔口說く母の聲が續いたが、それに對する父の調子は何時になく烈しかつた。

「お前はさう云ふがそれも皆お前の注意が足らんから起つた事だ。一郎の友達なら一郎の居ない時は、家に上げる必要はない。何だ。體さいのいゝ交際だなんと云つても皆娘を張りに來る奴ばかりぢやあないか。」

勝子は廊下の暗がりに聲を忍んで泣いた。

翌日、博士の出勤の留守の間に、夫人は勝子を其の室に訪うた。襖の開く氣配に、今迄机の上に突伏して居た勝子は泣きはらしたやうな顏を上げて母を見返つた。昨夜一夜、止度なく熱い淚の湧上る中に、恐ろしい光景をさへ胸に描きつゝ曉になつたのである。夫人は蒼ざめた顏を見て吃驚した。

「如何かしたんですか。氣分が惡いのかい。そんならお醫者樣に來て頂くから、寢て居なくてはいけません、熱もありやしないの。」

勝子はそれ丈でも耐へられなかつた。又机の上に泣き伏してしまつた。

「如何したんです、頭痛でもするのかい。」

「お母様、私昨晩のお話を聽いてしまひました。」

どうともなれと云つたやうに泣きじやくりながらも、強い語氣で云ひ放つて、ひしと取縋ると顏を埋めて母の膝の濡通す迄泣き出した。

「いゝから、解つて居ますから、お母様が惡いやうにはしません。お父様はあゝお仰つても、きつとお許しの出るやうにして上げます。」

夫人は夙から、岡部に對する勝子のそぶりに氣が付いて居た。一時はさうした事になつたのを、自分の罪として身を責めつゝ悔いた。しかし岡部になら勝子を遣つてもいゝと思つた。眞面目な、溫順しい軍人には姑となるべき母もなかつた。財産よりも人物が大切だ。そんな事さへ考へて居た。

「お母様が惡いやうにはしませんから。」

と夫人は同じ言葉を幾度となく繰返すよりほかはなかつた。

勝子の縁談は諸方から持込んで來た。幅利きの實業家の息子、地方の豪家、某伯爵の次男、勝

子は堅い決心を以て父の目前に一々それを斷つた。どんなに富んだ家でも、どんなに時めく人でも、自分の想はぬ人に嫁ぐ程淺ましい事はないと思つた。姉は父母の勸めるまゝに何も知らないで嫁つた。さうした結婚は遠い世の事のやうに勝子は考へた。

中に浦上もゐた。彼は外交官試驗に通過すると直ぐ申込んで來たが、勝子ばかりか夫人迄も浦上に對しては好意を持つて居なかつた。邸宅々々と云つて聞かした彼の家が庭も無い事なども不快を增した。彼家の令孃にも此家の娘にも申込んではねられたとも聞いて居た。

煖爐には又火が燃えた。少しの風にも散りかゝる木の葉は、日光にそりかへつてカラカラ鳴つて地面を走つた。

十一月の寒い日に、其の後姿を見せなかつた浦上が大澤家の玄關に立つた。

「今度メキシコの公使館に赴任する事になりましたので、お暇乞ひに上りました。」

座敷へ通ると直ぐ彼は云ひつゝ、夫人の後に控へて居る勝子を見た。

「それはお目出度う御座います。存じ上げて居る方が皆さんお立派にお成りになるので私共も嬉しう御座います。」

「どうも長い間寄せて頂きましたが、最早當分お目にかゝれないと存じまして。」

思ひなしか浦上は聲もしをれて哀れであつた。

「どうか夫人も勝子さんもお便りを願ひます。」

勝子は責められるやうな氣がして胸が塞がつた。自分の爲めに日本を去つて遠くへ行く人かとも思つた。長居もしないで歸つて行く浦上の、門を出て行く後姿を弱々しい心で見送つた。

夜は殊に物の音が悲しく身にしみた。遠く行く町の電車の軋りも、壁の中で細々と啼くこほろぎも、燈火に群つて來る羽蟲のハタハタと障子に觸れる音も、街路の下駄の齒音も、すべて明かに聞えた。

山々の嶺の白くなる頃は、東京の風もメツキリ冷たくなつて、街頭の柳の葉も黄に枯れて散つた。

其の日は珍らしい大雪で、昨夜の中に積つた上に、何時止むとも見えないで、風になぐれた雪片が降りしきつた。

勝子は此の四五日、底冷えのした風に觸れた爲めか、頭痛がして堪へられなかつた。少し熱のある身體は、夜着の中に埋もれながらも烈しく動悸を打つた。瓶を取ると水藥の匂ひが冷たく眼に沁みた。胸に手を置いてぢいつとしてゐると、折々庭にくづれる雪が、いかにも遠方のやうに聞

かれるのである。次第に寂しい賴りない心地になつて行くのを逃れようと思つて、勝子は細帶の上に羽織を引掛けて階下に下りて行つた。
「姉さん、岡部さんが來て居てよ。」
火鉢の側にうつぶして女學雜誌を見て居る惠美子は一寸顏を上げたが、又熱心に讀み入るのである。
「さう、今いらッしやつたの。」
「いいえ、もう先刻よ。姉さんは加減が惡いからお目にかゝれないつてお母樣が岡部さんに云つてらしつたわ。」
勝子はそれ丈でも涙ぐまれた。此の大雪の中を尋ねて來た男の心根さへ想像された。母と岡部との對話は何であらう、勝子はそれが不安であつた。強ひても其の席に出席いとも思ふのであるが、又其の場に起る氣まづさをも考へないわけにはいかなかつた。
間も無く玄關の方に人聲が聞えた。それは岡部の歸るのを送るのであらうと思ふと、勝子は思はず立上つた。そして足音を忍んで行つた。恰度玄關から襖一重の、暗い室に勝子はうすら寒く立つて居た。佩劍の音がチャラチャラと響いて、外套でも着るらしい氣配もした。

「此の雪では大抵ではありませんねえ。」

と母の聲で、

「では只今申上げたやうなわけですから、何卒其のお積りで、何れ私が悪いやうにははからひませんから。」

勝子は母が父の言葉を明白に傳へたに違ひ無いと思ふと、頭の血の逆行るのを覺えた。敷石の上に靴の音がして、

「さよなら。」

と云ふ母の聲に送られて行くのだと思ふと、勝子は間の襖を細く開けてみた。スツポリと外套の頭巾をかぶつた丈の高い後姿は今や門外へ出ようとする所である。勝子は其處に手をつかへて居る女中の見る眼も構はずに、玄關へ走り出て障子のかげから見送つた。眞直ぐに遠くへ果てしもないやうな、深々とある雪の道を、もう黑い姿になつて遠ざかる岡部は見る間に降りしきる雪にかくれてしまつた。冷めたい風が骨迄も沁みたと思ふと、勝子は烈しい眩暈を感じた。

「勝子。どうしたんです。勝子。」

あわたゞしく叫びながら、支へた爲め、危ふく倒れようとした身體を母の腕に投げかけた。

勝子は火に燒かれる苦しみと、氷にひたる惡寒に交々襲はれた。夜となく晝となく、枕邊について居る母は時々狂人のやうに泣いて、夜着の襟を嚙む娘を泣いた。どうしても、岡部を思ふ爲めの病氣であると信じて疑はなかつた。

「私が惡かつたのです。幾度お詫びしても返らない事ですけれど。」

後は涙になつて夫人は博士の前に說いた。

年の暮の木枯はつれなく障子を搖つては過ぎた。寒い夜更けに、物賣の聲が凍てついた町に冴え渡るのを聽いたのも幾夜かになつた。

フト神佛を祈る心になりもした。娘の机の上の聖書を手に取つて讀んだ。額にかゝつて居る聖母の油繪を、或夜手を合せて拜んだ。優しい顏立のマリアは其の面影からも親しまれた。朝に夜に其の前に額づかなければ氣が濟まなくなつた。それが自分の心なぐさめでもあつた。

同じやうな日が暮れては又廻つて來た。病人よりも看護の母の方が氣づかはれる程であつた。博士も遂に勝子を岡部へやる事に同意した。

大澤家では正月も寂しく暮した。

勝子の床上げは其の月の中旬だつた。祝ひの席には岡部も呼ばれて來て、博士の盃を受けたりした。

二月の末に岡部の家で結婚の式が擧げられた。古くから大澤家へ出入りした老人夫婦を媒妁人に頼んで、博士夫妻惠美子の他には、岡部の上官が一人並んだばかりで、大澤家からの支度も質素なものであつた。

流石に勝子も泣いて家を送られて出た。

「先方で、家が狹いから着のみ着のまゝで來て呉れと云ふので、何もこしらへなかつたけれど、お父樣が貴方の財産としてお金を下さつたから、欲しい物はそれで如何にでもするのですよ。」

母も泣きながら娘を立上らせた。父の惠みの金額が意外に多かつたので、勝子は又悲しくなつた。一度でも恨めしいと思つた事のあつたのが泣いても泣いても濟まなかつた。

夫人は滯りなく、勝子を岡部にやつた後で、氣疲れの爲めに十日近く臥た。枕元に坐つて新聞などを讀んで聞かせる惠美子の、メツキリ女らしくなつたのを見ると、種々の想ひがあつた。つく／＼と眺め入つて、誇らしく感じもしたが、又新らしい不安が生れたやうにも思つた。「もう

二度とあんな心配はしないやうにしませう」と自分に誓つた。

廣い家の中は何となく暗くなつた。岡部夫婦でも來る日は別であるが、博士と夫人と惠美子と、三人で圍む食卓は話もなくて終る事が多かつた。客の數も次第に減つた。

惠美子に琴を彈かせて、夫人は一人もの足りなく聽く夜もあつた。しかし、一年一年と美しくなつて行く惠美子は、博士にとつても　夫人にとつても生命(いのち)だつた。前髮のふくらみのいゝ髮をマガレツトに結んで、幅の廣いリボンを掛けて學校へ通ふ姿を夫人は必ず玄關迄見送るのであつた。

櫻は又梢に返つて、日光の色も濃くなりまさると庭は沈丁花の香りが漲るやうである。

惠美子は姉に別れてからは母とつれ立つて庭内を歩いたりした。木立の蔭に讚美歌の聲の細く高く聞える事もあつた。

或日、惠美子は學校から歸つて來て、自分の室(へや)で着物を着換へようとすると、袂から落ちたものがあつた、艶めかしい、桃色の封書に紫のインキで、「戀しき君へ、百合子より」と書いてあつた。開いて見ると男文字で細々と想ひのたけを繰返した艶書(ふみ)であつた。何時、何處で何人(だれ)に投入れられたものか想像(かんがへ)られなかつた。誰も居ないのに氣恥かしくて顏を染めた。息を殺して讀終つ

た後、恐ろしい目に合はされはしないかと云ふ疑惧が、それを母に見せなければならないと思はせた。封書を帯の間に挾んで中の間に行つたが、母の顏を見ると氣か臆れてしまつた。何氣ない風をして、お茶を飮んで、又二階に上つてしまつた。もう一度讀んで見た。いろんな美しい言葉をつぎあはせた下手な文章にも、何か心に觸れるものがあつた。

惠美子はそれを讀終ると手箱の底に入れて錠を下した。(明治四十五年四月十五日)

途すがら

汽車はほのぼのとあけはなれた九州路の朝日の中を走つて居る。

窓から射入るその日光が、横たはつてゐる顔から胸にかけて眞當面に延びてゐるのに氣が付いた時、俊雄はヤツトわれに歸つて、ものうい身體を半分起して車室の內を見廻した。乘合はたつた一人とぼけた田舍のぢいさんが、色の褪めた草色の風呂敷包に寄かゝつて居睡をしてゐるばかりだつた。

窓の外は眞靑な田畑に、さへぎるものもなく照りつける日がギラギラと燃え立つて、油ぎつた藍を含んでおつかぶさる空の下に、遙に低く脈を打つてゐる山々の襞が際立つて暗く眼に映つた。俊雄は日ざしを避けて、反對に窓の下の腰掛に身を移したが、フト彼は切々になつた記憶を鈍く、疲れた頭腦に集めて見た。

昨夜は京都の或場所で、したゝか飲んだ醉の醒め切らない身體を汽車に乘せたのであつた。無理強ひに醉はされた重い頭にヅキンヅキンと響く汽車の動搖が、愈々胸苦しさを覺えしめるので、それをまぎらさう爲めに幾本となく瓶の口から不味い冷い酒をそゝぎ込んだが反つて心持が惡く

なるのみで、果は窓から首を出すと同時に苦い汁を胃の腑の底から闇の線路へと吐いた。ぐつたりして、何處を走つてゐるのかそんな事は解らなかつたが、少し曇つた夜氣の濕氣がヒヤヒヤと額にあたる心地よさに、苦しい息を吐きつゝもうつとりとなつて見る眼に近く、青白く光つて螢の數知れず飛んだのを覺えて居る。それから今朝、下の關に着いて九州へ渡る聯絡船に乘る時、如何したのか眼が霞んで、すべての物象がよく見えなかつた。カツと燃えつく小蒸汽船の甲板に眩暈して、日に焦げた欄干につかまつて僅に倒れようとする身體を支へた時、流れの早い海峽の潮が底知れぬ蒼さを以て額に迫つて來ると思つた。

然う云ふ或る瞬間の光景のみが傷口に藥の沁み入るやうに鋭く明瞭と浮んで來て、混雜合つた汗くさい三等室であかした長い一夜は、今は夢のやうに朧に淡い昨日になつて居た。

間もなく或るちひさい停車場に着いた時、居睡をして居たぢいさんはフト眠りから覺めて、身の廻りから窓の外をあわたゞしく見廻すと、其處が自分の下りる停車場であつたのだらう、吃驚した顏をして荷物をかゝへるとそゝくさと出て行つた。それから俊雄は一人になつた。

窓の外の景色は少許も變らないで、同じやうな山と野を走る支線の汽車は激しく搖れながら腹の立つ程鈍い進みを續けて行く。何時迄たつても目的の〇〇驛へは行けさうもないやうに思はれ

て、彼は氣持の惡い口中の粘液を、さもじれつたさうに唇から吐いたが、重たく澱んだ唾液は唇を離れないでダラダラと顎から條を引いて衣服の胸に落ちた。俊雄は意氣地無く疲れてゐる自分を妙に情なく、泣き度いやうに思つたが、それと共に又非道く自分を馬鹿々々しく感じたのである。「何故一行に別れたらう」と心の底につぶやくものがあつた。

一體今度の旅は、俊雄や其の仲間の青年が師とも思つて居る新派の歌人――岡田紫葉――を中心にして、行く先きは關西から九州へ渡り、長崎迄行つて其の附近の五島天草等の變つた樣子も見度いと云ふのであつたが、途中各地の新しい歌を好む青年は一行を待ち構へてゐるので、何處に行つても歌の會や招宴に苦しまねばならなかつた。俊雄はそれが厭だからばかりではなかつた。三年前に別れて、今は九州の○○縣下の炭坑に居る美知代に逢ひ度いとフト思ひ立つたのが耐へられぬ想ひになつて、誘はれる心を止めかねては返らぬ昔に再び逢ふ自分を、哀れになつかしく胸に描き初めた。しかし何となきうしろめたさに責められて、とつおひつ思ひ惱んだのであつたが、遂に「自分丈は用事があつて寄り途をしなければならないから、大阪は素通りして九州へ行く、而して一行の來る日を待つて又一緒にならう」と思ひ切つて云ひ出した。それが餘り突然の事だつたから紫葉を始めとして誰もが驚くよりも怪しんで、種々に思ひ止らせようと口を盡した

のであつたが、俊雄には既に遠く走つた心を呼び返す事は出來なかつた。彼は或驛で再び一行と落合ふ可き日と時とを約して一人別れて來たのであつたが、今はそれが如何にも頼りない寂しいものに思はれて來た。

美知代は寄邊の無い孤兒になつた十五の秋、早く別れた父と新に失つた母の墓所の在る會津から、旅の恐怖に震へつゝ僅に叔父を頼りにして東京へ出て來た。田舍縞の着物を着た、血色の惡い小柄な娘が、たつた一つの風呂敷包の陰に肩身狹くかしこまつて、少し鼻にかゝる訛のある聞き馴れない調子で父母に物を云ふのを、俊雄兄妹はもの珍らしく見守つた。

俊雄は其の頃、身も心も自分ながら驚かれる程あわたゞしく成育して行く年齢であつた。昨日迄知らなかつた肉體の變化に伴つて憧憬やすき少年は何がなしに在るがまゝの物事を見るばかりでは滿足されないで、目的もなく何をか求め歩きつゝ云ひ知れぬ寂しさに囚はれて自も分ち得ざる涙にうるむ心を抱いてゐた。生來物に感じ易く涙脆かつた彼は、物の哀れを知ると云ふのであらう、解き難き鬱憂に身を任せては、しづこゝろなく散る花にも、かりそめの雲の往來にも誘はるゝものがあつた。が、咲く花よりも散る花は哀れ深く、かゞやかしい朝の日の光よりも淡く消え行く黄昏のうすら明りを、いとせめて果敢なくなつかしいものに思ふ心より、榮ゆる人よりも

哀れに零落れた人の身の上に、我が身親しく思ふのであつた。彼は何時しか功名と富貴を追ひ求むる念を失つて、只管に自己が好みに適ふ藝術に熱情を捧ぐる少年の一人となつてゐた。自然のなりゆきとして中學校で授ける課業は、彼に取つては餘りに興味のない無意味なものとしか思はれなくなつた。其の結果は忽ち成績に現はれて落第したが、落第の後には更にみじめな日が續いて來た。

以前から、俊雄の父は其の子の性狀の推移をあきたらず思つてゐたが、兎に角學校の出來も相應だつたので、強ひてこれを矯めようとはしなかつたけれども、たつた一人の男の子として自分が築き上げた家を繼がせねばならぬ俊雄を、今は打棄つて見てゐる事は出來なかつた。我が子の好む藝術か、先づ第一に我が子の身の毒である事を、いちはやく父母は感じたのである。而して忿怒と心配に震へつゝ、父は其の子の此頃の行狀を責め誡むる事に苦心したが、嚴しい掟と抑壓とが如何に俊雄の心の上に働いたかは覗ひ知る事が出來なかつた。

俊雄はいくら父母に云ひ聞かされても自己を悔る心にはなれなかつた。けれども亦自分の欲する處に進む爲めには、飽迄も兩親に抵抗ふ事を辭さない程の氣強さを持つてゐなかつた。彼は父母の目前では素直に云ふ事を聞いて頭を下げても、生れながらの自分に叛く事は如何しても出來

なかつた。然う云ふ狀態(ありさま)に在る事をつくづく腑甲斐なく思ふにつけ、儘ならぬ自己(おのれ)の遣瀬なさに、又しても鬱憂はヒシヒシと身に迫る。かゝる時自己を悲しみ他人(ひと)を哀れむ心弱さに、喰ひ入るものは慰め難き寂寥であつた。

恁うした心持ちにゐる俊雄にとつて、美知代の哀れな境遇は深き同情(おもひやり)を誘ふものであつた。始めのうちこそ彼は美知代に對して出來得る丈親切に、優しくし度いと思ひながら、それを行爲(おこなひ)に現はす事は流石に憚かられたのであるが、次第に距てが無くなるに從つて、美知代よりも年齡下(としした)の、妹の冬子にも云ひ聞かせて、寄人(かゝりうど)の孤兒(みなしご)をいたはるのであつた。

美知代は兄妹が學校へ行つてる間は、叔母の手助けに針仕事もすれば、女中達に混つて臺所の水仕業(みづしわざ)も爲(し)た。午後からは冬子と机を並べて、讀み書きを一生懸命にはげんだ。

一年、二年と月日のたつ中には、若き人々の心の中にも種々(さまざま)の變化があつた。喜びも悲しみも、それは多くは淡く果敢ないものであつたが、又後の日も忘れられない思ひ出の、深く根ざせるものもあつた。

俊雄が再度目(にどめ)の落第に、烈しい父の忿怒(いかり)に觸れて、彼がひそかに所有して、夜も日もわかちなく愛誦した文學書の全部(すべて)を、父の面前で燒き捨てねばならなかつた恨めしい日もあつた。

乍併、今日の俊雄にとつて最も忘れ得ぬ事件と云へばそれは美知代に關はつて居た。二室續の二階の、一室には俊雄が机を据ゑ、一室には冬子と美知代が居た。毎日々々朝に夜に、俊雄の眼に近き美知代はしほらしくのみ映つた。都の風の染むに連れ、お國訛の拔けるに從つて、美しくなつて行く女の姿をひそかに見るにつけて、彼は常に好んで讀んだ小說の夢のやうな物語りを其處に想ひ浮べては、其の中に自分をも結び付けて心嬉しく思つたが、かゝる果敢ない慰めはやがて又うら寂しさを增すのであつた。

それは不幸な身の上から切つて放す事の出來ないものではあつたが、美知代はフトした事にも時によると、腹の立つ程オドオドした。俊雄はそれが氣になつてしかたがなかつたが、考へて見れば心細い孤兒の身をいとゞ哀れむべき種となつた。複雜つた世の中に未だ觸れない、夢多き少年と、幼い時から親に別れて辛い事のみに遭遇つた賴り處の無い少女とは、どんな幻を胸中に描いたであらう。

けれども美知代が十八の秋、以前から俊雄の家に出入りした、今の美知代の夫大竹に懇望されて叔父叔母のすゝめるまゝ、孤兒は淚をかくして、見も知らぬ九州の石炭坑に連れて行かれねばならなかつた。

何時か以前のなつかしい、うちしめつた心持にひたりつゝ、俊雄はそれからそれと追想して居たが、又或る停車場から炭坑夫らしい三人連れの男が乘つて、高聲でしやべり出したので、始めて現在の自分に歸つた。「それが如何したんだ、悉皆過ぎ去つた事ぢやァないか」と心の中でつぶやくものがあつた。

夏の日は漸く高く登つて、生溫い風に吹き込む煤煙は、車室の內を轉廻つてゐる。三人連れは面白さうに笑ひながら話してゐる。

「……何時迄續きやァがるんだ。この不景氣つたらありやァしねえぜ。」

「眞實によ。南京米のお粥ぢやァ、爆發藥の音が腹に響へて耐らねえや。」

荒つぽい調子で吐き出すやうに云つた奴が、フト此方へ向けた顏が大竹に似てゐるやうに思へた。そのうちに、坑夫達はしやべりあきたと見えて、丸太のやうに身を倒すと、三人とも腰掛の上に眠つてしまつた。

漸の思ひで汽車は○○驛へ着いた。次第に速力を緩めて停車場の構內に這入つて行くのが、いかにも力の拔けたやうな感じを與へた。俊雄が下車する時も、三人連れは鼾をかいて寢込んでゐた。

「××炭坑には如何行くんですか。」

と俊雄は自分が下車ると直ぐ、笛を鳴らして出て行つた汽車の後影を見送つて居る驛夫に尋ねた。「此の山の陰です、かう彼處にうすく煙が見えませう、あれが炭坑の煙ですよ。」

と眞蒼な山際から雲もない青空に、一條流れて居る煙を遠く指さした。

キラギラと溢れた油の光つてゐる線路は何處迄もとうねつてゐる。それをまたいで停車場の構外に出た時、俊雄は再び疲れた自分を強く意識した。然うして強烈な夏の日にグツタリとして動かない木と草との他には人一人見えない、四圍の中に、自分と云ふ人間がいかにも哀れにみすぼらしく思はれて、其の儘其處に意氣地なく、打倒れてしまひ度い氣がしたが、強ひて肩を聳やかして、最う一度目眩めくやうな空に立登る炭坑の煙を振仰ぐと、山裾をうねうねと次第上りに登つて行く塵埃の多い一條路に、スタスタと足を進めた。

ダラダラ坂は思ひの他に長かつた。歩き出すと間もなく目的にした煙は目近い岡の背にかくれて見えなくなつた。路は一條だつたから迷ふ恐れは無かつたが、其處に美知代が居るのだとなつかしく眺めて、愈々自分もその身近に久し振りで來たのを心嬉しく思つた煙を見失ふと、又更に遠く距てられた氣がするのであつた。家も無い、人も通らない路を行きつゝ、何しに此處へ來た

のかを疑ふ念が起つてから俊雄の足は全く鈍つた。暫時の間、努めてたどつたが遂に路傍の草土手の日影を求めて、其處に身を投げた。而して投げ出した靴の尖端からヅボンの膝へかけて、高ゝ浴びた塵埃を沁々見た。

彼は指を折つて數へて見た。一年、二年、三年、別れてからもう三年になる。其の間に美知代は母になつた。變な頭巾をかぶせた赤坊を抱いた美知代が椅子に掛けてゐる傍に、頑丈な體格の大竹が寄添つて立つてゐる田舍出來の寫眞を送つて來た時、俊雄は女を哀れむ念と、誰と云ふあても無く――美知代も、大竹も、自分自身をも――冷笑してやり度い心持で見た。その頃の事を又暫時思ひ耽つた。

「美知代は母になつた」と俊雄は繰返して想つた。その人の妻たり母たる女に逢ひに行く自分を、強烈な夏の色彩の中に明瞭と認識て、彼は或る冒險の門出にあるやうな緊張た氣になつた。

彼は又塵埃をあげて坂道を登つて行つた。而して岡の尖端を四つ五つ迂廻ると、突然眼の前に山中の一部落が展開された。其の家々の屋根を越えて向ふに、一段大きな建築物の見えるあたりに、幾本となく煙突が林立して盛んに濁つた煙を吐き、それが空中で一團にもつれて居るのが、先刻山の下の停車場で見た一條の煙を成すのだと俊雄は思ひつゝ、漸く志した場所に來た喜びに、

落着いた心持で靜かに部落の中に這入つて行つた。

一條の路はなほ眼の前に長く横たはつてゐて、それを差挾んで粗末な長屋が兩側に並んでゐる。淺ましいやうな家の中は、うら手の切開いた赤土の山の腹迄あからさまに見透されて、裸形の女や子供が異様に見えた。彼は全く別種の世界に身を入れたやうな氣がして、炭坑には見馴れないらしい自分の姿に對して、一種の羞恥さを覺えた。實際、家の内から馳け出して來て見送る者もあつたし、暗い戸口から顔ばかり出して覗く者もあつた。それが皆たとへやうもない厭な顔色をして、灰色に光る眼で見詰るので、俊雄は不知不識早足になつたが、それでも此の狹い部落の中に、小料理屋の數の多い事は氣が付いた。多くは二階建築の家の軒に、赤い色の目立つ提灯を掲げて、入口に近い酒の瓶を置き並べた室に若い女が自墮落な風をしてゐるのであつた。そんな女も大概は腰卷一つの裸體で寢そべつたりしてゐた。ポツンポツンと何處からか倦怠い三味線の音か聞えて來た。

長屋つゞきの部落は、炭坑會社の事務所を突當りにして終つた。俊雄は事務所に這入つて行つて、大竹の家の所在を聞かうかとも思つたが、さうすると大竹が出て來てうるさいだらうと考へ直して門前で引返した。然うして折よく通り合せた會社の小使らしい青服の男に尋ねた。

「會社の役宅は何方にあるんですか。」
「役宅は澤山ありますが何人をお尋ねです。」
「大竹と云ふ家なんですが。」
「ア、大竹さんですか、そんなら此の山のうら手です。」
と其の男は近い岡を指示しながら、俊雄の頭から足の尖迄珍らしさうに眺めた。
廣く取圍んだ會社の黑塀について進んで行くと、教へられた通り、岡の中腹に一廓の家々の並んでゐるのが直ぐ見えた。彼は又其處へと導く細い道を登つて行つた。何の通知も無しに突然訪れる自分を美知代は如何に迎へるだらうか。俊雄は胸中に種々の取りとめも無い推想を廻らしたが、フト遠くから來た自分を見て、美知代は心の古傷に痛みを感じるに違ひないと思ひ當てた時、湧き立つて來る殘忍な快感を禁じ得なかつた。さうして大竹が會社へ出て居る留守を覘つて忍んでゞも行くやうな、心とがめのする面白さを感じて來た。
間もなく彼は役宅の一かたまりの中に、其の家を求め得た。「大竹」と肉太に書いた表札の出てゐる格子に手を掛けた時、俊雄の心は意氣地なく亂れてゐた。
チリンチリンと靜な書中の岡の腹に鈴の音が響いたと思ふと、訪ふ迄も無く障子をあけたのは

美知代だつた。

「マア俊雄さんですか。」

と言ひながらホンノリと顔を染めて、暫時は物を云ふ事も忘れて美知代は仰ぎ見る、その眉に寄る憂皺を俊雄はなつかしく思つた。

「驚いたでせう。僕も不意に寄つて見度くなつて、實は友達と一緒に長崎の方に行くつもりなんだけれど、一行に別れて一寸お邪魔に上つたんです。」

以前のやうに親しい口が利けないで、言葉も妙に改まらうとするのを、自分ながら物足りなく感じた。

「あんまりおもひがけなかつたものですから、私夢かと思つて。」

美知代はヤツト氣がついたやうに

「どうぞお上り下さい。」

と云つて立上つた。

座敷からは、此山より低い岡の線が遠くへ脈を打つて延びてゐるのが見渡され、眼の下には會社を圍む部落の板屋根が、チカチカ照り返す。貯炭場らしい眞黒な廣場に、虫のやうにトロツコ

や人がうごめいてゐる。見る限りが暑い八月であつた。

美知代は茶と團扇とを運んで來て、又改めて叮嚀に挨拶した。

「ほんとに久濶(しばらく)でしたのねえ。東京では皆様お變りも御座いませんか。」

「難有(ありがた)う一同(みんな)達者です。」

「それから昨年は冬子さんがお嫁(かたづ)きになりまして御目出度う存じます。隨分お變りになりましたでせうねえ。」

いかにもなつかしさうに美知代が知る人の上をうら問ふのを、俊雄は自分が想ひ設けた事にうら切られるやうな不滿を以て聞きつゝ、三年の間にひどく大人(おとな)びた女の、元から小柄だつたのか又もやつれた姿をば、流石に哀れと思つて見た。

「あの冬ちやんがもう奥様におなりなんですもの、俊雄さんがお變りになつたのも無理はありませんのねえ。」

美知代はつくづくと相手を眺めて云つた。

「そんなに僕も變りましたかねえ、然うかもしれないな、美知代さんだつて變つたもの。」

美知代は默つてうなづいたが、少し曇つてうつむいた。色の褪(あせ)た浴衣の胸の骨立つてうすいの

に、暗い影をつくる下向きの顔の、睫毛の長い眼ばかりが昔のまゝである他は、途すがら描いて來た女とは別の人であると俊雄は思つた。彼は通りいつぺんの親類の客として通りいつぺんの噂話をしてゐる心持には耐へられなかつた。如何かして以前の情緒を相手の胸にも蘇生せ度いと思つた。

「あれからもう三年になるんですねえ、早いものだなア。」

獨言めかして云つて見た。その三年以前を思ひ出させようとしたのであつた。

「早いと云へば早いものですねえ。けれどもお久振りですわ、ゆつくり泊つてゐらつしやつて下さいな。大竹も歸りましたらさぞ喜びますでせう。」

俊雄は大竹の名を美知代の口から聞かされた時、「此處は大竹の家だつたつけ」と今更らしく思ひ出して、折角骨折つて引出さうとした追憶も接穗なく途絶えてしまつた。

「私、忘れて居りましたけれど未だ午飯前でせう。」

「イヽエ汽車の中でお辨當を喰べて來た。もう二時か三時頃でせう。彼處の停車場から人力車でもある事と思つてゐたんだが、それも無いし思ひのほか遠いんで驚いちやつた。」

彼は朝も正午も氣持が惡くて何も喰べなかつたので、實は空腹を感じてゐたけれども、時刻も

過ぎたし世話をかけるのも厭だから故意と斷つた。二人は何を話しようか、適當な言葉を求めて得ないやうな座白けに苦しみつゝ向きあつてゐた。久しく忘れて居た種々な感情のもつれつゝ湧き起るのをひそかに止めかねてもゐた。

「ほんとに久濶でしたのねえ。」

美知代は沈默の壓迫に耐へられなくなつて同じ事を繰返へした、然うして又默してしまつた。

不意に次の室で火のつくやうに子供が泣き出した。美知代は狼狽てしきりの唐紙をあけて飛んで行つた。幌蚊帳をどけて、その中の床の上に起きかへつて泣きわめいてゐる子供を、膝に抱いてすかしてゐる後姿を俊雄は見て居た。

「怖いよう。」

と子供は泣きながら叫んで母の懷にすがつた。

「如何したの、夢でも見たのかい。そんなに泣くものぢやありません。芳ちやんはいゝ子ねえ。」

と云ふ時ヒシと頰擦りしたのを彼は泣き度いやうな氣持で眺めた。

「もう宜いもうい丶。芳ちやんの知らない東京の小父さんがゐらつしやつたのよ、そんなに泣くと小父さんが可笑つて。」

母親はすべてを忘れて子供をだましてゐたが、次第に泣き止んで今はすゝりあげるばかりになつたので、そのまゝ抱き上げて座敷を見かへると、俊雄がヂツト見守つてゐたので寂しく笑つた。

「ヘイこれが莠子で御座います。」

と美知代が坐りながらすがりついてゐる手を無理に放して差向けると、子供は涙の玉が未だ流れてゐる顔を上げて客を見た。「平べつたく四角張つた親父似の下卑た顔だな」と思つた時、何と思つたか俊雄を見た子供は、又してもワツト泣き出した。

「如何したんですねえ、東京の小父さんぢやアありませんか。」

母親は困つた様子で叱るやうに云つたが泣き止まぬ。

「人相が悪いもんだから驚いたんでせう。」

と詮方なく愛想を云つたが、ひどく侮蔑されたやうに感じて子供が面憎くかつた。

「如何したんでせう、困つた子ですねえ、一寸失禮しますよ。」

美知代はとりなしかねて座を立つて、次の室(ま)へ入(はい)ると距ての襖を閉めた。

俊雄はひどく自分の身體(からだ)に空虚を感じて、呆然(ぼんやり)と縁の外の西日の當る山の景色に眼をやつたが、それも眩(まぶし)くて耐へられないので、室(へや)の中に身を横たへた。暫時(しばらく)さうして居る中に、彼はフト旅へ

出る前に、馴染みの藝者が旅行の行く先き先きから必ず消息(たより)をしてくれと云つたのを思ひ出した。承知したと約束して置きながら、どうせ相手が相手だと思つて、名古屋からも京都からも音沙汰はしなかつたが、彼奴(あいつ)に葉書でも出してやらうと、いたづらな氣になつて、懷中(かくし)から葉書を取出して、先づ髯むぢやの坑夫がシャベルをかついでゐる繪を描いた。その上に

　炭坑見物の爲め山の中に參り候眞黑な石炭を喰つたやうな野郎ばかりにて別嬪さんにはお目にかゝれぬ土地にて候

と書いて又懷にしまつたが、思はずも不快(いや)な苦笑ひが浮んで來た。

　彼は昨夜の寢足りなさに、勝手の方でカタコトと美知代の立働く氣配のするのを、ウツラウツラしながら聞いてゐた。何(なん)にも見ず、何にも考へない疲れた肉體は誰の所有に屬してゐるのか解らなくなつてしまつた。眠つたのか眠らなかつたのかそれさへも解らなかつたが、俊雄は現(うつ)に衣(きぬ)ずれの音を聞いてうつすりと眼をあけると、身に近々と美知代の坐つてゐるのが幻のやうに認められた。しかし女のする樣(さま)を知り度い好奇心が又眼を閉ぢさせた。殆んど同時に彼の頸(うなじ)は柔かな女の手に卷かれたがそれは枕をさせてくれたのであつた。美知代は少し離れたのであらう、かすかに團扇の風を送つて來たが間も無く又勝手の方に立去つた。俊雄はひそかに待つてゐた事件(こと)を

殘りなく破壞れたやうにがつかりして、身の廻りを見ると其處に浴衣と兵兒帶が置いてあつた。

其の中に大竹も會社から歸つて來た。玄關に出迎へた美知代が何か云つてゐる。

「……眠てゐるのか。それぢやア一寸汗を流してからにしよう。」

と急に大きな聲が隣室でした。

手狹い家の事だから湯殿で流す湯の音が、はつきりと聞えたが、それが止んだと思ふと大竹のドシドシと力強く縁を踏んで來るのにつり込まれて、俊雄は思はず起き上つた。

「ヤア、久濶でしたなア、よく來ましたね。君が來られようとは意外でした。何ですか、矢張り炭坑見物ですか。」

「エヽ、友達と關西から九州へかけて旅に出たんですが、炭坑も見度いと思つたもんですから。」

「そりやアいゝですねえ。九州は暑いけれど炭坑の中は夏知らずだ。まあ、ゆつくり見物して行つて下さい。」

大竹は俊雄の家に書生してゐた頃と、少許も變らない高聲で愉快さうに語つた。

「僕はお先きに失敬しましたが、行水を使ひませんか。汽車の中は暑かつたでせうから、汗を流して、さつぱりしたところで、面白いお話でも伺ひませう。」

と云はれるまゝに俊雄は行水して浴衣に着換へたが、大男の大竹に合せてこしらへたものであるから手にも足にも丈が餘つた。

山々の陰は暗くなつて、家の内にも夕風がスイスイと通ひ初めた。縁先から見下す下の道路を會社の門から吐き出された坑夫の群がうごめいて行くのを見てゐる間に、美知代は座敷に食臺を出して、手料理の皿を並べた。

「サア一つ差上げませう。」

と大竹は盃を差して手づから酌をした。美知代は座敷と勝手とを一人で往復しなければならなかつた。

「どうも下女に逃げられたので困つちまふ。ナアニ坑夫と突走つたんです。」

大竹は炭坑の話をしながら、うまさうにグイグイと盃を干した。美知代も芳子を抱いて傍に來て酌をした。

「俊雄さんは召上らないだらうと思つて居たら、お強いんですねえ。」

「そりやア少しは飲みますが、別段好きと云ふのでも無いのです。」

「その方が結構ですよ、餘り上ると叔母さんが御心配なさいますわ。」

美知代の聲に情が籠つて親身になつて意見するやうに思はれて、此頃酒びたしになつてゐた俊雄は身に沁みて聞いた。

「叔母さんよりも自分が澤山飮まれると心配なんだらう。これでなか〳〵所帶持ちはいゝんだからね。」

二三本で眞赤になつた大竹は上機嫌で益々聲が高くなる。

「サア芳子は父さんに來い。」

と云ひながら美知代の手から拔き取るやうに抱きあげて膝に置いた。

「どうです、親父になると意氣地がなくなりますよ。こら、この小父さんは東京からいらつしやつたんだ。御挨拶をしないか。」

「もう先刻濟みました。僕を見るとワツト泣き出したには閉口しました。」

「ハヽヽヽ、弱虫だな、芳子は弱虫か。」

と醉に崩れた顏をして、臺の物をあれこれと子供の口に入れてやつてゐたが、しまひには盃をさへしやぶらせた。

「貴方、そんな事をなさつて、いけませんよ。」

美知代はあわてゝ子供を取戻さうとする。

「ナアニかまふもんか、それうまからう。」苦い顏しながらピチャ／＼なめとる。」

「およしなさいつたら。」

一寸強くたしなめて母親は奪ひ取つた。俊雄は此の家庭(いへ)の內(なか)に居る自分をなさけなく思ひながら手酌で飮んで居た。

「どうです近頃は文學志望は捨てましたか。大學も法科に這入つたさうですね。それでお父樣も安心なさつたでせう。實際文學ぢや飯は喰へんのだからな。――何時だつたか僕がお父樣の命を受けて君を說得する役廻りをつとめた事があつたが、あの時は實に困つた。飯の問題ぢやアない、生命(いのち)の問題だつて、君が云つたのを覺えてゐますか。」

盃を置いて飯にした後で大竹は手をフラフラさせながら古い事を云ひ出した。

「その後の事でせう、美知代から聞いた話ですが、お庭で君が書物(ほん)をすつかり燒捨てたつて云ふのは。」

「あの時は如何(どう)なるのかと思つて、ほんとに怖う御座いました。」

美知代の聲は、今そのかみの事を思はせられてゐた俊雄の心に醉を與へた。

「そんな事もありましたねえ。あれは二度目の落第の時だつた、親父が非道く怒つて罪を文學に歸したんです。是が非でも構はん、ありつたけ庭に積んで灰にしろ、つて云ふから此方もヤケになつて云はれるまゝに燒いたんだが、何しろ大事の本なんだから、いよ〳〵燐寸を擦つて火をつけた時は涙が一杯あふれて來ました。赤い炎や紫の炎がチロチロと舌を出したと思ふと、一度にボウツト燃え上つた。親父も母も反つて心配になつて縁先きへ出て見守つてゐる中で、煙にむせながら殘り無く灰にして、物も云はずに二階に馳け上ると、先刻から見てゐたんだらう、美知代さんと今子が抱きあつて泣いてゐましたつけねえ。」

俊雄は自分の聲で自分の以前を物語りつゝ涙組まれて來た。其の頃の自己に距てなく親しかつた美知代は、もう今日の自分に取つては現在の關係を持つてゐない、たゞ心の中に時折蘇生る過去の關係に在るに過ぎないのだと思つた。それから其の後の日の、ふてくされた寂しい自分の姿を繪のやうに想ひ浮べて惆然としたが、氣が付いて見ると話の中に肱枕して横になつて聽いてゐた大竹は、何時の間にかグツスリ寢込んでゐた。けれども美知代は、これも母の懷に眠つた芳子を抱きながら、息もしずに聽いてゐたが言葉の切目に見上げた眼には明かに露を宿してゐるのを俊雄は見逃さなかつた。而して又言葉をつゞけた。

「それから自分の部屋に這入ると、襖を立て切つて机の上に突伏したまゝ御飯も喰べずに夜迄泣いてしまつた。」

彼は云ふ迄もない事だ、美知代も忘れはしないだらうと思つて口をつぐんだ。其の夜は、朧に霞んだ春の月のうすら蒼い光の漲つた庭にうづ高く盛上つた愛誦の書のなきがらが白く見えてゐる上に、櫻の花が散りかゝつた。二階の窓の障子をあけて、俊雄は泣きはらした眼で見たのであつたが、忘れる事の出來ない痛手を胸に殘した。又しても流れて止まない涙をかくして、疊の上に倒れ臥してゐると美知代が心配して忍んで來たのだつた。假睡をしてゐるとでも思つたのか、ソツト寄添つて搖り起さうと肩に置く手を俊雄は執つて放さなかつた。

「あの時は涙に濡れて美知代の顏も見えなかつたつけ」と俊雄は心の中で思ひつゝ現在の自己に向き合つてゐる女を見ると、あかりにそむいた頬のあたりがゲツソリとやつれて見えたので、自分をも美知代をも引くるめてすべて哀れに寂しく思つた。

二人は長く押默つて更けて行く夜を感じてゐた。俊雄はどうかしてもつと突込んで昔を思ひ出させるやうな言葉を女の胸に傳へたかつた。而して女の口からも、自分に對して一度でも抱いた感情を今の姿で云つて貰ひ度かつた。其の時こそ悲戀のいたましさの中に、何物よりも強い滿足

を覺えるだらうと思つたから。

俊雄は心の寂寥(さびしさ)に耐へられなくなつて、德利の底に殘つた酒を振つて見て、茶碗に酌いで、冷(つめ)たいやつをグツト仰いだ。

「俊雄さん。毒ですよ。」

と、美知代は何故か聲をひそませて云つたが、少しの物の音が耳に入つたのか、大竹は眼を覺した。

「ア、ア、何時の間にか眠(ね)てしまつた。」

と大きなあくびをして起上ると、床の間に置いてあつた俊雄の時計をあけて見て

「もう遲い寢よう寢よう。君も疲れてゐるでせうから、早く寢て明日(あした)は炭坑見物の案內をしませう。」

と云ふかと思ふと、いきなり食臺を兩手で持上げてヅシンヅシンと勝手へ運んで行つた。

「ぢやアお休みにしませうか。」

と美知代も立上つて子供を次の室(ま)に寢かしに行つた。

床は美知代が敷いて與れた。雨戶は大竹が家中のを閉めて廻つた。

俊雄は蚊帳の中に這入つて横になつたが、身體は疲れてゐながら妙に頭腦が冴えて眠られなかつた。それに閉め切ると暑苦しいので幾度と無く寢返りを打つたが、隣室の物の音に耳を澄まさうとする心も強く在つた。

嘗て東京の自分の家の二階に、襖一重距てたのみで美知代は幾年の夜を眠つて居た。「美知代が隣室に寢て居る」と云ふ事が何時しか彼の頭腦に苦しく觸れて來るやうになつてから、俊雄は枕に顔を押當て眠られぬ夜を悶えて更かす事が多くなつた。

「あれは春の夜の事だつた」と彼は又思ひ出づる事があつた。蒸されるやうな夜半の床に目覺めた俊雄は、珍らしく厠に起きて、間の襖をなるべく音のしないやうにあけると、うす青い布で包んだ電燈に照らされた美知代の姿が目の前にあつた。つゝましく足には輕い夜着を掛けてゐたが、身内の熱に耐へられずして、床の外の冷い疊の上に投げ出した腕にも、はだけた寢衣の胸をこぼれて露な乳房にも、青い燈光の流れてゐるのを怖しく見て過ぎた。その夜の事が心に殘つて、俊雄は厠に通ふのを目的のやうに思つてゐた。その美知代が今は隣室に人妻として、夫と共に眠つてゐるのだ。彼は長い間マジマジと闇にうごめく自分を感じてゐたが、遂に晝間の疲勞の底に陷つて行くのであつた。

翌日。

「俊雄君、もう起きてもいゝですよ。」

と大竹は朝日のさし込む縁に立つて彼を呼びさました。芳子ももう起きてゐて、ヨチヨチ室の内を歩いてゐた。

「サア起きた、起きた。炭坑見物を忘れちやアいけませんぞ。」

と云ひながらドンドン蚊帳をはづし初めたので、俊雄も詮方なく床を放れた。顔を洗つて座敷にかへると、直ぐ飯になつた。

「ウント喰うて置かんと地極で腹が減りますよ。」

自分からテンコ盛りにしたやつを幾杯もかへた後で、

「それぢやア支度して出掛けませうか。」

と大竹は泥まみれになつてる仕事着を着て脚絆で足を緊めた。

「君もこれを穿くんだ。」

と投げて呉れた脚絆も泥足袋も少しダブダブしたが、俊雄も草鞋を穿いて大竹の後に随つた。

「行つていらつしやい。」

と玄關に手をついた美知代に見送られて格子の外に出たが、「炭坑なんか見度くもない」と彼の心は進まなかつた。それでも大またに坂を下りて行く大竹に遲れじと炭坑會社の門を潛つた。

「こいつをブラ提げて行くんです。」

と事務所に這入つて行つた大竹は、安全燈を二つ持つて出て來て、俊雄に一つ提げさせた。

暗い坑口に一足踏み入れた時、底知れぬ闇から吹いて來る石のやうな感觸の風が、俊雄の地底に對する恐怖を鋭く刺した。その暗闇の何處迄續いて居るのか、四條の鐵索が二條はあかるい坑外の地上に、二條は暗い坑內の地底へと、ゆるいゆるい速度を以て絕えず動いて行く。

「これは無終線。」

と大竹は說明もしないで云つたが、其の聲は坑の內の濕つた空氣にいやにボヤケて響き渡つた。

暗に馴れない眼には、安全燈の鈍い光が照らすばかりでは足場が定まらないので、一步下る度に思ひの外深く落ちて行くやうな恐怖を伴つた。次第に低くなる天井にコツンと頭を打つけたのも二度三度ではなかつた。そればかりか足元に轉がしてある丸太や土塊にも氣を配らねばならなかつた。

大竹は大きな身體をかゞめながら、馴れた足取りでズンズン進んで行つては、時々思ひ出したやうに、

「如何です、大丈夫かね。」

と振向いて云ひながら、少し離れた間隔(へだたり)を近くする爲めに立止つて、遅れ勝ちの俊雄を待つので、彼は一層氣をあせらして隨いて行かうとするのであつたが、つい物につまづいて前のめりに倒れてしまつた。ハツト思つて全身に冷い震への傳はつた時、俊雄の身體はヅルヅルと、眞暗などん底に向つて落ちて行くかと思つた。彼は下(くだ)りゆく無終線(エンドレスライン)の上に倒れてゐたのである。

「如何した如何した。怪我はしなかつたですか。」

と大竹が駈け戻つて來たので、俊雄は起きあがつたが立上る時膝頭にヒリヒリと痛みを感じた。それでも、

「大丈夫です。」

と勢ひよく云つて轉ぶ拍子に放り出した安全燈を拾ふと又坑道を下り始めた。

「危いぞ、端の方にくつついて、くつついて。」

と大竹が叫びながら手を取つて、壁に身を押つけるやうにした時、突然すさまじい音を立てゝ

眞黑な塊物がゴーッと過ぎた。後からも後からも烈しい耳鳴りをさせて過ぎた。
「無終線で掘出した石炭を地上に送るのです。」
と大竹は說明して、
「ツイ四五日前だつたが、彼車を避け損なつて吾々の同僚が一人やられました。」
と云つた。さうして又大またに暗い横道へと曲つて行つた。
俊雄は全く慄然とした。若しも今、自分が倒れた時に石炭運搬車が走つて來たら同じく此處に死なゝければならなかつた。轢死したのはどんな人か知らないが、その友達の大竹さへ平氣な顏をして、昨日の噂として語つてゐるのではないか。彼は暗闇にも蒼くなつた自分の顏を見る事が出來た。おまけに膝頭に受けた傷は、歩く度にヅキンヅキンと堪へるので、こんな坑の中に來なければよかつたと悔む心が強くなると、美知代戀しい想ひが烈しく燃えて來た。
大竹が說明する石炭の話も彼の耳には止らなかつた。坑內の恐ろしい光景をも夢のやうに見て過ぎた。カチリカチリと鶴嘴が岩を崩す音にまじつて、「ヨイコラセツセ、ヨイコラセツセ」と贅して土を運ぶ聲が聞えたと思ふと、直ぐ鼻先きにどんよりした燈光に照し出された男女の裸形の群があつた。石炭の巖の中に鐵棒を打込んで崩して居る者もゐた。崩された石炭を車に積んで押

しながら闇へ消えて行く女もゐた。それか皆、力業をする者に似ず、肉の無い骨立つた身體で、生きた色も無い顔に人を見る時、白く光る眼ばかりが大きかつた。彼は不快な心持でその場を足早に通り過ぎた。今、心を支配してゐるものは美知代の他には無かつたのである。

深く深く坑の底に落ちてゆくと、何處からともたく湧き出す雫が、ポタリポタリと陰氣な響を四方の壁に谺させて落ちてゐた。休みない身體の運動に内から流れ出ようとする汗を、外界の濕つぽい空氣が消して了ふ心地の惡さに、俊雄は清い感情に總て別れた感じがした。大竹を憎む念が強い底力をもつて目も眩むやうに頭に上つて來た。自分は炭坑を見物に來たのではなく、美知代に逢ひに來たのではないか。それだのに此の暗闇の坑の中を、傷ついた足を引擦つて仇敵の後に随いて行く、何たる意氣地の無い、みすぼらしい姿であらう。俊雄は繰返へして恁う思ひつゝ威勢よく眼の前を歩いて行く大竹の、偉大な體格を憎んだ。自分の意思で歩いてゐるのでは無くて、大竹の腕力に引擦られてゐるのだとさへ感じて來た。

恐ろしい考想はねばり強い誘惑を以て空想を誇大にした。「若しも今、坑内に變事が起つて大竹か死んだら如何だらう」と胸につぶやくものがあつた。彼は其のいまはしい期待心を打消さうと打消さうと努めたが、又誘はるゝまゝに誘はるゝ心をほしいまゝに走らせるのも、そゞろに面白

い事に思つた。無終線の上を走る運搬車がゴーッと、傍を過ぎて行く度に、俊雄は大竹を突飛ばしてやり度い誘惑に抗ふ自分をもてあつかつた。

「一層自分も一緒に死んで了へ」と又も心でつぶやいた。自分と大竹と二人つきりしかゐない地の底に、人目にも觸れないで生命を捨てる、氷のやうな死の快感に暫時彼は引かれて行つたが、何にも知らない――恐らくは嘗て自分と美知代との感情が、たとへ一時なりとも、ピツタリと接觸いて燃えて放れなかつた事さへ知らない――大竹は、馬鹿げた氣の毒な男だと寧哀れに思ひ初めた。

俊雄は頭腦が痛んで來た。四方に走る種々の念をまとめる事も出來なかつたし、自己を憎み他人を憎み、自己を哀れみ他人を哀れむ、こんがらかつた感情のもつれを、ほごす事も出來なくて、たゞ滅茶滅茶にかきむしられる苦しさを忍び切れなくなつたのだ。彼はいきなり道傍の丸太の上に腰を下してしまつた。

「如何かしたのですか。」

と大竹の氣づかはしさうに寄つて來るのを、彼は手で拂つた。

「少し此のまゝにして置いて下さい。如何もなんだか頭が痛くなつた。」

「そりやアいかん。少し休んでから、近道を取つて歸りませう。」
「否、うつちやつといて下さい。」
と俊雄は又寄添ふ大竹を向ふに押やつたが、それが如何にも男らしい痛快な復讐をしたやうな氣持がした。少し熱氣のあるらしい頭に冷い汗の浮んでゐるのを洋服の袖でグイと拭いたが、骨身に沁み入る土の底の冷氣に惡寒を覺え、膝頭の擦傷も風が沁みて痛むのでソツト手をあてゝ探ると、ヅボンが破れてゐて、その間から觸つて見ると、ヌラヌラと血ぬめりのした傷口が意外に大きく思はれた。
「如何です、氣分が惡ければソロソロ出ようぢやありませんか。」
と云つて俊雄が默つて立上るのを見ると大竹は安心したらしかつた。
「僕の肩につかまりませんか。」
「イヽエ大丈夫です。」
俊雄は云ひながら強ひて力のある足取りで大竹と並んで歩き出した。
暫時、無言で暗がりの坂道を登つた後、二人は坑の口から、燃えつくやうな日輪のギラギラと眼を射して輝き渡る光りの中に吐出された。闇から這ひ上つて來た者の眼は、それを仰ぎ見る事

も出來ないで、俊雄は額に手をかざしてうつむいたまゝ動かなかつた。乍併、彼は青空と山と家と人と土とに、漲り流れた日光の下に在る自分を認識た時、心の底からホツト息付いた。

「未だ頭痛がしますか、どうも惡かつたですな。」

と自分の責任らしく心を煩はして居る大竹に、俊雄は一刻も早く別れ度かつた。

「もういゝやうです。坑外に出たら氣分もさつぱりしました。僕は一人で歸れるから、君はお勤務をして下さい。」

「でも膝を怪我したのではないですか。そんなに洋服が破れて居ますよ。」

「否、ヅボン丈です、怪我はしなかつた。」

と云つて彼は送つて歸らうとする大竹と無理に別れて、一人會社の門を出た。

役宅への通路を俊雄は重い足を引いて登つた。ヂリヂリと身を焦す暑氣に滲み出る汗も、自己を責めるやうに思はれて、格子の鈴は今日も亦鋭く耳の奥に響いた。

「お歸りなさいまし。大變お早かつたぢやありませんか。」

出迎へた美知代は、草鞋脚絆を解いて上つた俊雄を見て驚いた。

「アラ、如何か爲さいましたの。ヅボンがそんなに破れてゐますわ、それに顏色もお惡いぢやあ

りませんか、――お怪我でも爲さつたんですか。」

「イヽエ一寸坑内で轉んだばかりですよ。」

と何氣なく云つて座敷へ通ると、美知代はまつはりつく芳子を袖にして、何かと世話を燒くのである。さうして俊雄がすゝめられるまゝに浴衣に着換へてゐるのを見てゐたが、

「俊雄さん、血が出てゐるぢやありませんか、お見せなさい。」

云ひながら着物の裾をめくつて、

「マアこんなに怪我してゐらつしやるのに。」

といたいたしさうに眉をひそめたが、立上ると次の室から藥箱を取つて來た。

「サア私が上手に繃帶してあげませう。」

と甲斐々々しく金盥やガーゼを整へて、働く事を嬉しさうにしてゐる美知代を見ると、俊雄は輕い反感が起つた。

「難有う、僕は自分でするからいゝよ。」

小道具を引たくらうとする手を押へて

「そんな事をお仰るものぢやありません。」

と美知代が覗き込むやうにして笑つたので、俊雄も強ひて笑つて見せた。

白いガーゼにひたした藥品の匂ひは眼にも沁みて、洗ひ去られた傷口に滲み出る血の色をいゝ氣持で眺めてゐると、美知代は靑い粉藥をその上に塗つて手際よく繃帶をしてくれた。

俊雄はそのまゝ其處に仰向けに寢ころんで、午飯の支度にかゝつてゐる美知代の傍にゐないのを本意なく思ひつゝも、珍らしく長閑な氣持に溺れてゐた。戶外に燃える炎熱にもかゝはらず、高い岡の上の家の中にはあるとしも無い風ながら涼しく吹いて來て、疲勞た身體は殊に心地よくそれを感じるのである。彼は何時迄も此處に恁うして、何も考へずに寢てゐ度いと思つた。

其處に芳子がチョコチョコと馳けて來て、物珍らしさうに彼を見て立つてゐる。俊雄が愛想にオイデオイデをすると、緣側迄逃げてアカンベーをしてから、バタバタ馳けて行つてしまつた。

俊雄は明日の朝は此處を發つて、××驛で一行と落合ふ約束のある身體なのを殘念に思つた。如何しても此のまゝでは美知代と別れられない、自分が如何なる心持で訪れたかも知らせ、さうしてそれに對する美知代の感情も聞かなければならないと、又も彼は絕ち難き未練に苦しむのであつたが、その苦痛の底の底に最も強く根を張つて、うづくやうに胸を刺すのは、嘗て美知代の肉體を一度も所有した事の無かつたと云ふ、返らぬ悔恨であつた。

その頃はお互に若年だつたから、想ひ合ふと云ふ事のみで、初々しい人戀ひしさを慰めてゐられたので、俊雄は美知代の身も心も常に自己の所有であると思つて疑はなかつた。人知れず自己の室に、美知代と手を取合つて物も云はずに震へてゐた事も度々あつたが、そんな時にも肉情の心をそゝる事はなく、たゞひたすらに人目を忍ぶ戀の嬉しさ怖しさに、力を込めて抱きしめ度いと思ふ念のあるばかりで、それさへ心弱くして爲し得なかつたものである。

けれども美知代が大竹に嫁に行くと云ふ事を、突然耳にした時は、俊雄は既にかきむしられた心より、唯美しい夢のみでは、哀れみと憎しみのいりまじつた感情から、滿足してはゐられなかつた。

永い秋の夜の終夜を彼は幾夜眠られぬ床の上に冷く幻を浮べつゝあかしたらう。暗い川端に抱き合つて、身の置所の無いのをかこち、彼の世を夢みて水に飛ぶ、男女の影も幾度か現はれては又消えた。眞夜中に闇の路を、追手を恐れて遠く走る、足弱の女の手を取つた哀れな男の姿も見えた。土の色さへ新しい殖民地に、うらぶれ果てた長屋住居の男女の身の行末も描かれた。けれども弱き心はいたづらに、なげき悲しむばかりであつて、美知代を責める言葉さへ、俊雄は強くは云へなかつた。

「御恩になつた叔父さんや叔母さんのお言葉に背く事は出來ません」と美知代は唯泣き沈むばかりであつたが、遣瀬無い俊雄の心の中に何時か殘忍な、せめてもの心やりが浮んで來た。

其の頃彼は二階の部屋をすべて二少女にあけ渡して、階下の一室に机を移させられてゐたが、或日學校を早退けにして歸ると人氣の少ないのを幸ひに足音を忍んで階梯を上つた。美知代は頭が病めると云つて、四五日寢てゐる事は知つて居たが、もう眼の前に迫つて來た女の嫁ぐ日にそゝられて、彼はあさましい考へに平靜な自己を失つてゐた。

「許して下さい、許して下さい」と美知代は俊雄に手を取られながら、夜着の襟に泣きはらした顏を埋めて、むせぶのをこらへながら泣き沈んだ。涙に濡れた髮の毛の、ピツタリとくつゝいた横顏をすかして見て、俊雄も慚悔の涙にかきくれてしまつた。

それつきり俊雄は美知代を失つた。その當座の亂れたる心に彼は酒の味ひを覺え、遣瀬なき胸の痛手を癒さうと、媚を賣る女に走つたが、亂醉に狂へる頭腦にも、慾情の疲れを覺ゆる裡にも、後悔の念よりも強く美知代戀しく思つたのであつた。

「如何しても此のまゝ別れる事は出來ない」と俊雄は幾度となく胸中に叫んだ。何にも知らない大竹の顏も、濟まないと思ふ念に連れて浮んで來たけれど、彼は無殘に打消してしまつた。

恁うした念に驅られてゐる間に、美知代は午飯の支度をして食臺を運んで來た。

「相變らず何にもありませんけれど、召上つて下さい。」

「美知代さんも此處で一緒に喰べないか。」

と俊雄は誘つて見た。

「さうですねえ、けれども芳子がゐますから。」

と美知代は口では云ひながら、立上つて自分の茶碗や箸をも運んで來た。

芳子は匙を握つた手でボロボロこぼしながら飯を喰べてゐた。

俊雄は箸を使ふ間も、食事が濟んだら思ひ切つて自分の美知代に對する心の中を、打明けてやらうと考へてゐた。而して何氣なく自分と向き合つて食事をしてゐる美知代を今更なつかしく思ひながら樂しく物を喰べてゐた。

芳子は皆が箸を置いた後でも、未だ休み休み茶碗の中を突つきながら口を動かしてゐる。頰にも鼻にも飯粒をくつつけた親父似の顏を見てゐると、可笑しくなつてしかたがないので、俊雄はそれをまぎらす爲めに、

「芳ちやんは父さんそつくりでいゝ子ねえ。」

とお愛想を云つてやつた。子供はキヨトンとした眼をクルクルさせて不思議な顏をしてゐたが、いきなり、
「馬鹿ッ。」
と云ふと茶碗の中の匙を俊雄を目がけて投げ付けた。一杯くつついてゐた飯粒は彼の顏にも飛び散つた。
「コレ芳ちやん、何をするんです。」
と美知代が手をつかんで叱るとワアッと泣き出した。すると母親は又あわてゝ
「御免なさい御免なさい。母さんが惡かつたのねえ。」
と頰擦りしてゐたが、ヤツト思ひ出したやうに俊雄に向つて、
「どうもおいたで困つて了ひますの。失禮な事をして御免下さい。」
と云ひながら又子供に頰擦りをするのであつた。
俊雄は癪に障つてたまらなかつた。母親の手から其の子を奪つて滅茶滅茶にひつぱたいてやり度かつた。苦り切つて頰を探ると、飯粒が手の平に粘つてついた。彼は默つて立上つて湯殿に行つて顏を洗つたが、なさけない泣き出し度い氣持がした。さうして部屋に戻る時、茶の間の柱に

掛けてある汽車の時間表が、折柄の云ふ事の出來ない不快な心を引いて、彼はそれを熟視て來た。

「どうも濟みません。」

と美知代はオドオドして云つた。

「いゝえ子供のする事ですもの。」

と俊雄はさりげなく云つたものゝ、子供ばかりか美知代迄も憎らしくなつて來た。何も知らない大竹の妻として、昔の自分だ尋ねて來ても、あまりに落着いてゐるのが面憎かつた。彼は思ふさま昔の事を云つて恨んでやり度いと、思ふと、もう何の思慮も無くなつた。けれども、

「美知代さん……」

と呼び掛けた聲は怪しく震へてかすれてしまつたので、美知代は吃驚した顏を振り向けて、怪訝さうにヂッと見守つた。その憂はしい眼ざしと、なつかしい眉根の立皺に俊雄の意氣込みも弱々しい哀れに心細いものになつたが、美知代がなほも見詰めてゐる所在なさに、

「美知代さん……」

ともう一度繰返したが、どうも思つてゐる事は云ひ切れない接穗のない間の惡さをまぎらさなければならないので、

「僕はこれから行かなければならない。」

とフト浮んだ事を云つてしまつて、彼はよせばよかつたと思つて唇を噛んだ。

「アラ本當ですか、そんな事をお仰つて未だ昨日いらつしやつたばかりぢやありませんか。」

と美知代はさも意外だと云ふ顔をして云つた。

「だつて友達と約束して來たから、どうしても今日の〇時〇〇分に××驛で待つてゐなけりやアならないんだもの。」

俊雄は一度云ひ出した言葉を眞實にする爲めに、眞顔で噓を云はなければならなかつた。

「でもあんまりお早いぢやありませんか。それに今から行くなんて、大竹にもさうおつしやつたんですか。」

「云ふ積りでゐて忘れてしまつた。歸つたら宜しく云つて下さい。――もう時間が無いから支度して出掛けよう。」

と俊雄は意地になつて立上ると狼狽しく身支度を初めた。美知代は淚組んだ顏をして、もう引止める事もせずに、默つて彼の爲るさまを見てゐた。

「俊雄さん――又お歸りにいらつしやつて下さいな。」

と暫時して云つた美知代の聲は全く泣いてゐた。俊雄は顔をそむけて默つて玄關に出たが、彼はもう意地も何にも無かつた。たゞ女々しい涙を見られる事を聊か恥たに過ぎなかつた。

「大竹さんが歸つたらよろしく。」

と彼は思ひ切つて格子を出た。

「御機嫌よう。」

と美知代は芳子を抱きながら、障子のかげに半かくれて云つたが、頬を流れる涙をば俊雄も悲しく見て別れた。

彼は夢見る心持で、あまりにあかるい坂道を下りながら、美知代の家を仰ぎ見ると、その緣側に寂しさうに立つて見送る姿が明かに心に燒き付いた。帽子を取つて、禮をすると、先方も叮嚀に頭を下げた。それを見ると彼は故意と足早に、何にも思ふ事はないと云つた風に、坂を下つた。

昨日の道を俊雄は繃帶をして歩きにくい足取りで通つたが或る三味線の音の聞えてゐた家の前を過ぎる時、

「いゝ男だよ。」

と云ふ聲に思はず其方を振りかへると、バツタリ絃の音は止んで、入口に下つてゐる暖簾から、

眞白におしろいを塗つた女の顔がかさなつて覗いてゐて、俊雄を見るとドット笑つた。
彼は適切な嘲笑を受けた氣がして頭を上げずに山上の部落を後にした。而して眼の前に展かれた長い下り坂の、塵埃に白く日に光つてゐるのを見た時、彼は今宵行き所の無い事を始めて思ひ出して、美知代に別れて來た事を沁々悔む念を起した。
一行と落合ふ約束の時間は明日だつたのに一時の氣のもつれから、あてども無い身になつてしまつた。俊雄はダラダラ坂の中途で、昨日もしたやうに草の上に身を倒して、うらはかなく思ひ沁みたが、胸に置いた手の當りから、昨日書いた端書を思ひ出して、それを引き出して讀んで見たが、ピリピリと裂いて捨てた。自分ながら呑氣らしい文句が今の心には、あまりに相應なかつた。
俊雄は別れ際の涙によつて、荒々しい氣は全く拭はれてゐたけれども、物足りない心持から誘はれて來る自己の遣瀬なさに疲れてゐた。もう何も彼も返らぬ事だと諦めて、思ひ出す事もしまいと、彼は流石に殘り惜しい氣もするのを強ひて押へて、たゞ自分の全體を悲しい寂しいものと思つた。而してその寂しい自分には此の泥にまみれた、膝の破れた服を着て傷ついた足を引き擦りつゝ行方を定めずに、山路を下つて行くのが、いかにも相應しい姿だと、自分を哀れに親しさ

を覺えて立上ると、後の山の山際から、眞青な八月の空に、うすくなびく炭坑の煙をかへりみがちに、坂道を塵埃を浴びつゝ下り始めた。（大正元年八月十五日）

その春の頃

この話をしてくれた人と知己になつたのは銀座の或る珈琲店でした。其の頃私は、夕方散歩に出ないと氣分が惡くて、其の晩は本を讀むことも物を書くことも出來なかつたので、何時も大概同じ時刻に家を出て行きました。兩側の柳の色も未だ淡い頃で、殊に銀座をいゝと思ひました。しつとりぬれた靄の底に、夜店の灯がチラチラと輝き初める夕暮、私は一巡其處いらを歩き廻つた後では、必ず其の珈琲店に足を休める事にして居ました。幾つかの卓と椅子とを置き並べた廣い酒場の隅つこの窓際が一番居心地もよかつたし、此家に集つて來ては又散つて行く種々の人を眺めるのにも都合がよかつたので、私は何時も其の席を占めようと思つたところが矢張り毎晩其家に來る人で、年配は三十一二でせう、會社員らしい服裝の人が先きに其の椅子を占めて居る事が度々ありました。さうして私の方が先きだつた場合には、其の人は何となく面白くなささうな顏をして別の卓に着くのでした。それで私は直感したのです。つまり私と其の人とで大概の客は厭がりさうな片隅の席を爭つて居る形なんだと。然う氣が付いた翌日から、私は何時もより早く行つて其の席を取る事に決めました。

私はそれで滿足して相手の樣子を、特別の興味を以て見て居ましたが、間もなく先方でも、私の腹の中を讀んだと見えて或る晩一足違ひに遲れて這入つて來るや、給仕の女が直す椅子は見向もしないで、私の居る卓の空いた椅子にツカツカ來て腰掛けました。

「此處に掛けさして貰ひます。」

と云ひながら其の人は意味ありさうに微笑ひました。

目、鼻、口、すべてがはつきりした顏立ちであるのに、眉の邊に深い賴り無いやうな陰影を刻んで、それが爲めに言ふ可からざる寂しさを想はせる人でしたが、ちひさい酒杯に各種の酒をつがせて、それをひとつづゝゆつくりと傾ける、その度に醉が廻るのか、蒼白い顏に紅味を加へて來ると共に、その寂しい陰影は少しづゝうすれて消えて行くやうに思はれるのでした。

其の人は幾度か私に話をしかけようとするらしい樣子を見せてゐましたが、とうとう口を切つて、

「どうも此席でないと酒がうまくないのです。一體私は此席を自分の席と一人できめて居たので實を云ふと貴方に取られるのが心外でした。しかし私は勤めの身で、時間に縛られてゐるものですから、競爭しては到底貴方に適はない。遂に軍門に降つたわけです。」

と存外心地よげに云ふかと思ふと、思ひ出してもしたやうにお低頭をしたものです。

「貴方も毎晩御熱心ですね。それに酒は強いのでせう。私なんか元來がいけない口なんですから直ぐ醉拂ひます。幸ひに貴方が許して下さるなら今後もよろしく此の卓に一席を與へ給へ――名のり遅れましたが私は町野修吉と云ひます。」

その人――町野君は次第に滑らかになる唇に又酒杯を持つて行くのでした。

其の晩を最初として二人は毎夜同じ卓で心置きなく世間話などしながら一緒に飲む事になりましたが大凡一週間も續いた或る夕方、町野君は例になく私より先きに其家に來て居て、私を待ちかねて居ました。

「大變今日はお早いのですね。」

と聲を掛けますと、

「これを見て下さい。今日は社の歸途ぢや無いのです。」

と和服の袖を引張つて見せました。

「實は君が早く來ればいゝと待つて居ました。私は突然神戸の支店の方にやられる事になつたので、お馴染は淺いけれど今夜は君と共に大に飲まうと思つて來たのです。」

「何時お出でになるんです。」
私は驚いて尋ねました。
「明日です。イヤハヤ薄給の身の手輕さは荷物と同じ事です。何の猶豫もなく追ひやられるのですからね。」
「如何して神戸へなんか行くんです。」
「如何してつて要するに左遷ですよ。」
町野君はうつちやるやうに云つてクルリと後に首を向けると高く叫びました。
「オイ酒だ。酒だ。何でもいゝからいろんなやつをついでくれ。」
と例の如く卓の上に同じ形のリキユーグラスを並べさせて、紅いのや青いのや色さまざまの酒を、それに湛へて眺めて居るのでした。
「私は元來彼地の方の人間だが如何も關西は蟲が好かん。萬事東京に限りますね。獨身者で下宿住居、家も無し、金も無い、且又希望も無くなつた私の如きは、何處にやられたつて同じ筈なんだがそれがいけない。未練が殘ります。あゝ東京は我が戀人なりか。」
早くも酒の廻つて來た町野君は丁と卓を叩きました。

「今夜は如何しても君を放さない。腹藏なくお互に語らうぢやありませんか。」

「私は何も話の無い男なんです。」

「そんな事があるものか、人として過去を有する以上は、しやべる材料はある筈です。——どうです初戀の話でも聞かせませんか。」

「私なんかはこれからです。それよりも貴方こそ材料がありあまる位でせう。」

「敢て然らず。けれども愈々今夜を終りとしてお別れになるのかと思ふと此の儘では物足りない。君が何か書く人だと聞いたので少し氣障だが構はない。自分には忘れる事の出來ない、一生を支配してしまつた半生も、他人に取つては平凡なありふれた身の上話なんだから、君の小説の材料になる程の事もないでせう。ひとつさらけ出してやつつけませうよ。」

町野君は酒杯を取上げて一息ついてから語りはじめました。

私は母を知らなかつた。殆んど物心もつかない中に死んでしまつたので、私は祖母の手に育てられた。子供の時分から身體が弱くて、氣ばかり強くて、我儘で、甘つたれだつた。

兄は中學を卒業すると、病身な父を扶ける爲めに前垂をしめて、帳場に坐つたが、それから四

年後に同じ中學を出た私は、更に進んで專門の學問を修めようと云ふので、東京へ出る事になつた。

東京には叔父の家があつた。叔父は郷里から出た代議士で、大政黨の幹部としてかなり幅を利かして居た。

「修吉も叔父さんのやうな偉い人になつておくれ。兄さんは總領で店の商賣があるから長く學校通ひもさせられなかつたが、お前は大學校を卒業して、どんな立派な人にでもなれるのだから、叔父さんのお云ひの通りに勉強して、私に安心させておくれ。亡くなつたお母さんに私が自慢の出來るやうに。」

祖母は幾度となく心強く斯う云つては勵したが、それよりも孫を遠く手放す心配の方がともすれば、うち勝つのであつた。

「叔父さんの家に置いて貰へば何も心配は無いけれど、東京は油斷のならない所だと云ふから、よく氣をつけて間違ひのないやうに、それから何よりも身體が第一だから……」

なにからなにまで思ひ浮ぶ事を總體云ひ聞かせようとしながらも、聲を曇らせては涙を拭つた。

故郷を出る時の悲しい心持は、その經驗の無いものには想像も及ばない事であらう。私も生れ

て初めて他所の土地に出るのだつたから、ひどく心細く思はれた。けれども亦少年の正直な心に立身出世を希望する旺な血が湧立つのを禁じ得なかつた。東京に出なくては天下に名を成す事は出來ないと思ふと同時に、東京に出たならば必ず偉い人になれるものと信じて疑はなかつた。それだから愈々東京へと郷里を出立する時は泣きながらも勇ましく前途の光明を胸に描いて祖母や父兄に別れたのである。

初めての一人旅はかなり心細いものだつた。殊に新橋へ着いた時、附近の町の雜沓が作る都會の喧しい物音に行方も知らぬ旅へでも出たやうな寄邊ない氣がしたが、かねて聞いた通り停車場の人力車に行李と相乘りで無事に芝の叔父の家に着いた。

それは忘れもしない三月の中旬で、輕い塵埃の上る町筋から、靜な屋敷町へと曲つて行くと直ぐその家は知れた。眠られぬ夜行の汽車に疲れた眼にも、朝日の中を白々と櫻の花が黑塀に散りかゝるのを明瞭と印象されて、今も眼前に描く事が出來る。

叔父夫婦には二人の娘と、未だ母親の乳を放れぬ男の子とがあつた。

登志子は麻布の女學校に通つて居た。溫順しい娘で何方かと云へば寂しい性質ではあつたが、また女らしくない子供々々した身體に、膝つきりの袴がよく似合つた。袴を短くはいて黑い靴下

に包んだ足を大股に歩くのが、亞米利加風の活潑ないきいきした女性を養成するのだと云ふ其の學校の風であつた。妹の高子は小學校に通つて居た。

女の同胞の無かつた私は、登志子姉妹を懐しいものに思つた。二人を呼んでは物の本で讀んだ話を聞かせたりした。祖母以外に女性に近寄つた事の無かつた私は、年來飢ゑて居た母の愛情のどんなに嬉しいものであるかを叔母と登志子姉妹によつて知る事が出來たやうに感じた。

私の部屋として與へられたのは門際の小部屋だつた。私は其處に起臥し、其處から學校に通つてゐた。部屋と母屋とは棟も離れてゐた。格子窓の下は往來だつたが毎朝其處に登志子を誘ひに來る娘があつた。其娘は登志子が小學校からの仲善で、直き近所の請負師の娘で、靜江と云ふ名さへ間もなく知つた。

二人は眞實に仲が善かつた。雨の降る日にも靜江はキツト誘ひに來た。

「登志子さん。」

と門の柱のかげに立つて呼び掛けるのが常例だつた。私はそれをも懐しく思つてその涼しく透る聲を、毎朝心待ちに待つたのであつた。

一年二年は瞬間に過ぎてしまつた。

其の間に私は父を失つた。「チチビヤウキスグカヘレ」と、兄から打つて寄越した電報を受取つた時、もう父には逢はれないと心の底でつぶやいた。夏期休暇に歸省した時、メツキリ衰へた父は「修吉々々」と片時も傍を去らせまいとして何彼と物語る中にも、將來の事を氣づかつてうるさく心付けてくれたが、九月に入つて學校が始まると、どうでも亦東京へ出なければならなかつた。其の別れを惜しむ事も祖母よりも却つて父の方が深く心細がつた樣子であつた。まだそれ程の年配でもないのに、何となくあやぶまれたのであつたが、一月とたゝないうちに死なうとは思はれなかつた。

取る物も取りあへず、私は急行の汽車に乘つたのであつたが、故郷は遠かつた。翌朝我家の閾をまたいだ時は、既にもう息切れて、私は泣き沈む祖母の他には取縋る可き人も無い身であつた。丁度用務を帶びて十日程前から來て居た叔父が萬事指圖して、後の始末をしてくれた。而して又叔父に連れられて東京へ上る迄、私は涙にのみ日を送つた。

生來私とは正反對たつた兄夫婦は賴母しいと思つた事も無かつたし、祖母にも何時死別れるか解らないのであつたから、私は愈々叔父叔母を心底から懷しく思つたが、向ふも私を子のやうに可愛がつて吳れるのであつた。叔父の家で一番我儘に振舞ふ者は私たつた程である。

其のうちに私はフト、自分と登志子とは雙方の父と父との間に於て、將來夫婦にしようと云ふ約束が何時か成立つて居たのではないかと思ひ初めた。如何してそんな考へが浮んで來たのか、後になつて考へて見ると寧ろ意外だが、兎に角叔父叔母の態度によつて然う云ふ風に直感した。然うすると心なしか、其の頃メッキリ女らしくなつた登志子の、私に對する態度が又その疑念を強めるものがあつた。元より內氣な溫順しい女だつたから、萬事が控目ではあつたけれど不精た我儘な私の部屋の、常に投げやりにしてある机の廻りを奇麗にかたづけて吳れるのも、又脫ざつぱなしの羽織や袴を叮嚀に疊んで置いて吳れるのも、女中の手には掛けないで、登志子自らしてくれる。すべて其の私に對する態度と云ふものが、若い娘の親切からとよりも、世話女房の樣子が見えたからだ。それのみか私が何か爲ようとするのを見ると、叔母はキット聲を掛けた。

「ソレ登志ちやん、修さんの御用をしておあげ。」

と云ふやうなわけなので、私は幾度となく心にうら問ひつゝ、遂に登志子と自分とは親々の間に約束の成立つた間柄なんだと思ひ込んだ。そして又登志子もその父母から此の事を聞き知つて居るのだと思ひ込んだ。私は當事者たるその子の意思に任せないで親と親とが勝手に取結ぶ結婚を我國の惡習として罵つてゐたのであつたが、此の時はそんな事を考へることもなかつた。寂し

い頼りない孤獨の自分を相扶くる妻となる可き人を傍に見得るのが、いかばかり心なぐさむ事であつたらう。

加之(みならず)叔父の家の女中も車夫も何彼につけてチラチラと意味ありげな言葉を、私又は登志子に對して聞かせるのであつた。その頃一番親しく往來(ゆきき)して居た同級の者で、私の處に度々遊びに來た連中も、私が自分と登志子とは行末夫婦(いっしょ)になるのだと直感したと同じやうに、彼等も亦二人の間をたゞの眼では見なかつた。

「オイ登志子さんは君の未來の妻(フユーチユア)だなア。」

と云ひながら最初に肩を叩いたのは蘆田と云ふ友人だつた。

「馬鹿云へ、そんな事があるものか。一體誰に聞いたんだ。」

「誰に聞いたかつて云ふからは事實なんだらう。誰に聞く迄も無い、誰でも知つてる事だよ。君んとこの友公(ともこう)も女中達もさう云つて居たぞ。」

「なんだ、あいつらが、又出放題(でたらめ)をぬかすんだ。」

「さうでなくたつて君に對する登志子さんの態度でも大概よめるぢやないか。」

蘆田は肩をすぼめて相手(ひと)の顔を見上げるやうにしてクスリと笑つた。私は何故だか非常に不愉

快に感じたが、顏の赤らむのを止めかねた。しかし又自分と登志子との間を確め得たやうな氣もしたのであつた。

又、其の頃の一二年程力強く私に對して働いた時期は嘗てなかつた。私は自分でも驚いた程著しい變化を遂げた。

無闇に規則づくめな故郷の中學に五年間育てられた私は、自由な校風に馴染むに從つて、今迄暗く閉ぢられて眠つて居た心の一面が、次第に勢よく日光を浴びるやうになつて來た。子供の時から憧れやすく涙もろかつた多情多感の私は、母無し子として、殊更嚴格に育てられて來たのと、「可からず」を唯一の教へとする中學の教育に、自分自身を知らないで成長して居たのであつたが、籠に馴れた鳥も放たれて、青空の下に移り住めば、やがて野山に生れる筈だつた己れを知るやうに、私は私の行く可き道を二十歳の若き血汐の湧きかへるのを止めかねる頃、漸くに認める事が出來たのであつた。

その以前から私は性質として、何等か自己の思想行爲を律する標準が無くては居られなかつたが、少年の日の幼い頭腦には、人が教へるまゝに善惡邪正の區別を以て、其の標準として安んじて居られたのである。

善とは何ぞや。私はそんな事を考へる迄もなかつた。矢張り人の教へるまゝに従つたのであつたが、就中他人の爲め――殊に弱者の爲めに一身を犧牲にして盡す事は、私の趣味に適つたのであらう、最も善なる事として考へられた。從つてその反對の自分一個のみを利する行爲は最も憎む可きであると思つたのは、元より當然の事である。

かういふ主義を正直に眞向から振りかざした結果、私は以外な方面に其の實行を求めんと欲した。前にも云つた私の行く可き道と信じて疑はなかつたのがそれで、即ち現在吾々が營んで居る社會組織にあきたらずして、新しい理想郷を造り出さなければならぬと云ふのであつた。勿論私の腦裡には片時も離れない國家社會があつたのである。眞に國の爲め人道の爲めに憂ふる者は如何しても自分と同じ考へを抱かねばならぬと思ひ込んで居た。如何してそんな考へが起つたかと云ふ事は自分にもよく解らないが、矢張り善惡の標準から割出した歸結であつた事は爭ふ可らざる事實であらう。

それはたとへ一時的のものであるにもせよ、幼稚な頭腦に沁み込んだ考へ程、自分自身に對して力強いものは無い。故郷を出る時には誓つて志を立てようと思つた立身出世が何の價値もなくなつたばかりか、寧ろ厭ふ可く忌む可き罪惡としか思へなくなつて來た。馬鹿々々しい話ではあ

るが、血迷ひ切つた當時の私は、叔父と語るよりも叔父の車を曳く友公と膝組みで談ずる方が遥に嬉しかつた。

それのみならず、自分は既に將來の國家の爲め社會の爲めに、かげながら微力ながらも燃えさかる熱情を以て盡して居るのだと思ふと學校で教へる科目の如きは最早まだるつこしい無用の物のやうに考へられて來た。私は學業をそつちのけにして最も興味を感じつゝあつた勞働問題に關する著書をあさり歩いたが、始めてカール・マルクスの宣言を讀んだ時に、私は全く有頂天になつてしまつて心の奥底から湧上る熱涙を、一枚づゝ開いて行く頁の上にそゝいだのである。云ふ迄もなく過激なる彼の宣言は忠君愛國の靑二歲の私に取つて、全部を承認させたのではないが、嬉しいやうな悲しいやうな、しかして又憤ろしいやうな、いりまじつた感情は、冷靜なる私の姿を全く打消してしまつた。

「全世界の勞働者よ、團結せよ。」

私は口癖に此のマルクスの言葉を叫んで吾と我が熱情に酬いたのである。

玆に至つて私のオツチョコチョイは遺憾なく發揮された。私は自分一人で物事を考へる事の出來ない人間で、「町野の鼓吹」と云つて、友達は、何事をか感じては默つてゐる人を取つつかまへ、

いきり立つて談ずるのを、又かとばかり笑ひ消すのが例だつた程、私はその所謂鼓吹家であつたから、何條默して居らるべき、相手構はずにやつたものだつた。

乍併マルクスの唯物主義卽ち此の人生に對して、徹頭徹尾現實のパンや肉の問題のみを、極めて重大に且つ嚴肅に考へる事は、持つて生れた私のロマンティシズムが許さなかつた。深く考へて見たならば私はマルクスでなくてもよかつたのだ。たゞ單に弱者を扶けて強者にあたる事が無上に勇ましく嬉しかつた丈であつたらう。其の證據には時々友達に誘はれて覗きに行く芝居で、極惡非道の奴輩が、かよわいものをいぢめぬく時、忽ちこれを扶ける俠客が物かげより現はれて來る二番目狂言には、口惜しいやら嬉しいやら、湧きかへる熱い涙をこぼしたものだ。その時の心持だマルクスを讀んだそれに比して如何なる相違があつたらうか、私はあまりの事に自ら赤面しなくてはならない。乍併その當時に於て私は何の疑問もなくマルクスを崇拜し、又市村羽左衛門を第一の贔負役者として奉たものであつた。

更に私の此の性質を明かにする爲めに他の插話を附加へよう。當時新富座で伊井と河合とが「通夜物語」を演た事がある。私は伊井も河合もよくは知らなかつたし、「通夜物語」が誰人の作で、どんな内容のものであるか勿論知らなかつたので、友達の誘ふまゝに、はからず見に行つたまで

ゞあつたが、あの雪の日の植半の小座敷で、薩摩人の軍人篠山六平太に「江戸ッ子だい」と絕叫しつゝ、身を切るやうな、懷中の札束を叩きつける素寒貧の畫家玉川清。大詰に自の血を以て、情人をして襖にその立姿を描かしめた丁山さんの花魁は、熱し易い私をして思はず知らず大聲に「いゝなァ」と感嘆の聲を發せしめた。友達は私が「いゝなァ」と怒鳴る度に、人前をかねて袖を引張つては注意してくれたが、私は默つて此の芝居を見て居られるやうな人間ぢやァなかつたのだ。

その日、偶然同じ桝に席を占めた靑年があつた。その男は宮部と云つて下級ではあつたが私共と同じ學校に通つて居たし、私の叔父の家の直ぐ側に、其の家があつたので屢々往來ではお互に顏を合せて見知つては居たが、膝と膝とを接して、狹つくるしい芝居の土間に並んでも、四海皆これ同胞だと口癖にして居た私さへ兎角口を切りにくい男であつた。連れもなしに一人で見に來てゐて、煙草も吸はなければ茶も飮まない、幕間に廊下へ出る事も稀であつた。たゞ折々懷中から寫生帖を取出しては、目も鼻もない人形を鉛筆で走りがきしてゐるばかりだつた。更にその容貌が人を近付けないものであつたばかりか、彼には人々の間に立つて居ると云ふ氣ぶりが少許も見えなかつた。俺は俺一人つきりだと云ふ其の男の、すねた強情な考へが如何しても其の態度に泛現はれて居た。私は道で逢ふ時から蟲の好かない男だと思つて居たが、此の時に殊に厭な奴だと

思はないでは居られなかつた。

私は芝居がはねて家に歸つても、興奮して頭は眠る事が出來なかつた。電燈を消しても、暗闇に、丁山さんの立姿が血汐の色に現はれた。淸の言葉、丁山のせりふは、耳の底に殘つて居て安眠を妨げるのであつた。

翌日學校に行つても友達をつかまへては「通夜物語」を鼓吹した。さうして覺え込んだ聲色を使つたものだ。「誰だと思ふ丁山さんの花魁だ」とペンを逆手に振り上げては氣障な身振をしたのである。私はたまらなくなつて其の日亦、學校の歸途に、新富座へと馳付けた。彼處の暗い立見場の鐵の棒に顏を押つけて、遠いあかるい舞臺の活劇に、再び涙を流したのであつたが、フト氣が付くと昨日の宮部が同じく今日も立見に來て居るのを發見した。熱し切つて居た私はいきなり、

「ヤア、君も御熱心ですねえ。」

と思はず聲に出してしまつた。宮部は、

「エ、。」

と云つたばかりで一寸頭を下げたが、それつきりで後の窓から場外に眼をそらしてしまつた。

「變な奴だな」と思ひながらも、私はなほ追ひ續けて話を向けたのである。

「河合の丁山さんはいゝぢやありませんか。」
と云ふと、
「エ、。」
と答へる。
「伊井はどうです。」
「サア、僕にはわかりません。」
と云ふのであつた。
「僕だつてわからないんですが、兎に角非常に面白い芝居ですねえ。僕は又明日も來て見度くなつたが、君も二日續けて來る位だから負けず劣らずですね。」
「イヽエ僕は今日で三日目なんです。——泉さんの小說が好きなもんですから。」
と彼は横を向いたまゝ低い聲で云つた。
「泉鏡花つて云ふ人の小說を脚色んだものださうですね。小說でも面白いんですか。」
「エヽ矢張り本で讀んだ方が面白いやうです。」
「そりやア是非讀みませう、此の頃出た本ですか。」

「隨分以前のものですが御覽になるなら此處にあります。」

と、彼は懷中から「通夜物語」を取出した。

大詰の幕があいて、又私の涙をしぼる、嬉しい女の達引に、私は宮部に聞けがしに「いゝたア」を繰返したが彼は返事もしなかつた。

歸路が同じなので一時間の電車の中でも何彼と彼に話かけたが、返事するのもものういらしい宮部の態度は、幾度か私をしてイライラさせた。けれども亦一方から云ふと彼の態度は私の好奇心を刺戟する丈の力があつたのに違ひない。

別れ際に彼は「通夜物語」を私の手に渡して、

「これを御覽になるならお持ちなさい。」

と云つた。私はそれを借りて家に歸つたが、その日から彼と知己になり、その日から更に泉鏡花氏を、マルクス、羽左衞門と並べたのである。

或日「通夜物語」を返すのにかこつけて私は宮部の家を尋ねて見た。彼は自分の居間におびたゞしい本を所有して居たが、それが皆文學書であつた。私はその頃は、まだあまり多くの小說を讀んで居なかつたから、此の青年の喜びさうな話題を持ち出す事は出來なかつたが、面と向きあつ

て平然と默り込んでる主人に對して、私も亦無言の行をする座白けに耐へず、あれこれとあらん限りの話を持ち掛けた末は、其の頃の私としては如何しても、其處迄行かないでは承知出來なかつた例のマルクスをかつぎ出したのである。私は一人でしやべつて居るうちに、自分自身の言葉に感動して、何時しか聲さへ高くなつて行つた。

「それで現社會組織に於ては不斷の階級闘争を避ける事が出來ない。卽ち資本家の權力の下に抑壓をかうむつて居る勞働者は如何に悲惨なる狀態に陷つて居るかを御存じですか。心ある者涙ある者が忍んでこれを看過する事が出來ますか。」

　私は殆んど詰め寄つたものだつた。

「それぢやアどうすればいゝんです。」

「そこです、救濟の途は、たゞ此の舊習に縛られて恰も蛇に咽喉を巻かれた狀態にある社會全體を解放する他はありません。」

　と私は演說口調になつて辯じ立てたが、相手は相變らず机の上に開かれた「新小說」を讀むともなく一枚々々めくつて居るではないか。私は馬鹿々々しい張合ひぬけのした自分を立直す爲めに、又もや力を込めて迫つたのである。

「彼マルクスさへ其の初め歐洲に於て默殺の侮辱を受け、嘲罵の中に葬られんとしたのです。しかしなほ彼の主張が次第に勢力を得た事を考へて下さい――宮部君、君は如何思ひます。」

「僕は別段如何も思ひません。貧乏人は小汚なくつて嫌ひです。」

彼はそつけなく云ひ放つた。

私はもう二度と此の男とは口をきくまいと思つた程腹立しかつたが、何處から見ても幸福な家に生れて、平和に育つて來た筈の宮部のすねたらしい態度を、いぶかる興味が頭の底にまつはりついてしまつてゐたので、其の後も亦鏡花氏の小説を借りに行くのを止めなかつた。私は宮部の本箱――それを私は鏡花文庫と呼んだ――の鏡花氏の作品全部を讀んだ。さうして又燃え易い私の性情は此の場合に於ても、盲目的熱心を以て耽讀したのであつて、冷靜なる宮部の如く批評的に見る事は出來なかつた。だから私は鏡花氏の作品に現はれたる幾多の特質の總てを認めて感嘆したのではない、あの弱きを扶けて強きを挫く任俠の趣味から湧出る反抗、ありとあらゆる嘲笑冷罵を憎む者の頭上から浴せかける痛快さに溜飲を下げたのである。世に謂ふ所の紳士、貴夫人、金持、慈善屋、道學者、さては巡査、女學生の如き、ほしいまゝに跋扈する徒輩は、見るかげもなくやつゝけられるのに反し、氣ばかり強くて金も力も無い江戸ッ子は、作者其の人の燃ゆるが

如き熱誠こめたるせりふを以て思ふさま氣焔をあげる光榮を有してゐるではないか。彼等が野暮で野呂間で、いけすかない階級を形造る時、これは又意氣で粋で美しい階級を代表してゐる。私は此の極端に醜化され、美化されたる二階級に對して、烈しい憎惡と限りなき熱愛の情を煽り立てられないでは居られなかつた。

斯うした心の傾向は次第に勢力を得て行つたが當然の結果として、私は我が思想行爲を律す可き標準の善惡邪正のみでは滿足されなくなつて來た。蓋し學校の先生も世の父母も善なる觀念に對してのみ目を開かせんとつとめるのに、吾等が自然の感情は善よりも美に對してより多く憧るゝものではないか。考へ深い人間ならば夙くの昔に感づく事であらうし、物事を考へる疾病の無い幸福な人間ならば、そんな事は如何でもいゝ事なんだ。ところが正直にして愚なる自分の如きは此の考察を得た時に遲まきながら驚いたのである。似非道學者が善なりと教へる事の總體が美ではなかつた。哀れむ可き當時の道德家はこんな馬鹿々々しい事に苦痛を覺えたものであつたが、遂にかう云ふ結論に到達して少なくとも一時は自ら滿足させたのである。即ち人の思想行爲を律す可き絶對不易の標準は存在する理由が無い。蓋し善惡邪正の如きは、事物の本質上自然に存するものではなく、全く人間が社會を形造つて行く便宜の爲めに設けた尺度に過ぎないのだ。道德、

習慣、法律の如き、畢竟するに時人が勝手氣儘に定めたのである。然らばそれが不便になつたら、うつちやつてしまふのに何の不都合もないのではないか。

私は此處迄考へたのに、しかも尙ほ何等か自己に對する道德を欲して、強ひて之を求めた愚かさを脫する事は出來なかつた。けれども美しきものには抗す可らざる權威ある事を知つたからは、兎にも角にも、善惡のみを標準とした時に屢々苦しい矛盾に陷つたのに比して、多くはそれを免れる事が出來たのは嬉しかつた。

私はこんな世間知らずの、向ふ見ずのお坊ちやんだつた。さうしてこんなお坊ちやんがいかに無慘に夢を破られるかは想像するに難くないであらう。

其の頃、私は登志子とその仲善の靜江とに每晚英語を敎へて居たが、二人が翌日の譯讀の爲めに與へられたる下讀みをしてやつた後では、せがまれるまゝにいろんな話をして聞かせた。その場合にも例の鼓吹癖は私をして、此の二人の少女に對し、淺はかな、しかし當時の自分に取つては動きたき、我が主張を宣傳するのに、最も感動し易い相手として遺憾なしと思はしめた。

私は未來の希望と云つたやうな景氣のいゝ空漠たる妄想を、常に聲を高くして說いた。勿論世に謂ふ所の道學者の如く、職業として道を說くやうな罪業の深い僞善者ではなかつたが、又一種

の無邪氣な道徳家であつた。或はこれを精確に云ふならば、物事の裡面を見る事の出來なかつた時代に、疑ふ事を知らぬ靑年が幼稚な清教主義に陥つてゐたに過ぎなかつたのであらう。兎に角私は一人たりとも自分と同じ考へに引入れなくては安心出來なかつたのだ。

私は思はず激越して來る私の聲に感動して瞳を輝かして聽いて居る二人に何を語つたか。今になつてみると話をする丈でも冷汗の出て來るやうな事ばつかりだ。

「貴方方は立派な衣服を着て居る、奇麗なリボンを結んで居る、學校に行く以外に仕事も無く、充分に喰べて充分に遊んでゐられる身分でせう。けれども此の社會には幾多哀れなる貧乏人が居ます。彼等の中には喰ふ可きパンの乏しさに衣服の事なんか考へる閑もない者さへあります。手近い所に例を取れば臺所に働いてる女中達を御覽なさい、朝は早くから夜は遲く迄、殆んど休むひまもなく、あゝやつて勞働してゐるでせう。しかも僅かばかりのお給金の中から若干錢の貯金をして、それでお嫁に行く支度をする。その行く先方は如何なる階級の人であるか、同じく哀れむ可き貧人です。彼等は其の日其の日の生活を支へて行く事のみに全精力を盡くさなければならない。だから永久に何等か有利なる事に投ず可き資本を得るの機會が無い。つまるところ浮ぶ瀨がないのです。さうして又浮ぶ瀨の無い者を親として生れた第二の時代を形造る其の子供達はど

らでせう、更に大なる悲惨が彼等を待ち受けて居るのではありませんか。それに反して貴方方は美衣美食に育てられて何の苦勞もなく、やがて富家に嫁ぐ人です。長屋に生れて長屋に死する貧乏人と比較して見たならば、貴方方は自分が如何に幸福であるかを知ると共に、彼等が如何に哀れむ可きであるかを知る事が出來るでせう。一國の生産力には限りがある、私をして云はしむれば、貴方方の幸福が大なる丈、それ丈、彼等貧人の苦痛も亦大きいと云ふを憚らないのです。」

私はこんな馬鹿氣切つた事を眞面目に說きながら、美しい顏をかしげて聽いてゐる二人の樣子に少なからぬ滿足を覺えつゝ、なほも調子に乘つて物語るのであつた。

「第一に、貴方方はその虛飾を捨てなければ駄目だ。リボンなんか捨てゝおしまひなさい。」

などゝ亂暴な事さへ云ふ時があつた。

然うかと思ふと時には又美は一切の物を超越すると云ふやうな事をも鼓吹した。けれども私は理論としてそれを承認したのであつて、矢張り沁み込んだ善惡の區別と全く絶緣する事は出來なかつたので、心の中の混亂に如何していゝかわからなくなる時が多かつた。

靜江は登志子と同年の、其の時が十八だつた。まだ私が故鄕から出て來た頃は、子供らしかつたのが、その面影も殘らない程女らしくなつて居た。色白で面長な、はれやかな顏立ちに派手好

みの服装の引立つて見える、姿形のいゝ靜江は、どつちかと云へば小づくりな、眼鼻立ちはいゝけれども、蒼白い血の氣の少ない病身な登志子よりも遙に姉らしく人目を引いたものであつた。もう其の頃は朝毎に、學校へゆく途すがら登志子を誘ひに來るにしても、以前のやうに門前から聲高く呼び掛けるやうな事はなくなつた。玄關の格子の外に立つて、小聲に訪ふやうになつた。何時か袴の裾も長くなつて絹傘に日をよけつゝ歩く姿が、癖の無い身體つきであつたから一層丈高く艶かに見えたのである。

私は登志子と靜江とが並んで行く後姿を、格子窓からひそかに見送つて、その二人と心置きなく話をする事の出來る自分を滿足に思ふのであつた。實際、其の頃私の友達の間にも、ともすれば彼處此處の美しい少女の名が屢々口から口へと傳へられるのであつたが、二人も元よりその口の端を逃れる事は出來なかつた。從つて私も亦、彼等が羨望から出る冷かしの的に立たねばならなかつたが、迷惑さうに裝ひつゝ私はそれをほこりとした。だが、

「町野は兩手に花だな。」

などゝからかはれると本氣になつて怒り度かつた。そんな事は汚らはしいと思ふ心が未だに強かつたのだ。

登志子と靜江とは容貌から氣質迄全く正反對だつた。ひとつには其の家庭の風が全く違つて居て、登志子が地味に内輪に溫和しくと、心掛けて育てられたのに反して、他所目にも靜江は兩親が他人へのほこりとして、殊更美々しく着飾らせたのであつたから、學校でも評判の華美者だつたさうである。

登志子は賢しい女だつたが、細かく働く胸の中を表面に現はさない事に馴れて居た。それを私は物足りなく常に思つて居たのである。だから私が二人に對して何か話をする時でも、多く應答をするのは登志子ではなく靜江だつた。それのみならず、登志子は靜に讀書する事は好きだつたけれども、小說は有害無益たとして父母から許されなかつたので、僅に「不如歸」「黑潮」位を優しい心から同情して、眼を泣きはらして讀んだばかりであつたのに、靜江は小說は大好きだと云つては、いろんな物を讀んで居た。で私が「通夜物語」に感激してこれを二人に鼓吹した時も靜江は既によく知つて居た。

「泉さんの小說は何れも面白う御座いますのねえ。」

と云つた程であつた。

一體私は賣淫を重大なる罪惡だと思ひ込んでゐたから、たとへ哀れなる境遇が然らしむるにし

ても、女郎と云ふ者の存在を憎むの念が強かつたのに、我が丁山さんは花魁だつた。さうして既に其の時は、私の胸に巣をくつて居た似非道學は知らぬ間に、無慘にも根柢から崩され初めて居たのではなかつたか。

私はよくこんな事を二人に云つて聞かせたものだ。

「僕が若し文部大臣なら直ちに『通夜物語』を女學校の修身の教科書にする。良妻賢母をつくるのだと云つて、見識を喰つて生きてやアしまひし、情の硬い常識一點張りの愛國婦人會々員を養成するのが能ぢやアない。いざとなつたら生命を捨てゝ達引かうといふ、情もあるが涙もある女をつくらなければ駄目ぢやアないか。」

「だつて修さんのお得意の丁山さんて云ふ人は、最初ゆすりに行つたんでせう。」

登志子は持前の考へ深い眼を伏せて、云ひ過ぎはしないかと云ふ事を恐れるやうに口を切るのである。

「そりやアさうさ。けれどもゆすりだつて構はない、冷酷な、名聞好きな奴等の爲めに侮辱された返報ぢやアないか。さうしてそれがしくじつたら生命を捨てゝかへりみない、その眞情の熱烈さを見てやらなくちやアいけないんだ。お登志さんなんか弱蟲だから出刃庖丁を振り上げる勇氣

はないんだらう。」

「私は恐くて刄物なんか持てないでせう。貴方は。」

と登志子は笑ひながら靜江の方に話を向けた。

「私なら死んで見せるわ。」

靜江は卽座に云ひ切つた。私にはその一言がたまらなく嬉しかつた。これは單に一例に過ぎないのだが靜江はともすると思ひ切つて投げやりな、氣隨氣儘な事を云つて喜ぶのであつた。私はそれが恰も自分と同じ心持を抱いてでも居てくれたやうに感じたものであつた。

元より私は登志子を愛して居た。將來自分の妻となる女だと思つてゐたから、どうかして自分の思想を充分に理解させて、自分の思ふ通りの完全な女にしなければならないとさへ考へて居た。今になつて見れば、登志子の方が私よりもづツと偉かつたのだと云へるのであるが、如何も登志子の沈着過ぎるのが物足りなくてしかたがなかつた。さうしてその物足りなさは靜江によつて充分に滿たされるやうに思つたのである。

或日登志子は學校から歸つて來ると私の室に遊びに來て、いろんな話をして居たがフト斯う云ふ事を云ひ出した。

「今日學校でほんとにをかしかつたわ。皆が集つて何かの拍子から、各々どんな人の奥さんになり度いか、かはるがはる云ひつこしませうつて、云ひ出した人があつたのよ。」

「お登志さんはどんな人の奥さんになり度いと云つたの。」

「私は何とも云ひません。だつて私には解らないんですもの。」

登志子はその癖として、一層伏目になりながら心持ほんのりして云つた。

「意氣地が無いなア、解るも解らないもあるものか、勝手な熱の吹競なんぢやアないか。」

「エ、そりやア皆がいろんな事を云つたんですよ。外交官がいゝとか、軍人がいゝとか、いろいろあつた中で、大熊さんて云ふ學校一のお轉婆さんが、小説家の奥さんになり度いつて云つたので、皆お腹が痛い程笑つたの。」

登志子は今でも未だ可笑しくてたまらないやうな顔をしてゐたが、急に眞面目になつて、

「それから、あの、修さんは靜江さんがなんておつしやつたか知つてて。」

私はなんとなく心が穩かでなかつたが、登志子がチラと見上げたので、故意と威勢よく云つてやつた。

「何を僕が知るもんか。あの人もお轉婆だから滔々と辯じたらう。」

「そりやア知らないのは當然ですけれど、マアなんて云つたかあてて御覧なさい。」

「矢張り外交官だらう、派手好きだから。」

「イヽエ違ふわ。」

「そんなら商人か。」

「イヽエ。」

「なんでもいゝや、僕には解らないもの。」

登志子は今更困つたらしい様子であつたが、

「ぢやア云ひませうか。靜江さんはね、財産なんか無くても、世の中の人の爲めに盡す、理想の高い政治家の奥さんになつて一緒に働き度いんですつて。」

と云ひ切ると、心中の混亂をかくし切れず思はず顏の赤くなつた私をヂツト見つめて意味深い微笑を浮べた。

私は登志子から傳へられた靜江の言葉をどんな心持で聞いたらう、到底云ひ盡す事の出來ないものであつた。靜江は私が平生口癖に、理想的政治家になつて社會を改革するのだと云つたのを其の儘に、學校で皆に語つたのであつた。あの勝氣な女が、そんな事を云ふからには、思ひ込んだ

ところがあるに違ひないと、私は嬉しいやうな恐ろしいやうな推察を下して、ぼんやりと想ひ耽つたが、登志子がそれを靜江から聞いた時、そして又それを私に告げに來た時の心持を思ひやると、私はいまはしい推察を打消さなければならないと思つた。

其の日以後、私は哀れにも自分の腦裡で、さまざまのローマンスを組立てゝは、これを樂しむよりも苦しむのに、時と日とを送つたのである。今迄はひたすらに、一日の中で最も嬉しい時として居た、登志子靜江に物を敎へる夜の時間を、勿論ひそかに樂しい心持はありながら、それよりも遙に強い物怖しさに心震へつゝ待たねばならなかつた。

早春の日の暮方から、障子の中にともる灯を、私は毎晩うら寂しく見守りつゝ、早くも凍てた夜の街を遠く町角から通つて來る下駄の音に一々耳をそばだてた。旣に閉された門の潜戸に結んだ鈴が、冴えて鋭く響いたと思ふと、敷石から玄關の格子にかゝる靜江の氣配ひに息も詰まるやうな思ひをして、自分の身動さへも憚かられるのであつた。さうして今迄は人に手數を掛けないやうに、靜江が來ると直ぐ此方から母屋へと飛んで行つたものを、それさへも氣臆れして、私は知りつゝ自分の机に向つて出放題に本を開いて、それを見てゐる振りなんかしながら、登志子の呼びに來るのを待つて居た。

かうした眼に映る靜江の樣子は、著しく昨日に變るものがあつた。一ッ一ッ取立てゝ云ふ迄も無い、すべて彼女の態度が自分に對して深い意味の無いものはないと考へられ、自分は今日迄あの女の心を知らなかつたのだとさへ思ひ決めた。それは元より燃え易き血の躍るのを止めかねる程嬉しい滿足を與へたのではあるが、如何にせんこれより以前、我心に絡みついて居た登志子に對する愛情の切つても切れぬものがあつた。

かゝる時道徳を知らぬ者の氣安さはいかばかりであらうか、今にして深く思ひあたるのであるが、其の當時の私は自分の手足を縛り、自由なる心に鎖する掟をば大事にかけて所有して居た。私は心の底の底を探る事を恐れたのでもなかつたが、要するに自分の主義として、此の場合靜江を念頭から去らねばならなかつた。一旦自分が愛す可く心に誓つた女以外に心を移す事は人道にもどり人情に反する許す可らざる罪惡であると云ふ、當時信じてゐた簡短なる道徳的結論丈では到底押へ切れない感情を、いろんな方面から打消す事に努めた。勿論一方に於ては、殆んど疑ふ餘地は無いのであるが、未だに叔父叔母の口から確には聞かされないのだから、靜江を想ふ事は登志子に對して罪にはならないとも考へたが、それは單に私の思想に止つて、眞の自分の苦痛を癒す筈のものではなかつたのみか、さまざまに想ひ惱んだあげくは、反つて反對の心持を強めた

のである。

私は何故早く叔父か叔母の口から「お前と登志子とはやがて一緒になるのだ」と打あけてくれないのだらうと、苦しい程切に思ひ初めたが、間も無く私は私の最初の想像が當つてゐた事を確める時が來たのであつた。乍併それは又、私にとつて悲しむ可き時であつたのである。

自由と放縱とを取違へてゐる生徒の多い學校で、殊に學問を以てしては社會を救ふ事も出來なければ、自己を滿足させる事も出來ないと思ひ込んでゐた私の如きは、年一年と怠惰者の名を廣めて行つた。學校に行く筈の時間が來ても、床の上に寢て居る。又學校に行つたにしても、仲間をかたらつて無駄話に花を咲かせ、教場へは出ないのを、ほこりとしてゐたのであつた。お恥かしい次第だが、學校なんかは眼中に無い、試驗なんかは我が輩の眞價を定むる標準にはならないのだと云つた風な、最も時勢に遲れ、又最も無智で有邪氣な東洋流の豪傑を氣取るところがないでもなかつた。だが連中は口でこそ怠惰者を標榜すれ、閑暇さへあれば人知れずノートに朱線を入れて居る要領のいゝ男達だつたから何時も相應に上位で及第するのに、眞正直に怠惰を極めた私は、學期毎に不出來の度を増して行つたが、遂に落第の結果をもたらしたのである。

其の場合に於ける私程意氣地の無い者はなかつた。口でこそ落第なんか恐れるものか、何も恥

等とする事はない、怠けてゐたあげくに滿足な答案の書けなかつたのは、もとより當然である、と云つたやうな事を云ひながら、腹の中ではひどく悄氣てしまつて、人々の顏の色をうかゞつては自分に對する侮蔑の影が浮びはしないかと思ひ、又其の意味もない會話の中にも、一々針を含んでゐるのではないかと疑ふ念が強かつた。就中、平生行來してゐた友達が、日頃から輕い調子の事は知りながらも、その慰めてくれる文句が餘りにお座なりに過ぎないのを、私はひがんだ心から、人の心の奥底を赤裸々にさらけ出されたかの如く痛切に感じたものである。彼等輕薄才子に我輩の眞價を認むる事の出來ないのはこれ又當然の事であつて、自分に取つては寧ろ彼等に理解されないのが名譽なんだと、根も葉もない處に花を咲かせて大げさに憤りを發したものだつた。

併それはまだしも輕い苦痛であつたのである。私は私が朝に夜に起臥する叔父の家の皆々に對して、自分のひけめから生じたひがみの一層強かつた事實を拒む事が出來ない。

私は成績發表の日の夜食の折に、叔父叔母登志子姉妹と卓を圍みながら、給仕の女中の居るのも構はず、さも平氣らしい聲と態度を以て、

「叔父さん、とうとう落第してしまひました。」

と自分から名のりをあげたものだ。

「フーン落第したのか。」

叔父は箸をやすめもしないで云つた。

「エ、美事に落第しました。」

と私は押を強くした時に感じる根柢の無い滿足を覺えつゝ一座を見廻した。叔母も高子も女中も、輕い驚きをあらはして私を見守つてゐたが、一人登志子は自分の事として恥るやうにうつむいて顏さへ上げなかつた。それに氣が付いた時、私はもう自ら自身を詐り人を僞く態度を全く其處に捨てなければならないと思つたが、卑怯未練な根性から故意と事もなげに振舞つて、さも痛快らしく高笑ひさへ附加へたものだ。

けれども其夜私は叔父の居間に呼びつけられた。なんとなくムシヤクシヤして落着かない胸の中に落第を悔いる念と、目的もなく腹立たしい心とが一時に湧きかへる身を机の前に倒してあかりもつけない暗がりに自分自身を苛んでゐたところへ、母屋からの通ひを靜に踏んで來る足音が折柄うそ寒い土に響いて頼りなく私の身に沁みた。

「修さん、お父さんが呼んでゐますよ、一寸いらつしやいつて。」

登志子は上り口の柱につかまつて、室内を覗きながら憚るやうな聲で呼びかけた。

「ハイ只今。」

私はいかにも故意とらしいと感じた程勢よく立上つて、登志子よりも先きに立つて母屋へと歩いて行つた。しかし心の中では、叔父の小言がもう既に耳の邊りにある事を思はないわけにはいかなかつた。

扨て叔父の居間の襖をあけると、今迄暗い室に居た爲めに一際かゞやかしい電燈の光に眼を射られたが、果して叔父が不機嫌だつた事は、勿論直感したのである。

「叔父さん、何か御用ですか。」

私は默つて睨んでゐる叔父に對して、上から見下されるやうな、ゐたゝまれなさを覺えて、早く如何とかなるやうになれと、此方から斯う口を切つた。叔父はゆつくりと二三服烟草を深く吸つては濃い烟を吐き出したが、思ひなしか強く烟管をはたいたと思ふと此方に向き直つた。

「お前は落第してくれたのか。」

と苦々しさうに云つた。

「ヱ、先刻程申上げた通りです。」

と云つて叔父を見ると厭な顏をして見守つてゐたので、てれかくしに又附足した。

「名譽の落第です。」
「馬鹿ッ。何が名譽だ。落第を名譽と心得てゐるのか。いゝ加減な負惜みを云ふな。」
「イヤ負惜みではありません。勿論僕だつて落第をほこるのではないのですが、しかし父たつた一度や二度の落第を一大事かなんかのやうに恐れる事は無いと思ひます。」
「お前は恥かしいとは思はんのか。」
「思ひません。一體僕は今の學校の制度が嫌ひです。自分が必要だと思ひもしない學課を強ひられて、貴重な時間を費やす事は目的のある者には徒勞だと思ひます。それなのに試驗と云ふ投機に類した制度を設けて、各學生の才能の在る所を知らうとはせず、一定の型にはまる事を嫌ふ者は落第させるなんて間違つた事だと考へます。僕は試驗の爲めに勉強するのは厭ですから落第しても構ひません。その代り自分の目的に向つて不斷に進んで行かねばならない事は一時たりとも忘れはしません。長い一生から見て、他人が不名譽だとする落第の如きは、なんでもないと思ひます。」
私は例の如くしやべつて居るうちに、何かしら云ふ事が殖えて來るので、それを上手に纏める爲めにかなり努力はしながらも、浮ぶがまゝに調子に乘つて辯じ立てたが、フト叔父の樣子に氣

が付くと、思はず口をつぐんだのである。さうして苦り切つた聽人の意中を想像して居寒く思つたので、私も默つてしまつたから白け切つた室の内に身の置所がなくなつた。

「もう演說はおしまひか。」

と暫時たつて云ひながら、叔父は私をヂロリと見た。

「それぢやア今度は此方から辯じよう。」

と錆のある太い聲を殊更落着けて、

「お前は今、自分の目的の爲めには常に努めてゐると云つたが、目的とは何だ。——度々お前に聞かされた、何とか云つたつけ、理想的政治家になつて社會の爲めに盡す、朽敗しながらも存在するものこ總て打破して新しい社會を形造り、眞に國家の爲め人道の爲めに一身を捧げる、とか云ふのだつたよ。それもいゝ、どうせ年をとれば空想だつたと氣がつくだらう。しかし其の理想的政治家とかになるにしても土臺を築いて行かなければ駄目ぢやアないか。一足飛びに成れるものなら誰が苦しんで勉強なんかするものか。成程學校で敎へる事はお前の云ふ通りのものかもしれんが、學問は現在直接に必要はなくても人間其の物をつくる上から云つたら第一に必要なものではないか。何事をするにしても人間として偉くなければ駄目だ。」

「ですが人間の偉い偉くないは、知識のある無しで決せらる可きものぢやァないと思ひます。」
「無論の事だ。だが知識がなくて何が出來る。土百姓に國家の行政が司れるか。」
叔父はさも云ひ得て滿足したと云ふ態度で、
「俺はお前のお父さんから呉々も頼まれてゐる。修吉の事は萬事頼んだ、と死ぬ間際迄云つてゐた。俺はよろしい引受けた、一旦引受けたからには必ず立派な人間に仕立てゝ見せると受合つたので、お父さんも安心して死んだのだ。それが未だ二三年とたゝない中にお前は落第なんかしてくれた。俺は亡くなつた人に對して甚だ相濟まん、申譯がないと思つてゐる。勿論俺とても、お前が以前のやうに勉強しなくなつた事は氣がついて居たが、もうその年になつた者を、子供なみに勉強しろ勉強しろとうるさく云ふ事も出來ないし、又云つても利目のない事たと思ふから、今日迄何も云はないでゐた。けれどもまさか落第しようとは思ひ掛けなかつたよ。叔母さんなんかは涙を流して口惜しがつてゐる。――がくどくは云はん、お前とても氣がついたらう。これからウント勉強して、偉い人になつた後には始めてお前の云ふ通り、たつた一度の落第で人物の價値をはかるのは間違ひだと云ふ事が出來るのだ。どうだ一つ來年は優等にでもなつて見せないか。」
私は言下に答へてやつた。

「優等なんか御免です。僕は所謂偉い人になんかなり度くないんです。」

「そんなら何になるのだ。」

「イヽエ僕の偉い人と云ふのは叔父さんの云ふのと意味が違ふかと思ふんです。たとへば僕は高位高官紳士紳商を偉い人だとは思はないのです。それよりも、先日も參觀して來た下谷萬年町の特殊小學校の校長のやうな人を、遙に偉い人として尊敬します。何故ならば、前者は私利私慾を滿しつゝ偶然富又は爵位を得たのに反して、後者は初めから人の爲め、殊に貧しき人々の爲めに自己一身の利益を放擲してゐるのだと考へます。」

「それぢやアお前も萬年町の小學教師にでもなるのか。」

叔父の語氣の強くなつた丈私もキツパリと云ひ切つた。

「なるかもしれません。」

「默れ。云はして置けば落第を恥とも思はんで筋道も立たん事をペラペラ述立てるとは何事だ。そんな心得でゐるからは、何時卒業出來るかわかつたものぢやアない。」

苦々しげに云つたかと思ふと一段聲を落してかうつぶやいた。

「誰がお前のやうな奴に可愛い娘を呉れるものか」

私は電氣に觸れたやうに、此の最後の言葉に打たれた。

「そんな事は御勝手です。僕には僕の考へがあります。」

と云つて一つ頭を下げると手荒に襖をあけて廊下に出た。其の時、今迄襖の外にゐたらしいのがあわたゞしく遠ざかつたのであらう、二階へ上る梯子の口に足早に消えた叔母の姿を見た。それから自分の室へと縁側を踏んでゆくと、茶の間の障子の腰障子から、室の中に何か讀書してゐる登志子の姿を認めた。向ふも私の足音にあかりの映る白い顏を、フト持上げて何となくニッコリして見せたが、私は聲も掛けないで自分の室に飛込むと、そのまゝ又暗がりにぶつ倒れた。

すべてが癪に障つた。第一に叔父に對して反抗心か燃え立つた。一體何時自分が登志子を貰ひ度いと云つたらうか、向ふが勝手に極めて――それはもう想像ではなくなつてゐた――ゐるのではないか。今更やるのやらないのと、いゝ氣なせりふがよくも云へたものだ。貰つてくれつたつて、誰が貰つてやるものか、と一人でいきまいて、果して叔父は自分の娘を指してあの言葉を云つたのか、或は一般の親に代つて云つたのか、どつちだかわからないと云ふかすかな反問も起つたけれど、これは全然否定してしまつたのである。

恰度其の頃、叔父一家の者は法事を兼ねて家中揃つて歸國する事になつたが、かう一家揃つて、

故郷へ歸る事は幾年振りと云ふのであつたから、暫時の留守は私があづかる事になつた。私は此の時こそとばかりに日頃の理想を實行して、車夫や女中達と毎日の生活を全く一致させ度いと思つた。何故に自分ばかり座敷で食事をし、彼等は臺所の板敷にかしこまつて膳に向ふのか。何故に自分のみ魚を喰べ獸(けだもの)の肉を喰ふ時、彼らは大根、胡蘿蔔(にんじん)を嚙つて止むのであるか。私はそんな事が氣になつて、彼等と食卓を共にせんと強ひて座敷へ上がる事をすゝめたのであつたが、習慣(ならひ)性となつて卑下する事のみを知る輩(やから)はどうしても諾(がへん)じないので止むを得ず、此方(こつち)から臺所の板敷へ膳を持つて出向く事にした。それを私は大なる善行として、心中非常に得意だつたが、車夫や女中達は勿論難有(ありがた)迷惑だつたに違ひない。後に聞いた事であるが、女中達は三杯喰べるところなら二杯でひかへる程氣づまりだつたと云つたさうだ。

兎に角私は一人天下で暮してゐた。人氣(ひとけ)少ない家の內は物寂しく、自分自身を持てあます徒然(つれづれ)に一年の中最も心地よい頃であるのを、惜氣もなく寢ころんで何もする事なく送るのであつたが、かゝる時フトした事のきつかけから一生の悲喜哀樂のさまざまが生れる事は、我が泉先生の筆を待つまでもなかつた。

日曜の朝の事である。叔父の留守中は母屋の方に寢て居たが、身內の骨迄も暖かに蒸されるや

うに、春より夏へ移りゆく頃の、苦しい程ものうい朝の床に眼覺めると、旣に雨戸のうすい板目は血のやうに半分透いて見え、すき間をもれる日光は暗い室内に籠つた重く寢ぐさい空氣に細い線を引いて忍び入つてゐる。目は覺めながら起出る氣力もない身體を、強ひて起さうとする心もありながら、又もまどろまうとするのであつたが、あまりに夜着の暖かさに腐つてゆくかと思はれる身内の熱をさまさうと、漸く緣の雨戸を二三枚あけると涼しい風は庭の繁みから冷々と通つて來る心地よさに、私は再び床の上に横になつて何を思ふ事もない肉體の喜びを味つてゐたが、いつしか又もウトウトと夢うつつの中に陷つて行くのを如何する事も出來なかつた。

乍併それは夢ではなかつたのである。私はフト物の聲に驚いて、うつとりした眼をあけて四圍を見廻さうと思つた時、

「まだおよつてゐらつしやるの。」

と云ふ女の聲をはつきりと耳にした。

私は其の時呆然として眼を上げたばかりだつた。誰が其處に靜江を認める事を期待し得たであらう。夢だと思ふのが當然であるが、しかし其の立姿は夢としてはあまりに明かなものであつた。

櫻は旣に散りつくして、庭の若葉の綠の色も日に濃くなりまさる頃であつた。其の綠の中

に一杯庭に植込んだ山吹の花が、輝やかしく朝日の中に咲き亂れてゐるのを背景にして、丈高い靜江は目の覺めるやうな紫の華美な矢絣を着て、二の腕の血の透いて見える迄なよやかに白い絹傘をさしたまゝ緣に近く立つてゐた。

「隨分お寢坊さんね。」

と靜江は輕く笑顏を見せたが、會釋すると惜氣もなくクルリと彼方を向いて紅の帶の結目高き後姿を一瞬間、まぶしい初夏の朝の庭に止めたが、見向きもしないで飛石を傳ひながら玄關の方へと導く枝折戸の外に消えてしまつた。

私はあわたゞしく飛起きると緣端に馳出して延上がりつゝ見送つたが、もう其の姿は見えなかつたけれども日ざしのうらゝかな足下の緣の板敷の上に、白く殘された結び文の落ちてゐるのを見止めたのである。手に取りあげて開いて見ると、若い女とも思はれぬ程達者な手で、

此頃は皆々樣御留守にてさぞかしお寂しくゐらせられ候はんと存じ上參らせ候。花も散り候永き一日を如何ばかり御徒然におぼし給ふらん、折を得て御機嫌伺ひに參上致度存じながら思ふにまかせず候。面白き御話承らん事も登志子樣御歸りの日にこそと、たゞたゞそれのみ待たれ申候。

と書いてあつた。私は非常に心嬉しく思ひながら、如何して靜江がこんな手紙を、庭口からわざわざ自分で持つて來たのかを訝からずにはゐられなかつた。短い文句ではあるが幾度も幾度も繰返して讀む中に、私は暗誦じてしまつたのであつた。

その日の夜、私は見馴れない手跡の封書を受取つた。開いて見るとそれは又思ひもかけぬ靜江からの再び私へ宛てたものであつた。

今朝はお驚きになつたでせう。私はたゞあのやうな事がして見度かつたので御座います。朝露に濡れたお庭の山吹が大層奇麗で御座いましたこと。一枝頂き度いと存じましたのですけれど登志子樣がお留守ですからお許しもなく折取るのも氣がとがめましてやめに致しましたの。登志子樣は何時頃おかへりになるのでせう。登志子樣と二人で貴方樣の面白いお話を伺ひ度いと思はない日は御座いません。

こんな事を申上げては失禮かもしれませんが私は自分の思つた事はなんでも云つてしまふたちですからお轉婆な女とおさげすみなさらないやうに願ひます。

また手紙を差上げてもよろしう御座いますか。

何の意味も無い女の手紙に私はさまざまの深い意味を附加へて、息も震へる胸のをのゝきを止

めかねたが、少しの躊躇もなく私は私の筆を取つて、手紙は大變嬉しかつた、實際相手がなくて寂しい、登志子がゐなくとも構はないから遊びに來てくれ、と云ふ意味を書いた。さうしてそれを往來に出て郵便函の口から差入れて、カサカサと函の底へすべり落ちる音を聞いた時、始めて私は目が覺めたのである。

それはたとへ先方から初めに寄越したのであるにもせよ、かりにも若い娘のところに手紙をやるのは考ふ可き事だつた。その兩親が知つたら何と思ふだらう、勿論私は靜江の音信に答へた迄の事だから、見られて困るやうな事は書いてありはしないのだが、矢張り男女七歳にして席を同じうせずに養はれた身だから自己の感情を世間の爲めに枉げる事は恥辱だと思ひもし、公言もした私も、此の際冷めたい他人の眼が四方から睨んでゐる事を感じないわけにはいかなかつた。私はよせばよかつたと思ふ想ひに責められながら、朧に暖かい夜の街を何時しか靜江の家の前に足を向けてゐたのであつた。門の扉は閉されてゐるけれども、家の內からは賑かな人聲がはつきりと聞えて、心亂れたる私にはそれさへひどく不安を增すのであつた。私はどうしても此處に待つてゐて、先刻の手紙を持つて來る郵便脚夫をつかまへて、取返さねばならないと思つた。

翌日もなほ昨日の行爲を悔みつゝも、やがて來るべき何等かの結果を恐れながらに待つてゐた

が、その夕ぐれ又しても靜江から手紙が來て、

あなたから御手紙を頂いたのは始めてゞ御座いますのねえ、私大變嬉しく拜見しましたわ。

と書き出してありながら、最後に彼女はかう云つてる。

こんな事を申上げては失禮ですけれど此後私に御手紙を下さらないやうにお願ひ致します、父や母に見つかりますとあらぬ事を疑はれますから。大變勝手な事を申して濟みませんお怒りになつてはいやよ。そのかはり私からは度々差上げますわ。

靜江は書けば上手な文章を書いたけれども、私にとつてはこのやうな碎けた手紙が一層嬉しかつた。世の中の女學生と云ふ階級に屬する女が好んで用ゐる厭味つたらしい一種の文體も、靜江によつて書かれた時は、少しも厭だと思へなかつたものだつた。

實際靜江は、あの庭口から這入つて來て私を驚かしたやうな事は二度と爲なかつたが、手紙は度々寄越すのであつた。それが何を報ずると云ふ事もなく、いろんな事を書いて來たが、何時も表書は男らしい字を上手に眞似てゐた。

間もなく叔父の一行が歸つて來た。寂しがりの私としては限り無く喜ぶ可き筈だつたのに、うらぎり初めた私は、喜ぶよりも寧ろ眉を顰め度い心持の働くのを感じて、自分自身を許す可から

ざる男として憎んだのである。臆病至極な私には、登志子の前で靜江を見る事は、一方ならぬ勇氣を必要とした。夜毎復習の教場は應接間ときまつてゐた。私は扉にかけた手の縮みがちなのを強ひて押したが睦じさうに椅子を並べて、二人は私を待つてゐた。

「町野さんにも久濶御目にかゝりませんでしたのねえ。」

と靜江はお低頭を濟すといち早く挨拶した。私は意外な女の言葉と態度とに打たれて、何とも云ふ事が出來なかつた。

　靜江は相變らず朝毎に登志子を誘ひに來るのであつたが、私の室の往來へ向いた出窓から文を投込んで行く事も度々あつた。それを拾ひ取つて見る時に、私は人目を忍ぶ祕事の面白さを深くも思ひ知つたのであるが、又何も知らない登志子の事を考へると、恐ろしい罪を犯してゐるかのやうに、大なる苦痛を胸に抱いたのである。さうして登志子の前でも平氣で口をきく靜江には似もやらず、私は得意の鼓吹癖さへ失つたやうにいぢけてしまつた。

　靜江の手紙は次第に思ひ切つた事を語るやうになつた。私はその文に籠めたる情の濃やかさに抗ふ事は出來なかつた。

　……何故此の國の少女は戀しき人を戀しと云ふ事さへも許されない哀れな身の上に置かれて

居りますので御座いませうか、私には解りません。

私は夢にもうつゝにも去らないその御方のおなつかしきお姿を束の間も忘れる事が出來ませんで此の頃は身も心も日に日に痩せ細るかと思はれます。それなのに私はその御方に思ふ想ひを打明ける事が出來ませんの。私も意氣地の無い心弱い此の國の少女の一人で御座います。私はそれが苦しくて苦しくて耐へられませんでお千鶴さん――貴方は未だ御存じないでせうが私の從姉で私とよく氣が合つて二人の間には何事もかくさない間柄なので御座います――丈には胸の惱みを聞いて貰ひました。大變同情してくれましたけれどもそれが何になりませう。私はどうしてもその御方を忘れる事が出來ないので御座いますもの。私は何故こんな事を貴方にお訴へしてしまつたのでございませう。

から云ふ書き振りの手紙を見て尙且平靜なる自己を保たんが爲めに僞れる態度を執る事は到底私のよくする所ではなかつた。私は旣に心の中に於て我が戀人は靜江の他にないと思ひ決めたが、そんなら登志子を如何するのだと、他の心が責問ふのであつた。空漠とした觀念から戀愛の神聖を信じ、熱烈なる戀の心は一人に向つて燃えさかる可きものであつて、同時に二人の想ひ人を有するのはそれは卑しむ可き事であると、私は確く思つてゐたから、嘗て登志子を未來の妻だと思

つて愛したのは、まだ眞に戀する心になつてゐなかつたのだつたと、強ひて考へて安んじようとしたが、現在靜江に戀しつゝ、しかも登志子を忘れ得ないのは、私に取つて自ら許しがたしとする大なる苦痛であつたのだ。さうしてかゝる右にも左にも、思ひ切つては馳出せない心の狀態に耐へられない私の性分として、無理にも迷ひのない煩悶のない自分をこしらへあげなければならなかつたので、私は登志子に對して何等愛憐の情もない事を、自分自身に證明する爲めに殊更つれない態度を取つたものだ。私は登志子の姿を見ない事を祈り、登志子に聲をかけられるやうな機會の全く消え失せん事を念じつゝ、故意と返事もしないでその前を通り過ぎるやうなしうちをして、いかにも自分は彼女に對して邪慳であると云ふ滿足を得ようと努力したが、これも亦うらぎる心の爲めに徒らに自己を苛む原因となるばかりであつた。

しかし私は靜江の手紙によつて、彼女が私に戀してゐる——かう思つた時は自分ながら氣恥しかつたが、 のは今は疑ふ餘地もない事を知つた時、ときめく心を押へつゝ、何氣ない風でかう書いた。

　清き戀を誰に恥ぢ誰に憚かる必要があるでせう、僕は敢てかう云つて貴方の意氣地のない事を笑つてあげ度い。僕は御存じの如き價値のない人間です、けれども美しき戀愛に對して同

情の無い男ではありません。否、おせつかいにもその戀の成就の爲めには火に燒かれ水に飛入る事をも敢て辭さない熱情を有してゐます。貴方は今或る人を戀してしかもその人に想ひを傳へる事の出來ないのを歎じてゐらつしやる。勿論僕はその胸中の苦悶に對して同情を有してゐますが何故貴方は其の人にむかつて眞情を吐露しないのですか、何卒僕を心の友として貴方の苦しき胸中を明かに語つて下さい、乍不及僕は貴方の御相談相手になりますでせう。

實に厭な事を書いたものだ。けれども其の當時其の場合に於ては、嬲殺しに逢ふ間の長き苦痛を忍び得ずして、かくの如き空々しい圖太さを以て押掛けた私を、哀れと見て許さねばならぬ。

勿論此處に至つても心中二の足を踏みつゝあつた事は、私として當然の事であつた。

私は登志子の目を忍んで、手紙を靜江に手渡した。折返へして女は何と云つて來たか。それは長い長いものであつたが、

……私の力になつてやらうとの仰せ嬉しくお言葉にすがつて私の胸の中殘らず御耳に入れ度き念はしますのですが思ひ返せば申しても甲斐なき事故私一人の苦しみとして長く胸の中に祕め置く事と致しました。實は其の御方には幾千代迄も變らじとお誓ひ遊ばした許嫁の方がおありなさるのです。その許嫁の方は私のお友達でそれはそれはお美しいお優しい方なので

ございます。それなのに私は思ひ切る事が出來ません。あゝ私はいかばかり罪深い女なので御座いませう。

といふ一節があつた。

靜江は其の間にも毎晩變らずに本包をかゝへては通つて來たが、登志子の前では些かも心亂れた樣子も見せないで、私にも臆しもせず別に心置きもない以前の通りの態度で接するのであつた。そして時間を見はからつて迎ひに來る女中を待つて歸つてゆくのであつたが、その落着いた取濟した平然たる相手の樣子は、反つて私の熱心に薪木を添へるものであつた。私はいつも苛々して、近寄りがたい靜江に無理にも迫つて、その袂を捕へつゝ生殺しの苦しさを救ふとも或は又一思ひに息の根を絶つてくれるとも、どつちにしろ手つとり早くかたをつけて貰はうと、もがくやうにあせつたが、如何してもその機會をば見出す事の出來ないのと、いざとなると挫けがちな心弱さに疲れるばかりであつた。

その年の夏も次第に迫つて來て、デリデリと暑氣を増して行く晝の間の苦しさに引きかへて、風の通ふのが汗に疲れた肉體に沁みて、初めて甦へる思ひをする涼しい夜を待ちかねる時候となつた。

或夜、靜江の家から涼みがてらに遊びに來てくれと云ふ使ひが來て、登志子と共に私も呼ばれて行つた。私は其の日暑氣當りか、少し身體の具合が惡かつたにも拘はらず、ひそかに嬉し喜んで出掛けた。風通しのいゝ二階座敷に、デツプリ肥つた父も、以前の偲ばれる姿のいゝ母親もまじつて靜江の弟妹達と他愛もない、骨牌遊びに興じたが、その中に初對面の紹介をされた十八九の娘があつたが、それが靜江の從姉だと云ふ千鶴子だつた。擧動の派手で仰山な、一寸した事にも誇大な表情をする、眼の大きい平顏に憚りもない厚白粉を、私は不愉快に思つたのである。

兎角するうちに、私はシクシクと腹に痛みを覺えて、初めの間こそ中座をしては惡いと思つてゐたが、遂に耐へ切れなくなつて、少し氣分が惡いから自分丈先きに失禮する、と云ひ出した。登志子もそれでは共にと云ふのであつたが、これは靜江やその父母に强ひて引止められて殘る事になつた。その時、

「私は家が遠ござんすから其處いら迄御一緒に參りませう。」

と突然千鶴子が云ひ出した。さうして一應は家族の者の口々に止めるのにも構はず、私の後から格子を出た。

「マアいゝお月夜ですわねえ。」

と馴々しく云ひながら、千鶴子は私に近々と寄添つて歩き出した。白粉の匂ひや香料の香りが迫つて、夜目にも白過ぎる顔が肩に擦れ擦れになるため、私は自然と逃身になつて溝のふち迄押されるやうになつたが、女はなほも身を寄せて來るのであつた。二人の影は青白い月光の流れた土の上に濃く長く恰ももつれあふやうにして小路へと曲つたが、其處らの家の門涼みの人々に好奇の眼で顔を見られるのが、私をして一層おぢけさせてしまつたのであらう。私は歸へる可き門の前で別れの言葉を云つたにもかゝはらず、

「もう少し先き迄送つて頂戴な。」

と臆面もなく云ふ女の圖太さに壓服されて、腹が痛んで困ると云ふのに、無言のまゝ従つて行つたのは、吾ながらだらしのない事だつた。

「町野さん、貴方は靜江さんを如何お思ひになつて。」

突然暗い杉垣の道で、千鶴子は更にピツタリと寄添ひつゝ、大きな眼に情をふくませて近々と私の顔を覗き込んだ。肉豊かな胸に盛り上がる乳房の柔かさを私の胸に感じた時、どう云ふものか螫服してゐた私の疳積は、平べつたい女の横つ面を張り飛ばし度い程煮えかへつた。

「あの人は泣きながら私にすつかり打明けました。貴方、可哀さうだとお思ひにならなくつて。」

再び女が媚をふくんだ顔で振り仰いだ時、私は臆病な憤りに震へつゝ、
「僕は何にも知りません。貴方なんか餘計なお世話ぢやアありませんか。」
と嚙みつくやうに云つたものだ。さうして女を突飛ばすやうに押のけると、
「待つて頂戴……」
と戯曲的な泣聲ですがらうとするのを振拂つて一目散に馳け出した。
私は腹痛も忘れて、燈火もない室に忍び入る月あかりの中に幻を描いてゐた。しかし何もまとまつた事は浮んで來ないで、はげしい渦を巻く今宵の出來事が頭の中を馳廻るのであつた。私は靜江をさへも、その時ばかりは憎いと思つた。千鶴子のやうな女に力を借りようとした、その行爲を不滿に思つたのであらうが、又あんな厭な女と從姉同志だと云ふ、切つても切れない血縁を有して居る事實さへ癪に障つたのであつた。
登志子は迎ひに行つた女中と共に、やがて夜更けて歸つて來た。母屋へ行く前に私の部屋に訪れて、
「修さん御氣分は如何。」
と入口から顔をさし入れて聞いたが、私の返事が遲かつたのでソツト疊に上つて來た。

「もう何ともない。あんまり月がいゝから床も取らないで寝ころんでゐた。」

私は何事もなかつた顔をして起上つた。

「ソウ、そりやアよかつたのねえ。私は今晩はちつとも面白くなかつたわ。――修さんあの千鶴子さんて方ね、女優志願なんですつて。」

「ヘエヽ、あの面でかい。」

「アラ、あんなひどい事。」

登志子は氣にも止めないで、立上ると、

「修さんももうおやすみなさいな。」

と言葉を殘して去つた。

私は其の時しかく罵つて憚らず、嘲つて嘲り足りないと思つたその千鶴子が、數年ならずして今日、日本の女優として文士先生方の渇仰措かざるところとなり、名聲の高き事その平べつたい顔と低い鼻を覆ひかくしてあまりあるに至つては、たゞたゞ我輩の先見の明なかりし事を恥るのみである。

閑話休題。我が戀は更にその焔を消す事なく燃えさかりつゝ眞夏に入つた。私はフトした氣

まぐれから、夏知らずだと聞いてゐた北海道に旅行しようと思ひ立つて、試驗が濟むと直ぐ、たつた一人で出かける事に決めてゐた。その話は勿論靜江にも聞かしてあつたが、思ひがけない一幕を又しても彼女の爲めに演じようとは誰か思はう。私は其の朝身輕い旅の支度をして、まだ朝露に濡れてゐる上野の停車場の、うす暗い構内に發車の時刻を待つてゐたが、やがて改札口から人々がなだれ出る列にまじつて、私もプラットフォームへ出ようと云ふ時であつた。あわたゞしい聲をひそめて、かけ寄りながら私の肱を捕へ、

「町野さん。」

と云つたきり息せきつゝ寄り縋つたのは靜江であつた。

「私も連れて行つて下さい。」

と我儘な事を、どうせ駄目だと知りつゝ云つて笑つた。上野を出る汽車に特有の、土に親しい顔をした、うす汚ない連中は、目覺しい靜江のなりふりと、その場の様子の變なのに氣をひかれて、不遠慮にポカンとした眼をすゑて見守るのであつたが、氣がねがちな私にヒタと寄添つた靜江は反つて落着いたものであつた。

二人は無言で立つてゐたが、間もなく汽車は北へ向けて遠く出て行く時となつた。私は窓から

顔を出して、叉しても無言に靜江と顔を見合せたが、鋭い汽笛が吹鳴らされると、彼女は待構へてゐたやうに、帶の間から一封の書を取出して、

「これを御覽下さい。」

と云つて渡した。汽車は直ぐさま動き出した。私は別れて行く寂しい心持で、プラットフォームに立つて見送る靜江の姿の消える迄、首を延して見てゐたが、始めて一人腰掛けに落着いた時、油然として前後のわかちもなく湧起る疑念と恐怖と喜悦と、其の後に來る疲勞とに身を任せるほかはなかつた。

すべてが夢ではなかつたか。あまりの事の意外さに打たれた反應のない心狀から、私は靜江が此の朝早く上野迄も見送りに來た事を怪しみ驚くよりも、寧ろそれが當然の事でゞもあるかの如く平然と別れたが、それは云ふべき言葉を知らなかつたからであつたかもしれない。それがしきりに物足りなく思はれて私は何故、少なくとも靜江の柔い手を握りしめて、心の底より湧出る別離を悲しむ念(おもひ)にひたらなかつたかを悔(くや)んだ。けれども何ものをも恐れず、あゝして別れを惜しみに來た今朝の靜江は、それ迄は半ば信じ半ば疑ひつゝあつた我が戀に、最早疑ふ可らざる立證を與へたものであると思ふと少なからざる安心を得て、私は先刻(さつき)から手の中に、渡されたまゝ固く

握つてゐた彼女の手紙を開けて見る餘裕を得たのである。

暫時(しばし)なりともお別れは悲しう御座います。何處迄(いつこ)も御伴して樂しい旅をする事も思ふに任せぬ女の身は又しても歎かれるので御座います。けれども私は貴方が旅へお出掛けになる日を何故(なぜ)か心嬉しくも存じて居りました。何故でせう。

私はかねてから是非とも聞いて頂き度いと思つて居りました胸の想ひを目の當り貴方の御姿に接したり又は翌日御目にかゝるのかと思ひますと言葉でも手紙でも申上げかねて一人苦しんで居りましたが貴方が遠き旅路へ御出ましになれば暫は御目にかゝる折もなき事と存じましてかへつて心強くなりました。それでも私は幾度取上げた筆をあだに投捨てましたでございませう。けれども亦私の心は如何しても思ひ切る事が出來ませんのでした。何卒哀れと思召してなめげなる私をお許し下さいませ。私は思ひ切つて申上げます。私は何時からで御座いませう、誰にも知らさずに貴方をおなつかしく存じて居りました……

私は待つて居た日の來た事を強く感じて息も詰る思ひにむさぼり讀んだ。繰返へし繰返へし長い手紙を、胸を突く感激に耐へかねて涙に曇る眼で讀んだ。

……北海道と聞けば熊狼の他には人も棲まぬ土地(ところ)らしく今も尚思はれますがその怖ろしい土(とこ)

地にさへ私はお伴して參り度くてしかたがございません。よしや猛獸の餌じきとなるとも貴方と御一緒で御座いましたら熊狼のお腹の中で魂と魂は相抱く事が出來るでございませうと存じまして。

私は最後の一節に更に烈しい感激を覺えて、文を持つ手の震へるのを止める事が出來なかつた。さうして此處に吾等二人の天地が、初めて開かれたやうに感じた。その際にも頭にまつはりつく現世の羈絆、社會も道德も法律も習慣も吾らが爲めに何するものぞ、そんなものはあつてもなくてもかまはない、塵芥に等しいすべての制度情實は、二人の胸に燃ゆる火によつて燒き盡さる可きものであつて、然らずんば相互に相抱きつゝ吾ら二人がまゝならぬ世を捨てるばかりだ。梅川と忠兵衞と、小春と治兵衞と、おさんと茂兵衞と。――吾等も亦美しき死を讚美するものであると、私は末の末迄も一瞬に頭に上つて來る混亂に狂ひつゝ、死を賭けても靜江を得る事を誓つたのであつたが、然らば何故に上野驛にて物言ふ事もなく立別れたのかと、フト思ひ責めた時、あゝ寂寥は我が傍に冷く寄添つてゐたのであつた。

旅の話は割愛しよう。青き山青き海青き野原青き御空、日光と月光と曉と黃昏と、すべて我身をつゝむ自然に對して私は嘗て知らなかつた喜悅と悲哀とを感じたが、それも靜江にかゝはつて

ゐる事は云ふ迄もないであらう。私は旅の途すがら靜江の上を想ひ續けてゐた。今は自分の目的は單に彼女を得る事であつた。歸京の上は如何なる手段方法によつて、その目的を達しようかと若々しい希望に血を漲らしてゐたが、又一方から云ふ時は、それ程に思はれて來た靜江の居る都を遠く離れた事が、限りなき悲哀を覺えしめるのであつた。青森から船で函館に渡り、森から小樽へと旅程は延びて行つたが、更に札幌、岩見澤、旭川と、志した行先きの爲めに、東京から送つて來る筈になつてゐる旅費を受取らうと、小樽の郵便局へ赴いたが、私は金子と共に不吉な電報をば、其處で受取らねばならなかつた。さうして私は其の日の中に、あわたゞしく歸途につかねばならなかつた。

事多かりし其の年の夏は、我が身を育てた我が祖母の老い疲れた身體に重き病をもたらしたのであつた。私は直ぐ歸國せよと云ふ電報を握りしめて、夜も晝もうち續く汽車の旅に、二日三日にゲツソリと憔悴して、東京へ着くと又急行に身を乘せて故郷へ馳けつけたのであつた。嘗て父の危篤に急行した時の悲しかりし記憶は、生けるが如く再現して、此の世に於ては到底もう祖母に逢ふ事は出來ないであらうと思つたが、瀕死の床にも心丈夫な祖母は、

「修吉はまだか。」

と附添ふ者に幾度となく尋ねつゝ、愛孫の來る事の遲きを恨みとしてながらへてゐた。

「おばあさん。」

と云つたきり、私は此の日頃の遣瀨ないかきむしり度い胸の中を、此處に漸く托す事が出來たとばかり、人の見る目も憚らずヒシとばかりに縋り付いた。

「修吉の事は叔父さんに賴んである。お父さんが叔父さんと約束した通り、末は登志子と一緒になつておくれ。」

と骨立つた手で私の手を握つて云つたが、祖母の病は間もなくあらたまつて、

「修吉修吉。」

と云ひつゞけて其の曉方に死んでしまつた。

私は呆然として、忌日を濟ますと再び東京へ出て來たが、祖母が臨終の言葉は冷く胸に彫られてゐて、初秋の風はいとゞ身に沁む思ひがした。さうして私の孤獨を哀れんで一層親切にしてくれる叔父叔母にも、淚を流して悼んでくれた登志子にも、私は常に濟まないと思ひつゞけて、一家の集りにはなるべく顏を出さないやうにしてゐたが、人々は祖母に別れた悲しみに、憂ひ沈んでゐるのだとばかり思ひ込んで、反つて親しい言葉をかけてくれるのが、身を斬られるより苦し

かつた。又、靜江の今は全く私に對して、距てが無くなつて、何時なりとも身も魂も捧げようと云ふ態度を見ると、私は激しい熱情を煽られると同時に、云ふ可からざる苦痛の伴ふ自己憎惡の念に責められるのであつた。

これよりさき、私は落第した心のひがみから、自分の方から年來の友達の多くにも遠ざかつてゐたが、いかにせん生來一日たりとも相棒がなくてはゐたゝまれない三下奴根性から、一時は傲慢なる變物として蟲の好かなかつた彼の宮部に近寄つて行つたのも、私として無理の無いところであつた。私は屢々彼を尋ねては、相手になつてくれてもくれないでも構はずに、不平を聞かせる道具につかつたが、彼も亦學校嫌ひの落第坊主であつたから、それが反つて心置きなくさせたものであつたらう。凡そ交際と云ふ事を知らない、愛想もこそもない男なのに、彼の酒客が海膽海鼠腸をたしなむたぐひであらう、變物の味は又格別で、馴染むに從つてなつかしくなつたのも、要するに絕ちがたき心の悶えから、手あたり次第に縋りついたものだつたのに違ひない。兎に角屢々一緒に歩いたり、語り更かす事が多かつた。

或日も彼と、目的もない散歩に出て、ブラブラ歩いてゐたが、とある小路を出るとその町角の出合ひがしらにバツタリ會つたのは、女中を一人伴に連れた靜江であつた。咄嗟の間に會釋して、

そのまま行き過ぎたが、彼女に對して宮部も亦、輕く頭を下げたのは少なからず意外であつた。彼が彼女を知つてゐようとは今日迄つひぞ知らなかつた。

「君は彼女を知つてるのか。」

と私は構はず聞いてやつた。

「知つてる。妹の小學友達で先のうちはよく遊びに來たものだつた。お轉婆でね。それが今ぢやアおつに氣取つて歩いてらあね。」

振りかへつて見送ると、絹傘に日が輝きつゝ、道の柳に消えて行くのであつた。

「其の後妹は別の學校に通ふやうになつたものだから、自然とうとくなつたが、近頃ぢやア怖れてるよ。彼女アなかなか評判者だつて云ふぢやアないか」

批評家は持前の憚りもない口を利くのであるが、私の耳にはひどく不快に響いたものだつた。宮部の妹と登志子とは何故知己でなかつたかと云ふと、丁度前者が轉校した頃、その家が芝に越して來たので、後者は新しく入學したのである。

其の夕べ、氣まぐれに私は宮部に誘はれて他所で食事をしたが、元來私は酒と云ふものを、哀れなる勞働者が心身の疲勞を忘れんとて、せめてもの心やりに飲む場合には、これを同情して許

すとするも、本來人の精神を亂るものであつて忌む可き奢侈品に屬するものと信じてゐたから、一杯の盃も口に觸れなかつたが、結んで解けぬ鬱悶に耐へかねてか、矢張り其の夜の氣まぐれか兎角して二つ三つ酌がれるまゝに盃を干した。酒は勞働の効果を増す爲めにも、時には必要であると云ふ說を、詭辯として信じなかつた私は、酒の力に嚇として、眼はチラチラと灯にかゞやき、少し苦しい息ながら、舌はしきりに滑かにして何等か氣焰を上げ度くなり、ヂツトしてゐるに耐へられずして、日頃からの高聲を又一調子張上げて、フンフンとうなづくばかりの宮部を聞手に辯じ立てたが、如何にせん勞働問題よりも戀愛問題は、旣に絕大の力を以て私を捕へてゐたではないか。私は何時しか、やりどころの無い此の頃の胸にわだかまる苦しきおもひを口に出してしまひ度くてたまらなくなつた。暫時はなほ覺めたる自己の片つぺらが消極的の態度を取らせようと、浮れ調子の他の自己をば、強ひて靜めんと努めたけれども、酒をかぶつた猪口才はいかでか默して止み得よう、遂に鎖を放たれて止まるところなく滑り出したが、少しく口がほどけると愈々醉はしげくなつて、私は淚を催しつゝ、戀のなりゆきを語り出した。宮部は一人グイグイ無雜作に手酌で飮みながら、默つて耳を傾けてゐた。

私はそもそものなりたちから、その間に起つた或る日或る夜の物語り、次いでは旅に行く前後

の事件の進行、新しくは祖母が死ぬ夜の忘れられぬ言葉、及びそれから後の日の我が心中の苦しさ迄、殘るところなく話した末、

「敢て君の意見に從ふと云ふのではないが、一體僕は如何すればいゝんだらう。親と親とが勝手に結んだ婚約は勿論無意味なものだらうけれども、僕としては無下に無視するのは忍びない。或は登志子のしほらしさに振捨てかねてゐるのかも知れないのだ。靜江は勿論戀しいし、登志子は流石に哀れぢやアないか。」

私は何時か聲も沈んで、誰でもいゝから力になつてくれる人の懷にすがり度い心持になつてゐた。

「そんなら二人とも可愛がつてやるんだね。君の好きな連中の中には、細君も共有にした方が便利だつて云ふ先生もゐるんだらう。」

宮部は相手もない癇癪から故意と嘲笑的に云ふんだらう、無理に笑つたりした。

「靜江つて女は變つてるぜ。僕は鏡花式の女つて云ふのは、あれだと思ふねえ。生命よりも戀を重しとする意氣の旺んなのに、僕は參つたんだ。――熊狼のお腹の中で魂と魂は相抱く事が出來るでせう、つて云ふ手紙を見た時、僕は即座に死んでもいゝと思つたよ。」

「甘いなア。男と女が狼に喰べられて、魂が一緒になつて困つたつて云ふのは西洋の小話にある種たぜ。」

彼は愉快さうに笑ひ出して、

「鏡花の女はそんなんぢやないよ。實を云ふと彼奴だけは、思ひ切つた方がお爲めたと思ふんだ。彼奴は僕にだつて艶書を寄越したもの。」

ズバリと云つて、驚いて屹となつた私を見たが、直ぐ聲を落して、

「君の話の様子ぢやァ、女の方が上手だね。總て新派の芝居がかりぢやないか。」

私は嚇と火照つて來る熱持つ額が割れるやうに思つた程、腹が立つた。餡く迄人を侮辱しやァがるのだと思ふと、もうゐたゝまれなかつたのであるが、ヂツト耐へてその夜丈は、互に何を云ふ事もない差向ひの時を過して別れたのであつたが、それつきり私は浮世の狹い批評家と、絶交しようと心に誓つた。

さうして實際其の日以後、私と彼との交際は、全く忘れられたかの如くに、思ひ切りよく絶えてしまつた。

事ある時は燐寸の如く燃え易いが一體が臆病な私は、自分から進んで行く事は無く、すべて女

が繰る糸のまにまに、引かれて動くに過ぎなかつたから、心の中に左右思ひ悶えても吾等が戀は捗らなかつた。女も元よりいかに勝氣で我儘だつたにしても、年頃の祕藏娘で出入りには殆んど常に女中がついてゐるのであつたから、忍び合ふやうな機會を作る事は到底思ひも及ばなかつた。加之私は又、人目を避けて女に逢ふなどゝ云ふ事は、主義として卑しんだから、たゞ何時か來るべき偶然の機會を待つに過ぎないのであつた。從つて人目を忍ぶ戀の冒險の思ひ出は殘念ながら僅かしかない。

それは秋の一夜の事であつた。私は故郷へ送る手紙を出しに門を出たが、少しくうす寒い月影に、垣根の中や溝の邊りから、すがれた蟲の聲もなつかしく、そのまゝ引返すのも惜しいので、そゞろに心引かるゝ夜の街を、物思ふ事もなく歩いて行つたが、

「町野さん。」

と不意に横あひから呼び掛けられて氣がつくと、うす暗い影になつた道の片側に、靜江は一人佇んでゐた。

「何方にいらつしやるの。」

と云ひながら肩を並べて歩き出した。

「一寸散歩に出たんです。貴方は。」
「私も散歩。」
と云つて面白さうに笑つた。
そのまゝ町筋を二人は歩いて行つたが、私は矢張り靜江の寄添ふのを憚りつゝ、ときめく心を押へるのに忙しく、多く言葉も無いのであつた。
「町野さん、かうしてるところを登志子さんが御覽になつたら如何でせう。私、濟まない。」
と云つた時、女はソツト私の手に觸れた。あわてゝ引かうとすると、更に身を寄せて來て意氣地のない私の手は柔かく握られてゐた。
「私、なんだか此の頃は登志子さんが怖いのよ。」
「どうして。お登志さんに憚るやうな事はないでせう。」
「だつて貴方の奥さんになる方ぢやァありませんか。」
傾けた顏に白く流れた月あかりが、際立つて涼しい瞳に情を含ませた。
「嘘です。いつかも靜江さんは、手紙でそんな事を云つて來たけれど、許嫁だなんて誰が云ひました。」

私は、誰と云ふのではなく、すべての人に對して濟まない心持を感じつゝ、暫くしてから云つた。

「おかくしなさらなくてもいゝぢやありませんか。」

「だつて嘘ですもの。許嫁なんて……」

私が其の場の行きがかりから、靜江の心をなだめようとした時、女は急に握つてゐた手を放して、ツト離れた。あつけにとられて、私は足を止めて見てゐたが、其の時駒下駄の音を響かせて後（うしろ）から馳けて來る者のあるのに氣がついた。

「お孃樣。」

と呼んだ。それは靜江の家の女中だつた。

「マア何處にいらつしやつたかと思つて探しましたんですよ。」

息せきながらも女中は、私の方をジロジロとすかして見るのであつた。

「だつて、お前を待つてゐたけれど、あの店に這入つたつきりなかなか出て來ないんだもの、さうしてると町野さんがお通りになつたから御一緒にお伴したんだわ。」

靜江は私にも聞けがしに答へたが更に此方に向き直つて、

「どうも失禮致しました。では唯今の事を登志子さんに宜しく。」
と一禮して、女中と連れ立つて歩き出した。私は一人横町に曲つたが、かりそめのそんな事にも、心がとがめられて許す可からざる事でもしたやうに、後悔の念に苦しんだのであつた。
次ぎは。其の秋もやがて暮れては、方々の家の庭には何處の家から來るともなく、カサコソと落葉が舞ひ歩き、朝は其上に白く縁取つて霜も置き初めようと云ふ頃である。叔父、叔母は所用の爲め、年下の子供を一人連れて郷里へ行つた後を、私は登志子姉妹と母屋の方に暮して居た。
一年の中何時と云はず、季節の移りかはりは身に沁みて心に殘る種々の念を、強くはつきりと浮べるものであるが、殊更秋から冬へかけて、物象の色もうすらぎ、身内の骨迄も冷くなる時、想ひに耐へかねては心弱く泣き度いやうになることを、私は常に感じるのである。しかも其の時はたゞならず思ひ亂れてゐた頃だつたから、フトした事にも感じ易く、私は種々の惱みに苛まれてゐたが、殊に登志子のもの哀れな、優しい姿を朝夕に親しく見るにつけて、そゞろになつかしい氣の毒さを覺えるのであつた。
　叔父叔母が、ゐなくなると登志子はメツキリ主婦らしく、女中を指圖して食事の世話迄も甲斐々々しく働いた。さうして誰もゐない、私と差向ひの時が自然多くなつたにつけて、登志子の私

に對する態度が、著しく所帶地味てゐるのに氣がついて、優しい少女心を哀れと思はないわけにはいかなかつた。

靜江は變らずに、夜毎夜毎稽古に通つて來た。門前迄送つて來る女中をかへして一人玄關から訪ふのを、登志子は何時も待ち受けて、立つて行つては出迎へた。それが其の夜のその時に限つて、登志子の姿が見えなかつたので私は玄關に聞える靜江の聲に立つて行つた。電燈のつけてない暗がりに朧に立つてゐる靜江の姿を見た時、

「登志子さんは。」

女は低い聲でつぶやくやうに云ひながら上つて來た。

「どうしたんだか見えませんよ。」

と私も引入れられてソツト答へた。その時だ。なんと思つたか靜江はいきなり寄添ひつゝ、私の身體に身をもたせかけ、

「嬉しいわねえ。」

と耳に口を寄せてさゝやいた。私は諸共によろけながら倒れさうになつたが、靜江の頸に手を卷いて危く耐へる事が出來た、と思つた時實に私の唇は、激しい接吻に驚いたのであつた。突然、

衣ずれの音がして襖のかげで電揿器(スヰッチ)をパチツとひねつたと思ふとあかるい燈火(あかり)の下(した)に照らし出された二人は、あわたゞしく立別れたが、それは丁度襖をあけて登志子が現はれた瞬間だつた。

あゝ、如何にその夜、私は混亂したる心狀を落着けかねて、あやしく震へた、聲も絶えがちに讀本(リーダー)を讀む苦しさに惱んだであらう。祕す可き事を見出されたと、氣付いた者のする心まどひは、すべての事に對して臆病な感覺を鋭くした。私は其の夜さへも、色も變へない靜江の態度を見ては、それが強ひて平靜を裝はんが爲めに反つて怪しまれる原因となりはしないかとあやぶみ、口數の少ない登志子を見ては、それが心あつてする振舞ひだと邪推して、自分(われ)から激しさに驚かるゝ胸の鼓動と息苦しさとに、あまりあかるき燈火(ともしび)を仰ぐ事さへ出來なかつた。否、その惱みは單に其の夜限りのものではない、夜(よ)一夜(ひとよ)床の中に轉(まろ)びつゝ寢もやらであかした翌日(あくるひ)も、その又翌日も、打消し得ずして、やがてその後の自分は哀れに人を憚るものとなつた。

これは私の思ひ過(すご)しだらうかと考へながらも、私は登志子の何となく浮かぬ様子になつた事を感じた。さうすると私は又ひけめ勝な心から登志子の姿を見ない事を希ふやうになつたが、それは一方から云へばひそかに登志子に注意する心であつた。

或る時は羽織の肩もうそ寒く、悄然と緣の柱に倚りつゝ、骨立つて梢の瘦せた木立の空の夕雲

を、いつ迄も眺めてゐる姿に心をわづらはし、或る時は夜の庭の落葉の上に音もなく降りかゝる時雨に靜に耳傾ける、燈火にそむく横頰の瘦せに驚き、或る時は細くすきとほる聲を震はしてうたふ唱歌の聲に哀れを誘はれて聞き入つては、かたく自を責めては悔ゆるのであつたが、後に思ひ合せれば、登志子は其の頃既に怖る可き病を、人も知らず自も知らぬ内に、うまれつき虛弱なその胸に受けてゐたのであつたかもしれない。

其の後彼の宮部は如何したであらうか、私は彼の夜彼の口から、靜江は「僕にも艶書を寄越したもの」と聞かされた一語を、忘れる事が出來なかつた。どうせひねくれた事を云ふ男の事だから、その言葉も眞實なのか、出まかせの笑談だつたのかわからなかつたが、兎に角私は忘れられなかつた。さうしてそんな不愉快な忌はしい言葉を聞かせた宮部をば、一層憎んだものであつたが、私は靜江にむかつては事の眞僞を尋ねる丈の勇氣を持つてゐなかつた。

然るに其の後突然宮部は、

來年の春も亦落第らしいから、思ひ切つて學校は廢業します。そんなこんなで家の方も居心地が惡いから、亞米利加へ行つて百姓になります。

と云ふ簡短な端書を寄越した。著しく感傷的な氣分になつてゐた私はかすかに彼のゐなくなる

事を安心を以て聞いたのではあるが、又そのまゝに別れるのは残念な氣がしたので、直ぐさま彼の家に赴いたが遲かつた。宮部はその端書を出した時が既に横濱から船出する時だつたのだ。彼は例の如く一人ぼつちで、肩を聳かして海を越えたのであらう。杳として其の後の消息を知らないが、今日になつて彼の言葉が、ヒシヒシと身に沁みて思ひ當る度に私はなつかしく思ひ出すのである。

間もなく叔父叔母も歸つて來た。さうしてその年も冬がれて、やがて暮近き頃となつた。靜江はフト二三日、夜の稽古に來なかつた。

「如何したんでせう、學校にも來ないのよ、御病氣かもしれないから、お見舞ひに行つて來ませうか。」

登志子は母親と相談して女中を連れて出て行つたが少時して歸つて來て、

「御病氣ぢやアないんです、親類の方でお泊客があるんですつて、一寸でもいゝからお上んなさいつてお仰るので私お客様にもお目にかゝつてよ。若い男の方、軍人ですつて。」

私は靜江の姿の見えなかつたのに就て何か事ある事と考へてゐたのに、さうでもなかつた登志子の言葉を、輕く聞き流してしまつた。それから四五日後だつた。丁度私は茶の間で叔母の相手

に世間話をしてゐた時だつた。學校から歸つて來た登志子は、

「靜江さんは、もう學校を退つたんですつて。」

と未だ袴もはいたまゝ、本包も下に置かないで、襖をあけて這入ると直ぐ自分もさも驚いたやうに、眼をみはつて云つた。

「どうして退つたんだらう。」

私はあてのない不安に襲はれて、叔母よりも先きにかう尋ねた。

「どうしたんですか、誰も知らないの。今日先生に伺つたばかしなんですもの。」

登志子も一大事でもあるやうに、

「どうしたんでせう。」

と又繰返へして云つて首を傾けた。さうかうしてゐるところに、噂に影がさして、靜江はその母親と一緒にやつて來た。母なる人の云ふ所によると靜江ももう十八にもなつたから、早晩他所にやらなければならないのだが、それには女一通りの事を仕込んで置かなければならないのに何分我儘に育てた上、學校通ひばかりさせてゐたので、何も出來ないからいざとなつた時困らうと思つて、今後は自宅で所帶を持つ下稽古をさせるのだと云ふのである。

「私共は舊弊でございまして、學校なんか卒業しないでも、とマア存じましてそれに貴方、針の持方一つ知りませんやうではねえ、ほんとに仕方がございませんから。」

となながと述べて、つまりは今迄毎晩教へて頂いた稽古も學校をやめれば自然無用やうになる、どうも大變今迄は難有かつたと云ふその禮を云ひに來たのであつた。

私は俄に靜江をば、その母親の爲めに奪ひ去られた氣がしてひどくがつかりしたのだつたが、しかし決して嫁に行く先方がきまつてゐるのではないのだから別段心を驚かすにも及ばないと思ひかへして安んじたが、なんのその、それから間もなくあわたゞしい戀の破局は容赦もなく押寄せて來たのである。

雪もよひの空に室の中もうす暗く、火桶のなつかしい日であつた。私はその頃目前に差迫つた年末試驗の爲め俄にせき心になつて机に向はねばならないのであつたが、かねて怠け癖のついた頭腦は役にも立たない妄想にのみ耽つて、なか／＼身に沁みて勉強する氣になれないので流石に机から遠ざかる事はしないのであるが、ぼんやりと頭を抱へて、疊の上に仰向けに寢て貴重な時間をあだに費すばかりだつた。

「修さん、お手紙。」

と、其處に登志子が手に封書を持つて這入つて來て、

「K生つて何方（どなた）。なんだか見たやうな字だわ。」

と云ひながら渡すのを受取る時、私はそれが靜江から來たのである事を直覺した。彼女は何時も出たらめに二十六字の中の、どれかを書いて寄越すのであつた。器用な女は男文字らしく、僞る事も巧みであつたが、私はそれでもドギマギして、

「學校の友達からです。又筆記帳（ノート）を貸してくれとかなんとか云ふんだらう。」

と勢ひよくポンと机の上に投げ出すと氣にも止めない風を裝つて、寢ころんだまゝ起上りもしないので、登志子もそのまゝに行つてしまつた。中には至極簡短（かんたん）に「話し度い事があるから今晩出て來てくれ」と云ふ旨が、走り書してあつて、時間と場所とを指定して來た。

私は逢引の心ときめきに震へつゝ、暮れるを待つて定めの場所に出て行つた。或る大名華族の持地で杉垣のみうちつゞく屋敷町の暗い小道を幾度となくゆきかへりしつゝ、忍んで來る筈の靜江がどうしたのか、なかなか見えないので、人目を避けて暗がりに暫時（しばらく）ひそむ間に、氷を含む冬の夜風に身内の血さへ凍るやうな思ひをしつゝ待ちあぐんだ。

夜は次第に更けて行き、少し離れた往來の下駄の音も途絶えがちに、遠くの町角を曲る電車の

きしりと、夜に恐れておびえたやうな犬の遠吠の、冴えて聞えるのも心細く、私は人目を忍ぶ邪事を行はんとした熱持つ心も冷え初めて、かすかに悔に誘はれると、道義の念に強く囚はれてゐた私は、又しても自分の行爲を卑怯な醜陋なものとして、自己苛責に陷つたのであつた。何時しか風になぐれつゝ霙さへ降り出したので、私は漸く思ひ切つて、大路へ出たが、そのまゝ歸る氣も流石になく、意氣地なく濡れながら靜江の家の前あたりを、それとなく覗つたが早くから閉めた雨戸の中は、ひつそりとして物音もなかつた。

翌朝又靜江から匿名の手紙で、「昨日は自分から誘ひをかけて置きながら、夜になるのを待つて拔け出ようと思つたが、如何しても出られなかつた、どうか許してくれ、怒つてはいけない」と云ふ意味を細々と書いて來た。しかし話度い事があると云ふ、その話らしい事は何も書いてないので、私はそれが單に私に逢ふ爲めの便宜に用ゐた文字であると思つた。私は怒るどころではなかつた。靜江が夜歩きを許されず、ひそかに家を拔ける事のむづかしいのも當然であるのに、折さへあれば、自分の爲めに家人の目を盜んで出ようとする、その心根を自分の信仰する勇しい大膽な情熱に富んだものとして、反つて夢中に難有がつた位だつたが、同時に私は昨夜靜江と約束通りに逢へなかつた事を或る危險から免れたかの如く、輕い安心を以て喜んだのであつた。

靜江からは更に又、まゝならぬ身をかこち、逢ふ瀨の得がたい事を恨み、されど自分の心は變らぬ事などを繰返す手紙が、日に夜を次いで來るのであつた。私はそれを人知れず郵便箱から、自分の手で取出すのみならん事を希つたが何時と云ふ時を定めないのであるから、或時は登志子の手から、或時は高子の手から、或時は女中の手から、時に又叔母の手から受取る場合が多いので、その度毎に臆病な心の中に人を憚る自己の行爲の陋劣さを、恥ぢ憎む念に苦しめられた。かゝりしうちに年は暮れて、初春は又あわたゞしい日をもたらした。惱みある身も、無い者もすべて何らの變りもたいらしい三ヶ日から松の内とすべての習俗を、主義としては輕蔑する身も、流石に力ある束縛は絕ちかねて、人並に賑はしく物思ふ事もなく暮したが、それらの時日もやがて過ぎて餘裕の出來た自己は又、なべての感情にもてあそばるゝ、哀れなものなのを沁々と感じて來た。

　私は其の頃、又もや押寄せて來た試驗の爲め、その當座ばかりは今年こそはと思ひもしたれ、何時か落第の苦痛も忘れて怠けてしまつた一年を悔いつゝ、そろそろ準備をしなければならないと思つてゐたので、うづ高く机の上に本を積んで、それに向つて坐つてゐたが、その無味乾燥な限りもない多數の文字を拾ふよりも、艶めかしく心をそゝる靜江の手紙を、今朝も亦受取つた事

に心を向けてゐた。けれども、亦亂れた頭腦を整へようとする努力もあつて、愈々縺れて來る惱ましさに私はあてもない散歩に出て、さうして何を爲る事もなく、一日は暮れてしまつた。夜食の後もなほ勉強は手につかず、暗い室の中に茫然と、とりとめもない思ひを走せてゐたが、そこに足音もなく忍んで來たのは登志子だつた。障子をあけて入ると又、靜に後をしめて、默つて暗い疊の上にほの白く坐つたまゝ、伏目になつてひかへてゐるのを、私は既にたゞならず見た。私も默つて電燈をつけようと思つて立上つて、手を延ばした時である。

「修さん、あかりのない方がいゝわ。」

と登志子はかすかに振仰いで云つた。

「だつて眞暗ぢやァないか。」

私はさう云ひはしながらも、返事も待たずにうす闇のまゝにして腰を下した。暫時は胸のみをどる沈默に、二人は向き合つて坐つてゐたが、登志子は幾度となく云ひよどみつゝ、

「私、今晩は修さんに聞いて頂き度い事があつて。」

としめやかに且熱心に云ひ出したのである。

「修さんは靜江さんと何か約束をなすつて、――おかくしなさらない方がいゝわ、私は夙から知

つてゐるのですもの。」

私はあまり突然に、意外な問をかけられたので、何と答へていゝか遁辭を見出す事さへ出來なかつた。

「學校では皆が惡く云つたけれど、私は靜江さんを惡い方だとは思ひません。ですから修さんがほんとに靜江さんと御夫婦におなりになるならいゝんですけれど……」

登志子はフト默つて、窓の外を通る人力車の音の遠ざかるのを聞きすました。私はどうして登志子が、感づいたかを考へつゝ、しかたがないからワクワクしながら困り果てゝゐたが、

「どうしてお登志さんはそんな事を云ふんです。」

と此の時勢を轉じようと思つてから云つた。すると登志子は、急に氣も挫けたらしく思はれたので、私は調子に乘つて、

「お登志さんは、なんだらう僕の文庫をあけて見たんだね――許しもうけないで。」

「エヽ。」

とあるかないかの登志子の聲を聞いた時、うす闇に崩折るゝ如くうつぶせになつた姿を、幻のやうに見て、私は萬事が終つたやうにホツト吐息をついた。

「それは私が惡かつたんですけれど――修さんは何も御存じないんですもの。」
思ひ決した顏を上げて、暫時後登志子は反つて明かに云つた。
「私も知らなかつたんですけれど、靜江さんには許嫁の方があるんですつて、靜江さんも此頃迄御存じなかつたのかもしれません、つひぞそんなお話を聞いた事もないのですもの。イヽエ、噓ぢやアありません、學校で靜江さんの御親類の方に伺つたんです。いつか私もお目にかゝつた軍人の方なんですつて、中尉で金澤師團とかにつとめてゐらつしやるのですつて。」
私は存外しめやかに物哀れな氣持で聞いてゐたが、恐らくそれはあまりの意外さに、信じる事も疑ふ事も出來なかつたのであつたらう。なりゆきに任せる心で押默つてゐた。登志子は恰も木像のやうな私に對して、常に似ず口凡かつた。震へる聲を嚙みしめつゝ、時には涙を流しつゝ、しかし流石に途絶えもして、下のやうな意味の事を眞心こめて說いたのである。
靜江も自分は知らぬ間に、遠い親戚にあたるその軍人に、長じて嫁ぎゆくべく親々によつて定められてゐた。その日が何時か來てゐたのである。學校をやめたのも、間もなく中尉と結婚の式を擧げる爲めなので、花の頃には共々に任地へ行く事にきめられてゐる。さう云ふ位置にある靜江を、それはたとへ知らなかつたにしろ、夫と定まつた人のある人を、戀する事は重い罪惡だか

ら思ひ切らなければいけない……

「修さんは何も御存じなかつたのねえ。」

と登志子は繰返して云つた。その折柄、

「登志子様、登志子様。」

と母屋で女中の呼ぶ聲がしたので、登志子は少時耳をすましてゐたが、思ひ切つたと云ふ風で、ソット立上ると、

「この事は私の他には誰も知らないんですから。」

とさゝやきつゝ、暗い中に衣ずれの音をさせて、呼ばれる聲の方に出て行つた。

私は終夜絶間なく疑ひ絶間なく又それを打消す胸の苦しさに、暗闇の室の中に引ずり出した床の中で轉々しながら、どうしていゝかわからない自分を苛んだが、枕は時々頼りない口惜しい涙に濡れたのである。

翌日、私は又一縷の望にすがつて、靜江に對して事の眞僞を問ひ試みる手紙を書いたが、それが若し噓だつた場合に、吾等の仲を距てはしないかとも思はれて、書いては破り書いては破りして、遂に筆を投捨てた。さうして何事も手につかず、イライラした心持で暮してしまつたが、そ

の夜私の部屋の窓を往來からソツト訪れたのは靜江だつた。
私は音のしないやうに、門の潛戸を忍び出ると、凍りついた二月の夜の往來に、長い影を落して女は一人立つてゐた。いきなり馳け寄つて、無言で私の手を取つたが、白く呼吸の凍るのが彼女の胸のおだやかならぬ事を感ぜしめた。
「誰にも知れないやうに、そうつと出て來たのよ、ヤツトの思ひで。」
靜江は街燈の數の少ない、暗いところを歩きながら、始めて落着かない聲で云つた。
「だから早くかへらなければいけないの。」
そのまゝ二人は又無言で歩いて居た。私は云ひ度い事が胸一杯になりながら、云ひ出す事の出來ないのを苦しく思ひつゝ、女に引かれて行くやうに歩いてゐた。靜江が家を拔けて來たと云ふ事は、その場合大した事でもなく、寧ろ自分にとつて當然の事であるやうに感じてゐた。
「町野さん大變な事が起つて、私はどうしたらいゝんでせう。」
靜江は落着いた聲でかう云つたが、正に來るべき言葉を、既に充分豫想し得て、息も出來ないでゐる私をヂツト見つめて、暫時後に又つづけた。
「私はちつとも知らなかつたんですけど、私には許嫁の夫があつたんですつて、何時の間にか親

お勝手にきめてくれたんですつて。」

寧ろ人をも己れをも嘲るやうな鋭い調子であつたが、

「私はその人と直ぐ結婚しなければならないんですつて。」

と云ふ時急に聲が震へて、靜江はヒシと私の胸に取縋つたが、同時に顔を埋めて烈しく泣き出した。

登志子が學校で聞いて來たのと變りはなかつた。靜江は遠縁の親戚の、今は陸軍中尉の男と、親々の爲めに結婚させられる身になつてゐたのだ。

「私はどうしても厭だつて強情張つてゐるのですけど、家(うち)の方の都合もあるからつて、毎日々々責められて――私は一層死んじまつた方がいゝわ。」

私はグングンと頭に血の上つてゆくのを、物怖しく感じながら、あたりを圍む夜の氣配におびえてゐた。突然起つて來たその場の問題を判斷する丈の餘裕は、到底ありつこはないのであつた。僅に女と諸共に地上に倒れようとするのを耐へ得たばかりだつたもの。かくて暫時後近寄り來る人の足音に、ツト女が身を離した時、私はそのうさんくささうに見かへりながら、過ぎて行つた男に對して、助けられたやうな感謝の念を抱いたのである。

「町野さん、私はどうしたらいゝんでせう。」

と女は繰返し繰返し迫つたが、私はたゞ一刻も早く靜江をば、其家に送り屆け度かつた。さうしてその後でゆつくりと、自分と彼女との關係に就て考へ度かつた。

私の心は休みなく働いて、突然頂點（クライマックス）と破局（カタストロフ）とが同時に迫つて來た事件の解決を急いだが、徒らに思ひ亂れる事ばかり多くして、兎角に苦しき日ばかりが續いて來たのである。二日、三日、四日、――靜江からは何の消息もない。私は或る時は情無い程冷酷な考へに傾いたが、又直ぐと浮調子（うはつてうし）な熱情に驅られんとした。それは主として祖先の血を受けついだ、慣習的な理性と、その束縛を逃れてゐる感情との鬪爭であつた。

私は勿論、他に夫となる可き人のある女を戀ひする事は、惡い事だと考へる丈、善良な道德を受け入れてゐたけれど、それは此の場合にあてはめるにはあまり單純過ぎるのであつた。何故ならば、私は靜江に許嫁のある事を知らなかつたのではないか。さうして一旦戀した女を、單に因習の障碍の爲めにみすみす人手に渡す事は、又私の主義に反するもので、頗る醜陋な事である。寧ろ道德を無視し、習慣を踏破り、死を賭しても女を奪ふのが、男らしい美しい行爲であるとも思つたのである。戀愛は他人に強ひらるべきものではなく、結婚は相互の自由意思で取結ばるゝ

ものでなければならない。たとへ親だつて、當人の意思を無視して、しかも何の相談もたく、斷りもなく知らぬ間に、勝手に約束してしまふなんぞは、あまり亂暴であり、野蠻極まる事であると憤りもした。

私は寢ては夢に、起きては空想の幻に、種々の姿を走馬燈のやうに、絕間ない繪として見たのである。北海道の山の中を、トボトボと血にまみれた素足で、手を引合つてゆく男女の、熊に喰はれて死ぬ最後も見え、逃げんとして追手の軍人の劍に斬られる自分も見え、水に火に相抱いて死ぬ二人も見えたのである。けれども殆んど生れながらに、負はされて來た切つても切れない道念が、意外に強く私を捕へてゐて、湧かへる反抗心を覆つてしまつたのと、二十年母を知らぬ我身をいつくしみ育てたる、哀れな祖母の臨終の言葉、優しい登志子の涙は、私の弱き心に沁みて、私は全く意氣地のない、みすぼらしい、道學者の家の下男になつてしまつたのだつた。いざとなると、矢張り世間的の人間になつてしまふ私の如きは、平生大言壯語する丈に、悲慘なものではなかつたらうか。

登志子は又たゞならぬ顏して、或日私の室にやつて來た。さうして私は自分も泣き出してしまつた程、淚にくれつゝかきくどく彼女の爲めに動かされてしまつた。

「お登志さん、僕はすつかりかくさないで話して了ふが、靜江さんを戀しいとか、なつかしいとか思つたのは、何も知らない時の事で、今ぢやアもう何とも思つてゐやアしないんだよ。許嫁の人があるつて云ふのに、たとへ思つてゐたからつて、どうもなりやアしないぢやアないか。此間お登志さんが忠告してくれた時から、すつかり僕が悪かつたと悔んでゐるんだもの。」
「でも靜江さんの方で、どうしても思ひ切らなかつたら……」
「そんな事があるものか、だつてそりやア道ならぬ事だもの。」
私は至極世間並な事を云つたが、實際今迄述べて來た通りの幼稚な私としては、それが一部分は眞の心の聲であつた事を否まれぬ。
登志子は私の言葉に安心したのであらう、泣き濡れた顔に無理やりの、寂しい笑ひを浮べつゝ、帶の間に挾んでゐた、靜江から私へ宛てた厚ぼつたい手紙を取出した。
「それぢやアもうこんなものも御覧にならない方がいゝわ。」
と云つて私の膝の前に置いた。
「見るもんか、破いてしまへ。」
と私は相手もないのに、何故だか腹が立つやうな様子をして云つたが、流石に心引かれるのを

まぎらす爲めでもあつたらう、更に私はやけくそな勇氣に任せて其の手紙を、封のまゝ火鉢にかざした。

「アラ、そんな事……」

登志子がかへつて驚いてあわてゝ止めようとした時、もう紫の焔をあげて、靜江が忍んで書いて寄越した文(ふみ)は見る間に灰になつてしまつた。それをヂツト見てゐる中に、私は涙の睫を濡らして來るのを感じて、面(おもて)をそらした。登志子も感に耐へないのであらう、又新しく頰を傳ふ涙を拭ひもせず、消えて行く文殼を見つめてゐたが、

「修さん。」

と云ふと私の膝に縋つて、更に又泣いた。私はその手をかたく握りしめて、女の背のかすかに震へるのを見てゐたが、自己(みづから)をはかなむ念に連れて、登志子をいとほしむ思ひも、沁々と湧いて來て、二人が一つの心であるやうに、悲しい親(した)しさを感じたのである。

私は試驗準備なんか、到底(とても)手につくどころではなかつた。一切の事を放擲して、絕間なくそゝのかさんとする邪心(じやしん)を靜めんが爲めに、無闇と步き廻つたが、一度口にした酒の醉心地を忘れかねて人知れず飲んでは、醉ふと一層感傷的になつて、一人で涙を流したものだ。それでも一日立

てた誓を破らず、私は其の後又靜江から來た手紙を二度迄も灰にした。けれども私は其の度に靜江に對して濟まないと思ひ、又自も誘はるゝ強きまどはしに耐へ得ずして、三度と續ける事が出來ないで、胸ををどらして三度目の手紙の封を切つてしまつた。

靜江はあからさまに恨んで來た。彼の夜家に歸つてから、母親に何處へ行つたかを詰問されて、遂に何から何迄打明けてしまつたが、それから家内の者はすべて彼女の監視者となつて、幾度家を抜け出して、扶けを借りようと思つたかしれないが、それも駄目だつた。ヤツトの思ひで、ちひさい弟に投函させた手紙は屆かなかつたのか、返事を待つても、返事の無いのは如何したのであらうと長き怨言をつらねた末を、斯う結んだ。

今は日に日に迫り來る父母の定めし結婚の日を悲しみつゝ貴方様となりせば共に死なん事も嬉しき極みにこそとあけくれ思ひ居候。

私は讀んでる中にホロホロと、紙の上に涙を落したが、極端に自己を惱み悲しむ念に襲はれて、氣も狂ふかと頭が痛めた。

私は又どうしても、靜江を得なければならないと、思ふのを止める事が出來なくなつた。祖母の言葉、登志子の忠告を聞き入れて思ひ切らうと誓つたのは、眞の自分の聲ではない、卑怯な臆

納た、世間を怖れた唾棄すべき詐言であつたのだ。よしや許嫁があつたにしろ、一旦かうと想ひ想はれた二人の間に何がある。人間の作つた道徳がなんだ、人の憚る世間とは要するに眞實の上に影をつくる仇敵である。すべからく彼を突破し、よろしくこれを蹂躙して、新しき吾等が爲めの道を開かねばならぬ、と私の心は狂ほしく叫び始めた。

その夕べ、私は家を飛出すと、手近な處でしたゝか飲んで、どう云ふ氣だつたか知らないが、靜江の家の方へ向つて歩いて行つた。夜はしめやかに降りて來て、早春の町の灯は濡色に霞んで見えた。私は、顔は燃えるやうに火照り、胸は張さけるやうに醉を發して、醉歩危ふく、しかも何の確たる意思もないのに、無闇と氣色ばんで行つたが、とある町角の小間物屋の店の灯に、うつし出された男女の姿を、醉眼ながら認めると、昏倒しはしないかと自分で思つた程、クラクラと頭の中に渦を感じた。

リボンや簪のかゞやく中に靜江を見たのは不思議はない。けれどもその傍に立添つた若い男を、私は私の敵であると、一目見て直ちに然う感じたのである。彼等は何の氣も付かず、その店を立出ると、私の目の前を並んで行く。肩幅の廣い、見るからいかめしい男に身を擦寄せて、肩と肩とで押合ふやうにしながら、靜江は何か面白さうに笑ひながら行くではないか。私は茫然として

横町の闇に出つてしまつた。

何が何だかわからなくなつた。靜江は私を欺いたのではないか、とフト考へて醉も覺めるやうに思つたが、それは直ちに打消した。今の男は彼の軍人ではない、中尉ではないに違ひない、私が疑ひ過した結果感違ひをしたのであらうと、強ひて思ひかへしたが、そんなら靜江があれ程に、親し氣に接する男は誰なんだ。私は何時ぞや宮部の云つた、忌はしい言葉を思ひ出したが、それも亦厭ふ可き誤解であるとして、無理に斥けてしまつたのである。

さうして私は如何したか。あゝ、たゞ意氣地なき苦惱の中に囚はれて、徒らに悶え苦しみつゝ、手も足も出なかつた。何方つかずの思ひ惑ひに、苦しき夜をあかしたのである。

もう後は語る迄も無い。弱者の身の上に落ちかゝる、悲劇の終末は型通りだつた。靜江の結婚は數日の後だつた。さうして直ちに夫と共に、金澤へ連れて行かれたのである。しかも私は當時なほ、些かも靜江を恨まず、彼女のその日迄の自分に對した振舞ひについて殆んど疑ふ所もなく、たゞ只管に自の、氣力なき事を恥ぢて、ひとりひそかに懺悔の涙にくれつゝ、靜江は矢張り厭ふ男に強ひて連れて行かれたのだと、考へる方に心を傾けて、彼女の爲めにも泣いたのである。さうして私はしきりに酒を浴び、亂醉の醜體を叔母の目の前にもさらしたものだつた。

勿論試驗は落第だつた。叔父も叔母も、もう私に對しては眉をひそむるばかりだつた。たゞ哀れなる登志子のみが、人知れず私の爲めに泣いてくれるのであつたが、その登志子はこれよりさき、かりそめの風邪のこじれから、床に就てゐたのである。さうして櫻の咲き初めて、やがて又散り盡す日が來ても、登志子はなほ枕を離れる事も出來ないで、かよわい身には耐へ難い、高度の熱は著しい衰弱をもたらしてゐた。私はそれを見るに忍びず、心の中には何故ともなく、登志子の病氣は自分の爲めであるかのやうに思ひなされ、ありもしない苦しみを求めて自ら身を責めたのであつた。

かゝる時、悔恨とやけと悲哀と寂寞とに惱み疲れた私は、胸底に常にわだかまるあてもなき熱情の反抗的に燃え上がるのを、禁ずる事が出來なくなり、何等か激烈な刺戟を欲したのであつた。同時に、生命も名譽も、勿論塵芥の如き社會的地位も、或は黄金も、すべて極端に無視したくなつた。同時に、多數の人の爲めに、身を以て盡さんとするかねての希望を、即時に實行しなければならないと、容易に心を決めたのである。戀に失敗して、反つて發奮した古今東西の所謂英雄偉人の逸話が、痛切に自分自身に關係ある如くにも思はれて、私は人道の戰士として、國家社會の爲め百年の計をしてるのだと確く信じて、當時彼のマルクスを鵜呑みにして、過激な說を吐いてゐた一

種の人物に面會を求めたのであつた。

遺憾ながら私は此の一段の顚末を、大きい聲で語る事が出來ないから略してしまつて、兎に角私は二度三度、その人物を尋ねたが、元來が空想の上に立つ私のは夢であつたから、實際その人々に接近して見ると、到底私の潔癖が、彼等と共にある事は許さないのであつた。私は私が熱愛した國家の爲め社會の爲め、反つて彼等を相手にして、烈しい議論をしたのであつたが、そのまゝ別れてしまつたのである。折柄新綠の香りこめた、郊外の野の小徑を、私は孤獨の寂寥に襲はれつゝ、トボトボと電車の音のする町の方へと歩いてゐたが、フト氣が付くと私にも、早や既にイヌのついてゐる事を知つて、かりそめの夢の結果の怖しいのに驚いたのであつた。

あゝ私の一生はその一年か二年の間に、すべて終りを告げたに等しい。私は昨日迄無くてはゐられなかつた景氣のいゝ希望の、何れも賴みがたない事を知り、自己の價値の全く哀れなものである事を知つたが、一時に押寄せて來て、その後に孤獨の私を殘して去つた、いろいろの事件の最後として、悲しい登志子と私との運命を語らねばならぬ。

風邪だと思つたそれが、何時迄たつても快くならないで春も暮れたが、彼女の病氣は夙に肺を冒してゐた。庭の山吹は又咲揃つて、其處に私は靜江の立姿を、幻に浮べ得たが、それよりも明

かに登志子は目の前の白い床の中に横たはつてゐるのであつた。一層痩せて肉落ちた、うすい胸から出る苦しい咳に、蒼ざめた頬にうつすりと血の色を漂はせる度、私は自分の身も細るやうな思ひをした。此の人の爲めにならゝ、自分の身はどうなつても構はないと思ひつゝ、枕邊に附添つて看護したが、怖しい病は日に日に勢を逞しくして、見るかげもなく痩せ衰へ、父母弟妹の悲歎の中に、登志子は六月の或る曉に、私の手に縋つて死んだ……。

町野君はフト物語を止めて、眼をしばだたきました。

「とんだおしやべりをしてしまひました。私は中途で醉が覺めて來て、よせばよかつたと思ひながら、とうとうしまひまで漕ぎつけたのです。」

と云ひながら、殘りの酒杯をつぎつぎに傾けて、又新しい醉を求めるらしく見えましたが、その甲斐もなく眉の邊へ例の寂しい頼りない陰影の深くなつた顏を、私は見るに忍びない心地で眺めました。さうして其の場合、それが反つて慰めになるであらうと思ひながら、

「それから後はどうなりました――其の後靜江さんには逢はないのですか。」

と尋ねました。

町野君は卓に額をつけて、一人何をか回想するらしいのでしたが、フト顔をあげると急に大きな欠伸をしました。

「それから後は何にもないんです。靜江には一度逢ひました。矢張り其の年の夏でした、一週間ばかり夫から許しを得て上京したとか云つて、叔母にも逢ひに來たのです。その時はもう丸髷でしたが、相變らず派手づくりで、目覺ましいものでした。さうして手には澤山、白百合の花をさげて來ましたが、これは生前登志子が好きな花だつたのです。叔母に呼ばれて私もその席に出ましたが、女は奥様の威嚴を失はず平氣な顏をして挨拶しました。私は妙に意氣込んで出たのでしたが、矢張り氣臆れして殆んど返辭も充分には出來ませんでした。さうして其の時私は始めて、女は悧巧で私は馬鹿だつたと知つたものです。」

と興味を失つたらしい調子の、話なかばから又些か冷嘲的になつたのを、苦笑にまぎらしてしまひました。私も引込まれて心寂しく思ひながら、目を見合せて笑ひました。

「それから女は子を生んで、立派に愛國婦人となつたのに、私は御覽の通り素寒貧で、三十にして家をなさず。」

と急に高い聲で云ひ足しましたが、咽喉がかすれて苦しさうでした。

既に全く客足は絶えて、廣い酒場（ベア）の隅々に居殘つた給仕の女も、空いた椅子に腰掛けて、ゐねむりをしてゐました。

「大分夜も更けたやうだ。」

と町野君はつぶやきながら、突然立上がると袂から銀貨（がね）をつかみ出して、勘定もしずに卓の上に置くと、少し危ない足を踏しめて、椅子を離れました。

「イヤどうも失敬しました。酔が覺めるといけません、よせばよかつたと思ふばかりです。貴方には又何時逢へるかわからないが、それもしかたがない、殘念だがさよならにしませう。」

と妙な手つきをして頭を下げた時、袖が觸れたか卓（テエブル）の上に並んだリキユーグラスが、一つ倒れてアスフアルトの床（ゆか）に落ち、冴えた響きをたてながら白く光つて碎けました。

町野君はヂツトそれを見つめてゐましたが、もう一度私に向つて頭を下げると無言の儘、私を殘してフラフラと、出て行つて了ひました。（大正元年九月八日）

心づくし

此の一篇のつくり物語を謹而慶應義塾大學敎授田中萃一郎先生の机下にたてまつる

御手紙拜見致候て其の夜一夜泣き明し申候。

よしなき人々がかりそめの言葉より年月の小生がはかなき心づくしも徒事となり、お年寄られし父上母上の御心わづらはし候事悲しくも恨めしく候かな。

幼きより氣性烈しかりし小生は、多きはらからの中にも殊に御兩親に御心配相掛けし事、其の後の日に想ひ出る每に人知れず深く恥入り候事に御座候。

未だ母上の御懷に眠りし頃、故もなく疳のたかぶりてむつかりては、終夜泣いて泣いて泣きあかせしこと祖母樣母上より幾そ度となく昔語りとして承り候のみか、小生が眼にもいたいけしたる幼子の夜におびえし姿明瞭に浮び候て未だ若かりし日のならびなく美しかりし母上の御寫眞見る每に、今日の御衰へ招きしはただに年月の業ならず、我が生れし日より幾年の不孝の故にはあらずやとさへ思ひし事屢々にて候ひき。いつぞや虫干の日に、御手傳ひ致し候て彼の黑塗の古き

本箱に納められし母上の御藏書、端近き夏の日に曝し居りし折、物のまぎれに見出候半紙四つ折のうすく綴られしに、千陰學び給ひし御手にて「心づくし」と書き給ひしは母上が其のかみの日記にて候ひき。いといと細き假名文字の美しきをなつかしきものに思ひなして靜に何氣なく讀みもてゆくうち、其處にはからずも、我が名を見出で申候。

今宵も亦俊三のいたく泣き叫べば身にしみて寒き夜すがら裏山の梟の聲寂しく聞きつつ曉に及ぶ

と母上が若き御手の墨の色のすぐれて濃きも早や二十年の昔なれば何時しか紙魚に食まれて綴目危ふかりしにや、細き紙よりの支へかねてホロホロと崩るる如く落散りしがあるとしもなき風のまにまに四邊に亂れ候ひき。

いかばかり我身の爲めに御心惱まし給ひけん、想ふも胸の塞がれて、小生は今は再び母上の御懷に縋らん事も適はぬ程、脊丈延びたる身に返へらぬ事をひたすら嘆き申候。

おもちやの刀抜き持ちて家の內を飛び廻り、「吾は犬江親兵衛なり」など呼はりつつ壁と云はず柱と云はず切りつけては、いたづらのしるし殘せしもさる事ながら、今もなほ、まざまざと左の頰に一筋ひける剃刀の刃のあとこそは、小生が墓に行く日迄恐らくは殘りて消えぬ悔恨の痕にや

候らん。緣の日向にむく毛剃るとて、いやがる吾の頭押へて母上の御手にうすく鋭き剃刀の冷々と光りて寒く、動けばあぶなしとてすかし給ふ暫時の辛棒さへ、遊びに心奪はれし吾にはなりがたく、手足ジタバタしてむつかるを「然らば汝が頬は切れんのみ」とおどし給ひし御聲はつむじ曲りし吾の心に邪しまなる反抗心を起さしめて「切れなば切れよ」と叫びつつ突然躍上りし吾は、あやしくも心狂氣の如かりしにや、「あぶなし」と云ひて引きし母上の御手の剃刀の刃を傳ひて濃き紅の血汐ホタホタと音してしたたれば流石に吾も火の如く泣き叫びて肩のあたりを染むる血汐に目も眩む思ひ致候。母上があわただしく流るる血をば止めんとて押へ給ひしハンケチも白地を殘さず唐紅に染みて、なほ我が枕したる御膝の上に花紋の如く散り亂れ候ひき。

　かかる事數ふれば數限りなく次ぎ次ぎに想ひ出づるも忌はしく候が、年こそは多くへだたれる兄上にさへ負くること口惜しく、かなはずと知りながらよしなき爭ひを幾度は繰返し候ひけん。其の日は幼稚舍の舍長なりし人の御葬式に行く筈なりし兄上にフトしたる事より烈しく抗ひしが足のもつれに折重なりて倒れし時、打ち所や惡しかりけん吾の氣絕したりし事、兄上今もよく記憶し給ふならん。やうやくに人聲に呼び活けられてうつとりと身の廻り見廻せし小生は家內の者皆集りて不安の顏並べたる中に悄然と立てりし兄上の御姿認むるや、再びむしやぶりつかんと立

上りしが、危ふく母上の御手に抱きすくめられて、初めて口惜しさに聲あげて泣き申候。一何故にかかる子は生れし」とて、其の時母上も泣き給ひしが、熱き御涙我が頬の上に落ちし時の悲しかりし心地今に忘れず、苦しきまで明かに覺え居候。

その頃の流行とて稚子髷に結ひし姉上と、幼稚園に通ひ居候ひし時、唱歌うたふ事好まずとて、如何にさとし給ふもただ頭横に振るのみならず、強ひてオルガンの前に伴はんとせられし年若き女の先生の、束髪なりし髪と云はず頬と云はずかきむしり、「ア」と云ひて放し給ひし御手すり抜けるや、裸足のまま戸外に馳出し自も泣き叫びつつ家に歸へりし後は、いかに父上母上の叱り給ひさとし給ふにも泣く他の答へはせず、遂に再びは幼稚園の門をくぐらざりし小生が五歳の春の事も亦忘れ難く候かな。やがて小學より中學に進み候後の、今日父上が御嬉嬉の折々に云ひ出ては笑ひ給ふ「俊三が全盛の時代」の悔いて返へらぬ放縱の日の始まりを色濃く浮べ候へば。

かかりし小生の何故に悲しき物語りのみ好み候ひしや、生れながらに我が負ひし鬱憂の血は矢張り幼き日にも流れ居候ひしならん。父上が「正直なるワシントンの話」「屈辱を忍びて後に名を成せし韓信の話」をば喜ばず、今は世になき母方の御祖母様の「落窪」の物語りこそ涙流しつつあかで聞きしものにて候ひき。幼少の時より良き子よおとなしき子よと、皆人の兄上をほめはやし

給ひしに、彼の御祖母様のみ、いたづらの小生を二なきものに愛で給ひし事、小生が幼な心に刻まれて消えぬなつかしさに御座候。祖母様はお話の上手にておはし給ひし故、夜毎々々母上の御傍を離れて、遠く廊下へだたりし御寢間に御話聞きに參り候ては、勇しきが中に悲しき恐ろしき話多く含める「八犬傳」をかしきよりも氣づかはれて哀れなりし「鉢かつぎ姫」さては德川の代の終りに朝敵の名をかうむりつつ支へがたき世の潮流とは知りながら、將軍家の御爲め身を捨てて戰ひし人々の悲壯なる話、殊に御祖母様の御兄弟が憎き官軍の爲めに年若くして討死なされし折の有様など聞く時は、口惜しさと悲しさに御祖母様の冷き御胸に顏を埋めて泣き申候。男は泣かぬもの、泣けば御話はなさらぬと仰せられ候まま齒を嚙みしめてうなづけども、更に悲しきは戰の折、漸く六歲のいたいけなりし我が母上さへ一日々々と官軍の攻め寄せ來るを待ちながら、大祖母様と云はれし賢かりし御方より守刀授けられて、女ながらも官軍に捕はれて縛めの辱を受けん事末の世迄の恥辱なりとて、自害して果つる仕方、手を取るやうにして教はり給ひし其の日より、幼な友達の集ひては昨日迄睦びし姐様、飯事の遊び他所にして、皆々鏡にむかひて白き咽喉に懷劍押當てつつ「かくして妾は死ぬるなり」と云ひ云ひし給ひしと承れば、いかでか吾の泣かでゐられん、又更に泣き濡れてやがて、涙の乾くまにまに疲れて眠るのにて候ひき。

父上も其の頃は折に觸れて漢詩など遊ばされ候ひしが、人の涙誘ふ如き文字好み給はざりし事今に變らず、吾等がをかしき讀本の、空想を誘ふ事さへ忌み給ふ事甚だしかりしは長く消え難き小生が心の上に置かれたる、力強き掟の基にて候。さるを何故に吾はさる讀本のみ好み候ひけん。暗き我が家の土藏の二階の西向きの窓の下こそは我がいろいろの本引出してはひそかに讀み耽りし處にて、小學へ通ひ候時代に早く「太平記」「平家物語」など讀み覺え候ひしが、「源氏」「枕の草紙」「萬葉集」「古今集」など得わかぬながらも十三四の折に一通り讀みし事など、其の頃の他に思ひもなかりし嬉しき心地思ひ出ては今もこよなく嬉しく候。とは云へ小生が新しき文字の知識培ひし寶庫は此の暗き土藏の二階にはあらず、碧梧桐の葉の青きをもるる日射し鮮かに流れたる兄上の御室にて候ひき。

早くより才智人に勝れておはせし兄上がそのかみの御姿も繪のやうに浮び申候。今は然る事もなくなりたれど、人の心も長閑けかりしにや、小生は我が幼き日、我が家に人々の集ひては終日樂しく笑ひ興じつつ歌詠み暮す事多かりしをなつかしく記憶致居候。殊に母上が瀧園社の方々と歌會被遊候折々の光景の忘れがたくも候かな。今もすこやかにおはせど瀧園の大人が美しき白き御髯かき垂れつつ正面に机据ゑ給ひし御傍に、小生も人々のせんやうを見眞似て硯引寄せ、馬牛

人形など紙の端に書き候を人々與へ給ふに「あちらへ行け」と仰せらるる母上の御目ざし知らぬふりして振舞ひ候。會津の役に官軍に斬られしとて肩のつけ根より左手の無かりし六尺近き偉丈夫の何とか云ひし方、その日の歌よみあげ給ふ御聲いともすぐれて美しかりしを今も忘れず。されどされど小生が心に深く刻まれしは其の頃十二歳の兄上が

　世にたたん人の栞となれよかし窓の呉竹心なくとも

とよみ出でて一座の人を驚かし給ひし時の限りなくうらやましかりし事に御座候。吾もやがては兄上の如くよき歌よみてほめられんものをと幼き頭いため候もはかなき思ひ出に御座候。

かくてその後小生が土藏の二階の文學書すべて讀み盡したる頃を、兄上は早や中學も卒業近かりし御身の學事にいそしみ給ふひまには、當時の新しき小說多く讀みては數々の本箱に納め置かれしを、人なき折に引出して小生も亦すべて其を讀み盡し申候。森鷗外先生、尾崎紅葉先生、泉鏡花先生の御作殊に多く「即興詩人」「文づかひ」「舞姬」「巴波川」「青葡萄」「心の闇」「多情多恨」「錦帶記」「照葉狂言」「黑百合」「三枚つづき」など何れも幾度となく繰返へし、繰返へす每に又新しき興味覺え候のにて候ひき。島崎藤村先生の「夏草」與謝野寬先生の「東西南北」も兄上御所持遊ばされしを拜借しては、淚流して讀み耽りしものに御座候。今もなほかかるふみのみ多く讀み候身も、

何時しか其かみの涙流して讀み入りし頃のうれしさには別れ候こそ悲しくも候かな。

「霙」と題する廻覽の雜誌に次で、高濱虛子先生の御名も見えたる「棚なし小舟」と云ふうすき非賣の雜誌などつくりゐ給ひし頃の兄上はいかばかり文學に對して若々しき熱情を有せられしにや、小生は何時も何時もうらやましく推察致上候ひしを、何に悟り給ひてか第一高等學校に入り給ひし頃よりフツトさる事に想ひを絕ち、專門の法律のみ專念に學ばれ、人にすぐれし成績にて大學の門を出でられ候に反し、道踏み迷ひし小生が次第に邪路に陷り候て、誘はるる心止めがたく遂に筆執る人の群に立ちまじる身と相成候こそ悲しき事に御座候。そは皆兄上が生れながらの賢き御性(おんさが)の故にして、これは又小生が生れながらの愚かしき性(さが)の故にて候らん。兄上が日に夜に黑き表紙の法律書讀み給ふを見て、一頃の小生は寧ろ物足りなくも思ひ候ひしが、今はなかなかに兄上の御心こそうらやましき限りに御座候。

すべての事に「程」を保ち得ざる小生は「棚なし小舟」時代にも學業の成績優等なりし兄上には似もやらず、心の向くに任せて止度(とめど)なく走り候結果、御兩親樣始め兄上姉上さては小妹の心をもいため候其の頃の事を思へば愈々自(み)の忌(いまは)しく思はれ申候。

父上の御叱り、母上の御なげき、世の中に模範と云ふも誰一人爭ふ者なき正しき父母(ちちはは)の家によ

き教へ受けて育ちし身の弱き心にいたく沁みて、我身の罪を悔ゆる念ひ絶えせず胸に湧き起れど、樣々に自が求めて爲せる行ひより愈々曲りくねりたる我性の意地惡き底の力を如何に爲し得ん、絶間なき思想と行爲の矛盾に頭亂れて、遂には烈しきひがみより家人の意味なき目ざしをも疑ひては家にゐる事何よりも苦しく、夜も晝も、あてどなく出歩きしが、寧ろ汚なき學校の寄宿舍に自を置かん事反つて心安からんと思ひてより二年が程其處に暮して我が家に歸る事も稀なりし其の間さへ兄上姉上よりこまごまとの御意見の御文幾度頂き候ひけん、吾よりは何一つ盡せし事もなきものを何時に變らぬ人々の御情の泣く迄苦しく思はれ候。

兎にも角にも其の頃は小生が心の傷にいたくも觸るる事の多く候ひしかな。彼の母方の御祖母樣、御身内に打ち續きたる不幸の上の御不幸に御心弱くなり給ひて相模なる海邊の家に御逝去遊ばされ候際、かからんとは誰もはからざりしため、折惡しく母上も遠出し給ひて、俄に御病氣あらたまりぬと電報もて云ひ來せし夕べ、家に在りしは小生一人にて候ひき。されど取る物も取りあへず直ちに急行致候小生さへ御死目に逢ふ事も得せず、いたづらに御なきがらに取縋りて人目も恥ぢず泣き申候。麻布に住ひし頃坂下の熊野神社の境内に出づる辻占者に、幼きわが後の日の運不運占なはせたまひて、此の子「必ず大事を成す」と以前は一かどの武士が落はくしたりしと聞

きし男の、しかつめらしく云へりしを上もなく喜び信じ給ひて、おなくなり遊ばされ候日迄小生が悪しき性はすべて認め給はず、小學の日に賢かりし事のみを御承知にて、その後の振舞ひなど露御存じなく、「俊三は學問も人にすぐれ」と二言目には云ひ出で給ふを、人々をかしがり候ひしど、小生にはいかに悲しき御言葉にて候ひしよ。すべて吾に情深く優しかりし人に、此方よりむくいたてまつる日もなく御別れ致候事身に魂に刻まれて悔まれし事に御座候。折柄秋の荒れし海邊は浪の音のみ高くして、御枕邊に悄然と唯一人通夜したりし小生の心に、雨戸をゆする潮風もただには聞き過す事能はざりしのに候。

其の秋も寂しく暮れて時雨の寒き頃に候。父上突然御病氣とて××病院に御入院被遊候が、曾て名を聞きし事もなき不治の御病と承りし時、小生は數ヶ月前に別れ参らせし御祖母様に對していだきたる心、不安の中に起り來るを止めかねて、年月の不孝を悔ゆる折々に涙冷く流れ申候。我がなせしあやまちをとがめ給ふを、おろそかに聞き流せし小生には、父上の御小言よりもその御身の上の衰へこそ胸いたく覺え申候。父上に對して腕力もて爭ひし不孝者我がはらからの中にて小生のみに候をいかばかりなげき候ひけん。若し此のままに父上の御命につつがあらんには何を以て御詫び致さんとあらぬ事さへ考へ及び候ひしが幸に程も無く御退院遊ばされし時、いかに

我が心安んじたりけん。然れども其のみぎり得給ひし御病氣は暑さ寒さの折々に殆んど休みたく御老體を苦しめて、夜毎夜毎の御寢酒の折、盃持ち給ふ御手の震へに屢々酒のこぼるるを寂しく眺め申候。吾にして若しそのかみに變らず、かりそめの事にも腹立ち怒りては、手當り次第に器物など投うちこぼつ事あらば、其を叱り止めんとし給ふも今は早や、我が力父上にまさりて恐らくは、いかんとも遊ばしがたかるべしと、フト思ひし時限りなき悲哀は我が心に暗き寂寞を横たへ申候。

今も問はるれば我が友のすべてに答へ候が、「孝行は哀れみにほかならぬ事」とその頃小生は、思ひ初め候。かかる悲しき考へのかすかに胸に浮びし頃、或時弟が我儘の振舞ひ、左程見かねしにもあらぬ己れの故意と手荒く取りひしがんとしたるを、果して父上の我が腕捕へて引放たんと遊ばされ候ひしが、御心のみはやり給ふも、御年寄られし父上の御手は我が弟に下さんとする拳、支へ給ふ事能はざりき。ああよしなき事に親をためせし、その時の、我が心に置かれし烈しき苛責より後の幾年の遺瀬なき意氣地なき忍従の心弱さは導かれしやとさへ被思申候。

それもこれも後見らるる心の影を、更にいたましく深くして外に燃えたる若々しき我がすべての物に對する熱情の焔、哀れにも冷く凍り初めし日の忘れ難き事の數々に候。

あれは中學を卒業致候年の春まだ寒かりし頃にて候ひき。さまざまの事に思ひ疲れてあやしく心狂へりし小生は、自もわきがたき心抱きつつ、誰人に斷り云ふ事もなく強き不安に追はるる思ひにて、寄宿舍を出で箱根の山上に二十日程吾にそむく吾と戰ひつつ、苦しきあけくれを送り候が、其の折兄上にのみ手紙もて小生が心のうつろひを、細々と申上候を御記憶遊ばされ候事と存候。

山上の二十日は多く雨にあけくれ致候。葦の湖畔の宿は、四方を圍む、山々の雪まだ解けぬ頃なれば小生の他に客も無く大寺の寂寥を覺えしめ候ひき。空青く晴れし日には僅に乾きたる草を求めて、山頂に雲のゆききを日もすがら遣瀬なくも眺め候。汀近くの枯葦の中にささなく鶯の聲、氷に響きてこだまするかと思はるる靜かなる湯の町に、何を想ひ何を苦しみ候や、今は思ひ出さず候。それ程とりとめなき事々に心亂れ候ひしなれば。

されど其の想ひ悩めりし小生の心にいたく沁み入りて、其の後の日の悲しきあきらめを深くも刻み候哀れなる小女の死こそは、小生が如何に忘れんと努むるも忘るる能はざる事に御座候。

初めて小生が日に光る雪を踏みて訪れし日に、宿の主人夫婦が中に唯一人なる娘の病みて臥せる事、夜食の折に給仕の者より聞き申候。そのために夫婦は客あしらひも忘れしさまに心いため

て看護せるを、次の日より小生も認め申候。日ざしうららなる日など散歩に出る度毎に、必ず其の室の前を過り候が腰硝子はめし障子の内に、ふすまかづきて横はれる娘の象牙の如き美しき顔を、何時も何時も胸苦しく眺め候。たまたまはその夜着の外に出せる腕の細き事にも驚かれ申候。枕邊にはいろいろの娘が喜ぶらしきリボン、簪、讀本の類うづ高く積みてあるもはかなく、朝も夜も左右につき添ひて心を盡す主人夫婦が、わが通る時硝子越しに愛嬌賣る人のすなる意味なき笑顔して挨拶するを例と致候が、強ひて浮べしその笑顔の哀れに心苦しく思はれ候へば、小生は其處を通る事憚る程の心づかひを致候ものを、其の年正月の半ば、かりそめの風邪の原因となりて、床に就きしと聞きしその夫婦が最愛の者は、霙降りし夜の曉方に歎きに沈む父母を殘して死に申候。

何事も知らざりし小生の翌朝ただならぬ人の氣配に氣づき候ひし時、身内の者近廻りの人達にやあらん、いささかは集へる人々になぐさめられながら、止め度なく落つる涙を拭ひも得せぬ夫婦の姿認めて胸ふさがり申候。

二日三日更にしめじめと降りし雨に濡れつつ、ちさき柩は山ふところの寺に運ばれ候が、その夜主人とその妻が、かたみに泣きて語り候ところによれば逝きし日の前の夕暮方、俄に病勢のつ

のりて、夜に入りては人心地もなく旣に息絕えしかと思ふ迄昏々と眠れりし娘の、雨戸の外に湖の水のほのぼのと白みて迫る氣配するあかつき、心も心ならず取縋る父母を衰へし眼を開きてフト眺めしが、何かは知らず脣動かして物云ひたげなる樣するを安からず思ひしが、暫時してかすかに「安心」と云ひし、それが最後の言葉なりと聞きし時、小生も共に泣き申候。

今や暗き冥路に、父母に別れて死にゆく十二の小女が最後の言葉は「安心」にて候ひき。其の言葉が何を意味し候や。歎き悲しむ父母に、苦痛なく死に行く身故安心せよと云はんとしたるものか、或は又佛教の國に生れし少女が寂しき心より、自は安心して死ぬるなりと云はんとしたるものかは知らず、かかる言葉東洋の日本の國に生れし身ならで誰か云ふ可き。蓮の花咲ける寂しくおごそかなる極樂を、吾等も幼き心にいかに不思議になつかしく思ひ候ひけん、彼の宿の少女が哀れに悲しき心こそやがて吾らが心には候はずや。死にてゆく自を悲しむよりも後に殘る父母の心安めんと、臨終の際迄、心いためし彼の宿の少女が心こそやがて吾らが心に候はずや。小生は此の國に生れ此の國の暗き人の血を傳ふる身のたちがたき心の悲しさに息詰る程打たれ申候。ああその折の何事をも思ひあきらめし我が寂寥を誰か知らん。

やがて雪解の水のシトシトと流るる山路を、小生は主人夫婦が寄邊なき思ひに泣き暮す彼の湖

峠の宿を見かへりがちに、トボトボと下り申候。

小生は直ちに寄宿舍を出でて父母の家に歸り候が、其の後人目に觸るる小生の行爲の彼の古き芝居の善人たやすく惡人となり、惡人忽ち善人となるそれにも增して著しく際立ちて變りしを皆人認めて驚きし中にも、親しかりし友の二三は寧ろ其の變化の激しかりしに心痛め候ひし程にて候ひき。父上も母上も何事にも爭ふ事なくなりし小生を如何に嬉しく思ひ給ひけん、吾自は恥しく思ふものを、他人樣に對して「あの俊三もやうやくおとなしくなりぬ」など、かくされぬ喜びもて語り給ふを傍へ聞く時、寂しき滿足に堪へ難き念も致候。聲あげて怒る事せずなりし小生は、又聲あげて笑ふ事なき身にて候ひき。

そのかみの無邪氣なるいたづら者の淸き心失ひしかはりに、日每日每自をいつはり人をいつはる卑しき心養ひて、小生の心の寂寞に想ひ至らぬ人々の御ほめ言葉頂く身と相成候てより、殆んど吾には等しく暗き春秋の幾度かうつろひて、他所目には事なき生活の、ものうくも年月を經申候。

ああ、然りながら悲しきは絕ち難き我が心にて候かな。父上母上扨ては吾に親切なる身內の人々の犧牲に一生を捧げん事こそ望ましけれと思ひ定めしより、憧憬強き我が心の欲求の燃えんと

するに水そそぎつつ年を經し其の間には、幼きより我が好みし筆執る身とならんと思ひし事も有之候ひしが、それもこれも皆あきらめの底にかくしてうち過ぎ候を、忘られし去年の鉢に花草の芽の春來れば日影にも萌え出る、あやしく奇しく力強き誘ひの次第に深く喰入りて、いかんともなりがたきに至りしは去年の春の頃にて候。今は又烈しく狂へる熱情に驅られつつ、しかもひそかに「處女作」の筆執り候こそ此度の御心配の種蒔きし事にて候。

小生は人無き山中又は高原などに一人在る時、鳥も啼かず風もそよがず、ただ大空の雲の往來のみ僅にものの動き候を認めてあまりの寂寥に堪へられず、自ら聲を發して自の存在を確めでは居られぬ念の致候を再三ならず經驗致候。又時に住み馴れし我が室の内に在る時さへも、冷く吾を圍む四方の壁の沈默に襲はれて、思はず脣に歌の聲をもらし候事も有之候。かかる折の心持こそ小生が筆執りし折の心持にて候ひき。

されば藝術とは何ぞやと問はれ候とも小生には答へ難く候。少なくとも彼の警世家、又は文壇の一部の功利主義者が云ふ如き、人を導くとか人の爲めにするとか云ふむづかしき事は小生が想ひも及ばぬところに候と同時に、一般の人に對して唯一なる藝術を人に強ひ、法律の條文の如き動きなき斷案を下して藝術とはかかるものなりと叫ぶ人々の勇しき思想も小生の身に知らぬとこ

ろにて候。あはれ小生が藝術は吾自の爲めの藝術にして、悲しきなぐさみにほかならず候。

小生は世の中の人、殊に人の子の親として筆執る者を忌み嫌ひ、就中小説の類を無益有害のものと看做す心持をよく了解致居候。小生とても文學を「いいもの」「わるいもの」と單純に分つ人のならひに從へば、別段の深き考へもなく「わるいもの」なりと答ふる事に躊躇致さず候。世の爲めにならず、自の爲めにならず、學校の先生、文部省の御役人の恐れ候如き惡化を世にも人にも及ぼす事をさへ疑ひ申さず候。かかる事申候へば文學にたづさはれる人々聲あげて笑ひ筆を盡して嘲り罵り候べし。さりながら小生はかく思ひかく信じ候のに候。

父上が數十年、夜毎夜毎御やすみになる前に召上り候御酒を、醫師は御體の爲めに惡しとて禁ぜんとしたるも、父上は「他人には酒は有害なるやもしれず、然れど年來一夜もかかせし事なき我がためには妙藥なり、これを止むる醫師が融通のきかぬ事驚かるるのみ」とて一笑に附し給ひ、御病氣惡しき時さへも人々の止むるをきかず盃を手にし給ふを、小生は御尤もの御事と存居候。御酒召上らぬ時は一睡をもなし給はぬ父上の御一生には夜毎の御寢酒なくてかなはぬものに候。小生が筆執る事或は又父上の御酒に等しきものには候はずやと、ひそかに思ひ居候。阿片を好みてたしなむ者の多くは阿片の害を承知の上の事と存候。毒と知りつつなほこれをたしなむ人の心

地の小生には限りなくなつかしく思はれ申候。これ皆人々が生れながらの悲しき性によるなれば、蕩兒は遊蕩に一生を捧げて惜しまず、金欲しき者は金に一身を托し、名譽を得んとするものは一片の金屬にて造られたる勳章の爲めに其命惜しまぬ人のならひ、あはれに面白く思はれ候。

かく思ひつつ小生は、ただ寂しさに耐へずしてうたひ候のみ。從つて其の道の批評家のそしりをいかに受け候も何の苦痛を伴ひ申さず、聲あげてうたひし後の心地よさに、更に又第二の歌をうたひ候こそ愚かにも哀れなる事にて候はずや。

とは云へかかる場合にも小生が衰へし心は、父上母上を始め皆々樣の御心に又新しき御わづらひ相掛けん事唯一の恐れにて候ひし故、出來得る限り細心の用意を盡して、我が爲す事を祕しかくし候をせめてはお憐み下され度候。今は最早や兄上にはかくすも及ばぬ事に候が、父上より頂きし忝き名前持ちながら故意と戲作者めかして假名用ゐ候も小生が心づくしに御座候。早瀨不二太なる變名は、我が年月變らず難有く嬉しく拜見致居候泉鏡花先生の御作中より憚りもなく拜借致候ものにて早瀨は「婦系圖」に現はるる掏摸上りの獨逸語學者、不二太は「風流線」の主人公戀に破れて山にかくれ、形ありて死せるが如く、死して形あるが如き青年の名に御座候。

初めて「處女作」の雜誌に載り候折の小生が心持は凡そ世の中の筆執る人の處女作出し候時のう

れしき心持に比ぶべくもなく、ひとには推し難き不安を覺え候を思ひて、何時も何時もうらはかなく存申候。幸か不幸か廣き世間には小生が幼稚なる物語をさへ讀みて兎角の噂する人も有之候へばか、新聞雜誌などに我が匿名の下に出したる作品の批評の出るを見て、疑ひに馴れし心より家人の目ざしの故もなく吾をみつむるやう思はれ、書店の前通る時は、うづ高く積まれしその雜誌の我が知れる人の手に入る事もやあると恐れ候ひしが、何かその係りの人の心に適はぬ節のありしとかにて雜誌の發賣間もなく禁ぜられし時、小生は不思議なる安心を覺え申候。かほど迄心惱まし候ものを、誰人の心なくも御耳に入れしにや母上の「汝が作り物語こそ見まほし」とのたまひし折の御眉のひそみを、小生はあわただしく打消す爲めにすべてを忘れ申候。傍に在りて意外の事に耳かたむけし小妹の、兄がさる卑しき小說書くわざにたづさはると聞きて、外聞惡るがりし顏の色、笑止にも候ひしが、小生は言葉を盡して母上の御言葉の眞實ならぬ事を述べ申候。

さは云へ又はげしきあくがれに、大方の人の夢なりとおとしめ云ふ我が小說を次ぎ次ぎに綴りては、ひそかになぐさみ候事止め難くも候ひしかば、何時しか不二太が俊三なる事、日頃知れる人々の間に廣まりて、やがて一人は二人に、二人は更に幾人の人に傳へて、遂には文學など夢さら知らぬ父上母上の御知己の人々さへ、彼の正しき人の子にさるたわれたるわざする者の出しこ

そをかしけれと云ひはやすとか、小生自いちはやく聞きしりて世の人皆悄き念致候。
我が父上我が母上程世にも行ひ正しく、心清き御方又とあらんや、小生は常にかく思ひ信じ居候。曾て千代が縁付きて間もなかりし頃、良人なる人の「世に誰人か最もすぐれたる人ならん」と云ふ突然の問ひに「我が父母にまさりたる人あるべしとも思はれず」と卽座に答へ候を、母上聞き給ひて、「先方の御兩親もおはすにさる事憚りもなく云ふ事やある」とて叱り給ひしが、小生は我が妹の無邪氣にしてしかも親を信ずる事厚く自を信ずる事深きをこよなく嬉しく存候ひき。一人千代のみならず我がはらからにして父上母上を又なき御方と思はざるもの誰かあるべき。さるを我が拗れたる心は御兩親の御惠み深ければ深き程、お情厚ければ厚き程、我が方よりむくいたてまつる事少なきを悲しみ、御心に適はぬ事に心赴く事のなげきをば、夜も日も惱ましく思ひ申候。

彼の御發病後、兎に角今は掛念する事なしとは云へ、著しく御年めされし父上の御酒の量も以前よりは減じたるが、却つて御嬉嫌に現はるる程よく廻りて吾を傍に呼び給ひては何事も知り給はず我が行末の事のみ云ひ出で給ふを泣かまほしくも思ひ候て、幾度か我が持つ筆を折りて捨てんとも思ひ候が、絕間なく內に歌へる聲に追はれて、常に机に向ひ候へばすぐれて遲筆なる小生

が書きしものも數になりしより日頃御交際願へる××氏の「我が店より君が集を出さんと思ふが如何に」など仰せらるる迄深入り致候事、ひけめがちなる小生には苦痛を伴はでは居らず候ひし。一度は御斷りも致候へども、此の秋愈々暫時は住みなれたる故郷を遠く離れ父母の家に別れて外國に旅寢する身とならん事定りし折に、何となく一度去らば再びは故郷に歸り來る日のなき如く思はれ候て、我が亡き後に何かしらかたみともなるべきもの殘し度き念致し候。

一日思ふ事ありて我が近き七年の間、一日も怠る事なく、記せし日記と、其の間に交りし人々よりの消息の、萬一の時後に殘さんは他人に迷惑及ぼす事ともならんかと思ひ、今はなかなかに捨てられぬ思ひもしたりしが、一切灰に致し申候。降り續きたる雨の後のうすしめりたるうら庭に、秋の日のつれなく赤々と木の間をもるる夕暮方彼の栗の大木の暗き木かげに、右の日記と手紙山と積みて火を擦り申候。かにかくに我が心の底の底迄殘りなく記したりし長き間の日記たれば燃え盡す迄に一時はかかり候らん。やがて白々と灰になりたる思ひ出のなきがらに、うす月の光さして、夏より秋へ暮れてゆく頃の殊更感傷的なる心につめたき涙も、もよほされ候。曾て二なく親しかりし人のさまざまの事原因になりて、打絕えしもはかなかりしが、それよりもなほ今は世になき人のなつかしさこそ苦しき事にて候ひき。その人々が心を籠めて吾に書送りし文がら

さへ、焔の後のうす煙りに消え行くを思ひて、吾は何故に悲しき紀念を灰に爲し終しかを強く強く悔み申候。その人々が吾に殘せし者今は我が心に刻まれし記憶の他に何物もなき事を想ひて、我がなき後の事しみじみと想はれ申候。

かかる心持より幼稚なる我が小說集市に出さん事願はしくなりしも自哀れに思はれ申候。旅の支度に忙しき身に一切の事××氏に御願ひ致し、何かしら心殘りはありながらあわただしく故鄕を後に致候。其の日、我が乘る船の靜かなる港の海に白泡を湧き立たせつつ棧橋を離るるや、波止場に立ちて見送りし小妹の早くもハンケチに顏をかくして泣けば母上も共に御泣き遊ばされ候。然るを小生は何故に悲しき淚に濡るる事もなく、恰も隣人を訪ふ心地にて甲板に立てるにやと、口惜しきおもひもして又しても我が習性としておのれをあきたらず思ひ、おのれを憎む念ひに堪へかね候が、しかもなほその見送りの人々の姿、遙に、ちさくやがては沖の方より吹く風に渦卷きつつ陸地へ靡く黑煙の末にかくれて見えずなりし時、未だ曾て知らざりし何事にもかかはりなき、いと長閑なる心持に在る吾を認めではゐられ申さず候ひき。

日を經ては人々口々に、昨日も今日も波の音にあけくれする海の旅の無聊をかこち候中に、小生は四方を圍めるは灰色に曇りて寒き空と海の他に一物もなく、道連れもなければ知人もなく、

父上母上兄上姉上扨ては親類の人々の誰一人も在らぬ事を此の時のみは限りなく嬉しく思ひ候事、失禮ながらかくさず申上候。海荒るる日の動搖にも搖籠に眠るおもひして、心安く身を任せ申候。人々が一日も早く目的の陸地に着かん事を希へるに反し、小生は一日も長く海上に漂ひて在らん事を希ひ居候ひき。かかる時、すべての煩はしき義理人情のしがらみに別れし身の、激しき熱情を以て行方しらずさすらはん旅人の身の上の慕はしく思はれ候もいとはかなし。

さはれ船は極めて平穩なりし十六日の航海の後、港に碇を下し候へば、わが無上の喜びなりし海上の生活はここに終りて、航海中知り合ひし人々皆ちりぢりに別れし夕べ、小生も五日路の平野を横切る汽車の中に、唯一人乘り込み申候。それよりは旅人の心細さ、事につけ折に觸れてしみじみ感ぜられ候が、殊に窓の外は見る限り枯草の廣野にして遠き遠き東の地平線より朝に上る日の、更に遠き遠き西の地平線下に沈み行くを見送りては、あまりに偉大なる自然の物怖しき偉力に愈々心震へ申候。「汝は支那人なりや日本人なりや」など、此のみじめなる東方より來りし顔黄色く足曲りたる旅人を珍しがりて、乘合ひの者の寄り來ては尋ね候に對しても、思ふ通りの答へさへ得せぬ身にしあれば、やがて此の地に着致し候て、下宿相定め學校に通ふやう相成候後も、すべて思ふに任せぬ事のみにて寄邊なくも被存候を、しかもなほ小生の年月知らざりし旅人の心

安さを深く深く喜び候事あはれに悲しく思ひ沁み申候。
いかばかり此の年月を、吾と我が心に鎖して在り經しや、小生は初めてそれに氣付きたる如く強く感じ申候は孤獨の嬉しさとも申すべきか、心細き旅にして初めて憂ひなき吾を見出候こそ甲斐なき事に御座候。ただ時折の故郷の消息の心苦しく思はれ候のみ。そは何時に變らず吾を信じ給ふ母上の、我身を案じわづらひ給ひて、海を遙かにへだててさへ衣食の事より人中へ出る時の心得迄も御心にかけられては細々との御注意の今更に胸迫り申候へば。されど大方は

我が旅の心こそ　　暮れゆく秋の雲の影

と詩人のうたひしたよりなさもありながら、旅人の身のうら安さを朝に夜によろこびつつ二月は早くも暮れて、此地の寒き寒き冬を迎へ申候。

まこと、語學の不得手なるために學業の忙しきと、誰一人知る人もなき生活に、今日迄心に掛かりし事のすべてを忘れ居候ひき。さるを、大雪の後の身にしみて寒き昨日の夜、門口の扉の鈴を鳴して來りし郵便配達は、小生の手にかさばりし小包と數通の書狀と、さて小生の心に悲しみを與へて去り申候。

小包は小生が「第一集」を書肆より送り來りしものにて候ひしが、同時に受けし書狀の中には、

兄上の御書面の他に鐵彌叔父様よりの兄上のにもまして長き御手紙もまじり居候ひしを何心なく打開けば

小生は文學を尊重するものなり、然れども……

と先づ書き給ひし一句のあまり意外なりしに胸を打たれ候が、小生は此の冒頭の一語に續いて來る可きすべてを讀まずして推察致候。叔父様の文學論に候へば此處に寫さずとも御推測下され度候。その尊重し給ふと云ふ文學の德を記し給ひし叔父様は何を思ひあやまりてにやいたく憤り給ふならん、墨の色すぐれて濃き例の達筆にて激しき文字を列ね給ひぬ。

……如何なる惡人と雖も善惡の別を知る、彼等が惡人となりし原因は如何、精神の痲痺なり。形と色に迷ふものは遂に救ふ可らず、色相に捕はるる徒輩の小說は一種の痲睡藥のみ、人心をみだるこれより甚だしきはなし。小生君が新進の文士先生なる事を知りしは君が出發の數日前なりき、爲めに所信を披瀝して君と一夕の文學論をたたかはす機會の無かりし事を遺憾とす……。

敢て君を指して云ふにあらず、酒を飲み賣女にたはむるる如きを文士先生となる必要條件と思へる所謂新進文士の如き小才人、最下等の人情を描くのみを小說家の任務なりと思へる馬

鹿者を小生はあくまで唾棄して憚らざるものなり。
と最後を結び給ふ迄、殆んど何を指して罵り誰を相手に憤り給ふにや解し得ざる程、故もなく熱罵の言葉を浴せかけられ候。あまりの事とて小生も流石に恨めしき心地の致候が、しかもなほ忍從に慣れし心は、か程迄理不盡にさげすまるるも怒るよりは先づ我が身の上をはかなみ候ものを、まして兄上の御情こめられし御手紙次いで拜見致候ては、二十歳越したる身にして盡きせぬ涙流れ申候。

小生は自を悲しみ候と同時に、心なほ人々を限りなく恨み申候。承れば彼の意地惡き石井氏のみならず、小生は見るだに胸惡しき心地する木村様、さては人皆の人喰ひ馬と呼ぶ幾野夫人迄何事をも知らず安んじて我が行末を待ち給ふ我が父上母上に、小生が筆執る事をほのめかし給ふとか。位高く黄金多く積みし人々が徒然をなぐさむる術の殘酷さをかへすがへすも憎み申候。

心曲りたる者は直ぐなる人を厭ふ事、何時も變らぬ世のならひか、父上母上の前にて頭下ぐる人々かげにては「あまり正しき」を唯一のそしりとして兎角さがなき嘲笑に自のうしろめたさをかくさんとする事、小生よりも早く人中に出で給ひし兄上は夙に御承知の事と存上候。されば彼の人々が、父上母上の嫌ひ給ふ事承知にて、且は又我が忍びて爲せる事をも知りつつ、ちらちらと

意味ありげに小生の事云ひ出ては御兩親樣の御心亂し候心なきしうちの口惜しくも候かな。

明治の教育受け、且自思想家を以て任じ、日頃小生に「形而上の事にも心向けよ」と口癖に云ひ給ひし若き叔父樣さへ故もなく怒り給ふ程なれば、小生が小說の筆執るてふ事は父上母上の御心には他人の思ひも及ばぬ、御心痛なる事些か御無理とも存じ申さず、「君は子息を小說家と爲すにや」と石井氏の突然の問ひに、それ迄は何の疑念をさへ持ち給はざりし父上の御返事さへ遊ばされず、殆んど他人への質問と思ひ給ひしやうなりしと承りて、それも亦御尤もの御事と存上候。然れば又漸くに人々の口より噂めかして何彼と聞き知り給ひては日頃の御氣質とて、直ちに其月の文學雜誌あまた取集められて、一々我が名を求め給ひし程御心わづらはし給ふと聞けば、曾て御手をも觸れ給ひし事なき雜誌の一頁一頁を、御心震はしつつたどり給ふ御老體の、小生が口惜しき涙の中にも瞭然と浮び申候。

もとより小生がかくし名を御存じもなければ、ただ人々の言葉よりほのかに推測し給ひての御事に候のみか、此頃創作の興味何故にか失せ去りし小生の文字のいかで御目に觸るる事のあらん、いたづらに勞し給ひしを愈々御氣の毒に存上候て旅人の感傷的なる心の不思議にも幼き日のそれの如く、更に泣かれ申候。

ああ吾は長き年月をひたすら御兩親の御爲めにと心つくしてありしものを、心なき我が意地惡き言葉より、よし今もなほ半ば疑ひ半ば信じ給ふ程の事なりとは云へ、最早や昨日迄の安らかさにて小生を賴み給ふ事かなはぬ御心となり給ひしこそ小生が盡きぬ涙にて候ひき。

やがてはすべて御耳に入り、御目に觸るる日の參り候べく思はれ候。小生は一人寒き屋根うらの室に、叔父樣、兄上のお手紙手にしてあく迄泣き申候。よき年をしてホロホロと涙あふるるを人は見ずとも恥かしく思ひ候ものを、なほも止めかね候が、その折の苦しき心地は實に自の身を悲しむのみにはあらず、常に人中にて落度あれと呪はれ給ふ父上母上の御身をも乍憚悲しみ候のに候。こしかたの事思へば、思ふ程口惜しく、此の頃の事聞けば聞く程殘念に存ぜられ、遂には頭堪へがたく痛みて、靜に椅子に倚りてあらん事苦しく、臥床の上に身を投げて悶え候が、やがて夜更けし町に出で、降りつみし雪の上吹く風の中を行手も知らずさまよひ歩き候折は、自心狂ふにはあらずやと思はれ申候。時折り行きあふ雪橇の鈴の音際立ちて冴えて響くも寂しく、やがて遠き小みちの闇に消えて行けば、あとは見る限りの雪の夜道にさ迷へるは小生一人にて、骨身に沁み入る風つれなくも吹けば、なほも流るる涙頰に凍り申候。

いかにして門の扉は開きけん、再び我が室に入りし時、小生は手足凍りて、そのまま床の上に

轉び申候。過去の事、將來の事、幻になりて浮び候のみ、頭亂れて何事も考ふる力御座なく候。たた小生は

髮白き父の頼めるわれなりと心弱くも思ひ初めしか

と侍てうたひしその心地の、幾度となくらゝぎらんとするを限りなくなげき候が、夜一夜眠りもやらであかせし此のあかつきより、兄上への御返へしとして此の文は書きつづけ申候。

思ひ亂れし小生には到底今のおもひ筆に盡しがたく候。此の後のなりゆきに從ひて如何とも心定めんか。否、小生は彼の山上の湖畔の宿の少女が臨終の言葉「安心」を叫びて我が筆を折り申すべく候。

十二月二十二日　　俊三

兄上様

（大正二年二月二日）

友だち

Aさんと Bさんは二階の教場でぼんやりと顔を見合せて居た。

窓に近い大樹の茂みをもれて、秋の空が眞青に澄んで居る。輕い風の吹き過ぎる度に、木の葉はもうあわたゞしく散る十月の末である。

「オイ君、こりやア休みだぜ。いくら待つてたつて來ないぢやアないか。」

「珍らしいこつたなア、M先生が休むなんて。」

「だから此の頃は變だつて云ふのさ。」

二人は又默つて顏を見合せてゐた。毎日々々見合せる顏だから、別段うまいともまづいともお互に思はない仲なのである。

「歸らう。」

Aさんはいきなり立上ると威勢よく本包を引かゝへた。本包の色は濃紫である。

だがBさんはまんじりともしないで友達のする事を見詰めてゐて動かない。Aさんはあんまり威勢よく立上つたゞけ相手の態度に張合ひ拔けを感じたのであつた。

「オイ行かうよ、つまらないぢやアないか。」

「マアもう少し待ち給へ。」

「馬鹿々々しいや、私アどうでも今夜中にあれを書かなくちやアならないんだからね　行かうよ。」

「ぢやア行かうか。」

Bさんは大儀さうにからだを起した。

二人は靜に階子段を並んで下りたが、おんぼろの白壁はその靜な足音にもみすぼらしく震へてかすかに砂が散つたのである。

「オイ一寸待つてくれないか。僕ア袴を脱いでくるから。」

Bさんは階子段の下で、小倉の袴を手早く脱ぎ捨てると、いきなり傍の物置の戸をあけて、クルクルとひんまるめたまゝ無雜作にはふり込んだ。

Aさんは入口の石段に立つて庭を眺めて居た。常磐木の葉の色さへ今は哀れになつて、乾いた土の上を干反葉がさゝやきながら風に吹かれてゐる。

「お待ち遠さま。」

Bさんがステツキを持つて出て來たので、無言のまゝ歩き出した。

「どうしたんだらう先生は、——僕ア今日は一生懸命で下讀みして來たんだぜ。」

「君がかい、だから此の頃は變だつて云ふんさ。」

二人は遠くの海の方から來る風に秋の心を感じながら、だら／＼坂を下りて黑い門をくゞつて往來に出た。秋は此の黑門が殊に寂しく思はれるのであつた。

その時、二人が後にした門の中では、今多勢のなまけ者がそれ／＼先生の教へを聞きそらしてゐる。或者は机の下にかくしながら其の月の雜誌の卷頭に出た「三月櫻の咲く時分」と云ふ題の、やたらに長つたらしい通俗小說を讀み、或者はポツケツトになまあつたかく蒸されてゐた干葡萄を喰ひながら筆記のペンを急がし、或者はつけ文の草案の起草に頭を惱まし、又或者はお母さんからおこづかひをねだり出す名文句の諳誦に努めつゝあつた。

教壇の上では知らぬが佛で、或先生は拙ない發音で外國の言葉を子供等に教へ、或先生は此の頃破産した本屋から原稿料をどうしても受けとらなければならないと思ひながら、そんな氣ぶりは見せないで、權利義務を說き、或先生はうちに五人目のお産で寢てゐる青い顏の細君の事を心配しながら、堂々と修身を講じつゝあつた。

AさんとBさんは馬や車が入り亂れて通るのも、時々威勢よくぶつかつて行く中學生も目にも入れず氣にもしずに、唯なんとなく行手が心細いやうな氣がして歩いてゐた。

「一寸お茶を飲んでかないか。」

Aさんはレストラントの前で立止つた。あけ放した入口に赤い鼻緒の草履が冷めたくかたづいて待つてゐる。

「よさう、銀座に行かう。」

「だがね、私ア仕事があるんだからね。」

とAさんは一人でつぶやいたが默つて又歩き出した。

二人は云ひ合はしたのではないけれど一寸本屋の前で立ちどまつた。

「何か新しい物でも出たかい。」

「イヽエ。」

そのまゝ二人は上積みになつてる本の表紙をめくつて見たつきりで立去つた。

「Yさんは彼の本屋が好きだつたねえ。」

とAさんは何の氣もなく云つたが返事はなかつた。

風は折々塵埃をあげたが、一口に云へば透き通つた景色である。町を歩いてる人の顔が遠くでもはつきり見えた。

「つまらないなア。私ア何がなんだかわからなくなつたよ。」

Bさんは默つてAさんの横顔を見守つた。此の言葉こそ何がなんだかわからなかつたから。

「ネー君、私ア今の批評家程氣樂なものはないと思ふね。」

Bさんは、ア、又その事か、と思つた。

「折角人が苦心して書いたつて、たつた一言で批評家はけなしちやふぢやアないか。それもいゝさ、けれど此方の立場も見てくれなくちやア、――又來月も手ひどくやられるんだらう。」

「いゝさ、わかつてる人にやアわかつてるんだから。」

「何故此方の人は皆默つてるんだらう。なんて云はれても苦笑ひしてるつて云つた人ばつかりだねえ。」

「だつて氣にしたしたらきりがないよ。」

「Yさんもよく云つてたよ、なんて云はれたつて平氣ですつて。だけどね、私アYさんだつてさうは云ふものゝほめられる時とけなされる時たア氣持がちがふと思ふんだ。」

「そりやアさうさ、だけど――マアいゝ加減にしとくほかないやね。」

二人は此の時別々の心持ではありながら肩と肩とをすれ〳〵にして歩いてゐた。

山內の木立の下を通つて神明に出て、日影町から烏森、それから新橋を渡つたがその間二人とも云ひ度い事がなかつた。

折柄、丁度下の關行きの汽車が汽笛を鳴らして出て行つた。其處にはいろんな人がいろんな喜劇悲劇の中にまじつてゐた。朝鮮に出稼ぎに行く亭主を送る淚の女房も、志を立てゝ東京へ出て來たのが、又ふところ手で故鄕にかへつて肥桶をかつがなければならなくなつた有爲の靑年もゐた。見送る人も見送られる人もお互になさけない顏を見合せてゐたのが、もう離れ〳〵になつてしまつた。ながい〳〵プラットフオオムに物の音が入り亂れる中を、今鳴いた烏も浮調子に日和下駄を引ずつてカラカラと步いてゐる。停車場を出ると今迄一構への中にゐた人間が四方八方に亂れて散つて街の人にまじつて步いた。

殘る煙は輕々と空に靡いて博品館の屋根をかすめたが、間もなく丸の內のお城の近邊迄流れて消えた。

AさんとBさんは銀座の敷石の上をブラブラ步いてゐた。脊の高い上に下駄のBさんは靑駄の

Aさんと三寸も違つた。

二人とも何處に行くつもりなのか相談はしないでもチヤント承知してゐたから、無言のまゝで大通りを一寸折れると白い壁造りの珈琲店の扉を押して這入つた。

Bさんが先きに、Aさんは少し遲れてスリツパアをつつかけると折れ曲つた階子段を二階に上つた。

「ヤア皆さんお揃ひですね。」

Bさんは割合ひに愛想のいゝ聲の出てしまつたのを、少々心に濟まないやうな氣もしながら改まつたおじぎをした。Aさんも頭を下げた。

向ふの窓際に一かたまりの連中がむなしき珈琲茶碗と共に白けて坐つてゐたのである。一二三——皆油の浮いたくたびれた顔だつた。

「先刻からですか。」

「エ、隨分長くはびこつてるんです。」

Cさんは口に入れたドーナツツの最後の一片の中に、何かかたいごみがまじつてゐたのでペツと吐き出して大に癪に障つた顔をした。

「煙草をおくれ。」

お疲れ筋のDさんは椅子の背にグツタリ仰向きによりかゝりながら、皆の眼の寄るところにお手々を出した。

「オイ來た。」

と云つてCさんは、袂の中でもみくちやになつてゐた袋の中に、僅に一本殘つてゐた敷島を元氣よく彼の手の平に置いた。

「珈琲。それからドーナツツ。」

「私も。」

孤兒院から拾はれて來た少し足りないボーイは、まかり出て命を聞くと一つおじぎをしてトコトコと引込んだが、間もなくお盆にのせて通し物を運んで來た。

珈琲の湯氣は二ツの茶碗から、敷島の煙はDさんの平べつたい鼻の孔から立上つた。

「つまらねえなア、何か面白い事はないかなア。」

とEさんはポツツリ口を開いて、又默した。

反對の窓際にも一組の客があつた。例の如くペン印の學生で、正服を着たのや、なんのつもり

なのか袴の紐にインキ壺をぶら下げたのや、何れも半熟の顔付きをしたのが大に喰つてゐた。

「綾菊かい――畜生ッ。」

急にはしやいだ聲を出した、そん中の一人が手をあげると、もみあげの短く青い色男の正服の背中を、いやつて程どやしつけた。

「痛え、よせやい。あいつが泣くぢやアねえか。」

色男の癖に非道く下等な言葉をつかつた。

此方の連中は一齊に振りかへつて眺めた。彼方は一寸テレた顔で皆クスクス笑つた。

「古い事を云つてやがら。」

Dさんは煙草の吸がらを無慘にも珈琲茶碗の中につつこみながら、得意さうにつぶやいたが、つぶやいたために一層くたびれてしまつたので默り込んだ。

一人がア、アと腸を見せてあくびをすると羅漢さんが揃つて各々一つづゝ順ぐりにア、アと大あくびをした。

午後の日は斜めに向ふ側の新聞社の白壁に射してゐる。その新聞社の二階では、今國家の財政のやりくりの拙い事を、無理に句點の少ない廻りつくどい筆で書いてゐる先生が、おひるの天井

ひとつでは少し足りなかつたお腹の要求から、見るともなく珈琲店の二階に目を引かれた。又しても何時もの生意氣な書生等が集つてゐるな、と思ふと自分の懷のつめたい丈それだけ熱烈な口調で、今日の青年の氣概なく、のらくらしてゐる事を痛罵しはじめた。聞きても元より天下の論客である。中には帝劇の芝居はほめなければ社長の御きげんを惡くするし、橘右衛門は社長の御ひいきの吉五郎の競爭者だから必ずけなす事ときめてゐる大劇通もまじつて、盛んにくたびれたる青年を嘲つてゐた。

Aさんと B さんは少し氣が急いてゐた。Aさんは或雜誌に約束した原稿の〆切が明日に迫つてゐるので、書きかけの「隣近所」を今夜は徹夜しても仕上げなければならないし、且つ又小説がうまい丈デカダンではなかつたから、如何も珈琲茶碗と運命を共にしてむさくるしくよごれてゐるのは餘りいゝ氣持でなかつた。

Bさんはツイ其處の横町の御師匠さんの格子戸の中に、袴を脱ぎ捨てた姿を運ぶつもりであつたから、これも交際にあくびをひとつしたものゝ實はお尻がうづ／＼してゐるのであつた。だが交際と云ふものは頗るむづかしいものであつて、うつかり席をはづすと神經の震へ易い新人の感觸を害ふ恐れがあるので、歸らうと云ひ出す迄には一寸手間がかゝるのである。

しかし久默々としてゐる事はかゝる場合堪へがたき苦痛を伴ふものである事も、Aさんの心がよく證明してあまりあるのであつた。彼は何か話の種を探し出さうと思つたが、考へる迄もなく話の種は己れの懐にひそんでゐる事に氣が付いた。

「アヽ、Cさん。Yさんからの手紙を今朝受取りましたよ――私アすつかり忘れてゐた。」

と云つた時はもうYさんの極めて拙き横文字で書かれた一封が卓上に置かれたのである。

「ヘエ、なんて云つて來ました。」

Cさんは矢張り面倒臭いのではあつたが、これも浮世のお義理だから、手を出して中身を引出して見た。

「第一喰ひ物が私には氣に入らないから西洋は嫌ひです。英語は生來蟲が好かないから異人のおしやべりには全く閉口してゐます……」

「なんだい、それが冒頭かい。」

Eさんは嘲るやうな聲で云つた。

「ヘン、つまらねえ事を云つてやがら。」

とDさんも男を立てるために一言以てYさんの長手紙を否定し去つた。

「あいつは馬鹿だ。」

Eさんはもう一ツおまけにつけ足したが、その簡短にしてしかも明確なる結論で、其の手紙をピリ／＼と破いて捨てたと同じ快感を買ふ事が出來た。

「なんだか氣障な事を書いてますね。」

Cさんはすつかり讀んだんだけれど、すつかり讀んでやつては沽券にかゝはると思つたので、こんなものを讀むものかと云つた鼻のかつかうでAさんに返へした。

「俺アあいつがゐなくなつたんでさつぱりした。つらつきから氣に喰はねえ。」

「小説もまづいぢやアないか。センチメンタルで古くさいや――ひとひらの花の散るにだに心悲しむ吾は何處に行かん、か、ヘン笑かしやアがら。」

一ひらの花の云々は初期の新體詩の一節ではない、大正の御代の新進作家、「三月櫻の咲く時分」の作者Yさんの處女作の冒頭の一句なのである。Yさんは此の時海を越えたるアメリカの田舎の古い大學の講堂で、若い一年級の生徒にまじつてJa, Marie und Karl ritten nach Hause, aber ich……　と頭の禿げた獨逸人の問ひにどもりながら答へてゐたが、どうしても次の言葉が浮んで來ないので立往生しながら、ア、日本にゐればこんな恥さらしはしないでもいゝのだがと、

とつさの間にしみ／＼哀愁を感じて故郷を思ひ出すと、平生あんまりうれしくもなかつた友達さへなつかしく思はれたから、罵られてゐるなどゝは神ならぬ身の知るよしもなかつた。

漫然と他人を罵つたり笑つてやるのは鼻の孔の膨脹する心地よさを味はゝしめるものである。ひとしきり連中はYさんの爲めに疲れた心に活氣を與へられて、思ふさまYさんの人と爲と併せて彼の作品を罵倒して大に痛快に感じたが、矢張りそんな根氣も長くはつゞかなかつた。

「あいつは馬鹿だよ。」

もう一度Eさんが結論をくりかへしたので、それで一幕おしまひになつて又沈默の中にあくびがはびこつた。

AさんとBさんはなんだか自分も一緒に罵られてゐるやうな氣もしてゐた。うまくはづして早く歸らうと思つてゐるのであつたが、自分がゐなくなつた後で皆が何か自分の惡口を云ひさうな氣がしていけなかつた。でもとう／＼がまんしきれなくなつてAさんは先づ立上つた。

「私ア失禮しますよ、一寸用事があるもんですから。」

「マアいゝでせう。」

「ニ、、又明日お目にかゝりませう。」

云ふと叮嚀におじぎをした。したかと思ふと椅子を離れて足早に階子段の下り口に姿は沈んで行つた。

「なんだ、又何か書いてやアがるんだらう、面白くもねえ。」

とじさんは今引止めた時の調子を忘れてつぶやいた。

「俺アあいつは大嫌ひだ。つらつきから氣に喰はねえ。」

「小說だつてまづいぢやアないか。上汐は大川端の石垣を又ヒタヒタと濡らしましたか、へン甘えもんだ。」

上汐は大川端の云々はAさんが出世作の結末の句なのである。

「あいつは馬鹿だ。」

Eさんは又手早く處分してしまつた。

往來に出たAさんは大通りの柳の下に暫時柴の本包をかゝへて立つてゐた。

BさんはYさんとAさんが順に馬鹿のはりふだの下つたのを見て、どうしても次は自分だと思はないわけにはいかなかつた。多勢集つた席で先きにかへるのは損だとつくづく感じたが矢張り急き心止めかねて、

「僕もお先きに失禮します。」

と云つてわざと律儀におじぎをして別れた。

Ｊさんは窓から首を出して下を覗いた。ステツキを引きずりながら少し首をかしげて歩いて行く背の高いＢさんの後姿を見てゐるとムラムラと憎らしくなつて來た。

「馬鹿ッ。」

とＥさんのおはこを待つ迄もなく、かう怒鳴りつけると同時に、往來にむいてペツと唾をして扨て又首を引込めて椅子の背によりかゝつてあくびをした。その時Ｂさんの姿は狹い横町に曲つて消えた。

丁度その時間にＹさんは學校の裏門を出た。祖先傳來の尊い足の曲つた身體に夷狄の服を着けて、その足の曲つてゐる事を氣にしながらトボトボと歩いて、一週間三弗の安下宿の三階の暗い室に歸つた。今日も亦 yes と no の使ひわけを三度しくじつた事を思ひ出してなさけなく感じた時、正面の姿見に映つた自分のまづい面を認めた。此のまづい面は日本の友達をなつかしく思はせたので、一生懸命で鏡の中を見詰めてゐたが、するうちにしみじみ浮世がはかなまれて來るのであつた。友達は誰一人そんな事とも知らないのである。

Aさんの乘つた東北生れの車掌の司る上野行の電車は、Aさんのお目にとまる程の別嬪を收容する事もなく、いたづらに京橋、日本橋、今川橋、萬世橋を過ぎて、停電もしずに黑門町でとまつた。Aさんはもう原稿の結びの文句が生きて動いてゐる心持で電車を下りたが、フト今しがた別れて來た友達が、なんだか自分の惡口を盛んに云ひ合つてゐるらしい氣が又起つて來て心配になつた。折柄曲りッ角の電信柱の下に無邪氣にころがつてゐた石つころを見つけると八ツあたりに溝んなかへはげしくけとばした。さうしてAさんの姿はその家のある横町へと曲つて消えた。

Cさんは目の前のDさんとEさんのたるんた顏を見てゐると小じれつたくなつて來た。自分はこんなてあひとははゞかりながら値打が違ふんだと思つた時、芝の寺町のその家にお母さんと妹が鹽せんべいでお茶をのんでる姿がはつきりと浮んで來た。

「俺も歸るよ。」

と云つたが誰も返事をしないので立上がる氣になれなかつた。

ペン印はその時わけのわからない事をガヤ〳〵しやべりながら一時に引上げて行つた。

Cさんはフト自分が此處を立去ると同時に、殘つた二人が思ふさま自分を罵倒しさうな氣がして不愉快たつた。どうしても今度は自分の番にちがひない。さうだキツト惡口を云ふに違ひない

と考へると、もうその悪口が、はつきりとわかるのであつた。三ちやんはおやつに金つばを四つもらひました、と云ふ自分の處女作の冒頭が馬鹿に心配になつて來た。Eさんがあいつは馬鹿だよ、と云ふ時の顔も見えるのであつた。

Cさんは今の今罵つたYさんやAさんやBさんの方が目の前にゐないため、ふだん仲よしと稱するDさんEさんよりも反つて親しくなつかしく思はれたのでなさけなくなつたから、

「ア、ア、ア。」

と無理に大あくびをしてやつたが、あんまり大きな口を開いたので、先刻のんだ珈琲の匙につめたくなつてゐるお腹の中に秋風の沁み入る心地がしてしみじみと浮世はかなく思はれたのである。(大正二年二月二十日)

世の中

息子は今日も亦終日机に對つてはゐたものゝ、筆の進みは鈍り勝で一行書いては消し二行書いては破り、「千代は泣きながら繼母の家に歸された」と云ふ第二節の結びの句を幾度も／＼繰返へしては次の書き出しを案じわづらひ、かくて朝から夕方迄、千代は泣きながら繼母の家に歸されたばかりであつた。

彼は冷い疊の上に仰向きに倒れたまゝ「千代は繼母の家に歸された」のだと、今更哀れな女の身上を惱ましく思ひやつたが、それはもう幾年か前の事ぢやあないかと、かすかに心がつぶやくのを聞くとすつかり張合ひがなくなつて氣の拔けたあくびをした。

お母さんは小間使を相手に、もう直き生れる筈の初孫の着物を縫つてゐた。それは男の子に違ひない、母親に似て眼の大きい、父親に似て鼻の高い男の子に違ひないと思ふと嬉しくて／＼たまらないのであつた。

「久美や、お前はどつちだと思ふえ。」

と突然口に出して尋ねて見た。

小間使は一生懸命で針を動かしてゐたが、フト聞かれたので、何と何のどつちがいゝのか合點がいかなかつたから、色白で一寸可愛らしいが何處となく狆に似てる顏を上げてまじ〳〵と奥様のお顏を見守つた。

「ねえ私は男の子だと思ふんだがねえ。」

私がどつちかと聞けば、大概察しさうなものなのに、此の娘は餘程氣が利かないよとじれつたく思つたので、たまらなくなつて自分の方から云ふのである。

小間使は、あゝ又その事かと思ひながらも、

「そりやア、キツト、奥様のおつしやる通りでございますよ――可愛らしい男のお子様に違ひございません。」

かう云ふほかに答へのない事を、此の十七の娘は無邪氣に承知してゐるのであつた。

奥様はもうホク〳〵して、

「ねえ、さうだらう、それに違ひないと思ふよ、だけどどつちに似るだらうね。」

「旦那様も御立派でゐらつしやいますし、奥様もお美しうございますし、もうどちらにお似んなつてもお可愛らしいお子様に違ひございません。」

小間使は針の手を動かしながらから云つたが、これでもう七度同じ事を聞かれて七度同じ事を答へるのだつたと思ふと低い小鼻がかゆいやうな氣がした。

お父さんは銀行を出ると我が家へ歸る途すがら、馬車の中で好きな煙草をふかしつゝ今朝の新聞の讀み殘りをあさつてゐた。今迄はつひぞ目を通した事もなかつた文壇消息が此の頃は氣になつてしかたがない。毎朝十種類ばかり來る新聞を一々開いて、そんな噂を探して扨て何にもなかつたと思ふとホツト胸を撫で下すのであるが、未だなんだか見殘しがあるやうな氣がして、銀行に居る間も幾度となく給仕を呼んで新聞室からあれこれと持つて來させては探すのであつた。さうして又歸途の馬車の中でもう一度最後の調べをして、あゝ今日の仕事は終つたと云ふやうな安心をするのであつた。

それはツイ此間からの事で、自分のたつた一人の息子が小說書きの仲間に這入つて、その方では、何時の間にか一寸聞こえた名になつてゐたのを或る新聞で知つてからである。記者は、銀行家としてのお父さんの偉い事から先づ書き出し、次ぎに息子が二三年前から變名で小說を發表してゐるのを知らぬおやぢはお目出度いなどゝ怪しからぬ事を書いた末、彼の親にして此の子ありとは誰か思はん―と結ぶ迄、一種人を小馬鹿にした調子で書いてゐた。お父さんはその新聞を見

た時ソツト破いて便所に捨てゝしまつた。三十年連れ添つて未だにあきない妻に心配をかけるのがいやだつたのと、なんだか自分の祕事をあばかれたやうな不愉快な氣持がひどかつたからである。

お父さんはひどく心配たつた。長男と次男があつたけれど、一人はひよわくて育たなかつたし一人は五年前に肺病で死んだから、今ではたつた一人の大事な大事な息子である。子供の時からどう云ふものか學校と學校の先生が嫌ひで、家庭教師をつけたり、先生に賄賂をつかつたりしても矢張り成績はよくなかつたが、中學に這入ると惡い友達ばかり集つて來て一層始末がつかなくなつた。實際お父さんは手こずつてどうともなれと思つて居た。それが又どうしたものか、丁度次男が死んだ頃から急におとなしくなつて勉強もするやうになつた。それからは何一ツ心配させる事もなく、學校の方の出來もよくなつて人のほめものになつたから、これで自分の後繼は大丈夫だと思つた。その日からお父さんはメツキリ年を取つたのである。ところが新聞で見ると息子は小說書きになつてゐる、さうして町內で知らぬはおやぢばかりなりなどゝ書いてゐる。怪しからん、と思つたがお父さんは口に出して息子を叱る事は出來なかつた。丁度息子が十七八の頃に年中家を拔け出して何處かで遊び暮らし、机に對ふ事なんか、一度もないので、その姿を見ると

毎日々々小言を云つた。これ程叱りつけたら云ふ事を聴くだらうと思ふと、かへつて息子は反抗的態度に出るのであつた。お父さんは又それを繰返へすのが怖かつたからソツト新聞を便所に捨て、誰にも何んとも云はなかつた。だがその心配と云つたら一通りのものではなかつた

お母さんは手元が段々暗くなつて來たので、

「久美や、今日はもうおやめにしませう。」

と云つてもう少しで縫ひ上がる産衣を膝から下して其處に置くと、しげ／＼と眺め入つた。小間使は待つてゐたお聲がかゝつたから手早くそこいらをかたづけて、扨て電燈をひねつた。丁度其の時女中頭の金が、夕餉のために洗ひ清めた茶碗やなんかを盆にのせて捧げながら、お次ぎから中の間へと行きかゝるのをお母さんは又逃さなかつた。

「金や一寸御らん。」

と姉様をいぢくる子供の氣持で呼び止めた。

「マア、きれいなお召でございますこと、奥様がおこしらへになりましたのでございますか。」

「ねえ、お前はどう思ふえ、どんな子だらうね。」

「左様でございますねえ、旦那様も奥様もおきれいでゐらつしやいますから、どちら様にお似ん

なつても結構でございますが、私はなんでございますか此方の若旦那様に似たお坊ちやまのやうな氣が致しますのでございますよ。」

「あの正雄にかい。」

お母さんはこれが又たまらなく嬉しかつた。娘は父親に多く似てゐるが、息子は自分によく似てゐると誰しも云ふから、若し孫が息子に似てゐればとりもなほさず、自分に似てゐるのだ。

「だつてお前、正雄に似るわけがないやねホヽヽ……」

自分でも可笑しい程嬉しくて若々しい笑ひ聲が出たが、フト心配な事を思ひ出してお母さんは眉をひそめた。

お母さんも此の頃は新聞を讀む事が一ツの苦勞だつた。毎日その爲めに早く起きて誰よりも先きに各新聞の花柳便りを一通り見なければ氣が濟まなかつた。それはツイ此間からの事で、品行も正しい學問も出來る、來年卒業したら直ぐ洋行させて、歸つて來たら銀行に入れて、きれいなお嫁さんを貰つて、と先きの先きを迄考へて樂しんでゐた息子の事が、花柳便りに出されたのを偶然見てからの事である。それには此の頃の文學者は皆自墮落でしかたがない、何某はかく〳〵の行爲あり、くれがしはこれ〳〵の事ありと書き立てた末、銀行家××氏の一人息子は大江三太郎

の名で小説を書いてゐるが、彼も亦これ／＼の女に夢中になつて通つてゐる、相手は名にし負ふその道の古狐だから「つまゝれた坊ちやんの行末心元なき次第なりかし」などゝ書いてあつた。お母さんはその時息子を呼んで聞きたゞして見ようかと思つたがそれは止めた。反つてうつかりした事を云ひ出してヤケになられては尚更大變だと思つたからである。外聞の惡い小説書きなんかになられても困るし、それよりもそんな古狐なんぞに大事の／＼一人息子をつまゝれては大變だと思つたので、お母さんの心配と云つたら一通りのものではなかつた。

お母さんは今それを又痛切に思ひ出して、息子に似た孫の生れると云ふ事がわけもなく胸に響いた。

お父さんの馬車は轣轆と玄關に横づけになつた。お母さんは女中達と一緒に出迎へたが、息子の不品行を知つてからはどうも三十年見あきる程見て暮したお父さんの顏がはゞかられて困るのであつた。

お父さんは一風呂浴びて食卓に着いた。去年娘を縁づけてからは、四角い卓に坐る者は親子三人きりなので、前齒の拔けた氣がするのである。

「正雄はどうしたのだ、留守か。」

「イヽエ只今久美を呼びにやりましたら、直き參りますと申したさうです、――何をしてゐるんですかねえ。」

お母さんはそんな事迄お父さんに對して心配されるのである。

「久美や、もう一度お食事ですつて申上げておいで。」

お盆を持つて控へてゐた小間使はハイと云つて立上ると、長廊下を折曲つて庭に突き出てゐる若旦那のお部屋の襖をソツトあけた。眞暗な中で若旦那はほの白く動いてゐた。

「お食事でございます。旦那樣も奧樣もお待ちかねでございます。」

「わかつた。」

それつきりで息子はなほも机の上をかたづけてゐる。彼は平生机の上には何一つ物を置いて置かない潔癖を有してゐた。本を讀む時はその一冊の本以外、机の上には他の何物の存在をも許さなかつた。原稿を書く時は紙と筆と墨以外、机の上には他の何物の存在をも許さなかつた。父母に心配させるのがいやだから、本箱はみんなすりがらすの扉にして、その中に文學書をかくして一々鍵をかける事にしてゐた。そんなやうな父母に對する心づかひを知り初めたのは、兄が死んでからの事であつた。その時息子は十八だつたが、それ迄にいろんな事をしでかして、しかも

みんなしくじつたゝめ、心弱くなつてゐたところへ、勉強家で頼母しがられてゐた兄の死に出つくはしたのだ。繼母のところにかへされた千代の事も、その後暫時馴染んだ綱次の事も、それから最後にひどい目にあはされた夏子の事も、すべて今長篇「十八の春」の中に書くつもりでゐる。「千代は繼母の家にかへされた」は即ちその小説の第二節の結末なのである。彼は折角苦心しても、今日は何の効果もなかつたのでがつかりして筆を洗つた。それから原稿類を机の曳出に入れて鍵をかけて、更に部屋の隅に置く紙屑籠を處分しようと思つてゐたところなのである。

彼は一行でも一句でも書き損ふと破いてしまふ不經濟な潔癖を有してゐた。さうしてその破いた紙屑を身の廻りに散らかして置くのに耐へられないので、書き物をする時丈部屋の隅に置いて置く竹籠に一々捨てに行く不便な潔癖を有してゐた。且又その屑籠から露顯してはいけないと思ふから、何時も庭の隅に持つて行つて燒き捨てる習慣だつた。しかし今、二度目のお迎ひが來たのでしかたがなく、紙屑籠を風呂敷で包んで机の下に入れてそれから中の間に赴いた。

「どうも遲くなりまして濟みません。古いノートの整理をして居たもんですから。」

と云ひながら彼は箸を取上げた。

「お前此の頃顔色がよくないぢやありませんか、あんまり勉強が過ぎるといけませんよ。」

お母さんはデツト息子の顏を見詰めた。私が何も知らないと思つてゐたつて、チヤント知つてますよと云つてやり度いのをこらへながらである。

お父さんは默つて御飯を食べながら、お母さんはお目出度いな、何も知らないで正雄は矢張り勉強してると思つてゐるのだな、俺はチヤント此奴が何をしてるか承知してゐる、道樂仕事に小說書きの眞似をしてるんぢやアないか、と思ふとイケシヤアシヤアとして米の飯を喰つてる息子が面憎くかつた。

「どうも卒業論文はありますし、忙しいので當分はしかたがありません。」

正雄は答へながら、ヘンお父さんもお母さんも甘いもんだ、何も知らないなと思ふと一寸痛快な氣がしたが、お父さんの顏にもお母さんの顏にも皺が深く刻まれて、今ぢやア此の自分をひとへに賴みにしてゐるんだと考へると又氣の毒になつて來た。何故自分は小說なんか書き度くなるんだらうと何時もの事ではあるが、たゞげかれもした。

食事が濟むと正雄は又自分の部屋にかへつて、机の下にかくした紙屑籠を抱へると、庭下駄をつつかけて飛石傳ひに屋敷の盡きる、崖つぷちの空地へ行つた。其處で風呂敷を解いて屑籠を引くりかへした。幾枚でも惜氣なく破いて捨てるのであるから、黃昏の中に白い原稿のなきがらは

一山あつた。直ぐに袂を探つてマツチを擦つた。

お母さんは此の頃息子が庭の木かげに行つては何か焼き捨てるのを夙から知つてゐた。それは晝間お父さんの留守の間が多かつたが、木立をもれてうす煙りがかすかに立上るのを何時もはかなく眺めるのであつた。或朝その崖つぷちにお母さんは行つて見た。日あたりのいゝ赤土の上にうづ高く白い灰のたまつてゐるのを見て、下駄でソツト踏んで見た。何か秘密なものが現はれて來さうに思はれたから。けれども輕く灰煙りが、その白足袋に舞ひかゝつたばかりだつた。お母さんは今でも息子が何を焼くのか見當がつかない、たゞ何か自分にかくして灰にして了ふのが水臭く思はれて、うらはかない氣がするのであつた。

今日は暮れてから其の仕事が行はれたので、チラチラ火の燃えるのまで、樹木の葉越しに見えるのである。

「誰た彼處で火を焚いてゐるのは、正雄ぢやアないか。」

お父さんはけゞんな顔をしてかう聞いた。

「どうしましたんでせうか。」

お母さんはハツト思つて、これつきり云ふ事が出來なかつた。何かしらお父さんには知らせた

くない事だつたからである。

息子は其處にぼんやりと、次第に焔の淡くなつてゆく火を見て立つてゐた。初秋の夜風はつめたく眼の下の町から吹いて來て、今日も亦夕暮は遣瀨ないやうな哀感が疲れた身體に沁み入るのである。

まだほとぼりは殘つてゐるが、間もなく灰になつたのを見濟ますと、あゝこれで安心したと思つた。それで大變氣が樂になつたので、又暫時ぼんやりと崖下の町を眺めてゐた。水のやうに流れた秋の夜霧の底にチロチロと灯がともる、その灯の果てに息子の心は誘はれて行つた。

お母さんは息子の事が心配だつたからばかりではない、又お父さんをはゞかつたからばかりではない、なんとなく其處に自分が此の頃の不安の種がひそんで居るやうな氣がするので、何氣ない風をして息子の部屋に行つて見た。電燈をつけて見ると、何時もの通りにキチンとして机から本箱から座ぶとんの置所迄一分も違はないやうにしてあつて、そのほかには何もない。お母さんは本箱と机の曳出に心を引かれたので、ソツト坐つて机の曳出に手を掛けようとした。その時突然庭下駄の音が近くしたので、ハツトしてゐずまひを直した。

障子をあけてヌツト上つて來たのは息子である。紙屑籠を小脇にかゝへ、鼠地に白く定紋を染

め抜いた風呂敷を片つ方にブラ下げてゐる。

「何處に行つてゐたの。」

お母さんは何か弱味を見られる氣がしていけなかつた。

「庭を歩いて來ました。」

「だつてそんなものをかゝへてさゝ、、、。」

と笑つて見たが、どうも少しほんとらしくない笑ひ聲が出てしまつたので又氣が引けた。

「お前焚火をしてたんでせう、何か燒いてゐたの。」

「エ、古いノートのいらなくなつたやつを燒いたんです。」

お母さんは、此の子は又嘘をつくよと思つたが、そんなら何を燒いたかは當りがつかない。ただノートなんて堅苦しいものでは想像を滿足させる事が出來なかつた。

息子は自分の部屋に他人の足を入れさせるのが大嫌ひだつた。權利を侵害されるやうな癪に障る氣もするけれど、それよりも何だか不潔なやうな氣持がするのであつた。ツイしか他人の姿を見ない部屋の中に、思ひがけなくお母さんの坐つてゐるのを見た時、惡事でもしかけてゐたところを覗はれたやうな氣がして胸がをどつた。

「何か御用ですか。」

「イヽエたゞお前のお部屋が此の頃はどんなになつてるかと思つて。」

お母さんは所在ないのとやましいので、早く逃げ出さなくてはならないと云ふ急き心にあわただしく中の間に引上げて行つた。さうして長火鉢の傍に坐ると心の底からホツトした。

息子はお母さんを見送つて、扨て紙屑籠を押入れに入れてから机の曳出に手を觸れて見た。大丈夫鍵はかけてあつたから、何かしらホツトした。

それで頭を亂されたのか、氣がワクワクしていけない、もう今日は原稿紙をひろげる氣にもなれないし本を讀む氣にもなれない。ぼんやりと机の前に坐つてゐた。するうちにさうしてゐるのもゐたゝまれないやうに感じられて來た。急に下町の灯の色がチラチラと美しく輝いて來たので思ひ切つて立上つた。

お父さんにもお母さんにもしれないやうに廊下傳ひに玄關に出ようと思つたが、運惡く障子が一枚あいてゐたので土藏の前の板敷きを通る時にお母さんに目つかつた。

「何處かにお出かけかい。」

「エヽ一寸友達んとこに行つて參ります。」

お母さんはそのまゝ行つてしまふ息子の後姿を見て、又嘘をつくよと感じられた。

「正雄やお小遣ひはいらないかい。」

とあわてゝ聲をかけた。

「エヽまた少しはありますが、でも頂いて置きませうか。」

息子は果して引かへして來た。お母さんが帯の間から四五枚お札を出して渡してやると、息子はさもいらなさうにつかんで、もう行つてしまつた。

お父さんはゆつたりと煙草の煙を鼻の孔から立上らせて此の光景を呑氣に見過した。

直ぐに玄關の格子の鈴が鳴つて下駄の音がすると、今度は門の潜りをあけてしめた音がした。

お母さんはその時急に息子を誰かに奪はれた氣がした。誰かは間もなく古狐になつて、お母さんの不安は一層強くなつた。お小遣ひをやらなければよかつたと思つたが、イエイエさうではないお金に不自由させると人間がすれていけなくなるし、世間に出て恥をかくし、お父さんの名にかかはるやうな事も起るかもしれないし、反つて家の爲めにも彼れの爲めにもならないやうな事になるかもしれない。あれだけ渡して置けばお茶屋に行つても大丈夫だと、フト何の氣もなく考へた時これは大變な事を考へたと思つた。けれども此の考へは次第に力を加へて、どうしてもお茶

屋に行つて古狐にだまかされてゐる息子の姿が浮んで來て、それからそれと止め度がなくなつた。それにしてもお茶屋に行つて女でも呼ぶなら、もう少しチヤントした服装をしていけばいゝのに、彼の子はほんとに無頓着で困つて了ふなどゝも思つた。

息子は心持のいゝ星の夜の高臺から、眞直ぐに燈火の巷へと坂を下つて行つた。電車つてものは四民平等に五錢だから嫌ひだつた。白銅一つ出しさへすりやアみんな同じ權利を持つてゐるんだつてやうな顏をして大きく席を占めてゐる奴や、公德の念がありますと云ふ色氣を見せて、女に席を讓る奴や、どれもこれも蟲が好かぬ。即ち彼は電車に對しても潔癖を有してゐたので、ブラ〳〵歩きの方がうれしかつた。

息子は紺がすりの着流しで足袋もはかずにヅカ〳〵と臆面もなくお座敷に通つて、なんだか一人つきりは賴りないやうな氣もしながら、お酒を飮んでゐた。近代の友達と云ふものは、大概金錢關係を結ぶ事になるのがけがらはしいと思ふ潔癖を有してゐた。だから賴りない方がうるさいよりもいゝと、何時も一人で考へてゐた。

お父さんは息子の樣子がどうも氣がゝりだつた。彼奴はどうも何かかくしてゐる、それを見屆けなくてはならないと、心の底の方からおだてるやうな誘惑が湧いて來る。で、自分の書齋に行

くふりをして何喰はぬ顏でお母さんのゐる中の間を立出ると、廊下の闇に足音を忍んで久しぶりで息子の室に行つて見た。襖をあけると電燈がついてゐて誰もゐない。本箱と机と座ぶとんが納まりかへつてゐるばかりだ。お父さんは本箱と机の曳出に心を引かれた。先づ耳を澄して物音に注意したが、誰の近づく氣配もないのでソツト机の曳出に手をかけた。一ツ二ツ三ツ、皆鍵がかかつてゐる。

お母さんはお父さんがゐなくなると又息子の部屋が頭にまつはつて來た。一體彼の子はどんな小說を書くんだらう、いやらしい事を書いてくれなければいゝがと、何時も思つてゐたし、それから古狐に就ても何か知る事が出來さうな氣がしたので、又してもソツト足音を忍んで廊下の闇を踏んで出た。

お父さんの疑念はいよ／＼鋭くなつて來た。お父さんは新聞で、息子がいやしい小說書きの眞似をしてゐる事と、大江三太郎と云ふわけのわからない變名を用ゐてゐる事を承知したが、扨てどんな雜誌に書いてゐるものだかさつぱり見當がつかなかつたのだ。今度は數ある本箱の中の一ツの扉を押して見た。矢張り鍵がかゝつてゐる。次の本箱の扉を押して見た。矢張り鍵がかゝつてゐる。次の本箱の扉を押して見た。矢張り鍵がかゝつてゐる。お父さんはヤケになつて次の本

箱の扉を力を込めて押して見た。ガラス扉がかすかにカタ／＼と震へたので、ハツト思つて振かへつた時、襖があいてお母さんの顔がコツソリのぞいた。

「マア貴方ですか。」

と云つてお母さんはビツクリした眼を見はつた。お父さんもお母さんも心のやましさと、あんまり大人氣ないふるまひだつたので無闇に面目ないやうな氣がしたが、お互に相手が何を目的に來たのかは知るよしもないのであつた。

「正雄は何時も此の掛物をかけて置くのか。」

お父さんはうまい逃げみちを見つけた安心に、大きに落着いて床の間を指した。

「エヽそれが好きなんださうですよ、何處が氣に入つたんですかねえ。」

「フウン。」

とお父さんはもつともらしくうなづいて筆者不詳の白鷺の一軸を感服した樣子で見てゐた。

「これは俺も氣に入つてる、これならいゝ。」

と云ひ捨てゝお父さんは用事の濟んだ顔つきでサツサと出て行つてしまつた。

お母さんはぼんやりと白鷺を眺めて殘つたが、お父さんの足音が遠く消えると又もはげしい誘

惑に抗ふ事が出來なくなつた。お母さんは先づ耳を澄まして物音に注意したが、誰の近づく氣配もないのでソツト机の曳出に手をかけた。一ツ二ツ三ツ、皆鍵がかゝつてゐる。そこで立上つて本箱の扉を一ツ一ツ押して見た。矢張り鍵がかゝつてゐる。

お母さんはつく／＼なさけなくなつてくづ折れるやうに部屋の眞ン中に坐つて、別段したくもなかつたけれども自分をなぐさめるために、ホツトため息をして見た。

息子はいくら飲んでも醉へなかつた。面白い奴は一人もゐない。女つてものは縹緻がよくて、あかの他人なら道ばたで擦れ違ふとき値打ちがあるが、それも擦れ違ふ丈にして置かないといけない、若しお低頭をしたり口でもきいてやると直ぐつけあがつて增長する。貴夫人だつて藝者だつて、女教師だつて女郎だつて、女學生だつて女工だつて、女文士だつて女土方だつてたいした變りはない。どいつもこいつも怒りつぽくて泣き蟲で薄情でおまけに身體が臭くていけない。矢張り生臭くないのは男だと思つた時つく／＼男の友達がほしかつた。誰か友達らしい友達がゐるだらうかと考へて、あいつこいつと順々に數へて見たけれど、皆駄目だ。死んでしまつた友達丈は喧嘩ばつかりしてゐたの迄、むやみになつかしくてたまらない、その人の爲めに泣いてやり度いやうな氣がした。そいつをまぎらすためにいきなりお椀で熱いやつをなみ／＼ついでグツトあ

ふつた。
女達はあきれた顏をして默つて見てゐた。一言でも口をきいちやアいけないと云ひつけてあつたから、たゞ妙な手つきをして止めようとしたのがあつたばかりだ。
息子は又默念として思ひ耽つてゐた。
「どうしたつてんでせう、まるでお通夜ね。」
とうとう／＼たまらなくなつて一人の女が笑ひ出した。
「默つてなくつちやアいけないんですとさ。」
と云つてもう一人の女も笑つた。それから皆義理にクス／＼笑ひ出した。それが矢張り職業的に色氣と愛嬌を含ませる事を忘れない笑ひなので、息子はグツト癪に障つた。皆てんでんにいゝ女ぶつて居るけれど、一人として滿足なのはありやアしない、矢張り女の中ぢやアお母さんが一番いゝや、何も知らないでくれと云へばいくらでもお小遣ひをくれるからと思つた時、山の手のその高臺の家に自分の歸宅を待つてゐるお母さんの顏が浮んで來た。
息子は子供の時分見て覺えてゐるお母さん程世にも美しい人を知らない。今こそちつと肥り過ぎて、顏が皺でたるんぢやつたけれど、俺のお母さんは誰よりも別嬪だつたんだ、いくらこいつ

らがおしろいを塗つたつて追ひつくものかと思ふと又泣き度くなつた。そのお母さんが年とつてしまつた事も悲しかつたにはちがひないが、それよりもそのお母さんが自分を待つて居る事と、そのお母さんに自分が待たれてゐる事とが一番悲しかつたのだ。

息子はいきなり立上つた。

「アラ何處にいらつしやるの、便所(はゞかり)？」

「馬鹿ッ、歸るんだい。」

と怒鳴つてしまつてから、何のために怒鳴つたんたかわからなくなつて、恥かしくなつた。いつの間にか醉拂つてゐた事にも初めて氣がついた。

「今夜はどうかしてらつしやるよ。」

と云つた奴がある。どうかしてるともと息子の心は答へた。

お母さんは中の間で新聞の續き物を讀みながら小間使に肩を叩かせて居たが、どうも息子の事が氣になつてしかたがない。今頃は何處にどうしてゐるのだらう、古狐にいゝおもちやにされてるにちがひない、と思ふと、お父さんにいひつけて力を借り度いやうな氣もした。

「久美や、此の頃は誰が正雄のお部屋を掃除するの、――松かい。」

「イエ私が致します。」
「さう。」
それつきりお母さんは何を云つていゝかわからなくなつた。けれども何か云はないのもまづいし、ちつとは手がゝりがあるやうな氣もしたので、
「夜お床をのべに行くのもお前かい――毎晩何時頃に行くの。」
「ハイ、大概九時半頃にあがります。」
「その時正雄は何をしてゐるの、矢張り御本を讀んでるかい。」
「左様でございますねえ、御本を讀んでゐらつしやいます時もございますし、何かお書き物をしてゐらつしやる時もございますし、何も遊ばさないでお机によつかゝつてゐらつしやる事もございます。」
「お書き物つて手紙でも書いてゐるのかい、それとも何かほかのもの。」
「いかゞでございますかツイ存じませんで。」
小間使は自分の落度のやうに思つて口をつぐむだ。
お母さんは此の娘はほんとに氣が利かないよ、何を書いてるか位、わかりさうなものだと思つ

たが、あんまりいろんな事を尋ねると、召使に迄息子の不品行が知れると悪いと思つてやめにした。

お父さんは自分の書齋で書類を調べてゐたが、どうも先刻のしくじりが氣になつてしかたがない、お母さんが何か自分を疑つてるやうな氣もする。それにつけても息子の事が念頭を去らないので、何もまとまつては手につかないのであつた。しかたがないから幾度も時計を見た。お父さんのお酒の時間は何時もチヤントきまつてゐる、早くその時間がくればいゝと思つてゐるのである。

息子は眞直ぐ家に歸らうと思つて、戸外に出たが、どうも酒に火照つた顔に川風が氣持よく適ふので、石垣に寄る波をぼんやり眺めて大川端にしやがんでゐた。そこゝの家の二階から陽氣な笑ひ聲が聞えたり、三味線の音がもれて來たりするのを、たよりなく聞いてゐた。突然醉拂ひが二人もつれあつて横町から現はれ出た。

「そりやア怪しからん、今更家に歸るとは何事だ。」

と髭をはやした黒紋附の大男が折詰めとステツキを一しよにふり廻しながら怒鳴つた。つれの男がしきりに泣きさうな聲で何か口說いてゐる。

「ナニ、家には可愛いゝ女房子が待つてる？　ケチな事をぬかすな。」
お國訛りが口髭に引かゝつた聲で又も紋附は怒鳴つたが、ヨロ／＼と正雄の方によろけて來たので、彼はフト立上ると不快な氣持で步き出した。折角靜に波と同じ心地になつてゐたのを、滅茶々々にされたのが癪に障つた。
息子はつく／＼俺のお父さんはいゝなアと思つた。つひぞ一度お父さんのだらしなく醉拂つたのを見た事がない、俺のお父さんは世間のおやぢのやうに慾ばかり深いのとは出來が違ふんだ、俺のお父さんは勳章なんか欲しがつた事もない、慈善家ぶつた事もない、誰にもいやしく頭を下げた事がない、いゝ質にいゝ、その上自分を可愛がつてくれる、矢張り俺のお父さんはありがたい、と思つた時なま醉ひの頭にも、こんなところにブラ／＼してゐてはそのお父さんに濟まないと云ふ考へが浮んで來た。
息子は通りすがりの車やを呼止めた。
「小石川迄大急ぎだ。」
云ひながら腰を下すとグツタリ疲れてしまつて頭が前後にフラ／＼搖いだ。
お父さんはとう／＼たまらなくなつて來た。初めは息子の事が心配で氣が落つかなかつたが、

しまひには、たゞお酒を早く飲み度いと云ふ方に移つて行つた。とう／＼書齋を出てのこ／＼と中の間にやつて來た。

「酒の用意はいゝか。」

「マア、もうそんな時間ですか。」

お母さんは小間使の手をやめさせてお父さんを見上げた。

「ナニ今日は少し早く始めようと思つて。」

お父さんはどうもバツの悪い氣持がするけれどどつかり坐つてしまつた。

「それぢやア、お前金にさう云つといで。」

小間使は奥様の命でチヨコ／＼引込んだが、間もなくお膳をとゝのへて來た。

お父さんは手酌で飲み始めたが、どうもうまくない、何かふさぎの蟲にとつゝかれた氣がして胸のつかへが直らない。可哀さうにお母さんは知らぬが佛で心配もないんだなと思ふと、うらやましいよりも妬ましくて腹が立つやうだつた。

お母さんはまだ新聞をひつくりかへしてゐる、けれども讀んでるのではない、早く息子がかへつてくれゝばいゝと思つてゐる。お父さんは知らぬが佛で、呑氣さうにお酒をめしあがつてゐる

と思ふとうらやましいよりも妬ましくて口惜しいやうだつた。

「正雄はまだかへらないのか。」

「エヽまだ歸りません、お友達のとこに行くと申しましたが――もう戻りませう。」

それつきり話は切れた。お父さんもお母さんも門の潛りのあく音を、今か〳〵と待つてゐるのである。耳を澄すと庭の草むらに、蟲の音がしんみりと聞えるのをフト寂しく感じて、思はず知らずお父さんとお母さんは目を見合せた。（大正二年二月二十七日）

此の一篇は全然つくりものがたりなり。

かゝる事をわざ〳〵お斷りするは小生の頗る不快に思ふところなれど、世の中には思ひのほかそゝつかしき人のありて、その人々に小生の作品を小生の自傳なりと思ひ込まれて飛んだ迷惑をしたる事一再ならず。近くは大正二年二月一日より同三日に至る都新聞の小生に關する記事の如き、書かれたる當人の身に覺えなき事のみなりき。想ふに彼の鐵面皮にして禮儀をわきまへざる記者は、拙作「もの丶哀れ」「途すがら」「噂」等を讀みて粗忽千萬にも、小生自身の半生をそのまゝ描きしものなりと速斷して、常に彼等が貴重なりと稱する紙面にまことしやかに大噓を書きつらねる結果に陷りしものならん。かゝる誤解を招く事も世間様のいやしみ給ふ小説など書きし罰にほかならずと思ひて一度はあきらめもしつれ、

小生の爲めに引合ひに出されし人の迷惑を思へば心苦しさに堪へざるものあり。卽ち玆に此の一篇のつくりものがたりなる事を附記してたとへば彼の都新聞記者の如きぼんくらの誤解豫防に備ふるものなり。

先生

先生は自分の先生だつたばかりで無く、我が兄の先生でもあり、又自分が母の胎內を出て大空の蒼い事を知り、鴉の啼く聲を初めて聞いたその日から既に白髮だつたやうに思ふ我が父の先生だつた。それから多勢の父方の叔父母方の叔父達の先生でもあつた。

「先生は單に吾々の先生では無い、日本中の人の先生だ。」

その叔父達がよくかう云つたのを忘れない。

初めて先生といふ人の存在を知つたのは幾歲の年だつたか、勿論覺えてはゐないが、或る寒い冬の夜半の記憶は、まるで自分の肉體の一部でゞもあるかのやうに切離す事の出來ないものとして殘つてゐる。

突然呼び起された自分は未だ母の懷に抱かれて眠つてゐる年頃だつた。睡たい目が思ふやうに開かなかつた自分も、寢衣の襟のはだけたまゝ、自分を抱き起して蒲團の上に坐つて居た母の顏と、その胸の蠟石のやうに白かつたのを覺えて居る。自分には母の懷の溫かさは今でも戀しく懷

しく、抱かれてみたく思はれるが、その夜枕もとの行燈の灯影に照らされた母の姿丈は何故か冷たく目に浮ぶのである。

父は縁側の雨戸をあけてゐた。

「火事は近い。」

短い、しかし切迫した父の聲に、母が自分を抱きあげて立上り、父の後に寄添つた時、眞暗な夜の空に風になぐれて降りしきる無數の火の子を、母の懐に縋りついて居る自分は寧ろ美しいと思つて見た。

間も無く家中の者が起き出して、一箇所に集つて來た。お祖母様と一緒に寢て居た姉が、女中の背中におんぶして怯えた顔をしてゐたのを、なんだか姉は自分よりも頼り無い可哀さうなものゝやうに思はれて、大變親しく感じた。

庭は火の子をかぶつて居た。車夫や、馳けつけて來た出入りの者が、その火の子の中を馳け廻つて居た景色も未だに明かである。

それから如何したのか、その邊の事はちつとも覺えて居ない。自分の次の記憶は、馬車に乘つて母の胸にしがみついてゐたちひさな自分の姿である。

「馬車のお迎ひを頂いたから先生のお邸へ行くのですよ。」

から云つて母から聞かされたのが自分の耳を通して先生を知つた初めてではないかと思ふ。うす暗い馬車の中には父と母とお祖母様と姉と自分とが居たやうに思ふが、はつきりした事は云へない。

馬車の窓からは火事のあかりが見えた。路にあふれた人の群、眞黒にうよ〳〵うごめいて居る人の群の中を提灯が飛び違つた。自分は初めて馬車に乘つたのが嬉しかつた。

その時は自分には、我が家が燒けるかどうか、そんな心配はちつとも無かつた。馬車が威勢よく馳けないで、のろ〳〵人込みをかきわけて行くのが齒痒かつた。誰も口をきく者が無い。皆の顏がうす暗く默して居るのを自分は幾度も見廻した。

先生のお邸迄行くには長い坂を下りて橋を渡り、暫時して又坂を上らなければならないのであつた。馬車は恰度其の橋の所にさしかゝつて居た。車輪に響く橋板の鈍い音も自分には初めての心地を與へた。遠くから曲りくねつて流れて來る川水にも坂の上の火事のあかりが映つて居た。

突然、橋を渡り終らうとする時に馬車が止つた。

「身投げ。」

「女が身投げしたんだ。」

そんな聲が馬車の窓に近く聞えた。

「身投げですつて。」

母が延び上つて橋の上を覗いた時、群る人の肩を越して、其處に裸體の女の死體を見たやうに思ふ。これはしかし眞實に見たものか、後で想像したのが眞實らしく思はれたものか、どつちだかわからない。それでも其の夜の事を思ひ出す度に、長い髮の毛の濡れて絡んだ女の顏が、火事のあかりで見えたやうな氣がしてしかたがないのである。

馬車は又動きはじめた。次第に人出のすくなくなる廣い通りを眞直ぐに、間も無くゆる／＼と坂道を上つてゐた。その坂の上に先生のお邸はあつたのたが、先生にお目にかゝつた記憶は無い。夜中の事だから先生はおやすみ中だつたらうと思ふが、それも確實ではない。坂の中途で俄に廣々と見えた海の上の空に、星が冷たく輝いてゐた景色を忘れない。

その夜の火事は隨分廣く燃え廣がつて澤山の家が灰になつたが、自分の家は軒端に飛火した爲め少し廂を焦した位で無事だつた。

橋の上の身投げの女――馬車が止つた瞬間の怖ろしかつた氣持は心にしみついて消えなかつた。

自分は二年も三年も經つた後々迄、女中やなにかを相手にしては、その夜の事を得意になつて話した。

「新ちやん身投げ見たなんて嘘よ。私見ようと思つても見えなかつたんですもの。」

傍から姉がさかし氣に云ふと、

「自分なんか知りもしない癖に。僕窓の側に居たんだもの。エエちやあんと見ましたよ。」

などゝ云ひながら、心の中では眞實は見なかつたんぢやあないだらうかと思ひ惑ふのであつた。でも矢張り凄い女の顏は目の前に浮んで來るので、あんまり姉がしつゝこく自分の話を拒むと、

「なんだい、馬鹿ツ。」

と直ぐに飛びかゝつて髮の毛をつかんで引き擦り廻したり、ひつぱたいたりして泣かしてやつた。さう―してそんな喧嘩の後では、身投げを見たなんて嘘だつたと思ふ氣の方が強くなつて、自分は嘘吐家だと考へる果敢ない心地に惱むのであつた。

兎に角、火事と身投げの女と先生とは、自分の心に於て連續して思ひ出される。或は火事と身投げの女とによつて、先生に對する追想が強く明かになると云つてもいゝ。

自分の家が引越したのは自分が六歳の時だから、次の話は其の頃の記憶に違ひ無い。
新しい家は先生のお邸に近かつた。
「今朝も先生が門を叩いていらつしやつたさうです。」
朝の食事の時に母が父にむかつてよくかう云ふ言葉を繰返すのを聞いた。
先生は大變早起きで、毎日々々まだ明け切らないうちから、先生の學校の生徒達をつれて散歩に行く。郊外の田圃や畑や川沿の小道を歩き廻つた歸りがけにも、まだ我が家の門はしまつてゐるので、
「藤瀬の家は寢坊だなあ。」
と云つて先生は門の扉をどん〱叩いて行くのだと云ふ事だつた。
父は宵張りの朝寢だ。きまつて飲む酒が早くても夜の十時か十一時近くから始まるので、自然下の者迄夜更しで、そのかはり朝は皆遲いのであつた。
「うちでもちつと早寢にして朝は先生のいらつしやらないうちに起きるやうにした方がいゝぢやありませんか。」
と母は流石に先生に對して氣兼をしたのであらう、よく父に說く事があつた。

朝早く門の扉を先生が叩いて行くといふ事は自分の好奇心を促した。今迄になく早く目覺めて、暗い寢所にまじ〳〵しながら、先生が門を叩くか如何か、今か〳〵と息をこらして待つて居た。それもかなり離れた奥の室に寢て居るので聞える筈は無いのだつたが、如何も度々聽き取る事が出來たやうに思つて居る。

朝になつて、女中や車夫の顏さへ見ると、きつと訊ねたものである。

「今朝も先生は門の扉を叩いたかい。」

なんたか朝早く他人の家の門を叩いて行くといふのが非道く怖ろしく思はれ、雲突くばかりの大入道の姿と結びつけて考へた。先生つていふ人は、そんな風に、寢坊したりなんかする者を探し出して叱つてばかり居るんぢやあないかと思つた。

七

その頃我か家のゐまはりを廻つて歩く乞食で非道く有名なのが二人居た。お泣きの三公とむつゝりである。お泣きの三公は以前は良い家の息子だつたのが、放蕩のあげくに勘當されて氣が違つたのだといふ事であつた。中には三公は白痴でも狂人でもない、白痴の眞似をして居るので、貯つたものも隨分貯め込んで居るなどゝ知り拔いたやうな事を云ふ者もあつた。三公にはお女房

さんがあつて、二人で廻つて歩いた。お女房さんも氣が違つてゐるのだと云ふ事だつたが、どうも二人とも白痴ではあつても狂人とは見えなかつた。三公はちいつぽけな男で、頭は何時もくりくり坊主にして、首には手拭を結び拍子木を叩いてやつて來た。お女房さんも矢張り坊主頭で、三味線を抱へて亭主の後から隨いて來た。あの女は以前は何處其處の藝者だつたなんて噂もあつたが、その時分は水氣でむくんだやうな女だつた。自分は此の女の口をきいたのを知らない。時々亭主の三公と路傍で喧嘩して居るのを見たけれど、そんな時にも唖のやうに言葉になつてゐない聲で我鳴つて居たやうに思ふ。

　三公は貰ひがあると、直ぐと地べたに坐つて、懐からおんぼろの繪艸紙を出した。繪艸紙の繪は役者の似顔で、三枚續の舞臺面なんかちぐはぐのやつを並べてゐた。そんな事には頓着なく、三公は得意になつて聲色を使ふのである。それも亦頓珍漢なものなんだが、自分では至極いゝ氣で居たらしく、側で見て居る者が笑つても戯弄つても平氣でやつて居た。お泣きと云ふのはよく泣き眞似をしたからで、自分達子供は眞實に泣くのだと信じて居た。兎に角三公は愛嬌があつて可愛がられた乞食だつた。

　それとは違つて、むつゝりの方は佛頂面の大男だつた。何時でも殆んど素裸で、ぼう〳〵した

頭に腐つた山高帽子をかぶつて居た。此の方は藝もなんにも無くて、のそ〳〵歩いてゐた丈である。たぶん三公のやうに貰ふ事を目的にして歩く事もなかつたのだらうと思ふ。どういふものか褌が嫌ひであつた。着物とは云へない襤褸を身につけてゐる丈なのだから、見兼て褌をあてがふ者があつても、失くなすのか捨てるのか直ぐ又以前通りになつてしまふのだつた。そんな男に對して、風俗をみだるものとして、無理やりに窮屈な場所に連れて行つて押込んでしまふ程難有い御時勢ではなかつたと見える。

三公の方は面白い事をして見せるから好きだつたけれど、むつゝりの方は物も言はずにのそのそ歩いて居るのでうす氣味惡く、往來でその姿を見掛けると廻り道して家に歸つたものである。

ところが或日の新聞に、先生がむつゝりを可愛がつて居ると云ふ記事が出て、自分は家中の者が寄つてたかつて讀んだ後の話を聞いて驚いた。それは例の散歩の時で、野原に裸で寢てゐたのを見つけて先生はいきなり話し掛けたのださうだ。どんな話をしたのか記憶して居ないが、先生は大變面白がつて着物だか食物だかをあてがつたのだつたと思ふ。けれども翌日行つて見ると、又何んにも無しになつて居たのだつたと思ふ。

新聞は先生のかういふ物好きを、大變珍らしさうに、ほめ立てゝ居たのだらうと想像

する。

「先生は乞食にも普通(あたりまへ)の人のやうにお話をなさるんですつて。」

母が感心して云ふのを聞いた。

「先生は人のしない事をするのが好きなんだ。」

と家に來る人の中で云つた人もあつたが、自分は矢張りわけもわからずに感心して居た。

それでも何故(なぜ)先生は三公を可愛がらないで、あんな厭な奴と話なんかするのだらうと不思議に思つたものであつた。

先生を初めて見たのは先生の學校の運動會の時だつたと思ふ。先生の學校の運動會と云へば皆(みんな)が樂みにして待つて居たものであつた。他の學校とは違つて萬事が綺麗事(ごと)だつた。或官立の學校のやうに、記念祭に若い女の入場を許すのはいけないなどと云つて、肩肱張つて議論するやうな見掛け倒しの色氣のある豪傑ぶりは以前(もと)から流行(はや)らない學校であつた。競走(かけつこ)をする生徒達も、おもひ／＼に意匠を凝らした襦袢(シャツ)を着て居た。澤山あつた先生のお嬢さんの一人は、そんな運動會の日に襦袢の背中に馬の顔を描いた生徒を見初(そ)めてお婿さんにしたのだなど丶叔父達の話して居

るのを聞いた。嘘かもしれないけれど、子供心にも面白い事だと思つて居た。
其の頃は生徒の數も少なかつたし、學校の近所は先生のお弟子の人の家で圍まれて居た時代だから、運動會に集つて來る人も大概はお互に知己の人ばかりだつた。その日運動場を圍んで見物席が設けられるのだが、一箇所丈赤い毛布を敷いた特別席があつた。それは女の人の爲ださうだつた。何故女になんか良い席をやるんだらうと、自分は合點がいかないで母に訊ねた事があつた。
「女はかよわいものだからです。」
と母は答へた。日本の女といふものは、昔から我儘で壓制で同情のない男の爲に不見目な境遇に居たのを、先生は大變氣の毒がつて、文章を書いたり演說したりして世の中の人に女をいたはれと教へたのだといふ事であつた。
女の味方なんかしてをかしいなと思つた。それでも自分は子供だつたから、その女の席に姉と並んで坐つて居た。
「これが三男でございます。」
ふと後に居た母が云ふので振向くと、山高帽子をかぶつた大男が大きなごつ／＼した百姓の手

六九

「自分の頭を押へて、

「いたづらさうだな。」

と云つて笑つた。づば抜けた大きな聲であつた。此の大男が先生だと直覺した。何故だか知らないが怖ろしくて息も出來なかつた。

先生のお邸や學校の在る高臺を、それを取卷いて住んでゐる人達は「お山」と呼んで居た。自宅の二階の窓から「お山」は紫色に霞んで見え、その木立の奥から生徒の吹鳴らす喇叭が青空に震へて聞えて來た。

「お山」には教場や寄宿舍の他先生のお弟子の家が澤山あつた。

平井先生と云ふのは體格の頑丈な八百藏のやうなおぢいさんたつた。朴の木齒の下駄をお天氣の日にもから／＼いはせ、肩肱を張りながら拳骨をこしらへて、正面を睨みながら歩いてゐた。「お山」で遊ぶ子はその様子の上に加へてお酒飲みだと云ふので怖氣づいて居たものである。

平井先生は若い時分は腕利きの劍術使ひだつたが、先生がしきりに西洋崇拜の說を稱へられるのが癪に障つて、國の爲に殺してしまはうと思つて、江戸に出て來たのだといふ話だつた。ところが一度先生に逢つて見たところ、先生の云ふ事が一々尤もに思はれて來たので、刀を投げ出し

てお弟子になつたのだと云ふのであつた。これも嘘の話だか、眞實の話だか知らないが嘘にしても面白い話である。自分は此の話を誰かゝら聞いてから、平井先生が好きになつた。

平井先生も矢張り散歩好きだつたと見えて、毎日のやうに往來で見掛けた。酔拂つた赤い顔で少しふら／＼しながらも肩肱を突張る事を忘れずに、行手を睨みつけて歩いて居た。竹の皮から魚の切身のはみ出したのをぶら提げて歩いて居た。魚屋の前に立止つて長い間店頭の魚を睨みつけて居る事もあつた。

平井先生の家にも子供が多勢ゐたけれど、自分が姉と一緒によく遊びに行つたのは黒田先生の家だつた。黒田先生は先生の一番弟子で、矢張り先生のやうな大男だつた。それでもにこ／＼した方だつたので、先生程怖いとは思はなかつた。自宅にも將棋をさしに度々來た。

「黒田先生がいらつしやつたから干葡萄を。」

うちの者はさう云つて笑ふのであつた。

黒田先生が洋行した時、彼地で干葡萄を食べて大變珍しくうまいと思ひ、日本に歸る時お土産として友だち仲間に配つたのださうだ。誰しも初めての事で珍しがつて喰べたさうだが、間も無く、日本でも珍しくなくなつたので、あんな甘つたるいものは御免だと云ふやうになつてしまつた。

それでも黒田先生丈は自分が初めて日本に持つて來たと云ふので、死ぬ迄干葡萄をうまい〳〵と云つて喰べたと云ふのである。

黒田先生には女の子が澤山あつて、それが姉の友だちだつた。黒い塀のある門の前でどん栗を拾つたり、椎の實を拾つたりして遊んだ。夕方お迎ひに來る女中を待ち切れない時には、「お山」の下の高村さんのいぢめつ子が怖くて、それにめつからないやうに念じながら、とも〳〵に手を取りあつて驅け出した。めつかるとぱちんこで覗はれるのであつた。

「お山」に遊びに行くと先生にお目にかゝる事もあつた。先生のお嬢さん達を見る事もあつた。黒繻子の襟を掛けた着物なんか着てゐるので不思議に思つた。自分の家にも親類にもそんな風をして居る人は一人も居なかつたから。

先生に逢ふと姉は足を揃へて叮嚀にお低頭をしたが、自分はお低頭をするのが羞かしくて、横を向いて通つた。でも姉が先生にお低頭をし、先生が姉に聲を掛けるのを見ると、自分がお腹の中ではお低頭をしなくては濟まないと思つてゐるだけ妬ましく、先生の後姿を見ながら、

「姉さん、先生を知つてるの。」

などと故意と云ふのであつた。

「エ、私知つてゝよ。新ちやんたつてお低頭しなくちやいけないんぢやありませんか。」
「なんだい知りもしない癖に。」
「知らなくたつてお低頭してもいゝのよ。」
「嘘云つてら。知らないでお低頭する奴あるもんか。」
「たつてお父様の先生ぢやありませんか。」
「ヤァイ、知らないもんだからごまかしてら。」
「知つてゝよ、知つてゝよ。」
二人はよく云ひ争つた。けれどもいぢめつ子を思ひ出すと、放した手を又つないで「お山」を一散に驅け下りて歸るのであつた。

「お前は大きくなつたら何になる。」
こんな質問を、すべての大人は好んで子供にきゝたがるものである。親は子に、先生は生徒に、さうして其の爲に子供が、なんとかうまい返事をしてほめられようと、幼い頭腦を惡賢く惱ます事には想ひも及ばないのである。

鞄をぶらさげて朝々通ふ尋常科の頃であつた。

大概の子供は、

「楠正成のやうな忠義な武士になつて天子様の爲に討死します。」

「太閤様になつて朝鮮征伐に行きます。」

と讀本でならつた人程偉い人は無いと思はせられて居るから、かう云へばほめられるものと思つて答へるのである。陸軍大將も海軍大將も、日清戰爭の後たから勿論澤山あるのであつた。

「『お山』の先生のやうな人になります。」

かう答へたのは自分であつた。他の子と同じ答へをするよりは、何か變つてゐて、しかも矢張りほめられるやうな答へをしたいと考へてゐたから、先生の瞳が自分の方にさし向けられるのを待ち構へて居て答へた。

はたしてほめられた。

先生の話は母と祖母から一番度々聞かされた。

自宅には二人の祖母が居た、父の方のと、母の方のと。その母方の祖母が話の上手な人たつた。

「先生は御自分の奥さんを、さんづけでお呼びになる。」

といふ事も聞かされた。

祖母の夫だつた人も、明治になつてからは、先生の御近所に住んで居たので、よく御話をうかゝつたものださうだ。

「俺よりはずつと若い人だが矢張り先生だ。」

と云つて居たさうである。

「おぢいさんが自宅に歸つて來て、先生は奥さんをさんづけで呼んでゐる。俺もこれからはお前をお喜久さんと呼ばなくてはならないなんて、よく笑談を云つたものだよ。」

祖母はをかしくて堪らないらしく、久如何にも意外な事だつたと云ふやうに話した。

祖母には夫がその妻をさん附で呼ぶなど、いふのは、氣障といふ可きかたらしがないといふべきか、とても呑込めない話だつたに違ひない。

お弟子の人達も夫れに倣つて、さんづけが多かつたさうだが、自分の父が母に對してさんづけで呼ぶのはまた一度も聞いた事が無い。

先生が女の味方だつたといふ事はその他にもいろ／＼聞かされた。

先生がおかくれになつた後の事で、姉が嫁に行く前だか行きたての頃だつたと思ふ。或時母が姉や妹に云つて聞かせて居た。

「男の子は先生の御恩を思つたら、自分々々で働いて先生の學校の爲に盡す事も出來るけれど、女は他家に行く身だから思ふやうにならないかもしれない。私は日本の女は先生のおかげで今日のやうに難有い身分になつたと思ふから、せめて志望だけでも御恩がへしをしたいと思ひます。貴方方にも出來るものなら相當の事をさせ度いと思ひます。」

そんな事を母は眞劍で云つて居た。物堅い家に育つた母は、御恩返しといふやうな事をよく口にしたが、この直接自分一人に關係した事でもない事に迄、御恩返しをし度いと、改つた語氣で云はれた時は、傍に聞いてゐた自分も胸の迫る氣持がした。姉や妹は涙をこぼして聞いて居た。

小學校から中學に移る頃になつたが、先生の學校は嫌ひだつた。それは生徒がにやけて居たからだ。其の頃の學生で頭をてか／＼光らしたり、縮緬の帶を幅廣に卷帶にしたりして居るのは、先生の學校だけだつた、だから子供仲間には非道く助平つたらしく見えたのである。恰度その前の年に、小學校の受持の先生が自分を呼んで、

「ほんとならもう一年此校に居なくてはいけないのだが、君はよく出來るから、今年からでも入學出來る。」

と云つた。先生の學校に行く事をすゝめた時も、自分はいやだと云つて斷り、父にも母にも其の事は告げなかつた。それで、多くの生徒の望む府立の中學に入らうと思つて居た。

一緒に試驗を受けに行つたのは七八人だつたが、みんなよく出來る生徒だつた。自分も大丈夫入れると信じて居た。試驗は三四日續いた。けれども一度門内に足を踏み入れた時から、その學校がいやで堪らなくなつて來た。何がそんなにいやだつたのかわからないが、今にして思へば、一から十迄いかにも文部省らしかつたのも、生來規則づくめの嫌ひな自分の心を不快ならしめた原因だつたかもしれない。運動場で遊んで居ると、體操の教師だらう、「三字略」の男が喇叭を吹いて生徒を集める、それもいやだつた。しかもその「二字略」は、無闇と叱り飛ばしたり、威張りちらしたりするのであつた。

自分は遠く運動場の隅の土堤に寄つかゝつて、ぼんやりと考へ込んで居た。それで別段惡氣も無しに、ゆつくり歩いて來ると、いきなり「二字略」は自分の腕をつかんで、

「貴樣は何故愚圖々々しとるかッ。」

と怒鳴りながら、手ひどくこづいたあげくに突飛ばした。澤山の知らない生徒が自分の顔を見て笑つた。自分は默つて教場に入つたが、口惜しくて泣き出したくなつた。渡された試驗問題を讀むのに目が霞んでしかたがなかつた。いつそ止めてしまはうかと云ふ氣が直ぐと湧き上つて來たが、試驗を受けて落第したと云はれるのは恥辱だといふ初心な氣の方が強くて、兎に角滿足な答案を書いて出した。

又その學校の近所には豫備校があり、近所の原つぱには攻玉社の生徒も集つて來る、それもいやだつた。あのだぶ／＼の股引を得意にして歩いて居る色氣たつぷりの書生は蟲が好かなかつた。散りぢりに門を出て歸つて行くと、土堤のかげから、ぴい／＼と口笛を吹く。幼い生徒は廻り道して歸るのであつた。

次の日は〔二字略〕の顔が益々不快に思はれた。一人の生徒は騷々しくしたと云つてなぐられた。

自分は最後に白紙に近い答案を出してしまつた。さうしてから後で胸がどき／＼して、自宅に歸つて父母の顔を見る事が憚られるので、一人頼りない心地で芝濱に行つて、夕方迄ぼんやり海を眺めて暮してしまつた。その頃の自分には非常な罪惡を犯したやうに思はれたのだ。あんな亂暴な事をしなければよかつた。何故あんな氣になつたのだらうと思ふと頭がわく／＼して來て、

居ても立つても居られないやうだつた。それでも強情に此の事は誰にも云はないでしまつた。

試験の成績の發表される前には自宅に居るのが怖く、自分のした事がばれたら如何しようと云ふ心配が非道くて、牛込の親類の家に泊りに行つてしまつた。自分と一緒に受けた友だちは皆及第したのに自分丈が落第だと云ふのは、自宅の者にも今迄の學校の人達にも、合せる顔が無いやうな氣がした。まだ不成績に馴れなかつたので、一生の不面目のやうに思ひ込んで居たのである。

自分は遂々先生の學校に入つた。喇叭で集まれをする事も無く、おしやれの方が凄いのよりはましであつた。

先生はその前に腦溢血で死にかけた事があつて、自分が入學した頃には、大分よぼよぼして居られた。太い杖をつき、甲斐絹の袴の股引、白足袋といふこしらへで、結ひつけ草履だつたと記憶する。或は草鞋だつたかもしれない。そしてじんじん端折の足取りが餘程よたよたに見えた。なんでも一時半馬鹿になつて了つて、さんづけの奥さんの顔も忘れ、一番弟子の黒田先生の名も忘れて、

「あの大きな奴をつれて來い。」

などゝ云つたさうである。
それでも段々回復して來ると又散歩が始まつて、自分達は往來や「お山」の上で逢ふ度に、崇拜の目を以てぼけた先生を見送つた。

その頃の先生の學校の生徒は、大概和服の着流しだつた。中には前かけをしめた若旦那風の生徒も居た。教場に通ふ敷石の上に響いた雪駄の音も、懷しく忘れ難いものに思はれる。
「書生に袴なんかぜいたくだ。」
と嘘か眞實(ほんと)か先生が云つたと云つて、生徒はそれを自慢にした。
運動場とは低い土堤を距てゝ崖に近く西洋人の教師の家があつた。その家の前でも生徒が打棒(バット)を振り廻すので、

球投ゲ其他危險ナル遊戲
ハ通行ノ妨害トナルヲ以
テ以後之ヲ爲ス可ラズ

として高札(たかふだ)がたてられた。ところが二三日すると、

球投ゲ其他危險ナル遊戲
ハ通行ノ妨害トナルヲ以
テ以後之ヲ爲サヾルヤウ
各自注意セラレタシ

し改められた。

生徒仲間の噂では「可ラズ」なんていふのは紳士（ジェントルマン）に對して云ふ事ではない、獨立自尊の人間に對して用ふ可き言葉ではない、今日迄一度だつてあんな掲示文の出た事はなかつたのに、校風に馴れ無い新しい職員が警視廳根性（おまはりこんじやう）で書いたのを、學生側から注意して改めさせたのだと云ふのであつた。

「苟も獨立自尊の人間に對して『可ラズ』なんて失敬ぢやないか。」

などゝ中學部の一年生まで得意になつて云ふのであつた。

凡そ世の中で何が一番憎らしいと云つて中學の生徒程生意氣で小癪なものはない。その時代の自分を想ひ出すと、吾ながら腹が立つて來るのである。

自分は何しろちひさい時から先生の事を吹き込まれて居たので、先生は偉い人、日本が今日のやうになつたのも先生のおかげだなどゝ、母などから聞くがまゝに信仰して居た。多くの生徒も同じやうに、先生に對して無邪氣な尊敬を捧げて來たのに違ひ無い。

ところが此の尊敬の念は、自分達が生意氣になると同時に、先生を無闇に寳物にして、いやが上にも尊敬させようとつとめる人間によつて、甚だしく傷つけられた。それは先生の弟子だと稱する事を無上のほこりとして居る其の學校の教師である。

「先生がかう云はれました。」

二言目には此の言葉をつけ加へる教師が居た。それが先生の偉さを增すものと思つて居るに反して、生徒には如何にも下らなく聞えるのであつた。

「先生は御自分で杵を取つて米をつかれます。」

などゝ云ふ、お腹をへらす運動迄大げさに意味ありげにこじつけられるので、自分達は頭の禿げた教師を馬鹿にしたくなるばかりでなく、先生その人をも安つぽく見くびつてやりたくなるのであつた。

「あんまり先生々々つて云はれるといやになる。」

田舎から出て來た正直さうな筒袖が云ひ合つてゐるとは、教員室でお辨當を喰べる大人にはわからない事と見える。自分達は或教師を「小先生」と呼んで笑ひものにしてゐた。しまひには自分はその教師の顏を見ると、口惜しいやうなじれつたいやうな氣がして困つた。或時も亦あんまり「先生々々」と夢中になつて云つてるのを見てゐると、反抗心を抑へる事が出來なくなり、その教師が黒板に文字を書いてゐるところを覗つて、先刻から机の上で廻してゐた團栗獨樂を力まかせに叩きつけてやつた。恰もその禿頭に威勢よくぶつかつてしまつた。

教師は眞赤になつて、誰がそんな不埒な事をしたのか白状しろと、泣出しさうな震へ聲で怒つて居たが、いたづらにかけてはお互に同情のある生徒は、誰の所業と知つて居ても口をつぐんで何とも云はなかつた。

偉い人のぼけたのや、大男の身體の利かなくなつた程悲慘なものは無い。角力取程榮枯盛衰のはげしいものはないが、幕の内のいゝところを取つた男が寄る年と共に次第に番附も下り、名前の上に生國を特別に記される丈け位置の下落が著しく目立つて、あゝいふのを見ると世の中がはかなくなるものである。自分が晩年の先生に對して持つた心もそれと同じやうなものであつた。

もう怖いよりもみすぼらしく、哀れにお氣の毒に思はれた。

それでも周圍の人々が、なんでもかんでも先生の事とさへ云へば、高く貰らうとする有樣を見ると、云ひやうもない不快な心地が湧起つて、あらう事か先生の衰へを嘲笑したい氣さへ否む事が出來なかつた。

改正の國語讀本には歌や句や新體詩まで取入れてあつて、芭蕉蕪村一茶千代などゝ一緒に、子規鳴雪虛子碧梧桐紅葉の句などが並んで居た。その講義の後で、或教師が話した事がある。

「先生は趣味の豐な方で詩もつくれば發句もおつくりになつた。或時、

死んだ鴨三間飛んで年の暮

といふ發句をつくられました。意味はわかりますか?——先生は大層お得意で或宗匠にお見せになつたところ、その宗匠の云ふには、これは面白い句だけれどもいけない。死んだ鴨もと直すと句が生きて來ると云つたさうです。どうです面白い句ぢやありませんか。たつたひとつ、もの字を入れた丈けで更に句が生きて來るのです、皆さん手帳を出して書きとめてお置きなさい。」

自分はその頃から、そろ〳〵學校で讀むと叱られる種類の本に耽り初めて居たので、なんぼ先生の句だからつて、こんな月並な床屋の親方の發句を教場で多くの生徒にむかつて講釋しないで

もよささうなものだと思ひ、かゝる事によつて先生の趣味の豐富なりし事を證明せんとする教師を憎んだ。同時に先生と云ふ人も、かう云ふ事にかけては矢張り百姓の手だと思はせられたのである。

それから又作文の時間には、先生の文章を極力ほめて、生徒にもそれを模倣するやうに強ひるのであつた。先生は文章は誰にでもわかるやうに書く可きものだと云ふ主張から、新聞などに發表する前には奥さんに讀んで聞かせ、奥さんに意味のわからない箇所があると幾度でも直したといふのである。ところが先生の文章と云ふのは、元氣のいゝ中學生には、なんだかぬら／＼してゐて讀みにくゝ、讀んでも覺えにくいのであつた。今日になつてみたら面白いに違ひないだらうとも考へるが、その當時の自分達には、華々しい色と光の缺けた文章はかなり退屈なものであつた。聞くところによると、これは單に學校ばかりで無く、先生のこしらへた新聞社でも、先輩が後輩の文章を、わざ／＼句點の少ない、饂飩のやうな文章に改めさせると云ふ事である。

先生は時代と共に移りかはる人であつたらうから、其の時代にあの種の文章を書かれたのは、特に意味ある事だつたらうが、先生でない若い者に、その各自の持つてゐる韻律を殺して迄も、先生の眞似をさせようといふのは、先生の心を知らないものだと論じ度い心持が、その頃の幼い

頭腦にも、ぼんやりと漂つて居た。
自分は御經よりも尊く聞かされた先生の數多い著書さへ、その當時受けたいやな印象から未だに一冊も通讀する氣にならないのである。

「先生はお政府で華族にしてやらうと云つても、厭だつて云つたんだつて。自分は一生涯大平民だと云つたんだつて。」
自分がまだ小學校に通つてゐる頃、兄がさも自分の事かなんかのやうに、この事を云つてるのを聞いた。自分は祖母や母から、士族は殿様の爲に忠義をつくし、戰の時には命を惜まず戰ふもので、町人や百姓とは違ふものだと聞かされ、その方が勇ましい立派な人間なのだと思つてゐた。だから先生のやうな偉い人が平民なんて變だと思つた。それに華族になるのがいやだなんて如何してもわからなかつた。それでも段々に人の云ふ話から、人間に華族とか士族とか平民とか云ふ區別をつけるのは惡い事で、誰も彼も同じ人間なんだといふ方が、一層もつともらしく思はれて來た。さうすると、與れるといふのをいやだと云つて突返したのは非道く威勢がよく、やらうと云つてはねつけられたのは間が拔けてゐていゝ氣味だと考へるやうになつた。

けれども先生の學校に入つてから、教師も生徒も口癖にして、獨立自尊とか平民主義とかいふ事を、うるさく自慢するのを見聞きすると、なんだか氣羞かしいやうな癪に障るやうな氣がして、無理にもその反對に出てやり度くなるのであつた。

春の運動會や其の他の學生の催しのある時に、先生の家の人丈、特別に杉葉や草花で飾り立てた立派な席――恰度活動寫眞に貴賓席のあるやうに――をこしらへて坐つて居るのが、生意氣盛りの小理窟をこねて見度くなり初めた自分には、大きな矛盾でゞもあるやうに見えた。何故他の人達と區別するのか、何故もつと平民的に、他の人と入りまじつて一緒に話したり笑つたりしないのか、先生も先生のお宅の方も、何故あんな殿様あつかひをやめさせるやうにしないのだらう、華族にしてやるといふのを御免かふむつた位なら、殿様あつかひにされるのが氣にならないわけは無い、偉さうな事を云つたつて、先生も矢張り山師なんぢやないか、華族にしてやらうと云はれた時は嬉しくて堪らなかつたんだけれど、今迄大きな事を云つて來た手前もあるし、其處でひとつ頑張ると又看板があがると思つたんぢやないだらうか、何時か同級生の演説會で攻撃してやらうかしらなどゝ考へると、非常に重大な問題の鍵を握つた心持で、嬉しくて堪らなかつた。

「先生は一方に非道く大膽だつたが、又一方に非道く神經質で臆病なところがあつた。」
といふ話を誰かしらから聞いて、自分は大變面白く思つた。あまりに人を神にするよりも、人間らしい親しさが、かういふ時に湧いて來るのである。

或晩、酒の機嫌だつたのか、珍しく父が次のやうな話をした。

まだ士族が、永年その魂だと思つて居た二本差に別れともない頃の事で、なんでも新しい事好きで、人の難んずる事を率先してやらうとした先生は、各藩から集つて來て居たお弟子達にも云ひ聞かせて、まる腰で向島のお花見に出かけた。人の澤山集る所で手本を見せなくてはならないと云ふわけだつたさうだ。

「どうも酒に醉つた武士が喧嘩を吹掛けて困つた。先生のなさる事だからと思つてゐたが、實は誰しもびく／＼ものだつたよ。」

と父は昔の事を思ひ出して面白さうに笑つた。

自分は側で聞いて居て、先生自身もびく／＼しながら痩我慢で肩をいからして歩いて居たのだらうと想像した。先生だつて弱いところもあれば、人一倍芝居氣のあつた方だなど丶、ともすれば人の缺點視する事に考へ及ぶと、かへつて先生を尊く懷しく、先生の敢てした事にも意味があ

ると思ふのであつた。だからその時も、是非とも先生を臆病のくせに強がつた事にしてしまひたく、曾て誰かゝら聞かされた、先生は臆病だつたといふ事を思ひ出して、

「先生も矢張りびく／＼してらつしやつたんでせうか。」

と訊ねてみた。

「そんな事は知らん。」

父はそれつきりで話をやめてしまつた。父は善悪にかゝはらず人の批評がましい事を口にした事か無かつた。

寄宿舍に居る友だちに誘はれて、その室（へや）に遊びに行つた。室長の大學生は他人（ひと）から借りて來た筆記帖（ノート）をせつせと寫して居た。自分達はそんな事には頓着なく、コムパニイで買つた餡ぱんを喰べながら、竹刀や打棒（バット）で机を叩いたり、軍歌を唱つたりしてゐた。

すると突然室の入口の羽目板をはげしく拳骨で叩いて、

「こらあッ。馬鹿者ッ。」

と怒鳴つた人があつた。自分達は首をすくめて息をころして居たが、怒鳴るとそのまゝ上靴（スリッパア）を

ばたつかせて廊下を遠く足音は去つてしまつた。
「舍監だよ。」
と室長は平氣で笑つてゐた。あんまり騷いだので叱られる事と思つたのが無事だつたので、ほつとしたもの丶、やつぱり不安だつた。
「馬鹿ッて云ふのは先生の御得意なんだ。もつともあんな風に怒鳴るんぢやないけれど、あれは馬鹿者だ、あいつは鼻つ垂しだなんて先生はよく云ふ。それを舍監は眞似してるんだよ。」
室長はそんな說明をしてくれた。
その時も自分は、先生と云ふ人は奥さんを、さんづけで呼び、女中にも小使にも乞食にも變らぬ態度で話をすると聞いてゐたのに、無闇に人を馬鹿者だなんて云ふのは非道いと思つた。室長の言葉によれば、世間で偉いと云はれた人も、先生の口にか丶つては馬鹿者で、たまに馬鹿者でない人も、決して悧巧者とは云はれず、
「あいつは馬鹿ではない。」
と云ふのだと云ふ事であつた。
あの大男の、百姓の手の、づば抜けて聲の大きい先生は、なまじつか叮嚀な言葉を強ひて優し

い調子で云ふよりも、馬鹿者呼ばゝりする時の方が、ほんとの先生なんぢやないかと考へた。

學校のうら手の崖の下に細長い空地があつて、草場になつて居た。その草場は馬場と呼ばれて居た。餘程前に、乗馬はいゝ運動だと云つて、例の如く先生が先達で、お弟子が皆眞似をして、ひとしきり大變流行つた頃、此の草場が馬場だつたのださうである。まだ自分なんか生れない頃の事で、父もその仲間で馬に乗つて役所へ通つたさうで、以前の家の門際には、當時の名殘のうまやが殘つて居た。間も無くみんなあきてしまつて、ばた／＼止めてしまつたのださうだ。

先生といふ人は、何事に限らず、自分一人でやるばかりでは滿足出來ないで、是非とも他人にも見習はせるのが、生れつき好きだつたんだらうと思はれる。昔風の師弟の關係、主從の關係、夫婦の關係、父子の關係、すべて上に立つと思はれてゐたものゝ抑壓的なのを、主義としては嫌はれたけれど、實は如何しても他人を自分の意の儘にしないでは居られない餓鬼大將だつたのではないだらうか。逃亡の賴りないやうな心長閑さに、その馬場の上の崖の草の中に身を倒して、遠くの海の沖に光る白帆や、「お山」の大銀杏の梢を離れて西の空に消えてゆく小鳥の群を、やるせなく見送りながら、勿論おぼろげにそんな事を考へた事も度々あつた。

秋の日は心地よく、友だちと郊外に遊びに行き、野山を歩き廻つた末、田圃を見晴す草土堤に、終日の疲れをもたせかけて休んで居た。なんとなく我が家戀しく、けれども歩き出すのもものうい心持は、友だちを一層親しいものに思はせるのであつた。

傾いてゆく日に輝く竹藪の多い村里を遠くに眺めて、いつ迄もいつ迄も其處に二人は居た。

その時一人の老人が、その孫らしい娘をつれて向ふから來たのが、矢張り土堤に背をもたせて休息してゐた。

「先生はお達者かな。」

老人は自分達が先生の學校の生徒だと知つて訊ねた。

「先生のやうな方は國の爲に長生きしてくれなくてはならない。俺(わし)なども初めは先生の云はれる事がよくわからなかつた。」

老人は一人でうなづきながら語つた。

それはずつと以前の事、或る山國から二人の書生が出て來て、先生のお弟子にしてくれと頼みに行つた。先生はいきなり、

「お前さん達の家は金持か。」

ときいた。一人の方は金持だつたけれど、もう一人の方は貧乏な家の子だつた。すると先生は金持の方は弟子にするが貧しい方の書生には、

「お前さんは國に歸つて、お父さんと一緒に百姓をなさい。」

と云つて歸したと云ふのである。

「この話を聞いて俺は怪しからん事を云ふ奴ぢやと思ふた。だが段々と考へて見ると後には先生のさう云はれたお心がようわかつて來た。

老人はそんな話をして置いて、又娘と一緒に夕日の坂を上つて行つてしまつた。

先生の御容體が惡いと云ふ事は、野球（ベエスボウル）や庭球（ロオンテニス）にばかり遊び耽つてゐる生徒達迄知るやうになつた。何時からか散歩に出掛けるところも見掛けなくなり、人々の口から口に不安らしい言葉の傳はつて行く頃は「お山」の上はひつそりして、如何しても來るべき日を待つほかはない心持がはびこつてゐた。

先生のお邸に日毎お見舞ひに行く父の物言はぬ唇からも、人々の心にさす暗い影の深くなり行

く事はうかゞひ知る事が出來た。

二月の其の夜――寒い冬の夜を、殊更怠惰者の身には戀しい床の中で、自分は眠りかけて居たのだつた。階下の時計の十時を打つ音をかすかに聞いてからだつたと思ふ。

「先生がおかくれになりました。只今『お山』から電話でございます。」

自分は女中の口から此の言葉を聞かされると、身の上の大事のやうに緊張た心地で、寢衣の上に羽織を引掛けると、靜にしかし狼狽して階下に下りて行つた。

父はその夜も先生のお邸に詰めて居たのだつたと思ふ。中の間には悄然として母が坐つてゐた。

「先生がおかくれに。」

云ひかけて自分を見上げた母の目からは涙があふれて來た。自分は默然として母と向あつて坐つて居た。何時も心の中を見透される氣のして困る油繪の父の肖像は、矢張りいかめしく自分を見詰めて居た。此の頃學校の成績の惡い事が心にとがめられた。世の中が暗くなつて行くやうな氣がした。

早春の晴れた「お山」の上は喪章をつけた生徒や、一般の會葬者でいつぱいだつた。砂利を踏む

足音も低く、人々の顔にも聲にも秩序あるお葬式の心が寂しく漂つて居た。
お棺の兩側には、平生は下宿屋の女中にからかつたり、芝浦邊で醉拂つてる大學部の生徒が、その日ばかりは西洋の大學の眞似をした形の惡い正帽をかぶつて、嚴肅な顔付をして歩いて行つた。

お葬式の長い／＼一列は「お山」から下の町へ靜に下り初めた。中學部の生徒は鐵砲をさかさまに肩にかけて、沈んだ喇叭の音につれて從つた。自分もその中にまじつて、成るたけ悲しさに堪へられない樣子を示さうと思ふ賢い心を持ちながら、足並揃へてだら／＼坂を下つて行つた。

坂下の町には群衆が兩側に身動きも出來ない程重なり合つて、葬列を見てゐるに違ひない――自分はなんとなく、先生のお葬式につらなる生徒の一人である事を滿足に思つた。それで一層愼み深い態度を取りながら、遠くの方を横目で見ると、目の下にうちつゞく町々の屋根を越えて青い海が空につらなつてゐる。あの火事の夜の星の空も思ひ出された。

先頭の喇叭の音は、坂を下つて、町をかなり進んだのであらう、次第にかすかになつて行つた。吾々の列はそろ／＼學校の黒門を出ようといふ時であつた。その門の際に、一樣に黒い喪服を着た女の人が半巾に涙を押へながら見送つて居た。黒田先生の奥さんも、平井先生の奥さんも、そ

の他「お山」の上の奥さん達、重立つたお弟子の奥さん達であつた。母もその中に居た。人目も恥ぢず泣いて居た。

自分はその前を過ぎる時、急に胸が迫つて來て、極めて純粹の心持から、涙の滲み出て來るのを止め兼ねた。

先生のお墓は見晴しのいゝ田圃に臨んだ丘の上にたつてゐる。自分は何時も靜な心を求めては、亡き祖母や亡き兄のお墓の前に佇む事を、人しれず懷しんでゐるのであるが、先生のお墓に行くと如何いふものか自分の心はおだやかに暗く沈んで行く事無く、かへつて騷々しく亂れて來る。死んでしまつても先生はなほ朝寢坊の家の扉を叩き、楠正成と權助とを比べたやうに、美事に切腹して果てた將軍と痴情の果てに心中したありふれた新聞種とを同一題下に論ふやうに思はれる。自分自身が一から十まで、する事なす事について叱られて居るやうな氣がしていけないのである。

あの強情我慢だつたらしい、聲の大きい、肩幅の廣い、百姓の手の、馬鹿者呼ばゝりをしたといふ先生は、さま／＼の此の世の事に念が殘つてゐて、世に謂ふ浮ばれない人であるらしく思はれるのである。

さゝやかなお墓は年一年と古びて行くが、自分の幼い心に刻まれた先生は、永久に自分の心に生きて居られるのである。（大正二年作）

海上日記

九月二十八日。

船は棧橋を離れた。

今の今迄のつたりと打ち寄せる波のまにまに海月(くらげ)の漂つて居た港の海に、烈しい機關の音を立て、碎けては散る白泡を湧き立たせつゝ、おもむろに船は動き出した。

自分は甲板の欄干(てすり)に身をもたせて、又更に最後の別れを見送りの人々に告げたければならなかつた。

涙脆い母は早くもハンケチを顔に押あて、妹は母の背にかくれて、日頃我儘に氣難しかつた兄との別れを惜(をし)んで泣いて居る。それに反して、暫時(しばし)なりとも海を距てゝ遠く行く身でありながら悲しき涙に濡るゝ事も無く、心配も無く恐怖も無く、我が生れたる故郷(ふるさと)、我が住み馴れし家、われをいつくしみ育てし父母(ちゝはゝ)、われに優しかりしはらからに別れて行く自分は落着いた心持で人々を見下(おろ)して居る。それを内心飽足(あきた)らず思ひもした。

人々の姿は船脚の進むに連れてちひさく、誰が誰とかわからずに、夕日に白く輝いてハンケチ

ばかり明かに靡つた。間も無くそれも、沖の方から吹送る風になぐれて渦巻きつゝ、陸地へ靡く黑煙の末にかくれて見えなくなつた。

赤々と半面に日の當る稅關の倉庫の角に、顧み勝に母の姿、妹の姿の、親類の男連れに引立てられるやうにして消えて行くのも他所事として見送つてしまつた。

自分はホツトした心持で甲板の籐椅子の上に疲れた身體を橫たへた。午後の日の次第に傾いてゆく光の中に、薄紫に棚引く故鄕の山を、ぼんやりと眺めて居たが、其の時自分は何の悲みも無く、さりとて何の嬉しい事も無い、すべて何事にもかかはりの無い長閑な心地になつてゐるのを知つた。

つい此間英吉利に向つて立つた竹馬の友は、自分とは違つて常日頃、如何なる場合にも感情の動搖を表面にあらはさず、時には冷靜に過ぎるのが物足りなくも憎らしくも思はれ、時には自分の事每に心動き、或は怒り或は悦び或は悲しむ事の度に過ぎてあさましいのを、引きくらべては恥ぢもした。その友だちと、旅に行く日も近づいた或夜、何と無く過去將來の事など語合つた末、自分は前夜、萬一の場合を考へて遺書を認めた事を話した。

「遺書の宛名は君なんだ」

と云ふと、

「實は僕も君の名宛でそんなものを書いて置いた。」

と友だちも云つて、二人はしめやかな心の觸合ふのを思つた。

「どうだらう、横濱を出る時は涙か出るだらうか、僕はなんだか泣き出しさうな氣がしてしかたが無い。」

自分は今でも芝居や小説の古めかしい義理人情にさへ胸の迫る事があり、哀れな人の身の上などを語り聞かされる時は涙が滲んで來て羞かしくなる事が度々ある。年老いた父母の事、何も知らないでやがて自分の留守の間に見も知らぬ他人に貰はれて行くに違ひ無い妹達の事、その人々に對して幾年の間自分は如何につれなく過して來たらうか、かゝる事をその時もしみ〴〵と感じた。

「僕は平氣たと思ふ。うちにゐるよりも煩くなくていゝぢやないか。」

友だちかかう云ふのを如何にも冷く思ふ程の心を自分は持つてゐた。此の人は冷靜に過ぎるばかりでなく、冷靜を誇らうとする惡い癖があるとも思つた。

「僕は泣虫だからね。けれども人前ぢや泣けないかもしれない。」

云ひながら自分は別れには別れらしく泣けるのが幸福だ、どうかして泣いてやり度いなど丶考へた。

友だちの出立前後の事も忘れられない。彼は神戸迄汽車にした。雨の降るわびしい日で、新橋の朝の停車場は濕づぽく、泥濘を歩いて來た見送人の足駄の音が、鈍く騒しく丈高き友だちを取巻いて居た。自分は少し離れたところから其の場の光景を眺めて居た。何か一言でい丶から強く深く先方の心に刻み込むやうな、又自分の心も震へるやうな言葉を相手の胸に止め度く思ひながらどうしてもい丶言葉の擇び出せないもどかしさを覺えた。

早く夫に別れ自分一人の手で育て上げた息子の遠く行くのを見送る友だちのお母さんの姿を見れば、氣の勝つた人も此の頃はめつきり瘦せて、その肉の落た肩をすべり落さうな黒縮緬の羽織も寒さうである。

停車場の正面の入口の段々を上つて待合室へ急ぐ時、フト擦れ違ひに、挨拶して行つたのを、誰だか少時は思ひ出せなかつた程奥様らしくなつた姉なる人の、やつれた姿に對しても、友だちが遠く行く事とひつくるめて寂寞を感じた。小學の庭で鬼ごつこをしたり手毬をついてゐた中で、誰よりも一番美しい人と子供心にきめてゐたその儘の印象が今日迄變らず殘つて居たのだ。

神戸から船の出る前に友だちは手紙を寄越した。平氣で身内の者に別れて行くものと思つて居たのに、途中迄見送つて呉れた姉妹が、下車した後は、急行列車の一隅に、今日迄は思ひも知らなかつた心細さに取卷かれたとあるのを見て、自分は嬉しく思ひ、その嬉しさは親しい友だちを奪ひ去られた寂しさを一層強くしたのであつた。

船の出る時は自分は屹度泣くに違ひない、みつともなくてもいゝから、嗤はれたつて構はないから思ひ切つて泣けるだけ泣いてやらうと考へると、父に對し母に對し、兄弟姉妹に對し、又自分自身に對して云ひ知れぬ懷しさが湧いて來るのであつた。

幼い日に多く感じたしめやかな心持に任はしいまで憧れ、人情の柔かさに身を浸して素直な心をはぐゝみ度いと常に願つて居たが、愈々旅に行く日の近づけば、忙しい日ばかりつぎ〳〵に迫り來るその間にも、此の心はかへつて強くなりまさり、自分は強ひても別れを惜み度く、強ひても父母の年とつた事を考へたかつた。

何と云つていゝか、何とも云へないなさけ無い頼り無い心細さの中に、幾年の間自分を離れてゐた優しい感情の身に返つて來るのを身震ひする程強く感じた。外國へ行くのが厭で厭でたまらなくなると同時に、時には寧ろ裏町の暗い木賃の宿に身を置く氣安さをさへ想つた我家に、絕ち

難き執着を覺え初めた。

日當りの惡い山かげの濕地で、三方は朝夕に寂しい鐘の鳴る寺々に圍まれた古家の、家の中から庭の隅々まで忘れられぬ懷しさが漲り渡つた。しかもその住み馴れた家は間もなく人手に渡つてしまふであらう。五年の後或は六年の後、再び故鄕に歸る日は恐らくは其處に夢を結ぶ事は無いであらう。高臺の日當りのいゝ地面を擇んで、父は今新しい家を建てようと、此の頃は唯一の樂みにして繪圖面ばかりひろげてゐる。自分は自分の部屋と定められてゐた庭の隅の小高い處に建てられた離家の緣に佇んで見馴れた庭を懷しくつく／＼眺めて飽きなかつた。

軒端までも枝を延した栗の大樹は何時も我が机の邊まで暗い影を投げて居た。細々と秋雨の降る頃なれば、さしかはす枝から葉から、したたりしたたる露しづくは、わびしい音を立てゝ落ちるのであつた。その花の咲く頃の蒸されるやうな香も、やがて梅雨にいたましく打れて落ちてそのまゝ土に沁み入る時、日當りの惡い我が部屋の疊の上は乾く間も無くうち濕り、銀色にいやらしく背中の光る紙喰ふ虫は、本箱の邊にうごめいてゐる、それを防ぐ爲めに多量のナフタリンを本箱の中にも疊の下にも撒き散らしたので、自分の所持品にはすべて藥の匂ひが沁みてしまつた。その濕つぽい氣分も此の栗の大樹の暗い陰をもとゝしてはびこるのではなかつたらうか、夏の日

の若い眞實もその下かげばかりは土に濡色が見えるのであつた。秋來れば朝な朝な熟み割れた實の雨戸の外に落ちるのを寢床の中で聽いた。幼い頃は姉や妹と競つては拾ひ集め、拾ひ集めた數を誇らうと、朝は殊更早く起きて寢衣のまゝ飛び出しては野分の風に吹かれたのである。

梅櫻桃李楓椿その他の庭の樹の何れにも、情を知るものにむかふ如く、別れともなく思つたけれど、就中此の栗の大樹の暗い樹蔭を立去り難く感じるのであつた。

さりながら、かゝる心に親しんだのは既に昨日の事になつたのではないか。此の朝うちを出る時から無闇に忙しくあわたゞしい旅立にまぎれて何を思ふ暇もなかつた。車が玄關を離れる時、一生奉公の古い女中から、昨日今日の新しいのまで、涙を流して見送るのも、古めかしい奉公人の心根と、昨日ならば哀れと見たに違ひないのに、今朝は他所心に過してしまつた。

父を先に車を列ねて停車場に向ふ途中の、或る町筋の小學校の塀の内から單純な唱歌の聲のもれ來るのを聞いた時、その瞬間には烈しく親戀しく家戀しい感情の起るのを覺えもしたが、それも暫時後新橋停車場で見送りの人々の挨拶に一々うけこたへする煩はしさにとりまぎれて心の外に消えて行つた。

今、たゞ一人知る人も無い船の上に殘された自分を顧みれば、何一つ殘り惜しい事も無い極め

て長閑な心狀に在るのであつた。彼の冷靜な友だちさへ心はかなく旅立つたと云ふのに、泣虫にして且泣く事を苛々する心の唯一の救濟とも思ふ自分が、家を離れ身內の物に遠ざかつて、かへつて大なる安心を覺えるのは少なからず物足りなかつた。あの凭馴れた古机にさへ別れともなく思つたのは誰だつたらう。どうかしてあのしをらしい心を取返し度いと願つたけれど、他方に於ては厭で厭でたまらなかつた一切の煩瑣なる絆と絕つた放たれた心地が、橫着に疲れた身を心を橫領してゐて、自分は快きものぐさに耽るのを止める事が出來なかつた。

見る間に遠ざかる故鄕の山々は旣に淡く、夕暮は初秋の冷い海の表面に流れた。その暮れて行く浦々の漁火を遠く眺めてゐると、父母の家の夕餉時の有樣がまのあたりに浮んで來る。折しも食事時の鐘を鳴らしてボオイが廊下を馳けて行つた。

夜はたゞ海原の蒼い月夜になつた。

九月二十九日。

今朝、自分は不思議な驚きをした。それは自分の乘つて居る船の四方を圍む海の、空に連なる一線が、大なる圓を描いてゐるといふ單純な驚きである。

海に來て初めての夜は、僅に船の揺れるのも、搖籃に眠る心地がして安らかにあけた。枕に近い圓窓の濃綠の布を引くと、目に迫つて灰色の波が近々と起伏する、それを珍しく眺めてゐると海に親しむ心持が湧いて來るのであつた。

一室に二人詰の上の臥床を自分は占めて居たが、下の氣配をうかがふと、まだ目が覺めて居ないらしい。睡眠を妨げては惡いと思つたが、竊かに起き出て身支度すると直ぐ甲板に上つて行つた。

朝の冷い水の上の空氣のひとすぢに咽喉に通る心地よさを覺えながら威勢よく梯子口から、甲板にをどり出した時、自分は海の廣さを忘れてゐたのだ。水平線は限られた紙の上に描かれた海の景色の如く、何處迄も眞直ぐに平らに引かれてゐて、何處迄行つても行き合ふ事は無いと思つて居たのに等しかつた。

初めて地球の圓い事を發見した時の吾等の祖先の驚異を偲ぶ事も無く、すぐれたる人の知識を借りて我物の如く敎へる學校の先生の打ち振る鞭の動くままに、地球儀と世界地圖を物珍しく眺める幾多の兒童にまじつて、地球の圓い事を知り陸地と海洋の關係をも、いち早く小學校で敎はつた筈だ。

それでゐながら今朝、此の船を圍む水平線が圓を描いてゐたのに自分は驚いたのである。さう云ふ景色を想像する事が出來なかつたのだ。與へられたる知識は、一度感覺の窓を通らなければ全く根柢の無い事を知つた。

それについて思ひ出すのは初めて吾々の棲息する地球の圓い事を教へられたそのかみの一日である。自分は先生が地球は圓いものだと云つた時、腹の中では隨分驚いた。實際自分がその上で、歩いたり、坐つたり、寢たりしてゐる此の地球がまあるかつたら、轉がり落ちてしまふ筈だ、目で見たつて、町も野原も平らである、人間が歩き、車が走り、牛や馬や犬や猫が四足で踏んでゐる地面は何處迄も平らであるとしか考へられなかつた。しかし同時に、先生の言ふ事だから同意した顏をしなければならないと考へる丈小悧巧であつた。

その時教場の隅つこに居た一人の子供が手を擧げて、

「先生。」

と呼んだ。

「先生、地球がまあるければ海の水はこぼれてしまひます。」

その子は考へ深さうな顏付をして、きつぱりと、か細い聲で云つた。ふだんから運動場の陣取

や、角力の仲間入りはしない、汚ない着物を着た貧しい家の營養不良の子であつた。

先生は師範學校でかためられた先生らしい態度を忘れて腹を抱へて笑つた。四十人、五十人の兒童は之に和して一齊に笑つた。自分も賢さうな顏をして笑つた。

先生は先生らしい態度を取返してから、地球は圓くても海の水は大丈夫こぼれない理由を說明したが、笑はれた子は淚を堪へて、うつむいて居た。頸のあたりの寒さうな瘦つぽちであつた。

その子は一二年の後、病氣で死んでしまつた。ああいふ風に自分の頭腦でもの事を考へ、考へた事を人前でも憚らず云ふ子は死ぬであらう。自分はその後も屢々その時の如く、何も知りもしない癖に衆にまじつて人を笑つた事が數へて數へ切れなくなつた。しかし時につけ折に觸れては、自ら信ずる事の厚かつた病身な貧家の子の、その時の姿を想ひ出して吾と我身に恥ぢるのである。

それからもう一つ、餘程後の事で、これはをかしい話だが、二三人の友だちと梅見から羽田に行つた歸りに、乘合船に乘つた事がある。川口を海へ流して、小舟に棹さして行く頃を、夕波は船端にしぶきをあげ、遠くに霞む品川の灯が懷しく眺められた。その時、舳に一人手土產の蛤籠を持つた職人が、まだ酒の香の消えない顏をふりむけて突然叫んだ。

「船頭さん、海は平らぢやねえんだらうか。何故つておめえ、遠くの方にゐる船は帆ばつかりし

か見えやしねえぜ。かんじんの船は何處にもゐやあしねえ。」
棹を櫓にかへて、のつたりと漕いでゐた船頭は、綿の厚いぬのこにぬくぬくと着ぶくれた畑にゐさうなおやぢだつたが、むつつりした顏に不安もなく、
「平らでねえ事があるものかね、海は平らと昔からきまつたものさ。平らでなかつた日にや船はみんな低い方に流れちまひまさ。かうして漕いでるつてのが證據だあ。遠くの船が見えねえなあ、矢張り遠くだから見えねえだけのこつた。」
「違えねえ。」
職人はいかにも嬉しさうに笑つて吾々の方を見た。一時の疑念は全く解けて何も不思議は殘らないのであつた。
その時も自分は友だちと顏を見合せて、彼等の無智を嘲笑つた。
そんな事を想ひ起しながら甲板の椅子に腰を下して自分は灰色の海を眺めてゐた。
「お早う御座います。」
急に後に人聲がした。船醫と乘客の一人が喫煙室から出て來た。
「どうです、此處からあの水平線迄幾哩あると思ひます。」

船醫は突然かう訊いた。うすく雲切れのした空の下に、銀鉛色に光る水平線を指して、

「さうですね、さあ何の位ありますかな。」

人のよささうな青年は首をひねつた。自分も見當がつかなかつた。幸ひ自分よりも先に青年が口を開いたので、いゝ事にして默つてゐた。

「三十哩もありますか。」

青年はふりかへつて云つた。

「なあにたつた六七哩ですよ。」

船醫は得意さうに肩をゆすつて笑つた。

「六七哩。そんなものかな、隨分遠く迄見えるやうですが。」

青年は腑に落ち無い顏をふり向けて自分に云つた。自分も少なくとも十四五哩はあるだらうと思つてゐたのだが、フトその時思ひ出した。學校で、何かの講義の中で一國の領海はその海岸線から三哩迄だと敎へられた事があつた。

「何しろ人が水面に立つて見得る限度は三哩ですからね。マア彼處迄は六七哩でせう。」

自分はすましで水平線を指した。講義中に聞いた領海制定の理由を思ひ出したのである。

「さうです。つまり此の船の高さ丈それ丈遠く迄見えるんですから。」
船醫は自說に保證がついたので落着いて云つた。
「へエ、そんなものですかねえ。」
青年はなほ半信半疑でしきりに海面を見詰めて居た。
自分は十四五哩位はあるだらうと口に出して云はなかつたのは、如何にも聰明だつたと思つて安心した。同時に自分は又小悧巧に立廻つたなと思ふ不快を禁じる事が出來なかつた。
二人の立去つた後、自分は自分の想像外だつた廣々とした海の圓を描いたまん中に居る自分の、ちつぽけな存在を寂しく思つて、その廣い海を見て默した。

九月三十日。
船に來てから知つた放たれた心は昨日も今日もつゞく。それに張合ひの無い倦怠を誘つて、自分は肉體からも激しい疲勞を覺えるのであつた。
うす曇りの寒い日を外套にくるまり、甲板の籐椅子に寢轉んで、ぼんやりといろいろな事に怠惰な想ひをはせて居た。終日さうしてゐても活動を要求しない程、身も心もがつかりしてゐるの

であつた。

想へば昨日迄の煩瑣なる自分の周圍の、切つても切れなかつた一切と別れた事を感じた。その煩瑣なる周圍の爲に、如何に自分は疲れてゐたかを知つた。

殊に出發の間際には、父母の爲に善き子として、殆んど毎日心ならずも閑暇なき日を送り迎へなければならなかつた。いろんな人から種々な餞別の品物を贈られるのに驚き、それに對して一々お禮とお別れを兼て、戸毎に頭を下げて廻る面倒に氣をくさらした。その間には又誰彼の友だちと別れを惜しみたかつた。かゝる時自分は何處に行つても盃を手にしなければならなかつた。改つた顔をして痛い膝を崩す自由さへ與へられぬ席で、苦い酒を飲まなければならなかつた。どうして好きな酒が他人と飲むとかう苦いのだらうと思はれた。

その酒の香の失せないうちに、靜な場所を求めては又友だちと新しい盃をやりとりした。日に日々にかゝる事を繰返す間には、殆んど交りの絶えてゐた昔の友だちに突然訪問されて驚く事もあれば、その人々に招かれて夜を更かす事もあつた。

常に自分一人の時間を多く持ちたいと思ふ自分には、此の種の禮儀は堪へ難きものであつた。

夜更けて我家に歸れば、慈愛深き母は、いかに歸宅の遲い時でも、必ず一杯の茶を用意して、な

ほ燈火の下に待つて居る。自分は一人我が部屋に敷かれた床の上に横たはる時、初めてのびのびした心地になり得るのであつたが、晝の間の身心の疲勞に枕に頭をつけるや否や、獸の如く眠るばかりだつた。

自分は全く氣儘に樂む時の無い事に氣がついた時、わが目の前に迫つて來てゐる出發の日を、如何なる事由によつてゞもいゝから、一日でも延引させたいと思つた。ゆつくりした心に映る別離の情をほしいままにしたいと思つた。

さう思ひながらも惜しい一日をあわただしく、殆んど麵麭の爲に興味の無い勞働に從ふ人の態度で、苛々しながら、何となく心はかなしみつゝ、あちらこちらと歩き廻らなければならなかつた。自分が最も心苦しく思つたのは、平生自分自身としては何の交際も無い社會に相當の地位のある人々から、思ひもかけぬ餞別の品を贈られたり、うやうやしく送別の言葉を寄せられる事であつた。單に外國に修業に行く、學問も無ければ地位も無い青年が、どうしてさる人々から叮重な待遇を受ける事が出來よう。自分は徹頭徹尾父母の子としてのみ取りあつかはれ、父を離れ母を離れた自分としての存在を持つてゐないのだと思ふと、日頃から面倒臭く、厭はしく思つてゐた事が更に強く感じられて來た。

自分は初めからさう云ふ事の無いやうに、つかないでもいゝ嘘をついて迄も出發の日と時とを友だちにさへかくして、こつそり立つてしまはうと思ひ定めてゐたのだけれども、段々と家の近くから廣まり初めて、出立の二三日前には日本一と自稱する新聞の一隅に、自分の乘つて行く船の名、その船の出帆する日時が掲げられ、切離しては知る人も無い自分の名が、聞えたる父の名の下に活字に組まれて現はれた。自分はつくづくなさけなくなつた。

さうしてその日、新橋に横濱に、見送つてくれた人の數の多かつた事が如何に自分を心苦しく思はせたか。

今、それを回想して思はず自(みづから)を冷笑した。

自分が此の船の上に安らかな心を見出したのは、限りもなく廣い水に浮ぶ船の上では、陸地に居た時幾年の間、家と親との名の爲に過重に受けなければならなかつた冷嘲をうらに包める尊敬と叮重とに別れた事に歸す可きであらう。自分は此の世に生れてから、父母(ちゝはゝ)の子としてのみ人々の目に映じた。曾て誰か自分を人に紹介する時に我が父の名を出さなかつた事があつたか。小學中學に通ふ頃、自分を叱る先生は、幾度、父の名を繰返し、その父の子として惡しき行ひを恥ぢよと云つたか、母を始め身内の者、子供の頃の附添ひ迄、お父樣のやうな偉い人にならなければ

ならないと教へた。自分には父の踏んだ途以外に、行く可き途は無いかの如く人々は自分を強ひるのである。それを自分は長い間、自分の弱い力では如何する事も出來ない重税として負はされて來た。自分自身として、殆んど何ら尊敬を受く可き値のない人間として人々から如何にでも取扱はれたかつた。

それが船に來て稍實現されたのは嬉しい事の限りである。見る限りの海の上に、自由に心置きの無い自分を初めて見出して、身丈も延びるおもひがした。

自分はフト長い坂を重い荷車を汗もしとどに曳上げた時、彼の車力等がホツトした顏で、額から胸から腕にかけて流れる汗を拭つてゐる姿を眼前に彷彿した。

十月一日。

海は昨日も今日も靜である。初めの二三日は如何に波が靜でも、馴れない爲に船醉ひに苦しむに違ひないと人々から云ひ聞かされて心配して居たが、それもほんとの心配に過ぎないらしく思はれて來た。

朝は早く心地よく目覺め、夜は枕につくと物思ふ事も無く、舷側を打つ波の音を守唄のやうに

聞きながら、波のうねりに揺られつゝ眠る。昔は大方甲板に暮した。見知らぬ人と口をきく術を知らず、ありきたりの會話の頗る拙い自分は、矢張り此の船の中の社交に於ても、人々を知り人々に知られる事が一番遅かつた。

ぼんやりと一人で、甲板の上から、船底に博奕うつ支那人の群を眺めて居た。昨日も今日も暗い三等室の天井をあけて、僅にあかるい光線のさし入る下で、彼等は終日うちつゞける。まるで喧嘩の最中のやうに早口に罵りかはしながら、手は絶えず卓の上に忙しく動いてゐる。青と赤と各々数を異にしたらしい丸い玉の刻み込んである木片を頼りにやりとりするが、もとより自分には如何して勝負がつくのかわからない。また十五六位にしか見えない子供達迄入りまじつて勝敗を争つて居るのが物凄い光景であつた。何時食事をするのか、その暇も無く思はれる程朝は早くから暮は遅く迄、血眼になつて金錢のとりやりにすべてを忘れてゐる。自分はそれを、子供がからくりを覗く心で、あかず見下してゐるのであつた。

彼等は勝負の合間々々に、眼を光らしては自分の方を、うさんくさうに仰ぎ見る。悪事をする者が必ずする、人を憚る様子を明かに示すのであるが、又も自分に廻つて來る勝負の別れ目に誘はれて、木片のやりとりに一心になるのである。しかしその時たまに仰ぎ見る時の凄い目ざし

は、うす氣味惡いものであつた。

彼等は加奈陀のヴイクトリアに行くのださうだ。船員の話では、毎航海支那人は横濱を出てから向ふに着く迄、あゝしてのべつに博奕を打ちつづけると云ふ。勝つた者がよろこぶのは當り前だが、負けた者も別段損をしたとも思はないさうだ。勝つて徳のあるのは勿論として、負けても勝負そのものを樂んだ代價だと思へば、なげく事はないと考へてゐるさうである。垢じみた油じみた着物を着、粗食に甘んじて稼ぎためた金を、見る間に取つたり取られたりしてゐるのも自分などの知らぬ世界であると思ふと、それも氣安い一生らしく想像されもするのであつた。

自分は何時迄も何時迄も、夕暮迄も其處に殘つて眺めて眺めあきなかつた。ちひさいながらにガツシリした肩腰を持つてゐる吾々日本人に比べて、背中の骨の足り無いやうな支那人の姿態は血の冷い爬蟲類のやうな氣がする。それが亂雜に罵りかはしてゐるのを見てゐると、人間の母親から生れたのではなくて、何處かそこいらの船底から、船蟲と一緒にわいたもののやうに思はれる。

兎にも角にも、彼等は何時迄も何時迄も博奕をうちつゞける。海も空も次第に暮れかゝる頃、船底にともる灯に暗い人影の動くのは、なほも彼等が勝負を爭つてゐるのである。

さうして夜、暗い夜の船底に奏する胡弓の音も悲しく、彼等は故郷のうたをうたひつゞけたが

ら、なほも博奕をうちつゞける。

十月二日。

つい此間迄は顔も姓名も知らなかつた幾人が、水に圍まれた船の上に集つて、新に小社會を形づくつた同船の客に、互に挨拶をかはすやうになつた。

自分と同室のA氏は市加古に雜貨店を持つてゐる人で年に一度か、隔年に一度は、日本に歸りはするけれど、既に二十年近く亞米利加に家を持ち、彼の國の女と結婚して二三人の子供もあると云ふ程で、洋服の着こなしから歩きつき身ぶり迄が、餘程日本ばなれしてゐるのであつた。

B氏も同じく長年の亞米利加住居の人で、日本には行くのだか歸るのだかわからないと云つてゐた。

酒肥りに肥つたシアトルの商人C氏、早稲田大學を卒業してカリホルニアに百姓しに行くD氏、その他それぞれ異つた希望を抱いて渡米するEFGの諸氏であつた。

中に全く色彩を異にしたのは或教會の牧師であつた。これはC氏と同室たつたが、毎晩かかさぬC氏の飲酒に極力反對して、殆んど喧嘩の有様だと云ふ噂が、早くも人々の間に知れ渡つた。

「どうも私と牧師さんぢやア取合せが惡るわ過ぎますさ。」

とＣ氏は下腹したっぱらをゆるがして笑ふのであつた。

牧師は何時も手に聖書を持つて船中を歩き廻り、誰彼の差別無く話しかけては耶蘇教に歸依すべく說きすすめ、且は自分の信仰のゆるぎ無き事を誇らんが爲に何處のだかしらないがゴツゴツした、山國の訛のある調子で長談義をするのであつた。時には不器用な聲を張り上げ讃美歌をうたひもした。英語が自慢で外國人に話しかけるのを何よりの得意として樂たのしんでゐるのであつた。

それ等の人々の間につひぞ物言はぬＨ氏が居た。五尺七八寸もある大男の骨組も逞しいのが凄い目つきをして、日に燒けた顏に漆黑の口髭をたくはへて居た。餘程の年配であるが、故鄕の鹿兒島を去つて妻と一緒に墨其西哥メキシコに行き、農業に從事するのだと云ふ話であつた。その妻と云ふのは、一度も室外に顏を出した事が無い。此の靜な海にさへ船醉ひに苦しめられて、枕を離れる事も出來ないのだと聞く。Ｈ氏は殆んど口を開いた事もなく、他人が朝夕の挨拶をしても、心持頭を下げてニヤリとする他に言葉を知らないのであつた。

女客ではシアトルの醫師ドクトルの奧さんと云ふのが一番幅をきかして居た。四歲よつつばかりの莟しよびれた男の子のメソメソ泣いてばかり居るのを連れてゐる爲か、少しじれつたいと云つた調子が年中

ついて廻つて、他の人に對してもあんまりおだやかではなかつた。おまけに初渡航の者とさへ見れば、誰彼の差別なしに亞米利加の偉大なる文明を語り聞かせた。

「シアトルで井上とおつしやれば知れますから。」

などと無闇に名刺を與へたりしてゐた。

今度日本に歸つたのは、横濱にゐる里の母親が、シアトルで生れた孫が見度くてたまらず、幾度も手紙で遊びかたがた孫を見せに來いと、かねてから書越すのを、夫なる醫師が許さなかつたところ、遂に「母病氣」と云ふ電報を受取るに至つた。奥さんもこれは眞に受けて、あわてて子供を抱へて歸鄕したのだと云ふ。

「母つたら隨分非道いぢやありませんか、病氣どころかシヤンシヤンしてるんですもの。」

奥さんはいかにも面白いいたづらだつたと云ふ顔付きで得意になつて繰返した。

Kと云ふ海老茶の袴をはいてる若い女もゐた。どう云ふつもりなのか二言目には格にはまらない漢語を使ひたがるので物笑ひの種になつて居た。

「どうも今日は皆が傾きますね。」

と云ふと、

「エ、稍傾斜しとるですね」

と答へるのである。よく田舍出の女學生や看護婦の使ふ最も不快なる言葉使ひである。何時とは無しに傾斜女史の名が、ひそかに通用するやうになつた。

「Kさんは寫眞結婚なんですつて。」

醫師の奥さんは一大事のやうに人々の間を觸れて廻つた。同鄕の者で、サクラメントに出稼ぎして相應に成功した男のところに貰はれて行くのださうだ。

もう一人寫眞結婚だと云ふ女が居たが、これはH氏夫人と同じく、乘つた日から吐きつゞけてゐると云ふ事だつた。

他に西洋人が四人、支那人が三人居た。西洋人の一人は永らく日本の汽船會社の船長を勤めてゐた英人だと云ふ、船乘りらしいがつしりした大男で、年中何かしらゲエムをやつてゐた。「お早う」「今晩は」程度の片言を自慢にしてゐた。

米人の夫婦者が居た。男は比較的若いのに、女の方はもう白髪の婆さんだつた。「男妾でせう」などと噂するものもある程年配が違つて見えた。

もう一人は獨逸人だと云ふ若い女で、妙に厚ぼつたい外套を着て、時々人氣の無い甲板を歩い

てゐた。一度も食堂には出なかつた。

支那人は六十かつかうの油ぎつた金持らしい老爺と、十三四の少年とで、これは時々喫煙室にも出入した。事務長の話によると老爺の妻たと云ふまたやつと十六七なのが乗つてゐるさうであるが、それは人前には出さないものらしかつた。

「チャンには珍しい別嬪ですよ」

と三度三度の食事をはこぶボオイが云つて居た。

から云ふ船客を相手に煙草好きの船長、酒飲みの機關長、溫厚な事務長、ハイカラな船醫が喫煙室の集りを賑かにして、船の上の一團は昨日今日を送るのである。

十月三日。

日本に通じる無線電信は今晩でおしまひだと、電信局の人が注意に來てくれた。

カワカイデジ

と云ふやうなのが、いくつもいくつも繰返されて居るのである。

自分も父樣をよろこばせる爲に、何か一言いひ送らうと思つたが、無事と云ふ以外に云ひ度い

事は何も無く、たゞ無事と云ふ丈では、あんまり物足りなさ過ぎるので、手帳を出してあれこれと近頃の自作の歌の中から適當なのを撰ばうと思つた。

景樹の流れを汲んで和歌をよくする母は、自分達兄弟姉妹が、時折父母の家を離れて旅にでも出た時とか、或は父母自身が家を留守にした時に、必ず吾等に對して子を思ふ親の心を三十一字に籠めては書き越すのであつた。見やう見眞似で兄も姉も幼い時から歌を詠み習ひ、母から送られた時には返しをするといふ風であつた。自分も何時かそれに倣つて、旅好きの身の旅先きから強ひても母の好きさうな古風な歌を詠み出ては書き送るのをならひとした。

恰度此の夏も、自分は自分の拙い歌を、拙い文字に認めた行く先々の驛路の繪葉書の、いかばかり母を慰めるかを想ひ、又知る人の訪ひ來るまゝに、いかに母がほこりがに人々の前にそれを示すかを想像しながら、九州路の旅に日を暮した。

しかし今自分の手帳には旅の歌が一首も無く、船に來てからも時折は、切れ切れに浮ぶ想ひを歌はうとつとめはしたけれど、どういふものかどうしてもそれが纏まらないのであつた。且正直に書きとめられたその切れ切れの思想は、何れも故郷を去り父母の家を離れて心の嬉しさ氣安さを思ふといふやうな意味の句ばかりで、それが鉛筆の痕鮮かに目に映るのである。父母の家を離

れし氣安さを旅に知る身もはかなかりけり、と云ふのが、傍に疑問點をつけたまま僅に纏まりかけた一首であつた。

　けれども自分が父母に送る可き歌はそんなものではいけない。なるべく心配させないやうに、海上の平穏な事を知らせ、併せて父母の家を片時も忘れないと云ふ意味を含ませなければならない。

　こんな事に迄も自分はいゝ子になり濟まさうとする根性になつてゐた。喜怒哀樂すべてに對して、全くおのれを押へ、おのれを虐げる事のなかつた自分は、曾て如何に身内の者の心を亂したらうか。しかしその後の聲あげて笑ふ事無く、拳をあげて怒る事の無くなつた自分が、想像の外の安堵を、彼等の上に與へ得た事は疑ひもない事であつた。おのれの功名を語る事を好まぬ父がその重い口にいかに屢々我が名をのぼせ、知る人の限りに今日の自分が昨日の自分でない事を憚りも無く誇つたかを思ふと、自分は冷汗の背を流れる心地と共に、殆んど心にもない嘘詐を以て人を欺きおのれを欺く不滿に伴ふ寂寥と悔恨に惱むのであつた。

　腕力を以て父に抵抗する事をさへ憚らなかつた我儘な短氣な癇癪持ちは何時の間にか人に逆らふ事を忘れてしまつた。專横なる慣習の桎梏に縛られつつ敢て縛めを解かうともしない世の常の

奴隷根性も、やがては生れながらの性質とならんとする自分の忍従と同じ途を歩むものではないか。自分は何時の間にか、父母の喜ぶ事をことさらこしらへ上げて迄も、目に立つやうに振舞はうと心掛けてゐた。それが頗る自分に不滿足を與へ、行くがままに走らんとする心との抗爭に苦しめられもしたけれども、何時しかそれが根深く心を領するやうになつてしまつた。自分は二十四孝の愚さをさへ、機會さへあれば敢て學んだに違ひ無い。

かゝる事の切れ切れに浮ぶがままに自分の歌は、一層纏まりがつかなくなりゆくのであつた。幾度も幾度も、短いありふれた句を手帳に書いては消し書いては消した後で、あれこれとつなぎ合せて、漸く左の一首にまとめたのである。

ヤスラカニウミノイクヨハアケニケリ

チチハハノイヘコヒシトオモヘド

自分はその電報が、恰も父の寢酒の時刻に我家に着くやうに、無線電信掛りの人に賴み込んでそれで今日は一層安らかな心になつた。

父は近頃頓に量の少なくなつた酒に陶然としながら、なんだつまらないと云ふやうな顏をして見るに違ひ無い。しかしその心中の嬉しさは、かくさうとしてもかくし切れず、見ないやうな風

てゐなから、電報の歌を暗んじゐるに違ひ無い。母はもうたまらなくなつて、目頭に涙を滲ませたから、幾度も幾度も口吟んだ後、妹にも弟にも、さては女中達に迄も讀み聞かせるに違ひ無い。明日からは、彼の家の夫人、その家の奥さん達に逢ふ度毎に、我子の歌を脣にのぼせるに違ひ無い。自分にはよくそれが見えるのであつた。

十月四日。

A氏は船室の壁に市加古に待つ妻子の寫眞を掛けてゐた。

「君も泣いて別れて來た人の寫眞でもお出しなさい。」

と度々からかふのであつた。

自分は鞄の底にしまつて置いた祖母の寫眞と、出立の少し前に兩親と自分と三人でうつした寫眞とを取出した。

「こんな寫眞きりありません。」

と云ひたからA氏に貰つた鋲でその二枚を壁にうちつけた。

「君はお母さん似だね。」

と A 氏は云つた後で、暫時父母の事を話題にしてゐたが、思ひ出した用事でもあるらしくそゝくさと出て行つてしまつた。

自分はその寫眞に向つて默つて見詰めてゐた。心の中にさまざまの感慨の淡くなつかしく湧起るのを覺えた。

出發前忙しい忙しいと云ふうちに、姉や妹のすすめるまゝ、父母と一緒に寫眞をうつしに行つた。自分は寫眞といふものに曾て興味を感じた事がないばかりか、自分自身の姿をうつす事は絕對に嫌ひである。他人の寫眞を見ても大概は妙に固くなつて、いかにも山高帽子の好きさうな顏をし、無表情な顏を一層壁土にしてゐるのを見ると寧ろ腹が立つ位である。それから又寫眞屋が嫌ひだ。いやに氣取つた身振りをしながら無理に兵隊の姿勢をとらせたり、ひどいのになると後腦に冷い金屬性のつつかい棒をさせもする。かういふ事に手間取られるうちに持つて生れた癇癪に堪へられなくなつて、自分の寫眞と云へば何時でもきつと、ふだんから人好きのよくないのが更に佛頂面にうつるのをおきまりとした。

それが珍しく幾年ぶりかで父母と車をつらねて、或寫眞屋の門口に伴はれた時、自分は意外にも此頃全く知らなかつた柔らかな心地で、赤い絨毯を敷き詰めたその家の階段を二階へ上つて行

きながら、父でもいゝ、母でもいゝ、その寄る年に何時かしら冷めたくなつた手を執つて歩いてやり度いやうな優しい心で父母の後に從つた。

一枚はその寫眞なのである。

又それは夜の間にすさまじく荒れて過ぎた風の名殘りのまだ止まぬ一日、數十年來の痼疾の神經痛に一日も苦痛を忘れる事の出來ない祖母を湘南の海邊の家に訪れた。

何時しか雨は遠く過ぎて、風ばかりなほしきりに強く吹きに吹くさゝやかな停車場に降りた自分は、外套の襟に顔を埋め、ザラザラ吹きつける砂ほこりを浴びながら波の音のする方に急いだ。自分は風の吹く日には曾て安らかな心地でゐた事がなかつたのに、その日に限つて幼き日、町つ子と遊んではいけないと云はれながら、ほしいまゝな往來のいたづらに心引かれて、忍んではぬけ出し、町つ子の群にまじつて終日遊び暮し、遊び疲れて家路へ一人歸る頃は、我が幼心に常にある物の怖れと悲しさを沁々と感ぜしめた夕暮のうす明りが音も無く身にひしひしと迫つて來て、自分は何時も父母のいましめをきかず、町つ子と遊んだ事を悔み、思はず知らず滲み出る涙に夕風のつめたく沁みる時、必ず祖母に縋らうと思ふ心に震へながら心細くうちに歸つて行つた。そのなつかしい心持を、烈しい潮風に濡れて行く時自分は不思議にも胸にいだいてゐたのであつた。

今年の夏は遂に一度も來る機會がなかつたので、主人の顔を見忘れた犬は、海の音にもおびえやすくなつてゐるのであらう、やま犬のやうにはげしく吠えかゝる。それでも何となく此の犬にもわざわざ逢ひに來てやつたやうな氣がして、ヂョン、ヂョンと呼びながら手を差出すと、犬は俄に頭を土に擦りつけ尻尾をちぎれる程振り立てゝ先刻の無禮を悔いて甘つたれる。自分は口笛を吹きながら身を擦りつける犬と共に、潮風に白い葉うらのいたましく亂れ伏した臺灣蘆を踏み分けて庭口に廻つて行つた。

日當りのいゝ小部屋に何をするともなくちひさく坐つて居た祖母は、不思議さうに暫時は自分の姿を眺めてゐたが、

「オヤ。」

と云つて立上らうとする時、フラフラと倒れさうになつた。

自分はもう涙が溢れさうなので幾度となく鼻をかんではまぎらしてゐた。

「もう私は二度とは逢へまいから。」

と祖母は繰返して同じ事を云つては涙を拭いてゐた。それが附添ひの人や女中達のゐる前なので、自分は泣くにも泣かれず、風に鳴りはためく緣の玻璃戸の外の庭の小松の葉の間に遠く荒れ

騷く海を眺めてまぎらすのであつた。

自分はどうしても其處に九十近い祖母と差向ひで長く坐つてはゐられなかつた。涙に咽喉が詰つて聲の出ないのを氣にしながら、

「今晩ははづす事の出來ない送別會がありますから。」

と嘘をついて又逢へるか逢へないかもわからない祖母に別れたのである。

風は次第に靜まり、夕日の色のつれなくも赤々と山際(きは)を染める夕暮、自分は一人白砂(しらすな)の長い汀(みぎは)を、幼い日の祖母に對したと同じ心で、止度なく催して來る涙を拭ひもせず、別れ際に白紙に包んで渡された祖母の寫眞を胸に抱きながら、氣持のいゝ哀感にうなだれて、停車場の方へ歩いて行つた。

一枚はその寫眞なのである。

自分は此の他に遠い九州の田舍に居る姉の家の年寄が、わざわざ、太宰府に詣でて自分の爲に頂いてくれた梅のお守を持つてゐる。そのお守を包んだ菊桐の錦のきれは、明治の初めに役人として洋行した父が歸朝の際拜謁仰せつけられた時、かしこきあたりから賜つたものだといふのであつた。それを姉が手づから袋に縫つて、その中にお守を納めてくれた。

自分は此の二枚の寫眞とお守とを同じ心持でなつかしく鞄の中に入れて來たのであつた。

十月五日。

人々は早くも無聊に苦み初めた。

あけくれ目に迫るものとてはたゞ灰色の海の水ばかりなので、誰彼から紹介されるさま〴〵の遊戲も、ひとしきり喫煙室を賑はしては、つぎ〴〵にあかれて行くばかりで、寄るとさはると一日も早く陸地に着かん事のみ互に希つて居るのである。しかし自分丈は此の航海の長閑さに別れともなく、何時迄も甲板の椅子に寢ころんで海を見る人でありたかつた。

人々は所在なさに狹い甲板をあちこちと足並揃へて往きかへりしては、適度の運動を取るかたはら退屈の時間を消すのであつた。

下の甲板では三等の女客が暇さへあるとキヤア〳〵云つて鬼ごつこをやつて居る。大概は廣島岡山あたりの産で、何れも寫眞結婚の連中であつた。總勢二十人近くも居る中には、內地であらんかぎりの事をしつくして來たといつた風の女も居れば、まだ見たところ十五六にしか思はれない小娘も居る。たゞ共通なのは何れもが、やがてシアトルの波止場に迎ひに來る筈の未だ見ぬ夫

の寫眞を懷にして居る事である。

船員の話によると、さま〴〵の喜劇悲劇がかゝる結婚から起ると聞く。横向きの美男子の寫眞に滿足して、遙々渡つて行くと波止場に自分を待つて居たのは、かくれたる半面に著しきめつかちだつたり、或はもつとはげしいのになると友だちの寫眞で釣出すのもあるさうだ。

つい此の間迄我家に奉公して居た女で相模の漁村の者であつたが、緣談があるといつて暇をとつた。愈々結婚の當夜になつてみると、花婿と名乘つて現はれたのは見合の時の男とは似ても似つかぬ醜男だつた。嫁女はひた泣きに泣き出したさうだが、それでも先方は相應に資產のある家なので親達は不承知をとなへず、花嫁はほんとに泣き寢入りになつてしまつたと云ふ。から〳〵はしやいだ女たつたが可哀さうな話と思つた。東京の近くにさへ今もかうした事があるのだから、太平洋を距てた亞米利加と日本の間を、たつた一枚の寫眞が取結ぶ緣談に、幾多の悲慘な話の作ふのは驚く迄も無い事であらう。

これらの女は既に彼地に着いた以上は、たとへ相手が自分が寫眞によつて胸に描いて來た男とは、あかの他人だつたにしても、もはやしかたがないのである。歸るべき旅費は無く、身の振方を相談すべき手段を知らず、多くは口惜し淚にかきくれつゝ、それらの男に身を任せる運命に終

るのだといふ。今自分と同じ船で渡航する女達の中にも恐らくはそんな目にあふものもあるのであらう。しかしそんな事は彼等の想像に浮んでゐるかどうかもわからない程呑氣にしあはせに、つかまへたりつかまへられたり鬼ごつこをやつてゐる。着のみ着のまゝと見えてうす汚れた風をしたのが、潮風に裾を拂はれて太股迄もあらはに甲板を馳け廻つて居る。

日子重複となるため一夜あけても十月五日である。それを知らずに朝の食卓で食事半に牧師は立上つた。

「皆さん。」

と呼び掛けて彼は非道く高調子で、今朝十時から此の食堂で日曜の禮拜をするから集つてくれといふ事を、かなりうるさい前置きや說明を加へて述べた。

「今日は日曜ぢやありませんよ。」

と隅の方から嘲弄を含めた聲で叫んだ者がある。

「日曜でない？　そんな事はありません、昨日は土曜でありました。土曜の翌日は日曜であります。」

牧師のいふ事が眞面目でをかしかつたので總笑ひになつてしまつた。日本語を解さぬ人々さへ、つい釣り込まれて笑つた。中には拍手喝采した者さへあつた。

牧師は眞赤になつて怒つて棒立ちに立つて居たが、隣席のB氏が理由を云つて聞かせたので、とつてつけた拙劣な笑顔になり、

「今のは取消します。」

といつて着席した。そこで又ドツト笑聲が湧き起つた。

此の夜船員の催しにかゝる演藝會があつた。落語浪花節劍舞のたぐひから俄づくりの舞臺の上で芝居の眞似もあつた。花道のせりふなかばに、揺り上げる波の動揺に足下を危ふくされて、狼狽て、足駄を脱ぎ捨てた侠客もあり、顏と手首丈は眞白に塗りながら、歩く度に極端な毛脛をあらはす娘形もあつた。三味線は寫眞結婚の連中の中に少しは心得たのが居て、自分から名乘つて出たのだといふ。暫時はそれを見てもゐたが、人いきれのはげしさとさまざまの物の臭ひの入りまじる堪へがたさに、笑ひさゞめく人の中を抜けて甲板に上つて行つた。

その夜は暗く風も吹き添ひ、やがて雨か嵐になりさうな模様に見えたが、蒸されるやうな船室から出て來た身は、熱した頰を吹く風の冷たさを嬉しみ、一人欄干に倚つて遥の下の海の波の騒

端に蒼白く碎けて散るのを見下して居た。

その時うしろに氣配がして、今夜は燈火もついてゐない喫煙室から出て來た人影があつた。ふりかへると夜目にも彼の外套の女であると知れた。

女はいきなり自分の方に進み寄り、

「今晩は。」

と英語で云ひながら近々と來て同じく欄干につかまつて海を見下してゐる。

それから、何處に行くのかとか、何を學ぶのかとか、ありふれた事を聞き初めたが、ふつつかな自分の英語ではたど〳〵しい返事より他にうけこたへする事は出來なかつた。

女は煙草を持つてるかと訊ねたが、自分が煙草は嗜まないと答へると、それには最早頓着せず、海に向いて小聲で何かうたひ出した。

肉付のいゝ肩を自分の肩に擦り寄せて女は足拍子を取りながらうたひ續けて居る。

「アラ彼處に星が。」

女は仰山に叫んだ。

「たつたひとつ。」

遠くの闇を指して自分にも見よと振向いたが、何處にそのたつた一つの星がきらめいて居るのか自分には見當がつかなかつた。

「彼處ですつたら。」

女はいきなり欄干に置いた自分の手を取つて高くかゝげた。

「あゝもう雲にかくれちやつた。」

とつぶやいたが、自分の手を放すとそのまゝ、喫煙室の横手の梯子口から船室の方に馳下りて行つてしまつた。

「ヒイ。」

と口笛が聞えて、船橋から若い三等運轉士が下りて來た。

「やつてますね。」

といひながら彼は自分の肩を叩いて、

「あいつ僕が來たもんだから逃げちまつた。どうしたんです、約定濟みですか。」

と笑ひかける。

「そんなんぢやありませんよ。下で芝居を見てゐたんですが、少し退屈して來たから此處で海を

見て居たら、彼の女もやつて來たんです。なんですか。あれやア怪しいんですか。」
自分は女の言葉つきから振舞ひから、ただの女で無いとは知つてゐたけれど、さう云つた。
「あれですか、あれやア非道いんです。」
と運轉士は面白さうに話し出した。
女が自身いふところによると、つい廿日ばかり前に香港からの船で神戸に來たが、今度は加奈陀のヴイクトリア迄行く、其處には亭主が待つてゐると云ふ。荷物は悉皆前の船で送つたと云ふが、それにしても着換へさへない全くの着たきりなので、食堂に顏を出さないのもその爲である。
「實際着のみ着のまゝなんだから、側によるとプンと臭ふつていひますよ。おまけに酒を飮むんですが、拂ひをしないものだから酒場給仕はこぼしてゐます。早くいゝ鳥をつかまへなくちやア全くやりきれないんでせう。どうですひとつ、慈善ですぜ。」
運轉士は外套の襟に顏を埋めて笑つたが、又聲をひそめて、
「しかしね、あの一人者の毛唐がゐませう、あれは確にひつかゝつてゐるんです。それからうちの船長も名代の好きなんだからどうも怪しいんですよ。」
とつけたした。

二人は其處で暫時無駄話をして居たが、水の上の夜の寒さが背迄も沁みて來るので、自分は間もなく運轉士を殘して船室に歸つた。

十月六日。

朝、食卓で牧師は再び立上り、

「今日こそは十時から日曜の集會を致しますからみなさんお集り下さい。」

と述べた。今日こそはのこそはが、ごつ／＼した訛の多い口から出たので一層をかしく響いた。これかあらぬか又ひとしきり面白づくの笑聲が室内に滿ちあふれた。

十時になると牧師は又室々を訪れて、

「會、始まります。」

と云つて廻つた。けれどもあんまり集る人もないらしかつた。ボオイが命を受けて再度觸れて來た。

自分はあまり教會に出入した事はないけれども、たま／＼山の手の物靜な町などを歩いてゐる時、教會の窓から鈍いオルガンの音のもれ來るのを聞けば、必ずうら悲しい心地になつた事など

思ひ出して、別にする事もない身だから行つてみる事にした。

集つて來たのは僅に十人ばかりで、その多くはあまり見かけた事のないカリフオルニアの野に働きに行くといふ青年であつた。

牧師の說教はいたづらに自分に不快を覺えしめた。頻におのれをほこらん事をのみつとめる彼は、說教の中にも屢々自分を引出してこれを飾る事に腐心してゐるのであつた。しかし自分が不快に思つたのは、恐らくはその說教の爲ではあるまいと思ふ。自分は彼の丈高き猫背と、油切つたる廣き額と、その言葉の訛と、聲を高くする度に唾を飛ばす唇と、その他一擧一動の粗野と不潔を憎んだのにちがひない。

然しながらドクトル夫人の彈くピアノにつれて人々のうたふ讚美歌は、あはれになつかしく胸に響いた。

夕日はかくれて　　みちははるけし
ゆく末いかにと　　おもひぞわづらふ
我主よ今宵を　　ともにゐまして
寂しきこの身を　　はぐくみたまへ

女客は別に來なかつたから、太い男聲のみのしかも畑に働く人々の鈍い聲で、歌の記憶のおぼろげな爲か、ピアノに伴ひ行く事に心を專にするためか、時に震へを帶びて不揃ひにうたはれるのが、かへつて時と處と且は自分の心持にふさはしいものであつた。聽いてゐる中に、いかにもイエス・キリストの足下にひざまづく信仰深かりし殉教者、邪惡なる心を知らぬ野邊の農夫等のひとへに神を賴む心を、此の人々の中に見出したやうに感じ、自分も知つてゐる此の讃美歌を小聲で合せてうたつた。

禮拜が終つて室々に歸つてからも自分はなんとなくしめやかな、神にでも人にでも賴り度い氣持で、思ひ出した讃美歌をきれぎれにうたつてゐた。

夕日はかくれて　みちははるけし

自分は迫り來る夕暮の雲の彼方をのぞんで心を震はして野路をたどりゆく旅人の姿を描いてゐた。その歌は自分が子供の頃、父の鄕里の資產家の娘だつたのが、たま〳〵家運衰へて落ぶれ果てた身の寄る方も無く、我家の小間使に住み込んでゐたのが、人氣無き折々に口吟んだものであつた。その頃ゐた女中で束髮に結つてゐたのはその女丈であつた。ナショナル・リイダアを取出して、可愛らしい子供が、犬や鴉と口をきいてゐる珍しい繪を見せながら、自分に讀んできかせ

たりした。なんといふ事もなく此の女のうたふ讃美歌をもの丶悲しく身にしみて忘れなかつた。
今朝食堂に集つた人々の質朴な姿も恐らく忘れる事はないであらう。彼の人々は果てしもない亞米利加の大平野に、鋤鍬をとり汗を流し泥にまみれて勞働しながら、賴り無き身に主の御惠（みめぐみ）をおもひ、廣野の中に讃美歌をうたふであらう。自分はそれらの景色を想像して寧ろ羨ましい氣もしたのである。自分も彼の地についてからは、日曜毎に教會に行かうと一人で考へて樂みに思つた。

十月七日。

昨夜（ゆうべ）からの風雨は全く暴風雨になつた。
橫濱出帆以來毎日々々灰色の空と水とにあけくれして日の目を見ることも稀だつたが、それは此の航路のならひだといふ事で、旣に十日近く凪續きの航海は珍しいと云はれて居たのに、夜前の怪しい空模樣はとう／＼暴風雨をもたらした。風は次第に吹きつのり、浪は船の橫腹に怖（おそろ）しい力を以て押迫り、搖り上げ搖り下すはげしさに、器物は狹い室（へや）の中を轉々し、食卓には木の枠（わく）が張り廻されたが、それでもなほ折ふしの凄じく大きい波のうねりに危（あやふ）く船體の傾く時、卓上の皿

やコップは滑走して、アレといふ間も無く枠を越え、冴えた響を立てゝ床の上に砕けて散る。昨夜迄は平氣で顔を出した人の多くも此の荒れには船醉ひに苦しみ初め、食卓に着く者は船員の他にあまりなかつた。

自分は秋の嵐を好む。荒れ狂ふ風の道筋のありとあらゆる物の動揺する瞬間の光景は、緊張した心地を吾々に與へる。高き樹々は枝ながらちぎれ飛ぶばかりに撓み、木の葉はその梢から容赦無くもぎ放されて靑きがまゝに亂れ散る。草の葉は花ながら靡き伏して土に埋れ、なほあきたらず雨風に虐げられる。その時路上を行く一切のものは、人も獸も、抗す可らざる自然の威壓の前に平生の生意氣な姿を忘れた不見目な有様で辛うじて歩み、家の內に在る者も息を殺してたゞ安全を祈る他に術を知らない。憎む可き俗衆を自分に替つて懲してくれるやうな痛快な心地を屢々經驗する。

やがて又嵐の過ぎた後の景色は、思ひ殘す事も無い明かなこゝろよさで、倒れた塀を起し倒れた垣を結び倒れた樹木をいたはる人足の働きさへ、洗ひ清められた世界に於けるやうな力に充ちたものに見え、彼處此處の潦に赤蜻蛉の群れ飛ぶのも飄逸な風情である。

海上の嵐はそれにも增して一層殘酷に容赦なく押迫る。遠くの空に接して居た水の果は見るに

よしなく、最も近く迫り來る波頭の他には頭の上の暗澹たる雲ばかりが見えた。若し萬一船が顚覆したらそれつきり嵐の後の海面には殆んど何も殘るまい。タアナアの奴隷船の繪に見るやうなさまぐ\の不思議な魚族は、忽ちに群り來て人間を爭ひ喰ふにちがひない。

自分は沈沒の光景をさへ想像したが、それでも些も恐怖を伴はず、若しもの事があつたとしても、沈んで行く自分を客觀的に見守つて居られるやうな氣持でゐた。千島艦畝傍艦ノルマントンなど自分が子供心に深く刻まれてゐた話、近くはタイタニックの難船の悲壯な事實に感激した心から、暴風雨の中に沈沒するのは、あまりに光景が壯大で、びくぐ\するよりも寧ろ緊張した平靜な心持で死んで行くにちがひないと思はれた。

喫煙室に上つて行つても、日頃其處にへぼ將棋をさし、ざる碁をうち、或は拙劣な駄洒落をよろこんだ人々の姿は見えず、聞えるものは甲板を打つ波濤のしぶきと、雨の音と、波と波との相打つ叫びと、帆柱帆綱煙突にはためき騷ぐ風の聲と、その間に悲しげな船の警笛と、船體を構成する木材のきしむ響とが一つに合した物凄いうなりの他にはなんにもなかつた。

何から何迄壯快だ。自分は誰もゐないうす暗いその室内に、出帆以來時々開いて見た夏目漱石先生の「彼岸過ぎまで」を讀んだ。

十月八日。

どうしたものか船に來てからは、怠惰を樂む他に全く根氣がなくなつて、本を讀むのも億劫になつてしまつた。

出發の日に新橋に見送つてくれた或人が、夏目先生の「彼岸過ぎまで」と何某山人著「維新の豪傑」といふ本を、航海中のおなぐさみにと云つてくれた。自分は夏目先生の小説は悉皆讀んだけれども、一回宛新聞に出る小説を毎朝讀む事は、近年全く出來なくなつたので、單行本にして出版される迄は少しも目に觸れないのであつた。今度の「彼岸過ぎまで」も友だちがしきりに感服して、昨日のところは斯う、今日の話はこれ〳〵と屢々話してくれたけれど、自分では遂に一行も讀まないで完結の日を待つてゐた。

その本が本屋の店頭に並んだのは、出發前の忙しく心の落着かぬ時だつたので、そんな時に讀んでは作者に對しても濟まないし、自分にも濟まない氣がして、旅鞄の中に入れて旅中讀まうかと考へた。けれども、それより先に豫て幾度と云ふ數を知らぬ程繰返して讀んだ本、たとへば泉鏡花先生、永井荷風先生、島崎藤村先生の作品の如き、何時も手もとに置いて到る處で欲するが

まゝに讀み度いと思ふものが澤山あり過ぎて、荷物がかさむから、いつそ本らしい本は一冊も持つて行かない方が思ひ切りがよくていゝと決めてしまつた。愛讀書の中のどれとどれを持つて行くかを決める事が自分には出來なかつたのだ。ひとつを擇んで他を殘すと、殘す方の本に對して氣の濟まないやうな感情が起るのであつた。それで「彼岸過ぎまで」丈を持つて行くのは、まだこの本は讀まないからと云ふ辯解を反對する心にむかつて與へる事が出來るのであつたが、讀了後これからの長い旅中常に身邊に置くとすれば、矢張り、他の本に對して公平を缺くやうに思はれて氣持が惡いのであつた。とう〳〵一頁も讀まぬ「彼岸過ぎまで」は本箱の中に納めてしまつた。五年の後、六年の後、いつか日本に歸つて來た時先づ第一に讀む本として記憶する事に決めたのである。

それで自分の鞄の中には本といふ本は一冊も入れなかつたところ、右の「彼岸過ぎまで」と「維新の豪傑」といふ面白い取合せの二冊丈が、おもひがけない賜物として手さげの中に入(はい)つて來た。

自分は好きな本を讀むには非道く我儘だつた。第一に自分の居間で、用ゐ馴れた机の上に讀まうと思ふ本以外の一切の物を置かず、それにむかつて膝を正して一人靜に讀まなくては嬉しくなかつた。人聲のする所では、本を讀む事はどうしても出來なかつた。それから又大概の本は、そ

つ本を本屋から求めて來た日に讀まないと氣が濟まなかつた。讀み初めたらおしまひ迄一息に讀み續けないでは氣が濟まなかつた。その間に何かの事故で中止しなければならない場合には自分のその本に對する評價は著しく傷けられた。

かゝる我儘に馴れた讀書は、船中に來てからは全く出來なくなつた。室には同室の客がゐるばかりでなく、せゝこましい所に鞄もあり手さげもあり、いろ／＼の雜用品のちらかるまゝにちらかつてゐる中では、氣が落着かなくて駄目である。喫煙室には人々が常に談笑してゐて靜に本を讀む一人を許さない。食堂は食事時以外は船内圖書館だつたが、がらんとして廣過ぎる上に、女客が下手なピアノを鳴したりするので到底長くは安靜でなかつた。自分は甲板の吹きさらしに椅子を据ゑて「彼岸過ぎまで」の第一頁を開いたが、船端を打つ波の音にも、船底に絶間なく響く機關の音にも、騒ぎやすき心は落つきを失つて、殆んど毎日「彼岸過ぎまで」を手にしながら、一息に讀み切る事は思ひもよらず、最初の十頁ばかりを繰返しては根氣がなくなつてやめてしまふのであつた。

それが暴風雨の最中には、誰しも船室に閉籠つてゐて、室外に出て來ないので、喫煙室は物靜にて、窓を閉してあるからうす暗く、それが心を落つけて久しぶりでゆつくりと一字々々を味ひなが

ら、直に「彼岸過ぎまで」を讀了した。自分は自分の好む本ならば大概は直ぐと續けて讀み直すのである。二度目はきつと初めよりも面白く、三度目は必ず二度目よりも興味が深くなるのである。それで此の作ももう一度續けて讀んだ。

俄に讀書慾が旺盛になつて來た。船内圖書館に行つて、あれこれと探したあげく、「水滸傳」を選んで又喫煙室に戻つた。

「水滸傳」は曾てひどく愛誦した時代があつた。あれは中學の二年頃だつたが、友だちといへばいたづらつ子ばかりだつた中にも抜んでた一人が居た。彼はヅベの中のヅベであつた。「水滸傳」は彼の愛讀書だつた。初めは兄さんから借りて讀んだのださうだ。一度讀み初めたら面白くて面白くてたまらなくなり、讀めば讀む程痛快になつて來る。しまひには興奮の極兄さんは竹刀を持ち、彼はあり合せの丸太棒を持ち出して、庭の中でなぐりあひを初めたといふのであつた。翌日學校に來て、

「兄貴の奴、ほんとになぐりやがつた。」

といつて、紫色に腫れ上つた二の腕を出してペロペロなめてゐた。彼はその頃既に十五貫目を遙に越えた偉大なる體格だつたが、自ら花和尚魯智深と號した。

自分は彼にすゝめられて讀んだのであつた。なんでも浪漫的な傳説や物語にあくがれてゐた頃で、自分も夢中になつてしまつた。それからは、

「あいつにも讀ませよう。」

「あんな奴に讀ませちやもつたいない。」

などと云つて、單純に威張つたものであつた。

二人とも落第坊主で、愈々「水滸傳」の豪傑を崇拜した。その後自分はぐうたらに人のうしろにくつゝいて、カンニングをしたりなんかしながら中學を卒業したが、魯智深は代數や幾何が面倒臭くなつて退學してしまつた。

久しぶりで「水滸傳」を手にして、かなり遠くなつた昔の事なども思ひ出した。

何を讀んでも面白い、些も責任を感じず、強ひられる心を知らずに本を讀むのは嬉しい事の限りである。

想ふに自分は此の日頃、知らず識らずの間に、競爭的に本を讀んでゐたやうである。碌に知りもしない外國の作家の評論を書いたり、碌に讀めもしない外國の作家の作品を飜譯したりする人を嘲りながら、自分も同じ道を踏んでゐたのだ。新刊書を讀む事は一つの勞働だつたらしい。人

が何それの本を讀んだと聞くと自分も讀まなくてはならないと思ふ賤民の心持の起るのを止めかねた。

殊に自分自身が小說戲曲を書き初めてからは、一層卑しい根性になつて來た事を否まぬ。處女作第二の作などは確に自分の心に忠實に、胸に湧くがまゝの感情をいつくしみつゝ、只管自分の技巧の思ふに任せぬ事に苦しんで書いた。それはもとより幼稚なものにはちがひないけれども、拔く可らざる眞實性のたど〳〵しい文字の間に行きわたつてゐる事を自分は信じてゐる。しかし第三の作第四の作、殊に自分の名の上に新進作家などゝ冠せられるやうになつてからの作品に至つては、鼻持もならないもので、自分で讀み返す氣さへ起らない。それも書いてゐる當時は別段やましい氣があるとも思はなかつたが、書き終つた後、印刷されて雜誌に出た後、時日がたつて心が冷たくなつた後に、自分は評判を氣にしながら、流行を氣にしながら、書いてゐた自分のみつともない姿を想ひ浮べて拒む事が出來なかつた。いやな事だと思ひながら又次の作の筆を執る。なんとなく常に作品を發表して、人に忘れられたくないと云ふ氣や、今度は評判を取らうと云ふ根性が強く自分を支配して來るのであつた。

讀書の態度も之と同じだつた。人の讀む本を讀まないと、文壇の流行に遲れるといふ念が常に

あつたにちがひない。

何等かの關係で結びついたものは、その仲間を互に持上げ合ひ、他をけなすにも力を併せながら、その實仲間同志も裡面では競爭心に目の色をかへてゐるらしく思はれる所謂文壇を思はしく思ふ前に、自分は自分の態度に對して慊焉たるものがあつた。

原稿紙をひろげてペンを執る事も日課になり、新刊書を人に先んじて讀む事も日課になつた。それと氣のついた時、自分は全く自分の心を破壞してゐたと思つて、後戻りをするのに努力したが、一度踏入れた足はなか／＼その泥濘から拔き難いのであつた。一昨日迄も昨日迄も自分はその日課に追はれてゐたのだつた。

しかし今、自分は單純なよろこびを以て「水滸傳」を讀んで慰む心に近づいてゐる。それは少なくとも、血眼になつて歐洲の作家の作品を丸善の二階にあさる根性よりも、遙かになつかしいものであつた。

十月九日。

雨は既にやみ、風はなほ帆柱にはげしく鳴り騒いでゐるけれども、昨日一昨日に比べては力が

弱つて來て、船の動搖もさまで非道くはなくなつた。
此の朝も讀み續きの「水滸傳」を讀んだ。午後、それを圖書室に返しに行つたら、其處には醫師夫人と傾斜女史が二人で向きあつて小說を讀んでゐた。
「今日は餘程靜になりましたやうですね、昨日一昨日はもうどうなる事かと思つてゐました。」
夫人はまだ蒼い顏をしながら、有名な或作者の長篇小說を讀んでゐた。
「大層御勉强ですね。」
自分は話し掛けられたお愛想にかういふと、待構へてゐた相手を見付たとばかり元氣になつて、
「あんまり室に籠つてゐると頭痛がしますから小說でも讀まうと思つたんですけれど、此の頃の小說はほんとにつまりませんねえ。」
と云ひながらその本をさもつまらなさうに伏せた。
「貴方のは何です。」
「つまらない雜誌。」
と云つて女史が持上げて見せたのは、自分が時々小說を出して貰ふ雜誌の、しかも自分の小說の載つてゐる月のものであつた。

「お友だちがくれたから持つて來ましたけれど、つまりませんよ。」

女史は指のさきをなめながら、掛値なしにつまらなさうに一枚々々頁をめくつてゐたが、

「ごらんなさらない。」

と云ひながら自分の方に押して寄越した。

自分は變な氣持でその第一頁を開いた。自分の小說「噂」がその卷頭にあつた。

「今それを半分ばかり讀みましたがつまりませんよ。あなたごらんなさるなら持つて行つてもよござんす。どうせいらないんですから。」

自分はその場の調子から愉快ないたづらな氣になつて來た。

「此の作者は上手なんですか。あんまり聞かない名ですね。」

「エー私もそんな人ちつとも知りませんでした。私隨分小說は好きで、雜誌もいろ／＼讀むんですけれど。どうせへつぽこなんでせう。」

若い女の癖に亂暴な言葉を使ふものだ。それは自分が書いたのだと云つたら、どんな顏をするだらうと思つたが、それはやめた。たゞ、いたづらは一層つのつて行くのであつた。

「貴方がほんとにその雜誌を捨てゝしまふつもりなら私に下さいませんか。讀んだ後でも記念に

取つて置きませう。」

「エヽよござんすとも。」

恰も紙屑にひとしく雜誌は自分に與へられた。

「お願ひついでに此處のところに貴方の姓名を書いて頂きませうか。」

自分は横着にかまへて云つたが、女はなんにも知らず、自分の渡すペンを執つて雜誌の表紙に「記念のため」と書き、その横に此方の名を、その下に女自身の名をはゞかりもなく書いてくれた。醫師夫人は想ひ掛けない事だといふ顏で二人を眺めてゐたが、フト自分と目を見合せると無意味に笑つてうなづいた。

自分は雜誌を持つて室に歸つたが、室内にはA氏を訪れて牧師がさかんにしやべつてゐるので、そのまゝ通り過ぎて喫煙室に行つた。

あゝいふ女がこんな片寄つた雜誌を、たとへ友だちがくれたにしても持つてゐたのは取合せが面白い。表紙に書いた文字も單に姓名丈に過ぎないけれど、いかにも神田本郷邊のうす汚ない田舎出の女學生の書きさうなものであつた。此方の名の下に「の君にまゐらす」としたのもをかしく思はれた。

貞こおける時にいちいち痛さをなめる躾はよい、ある躾だけれど、若い女の身でよそはいゝのにと思つては、日頃から友たちの中にも同じ躾の男があつて、目の前でやられると小汚たくて困つたが、今度の雑誌を無闇に汚ならしく感じられて來た。直に破いて捨てゝしまはうと思つたが、なんとなく心引かれて、自分の作丈を一度讀み返した。これから雨水のたまつてゐる甲板に出て吹き荒ぶ風の中で、されぐ〳〵に引裂く、そばから海を目がけて投げた。雑誌の小片は強風に飛んで山なす波の上に落ちてもまれて流れて行つた。非常に愉快な心持だつた。

波はなほ高く〳〵かさなりあつては猛烈に不規則に碎けた。その波頭に乗る時、船は左右に頭を振り、その波と波との間になる時、船の所在は波よりも低かつた。

しかし雲はちぎれ飛ぶ雲の間々に、見えてはかくれつゝ細かい星が寒く輝き初めた。

十月十日。

雲は全く遠き去つて、名殘りの海は次第々々におだやかになつてゆく。雲のはびこる空だから、ところ〳〵に青空の彼方の浮び出すところから、弱い日光は海面を珍しい碧色に照してゐた。流れて行く芥を追つて海鳥の群は、けたゝましく啼き叫びながら狂ふやうに餌をあさつてゐる。

うす暗く人氣の無かつた喫煙室は、室内にとお籠つてゐた人々に又新しく賑はひ、それらは昨日の恐怖を忘れて晴れやかな笑ひ聲をあげてゐる。同時に自分の讀書は又妨げられてしまつた。暴風雨の後の壯快な氣持で、自分は終日甲板に日を暮した。

夜は晴渡つた空に降りしきるまで星屑がまたゝき、秋の夜にのみ限られた冴えた空氣の寂しさを身にしみて思はせるのであつた。

夕食後、又ひとしきり賑はつてゐる喫煙室を他所にして、一人空と海とに心を移してゐた。爪立つて欄干の外に顏を出し、船の腹を抉つて流れる潮流を見れば、夜の光にうす蒼く照らされる底知れぬ水は自分を水底に誘ふやうに思はれる。ぢつと見詰てゐると、自分の存在を忘れて行く不安に襲はれて首を引込めるが、又何となく凄い波の色をのぞいてみる氣になるのである。

自分は全く子供の時から海が好きだつた。此の船に來てからも、たゞ海を見てゐる丈でも半日や一日は飽きずに暮せるのであつた。朝は朝の、夕暮は夕暮の、夜は夜の、それ〳〵異なる海を毎日眺めて眺めあきなかつた。

「僕は船乘になりたいと思ひます。」

と自分はよく船員に話した。

「それや呑氣は呑氣ですが、毎日同じ海ばかり見て暮すのもあきあきしますよ。殊に將來の事を考へてごらんなさい、船乘なんか世の中に遠くなつてしまつて捨場もありやあしません。」

と彼等は答へた。

その世の中に遠くなるのが何よりも嬉しいのではないかなどゝ無責任な事を考へながら、自分は何時迄も何時迄も海の景色に親しさを覺えるのであつた。

今宵も人に妨げられなかつたなら、自分は夜更迄も其處に佇んでゐたにちがひない。けれども間も無く喫煙室の戸口から顏を出したA氏に呼ばれたので、ほしいまゝなる空想は途絶えてしまつた。

「今夜はひとつ落語でも聽かうと思ふんですが贊成しませんか。此間の演藝會の時なか／＼うまい奴がゐたから、もう一度やらして見ようと思ふんです。ナアニ向ふだつて大よろこびさ。贊成なら應分の寄附を願ひます。」

と云つて目の前につきつけた帽子の中には既に若干の銀貨が光つてゐた。

室内には多勢(おほぜい)集つてゐて、無闇にはしやいでゐる人もあつた。其處へ落語をやるといふ男が羽織を引掛けて出て來た。いかにも得意さうに「三枚起請」をやり出した。もとより速記本かなんか

で覺え込んだのだから、思ひきつてあくどくうるさく下手だつたが、度をはづした笑ひ聲は聽衆の間に絕えず起つた。お凸で出つ齒の顏つき丈は前座なみに出來上つてるその男が面目をほどこして引さがると、次は自分達の食卓のボオイが薩摩琵琶を持つてかはりあつた。

此のボオイはすれつからしの連中に似ず、何時もぼんやりと何か考へ事でもしてゐるやうに見え、時々は英語讀本などを讀んでゐるのであつた。船員の話によると彼は捨兒であつた。拾つて育てゝくれた親にも幼くして死別れたが、生みの親は何處にか生きてゐるものか、又は死んでしまつたものか、名前も知らないのだから解らう筈はないのであつた。

「何時か何處かで逢へるやうな氣がします。」

問はれると身の上を語つて彼はかう答へるといふ。

その話を聞いてから、自分はそのボオイに對して特別の同情を持つやうになつてゐた。彼は白地のかすりの單衣に膝つきりの袴をはいてゐたが、琵琶を抱へて目をつぶると、色の白い子供らしい顏を少し仰向けにしてうたひ出した。うたは城山だ。琵琶は好きではないけれども、語手に同情を持つてゐる爲に靜肅に聽いた。

彼の聲は低く寂しく震へ易かつた。高く調子を張る時は殊に震へを帶び、且かすれ勝であつた。

それを聞いてゐると胸の迫るやうな息苦しさを覺えて來る。無骨に野蠻な樂器さへ孤兒(みなしご)の手に抱へられては、たよりない哀音を傳へるのである。自分はさま〴〵に此男の哀れな生ひ立ちと、それからのなりゆきを想ひながら涙を誘はれるやうな心地になつてゐた。

この時突然室(へや)の一隅から、

「ーウッ。」

と怒鳴つたものがある。人々は期待しなかつた此の掛聲に驚いて振り向いたが、壁に背をもたせて腕組みしたまゝ一心に聽いてゐたのは、つひぞ喫煙室に顏も出さず、人々と交らず無言で押通してゐるH氏であつた。再び顏を仰向けに眼をつぶり、感慨に堪へぬらしい樣子に見えた。鹿兒島の人と聞けば、城山に死んだ隼人(はやと)の一族か、或は自分自身その頃は血氣の少年として叛軍について刀を振つた一人ではあるまいか。自分は彼の凄愴な風采からそんな事を想つた。

やがて曲が終つて、おきまりの拍手の中にボオイは羞しさうにおじぎをしてまかりさがつたが、自分はH氏の態度になほ注意を集めてゐた。彼は人に和して拍手する事も無く、暫時(しばし)は默然としてゐたが、やがて姿勢を崩すと、誰にともなく頭を下げて忽ち室外に立去つてしまつた。その瞬間に自分は彼の凄い目の中に涙の露の光るのを感じた。それは自分の想像が生んだ幻影であつた

かもしれないけれど、自分は確に彼は感激の極涙を催してゐたのだと信じたい。

續いて又先刻の男が出て來て再び落語を初めたが、自分はひそかに室外に去つて又海に親しみに行つた。

十月十一日。

明日は愈々加奈陀のヴイクトリアに、明後日はシアトルに着く豫定なので、横濱を出たその日から早くも陸地を戀しがつてゐた船客は、何れも悦びを顏に浮べて甲板に集つてゐた。

穩かに凪ぎ渡つた海は今日も曇つてはゐるけれど、風はさまで寒くないので、仲たがひの牧師もＳ氏も共に談笑しながら散歩してゐた。

久しぶりで甲板撞球戲の音も終日聞えた。

人々は二人寄れば必ず航海の無事だつた事を祝し合ひ、よき道連を得て二週日を樂しく過した事を感謝し合つてゐた。

「明日は土が踏めます。」

と云つて嬉しさうに靴のかゝとで甲板をコツ／＼いはせてゐる人もあつた。

支那人はそんな事には頓着せず、引續いて博奕をうつてゐる。

寫眞結婚の女達は陸地の既に近い事を聞いて、まだ見ぬ山影を求めてゐる。

「あゝいふ連中は愈々明日はシアトルだと云ふ前の晩なんか、嬉しいんだか怖いんだか、一睡も出來ないんです。その爲に船醫が催眠劑をみんなに呑ませて廻る事になつてゐます。」

と、船長が話した。船が波止場に横づけになると、其處には花婿が各自の花嫁の寫眞を手にして、どれが自分のたらうと一心に甲板を見上げ、船の上では女達が各自の夫になる男を群衆の中に見出さうと手に手に男の寫眞を持つて、あれかこれかと引比べるのださうだ。自分などには想像も出來ない程の事だけれど、さういふ風にしても男と女とは夫婦になれるのだから面白い。

自分は此の二週間毎日々々眺め暮した海に別れともない心であつた。どうかしてもつと長く海の上に日を送りたい。見果てぬ迄廣い大陸に言葉もよくは通じない身で、輕蔑されながら暮すのは如何考へても嬉しくない。航海の終りに近づいた事を思ふと、なさけない氣がするのであつた。

夕食後の暫時は航海中最も賑かな時であつたが、そろ／＼荷造りにとりかゝる人もあつて、稍々時たてば喫煙室は人氣少なくなつてしまつた。その後で三四人、多少はいける連中の發意で別れの宴が始まつた。

船員側からは酒豪をもつて聞えた機關長を頭に二三人來て加つた。麥酒、葡萄酒、ヴェルモット、ウイスキイとちやんぽんに出たらめに飲んではワアツ〳〵と騷ぐので、思はずしらず量を過して一人二人順々に倒れて行つた。

自分はこの夏、減食に續いて斷食を實行してみた事があつた。ほんとにちよつとの間だつたけれど、體量は二貫目も減じ、自分の指でつまんでみるとつまゝれた肉に彈力のなくなつてゐるのがわかつた。その間に又無闇に酒を飲んだが、ふだんとは違つて少量の酒でも腸に沁み通り、忽ちグル〳〵體の中を廻り終つたと思ふともう堪へるひまもなくしたゝかに吐くのであつた。

それ迄といふものは自分はあまり酒に苦しんだ經驗がなかつたので、多人數の酒の席で見苦しく醉ひつぶれては、ところ構はず小間物屋になる男を見ると、それが今の今迄話を合せてゐた友だちだつたにしても、淺ましく憎らしく張飛ばしたく思はれて來るのであつた。殊に集つた人數の過半が前後を忘れて來る時に、部屋の隅に冷くなつた盃を前にして坐つてゐる自分があぢきなくなつて、酒宴は厭だと思ふ心ばかりが強くなるのであつた。然るに斷食に弱つた自分が酒に苦しんで吐く段になつて見たら、飲んだ丈の酒を無理にも吐き終つた時の疲れた心地よさは比べるものもなく、吐く時の苦しさなどは忘れて、盃を手にすれば今日も亦吐いてやらうと必ず思ふや

うた病的な傾向を帯びて来た。

酔覺めの水の味は月並に誰しも口にするところであるが、吐いた後の水の味には遠く及ばないと思つた。酒を飲む事よりも飲んで吐く事が嬉しくなり、苦しみもがいてもどした後で、グツタリしたからだを寄せ掛けた窓の外の遥かなる夜の空を眺めた時、きらめく星の光なども常とはかはつて美しく見える事さへ忘れなかつた。輕い發熱にうと／＼して、ふと障子の紙のうす黄色く見える夕方などに疲れた心地よさを覺えるのと同じやうな次第であつた。時と場所とに構はず、今にして思へば不潔極まる醜體だが、自分はそれを求めて行ふやうな誘惑を感じたのである。

それから當分の中といふものは次第に身體は回復して行つたにも拘らず、酒を飲めば必ず吐く癖がついてしまつて、その時は既に平生の心持に歸つてゐた自分は屢々なさけないおもひをした。船に來てからは酒好きの船員に誘はれるまゝ盃を手にしたが、控へ目控へ目と心掛けてゐた上身體も健全になつてゐたから別段醉拂ふ事もなかつたので、自分は安心して此の別れの宴につらなつたのであつた。

一人二人崩れ初めると、ふだんは大人ぶつて態面を保持しようとしてゐる者も取亂してはいかがはしい流行唄などをうたふやうになり行く、その經過を眺めてゐる丈の餘裕が自分にはあつた。

矢張り醉拂ひは好ましくない、顏面筋肉の助平つたらしくなつて行くのを見ると酒の味は濁つて來る。

それでも負けない氣になつて飮んでゐたが、そのうちに自分も酒の臭ひが鼻について來た。盃を取る度に鼻に迫る臭ひの強くなるのを知つてこれは危ないと思つたが、その時はもう旣に遲かつた。自分は人々が何か一齊に呼び掛けるのを後にして、早く正體のなくなつた連中の間を拔けて甲板に出て欄干につかまると殆んど同時に堪へ性も無く吐き初めた。

矢張り吐くのはいゝ氣持だつた。夜露を吹く秋らしく銳い風は、正體もない醉拂ひには心地よく感じられ、クラ〳〵とめくるめく目には船端の波は朦朧として遙かなるものであつた。自分は殘りなく吐いて、又してもその心地よさを思つたのである。

さうして熱した額を冷めたい鐵の欄干に押つけて佇んでゐた時は、些かの悔も無かつた。

フト後にかすかな口笛が聞えたので億劫にふりかへると、夜目にも彼の獨逸の女が通りすがりに半巾を振りながら、梯子口に消えて行つた。

十月十二日。

昨夜の飲み過ぎですつかり疲れてしまひ、目は覺めてゐながらうつらうつらしてゐた。A氏に催促されて床を離れたのは既に正午近くだつた。

「もうヴィクトリアです。直ぐ檢疫官が來るさうだから起きなくちやあいけない。」

云はれて頭を持ちあげ、圓窓のとばりを引くと、晴れわたつた春のやうな海の霞の中を無數の鷗が亂れ飛んでゐるのが見えた。

甲板に出て見ると船は港外に泊つてゐるのであつた。手近に見える岬は霞みながらも、この中腹に立つ百姓家らしい小家小家の風車迄はつきりと見え、あたりの山々は既に紅葉して蒼い空蒼い水の間に目覺しく輝いてゐる。

一目見た景色は全く夢であつた。油繪や繪本から想像して幼年の心に描いたパラダイスの景色が、ほんとに自分の目の前にあつた。山の姿も紅葉の色も空氣の肌觸りも今日迄知らなかつた新鮮なものであつた。

恍惚として船の上から見てゐると、その岬のかげから加奈陀の旗を掲げた小蒸汽が現はれて此方の船に近づいて來た。

船客は一列に甲板に並んで檢疫官の來るのを待つてゐた。横濱を出た日から船醉ひに惱みつゞ

けて起出る事も出來なかつた女も、亂れた姿をして黃色い顏をさらしてゐる。

H氏の妻といふのも自分は此時初めて見た。四十女の平べつたい無智な顏つきが寢亂れたままで、佇むにも堪へぬらしく屢々額を押へてはうつむくのを、H氏は寄添つて無言で氣づかひいたはるのである。一生涯つれ添ふ女房として、肉體を任せる事、飯を炊く事、雜巾がけをする事に絕對に從順である他には何事にも氣のつかないらしい女を連れて、メキシコの暑い野原を耕しに行くのかと思ふと他人事ながら自分の心は暗くなる。かういふ女房を持つ人を哀れまないではゐられない。

そのうちに檢疫官は吾々の前に現はれて、手輕に形式ばかりの眼疾檢査をしたが、彼の支那の老爺の妻と聞く若い美人はいまだに姿を見せなかつた。その爲に檢疫官は事務長とつれだつて、その室に押かけて行つた。

船は間も無くヴイクトリアの波止場にゆるぎなく橫づけになつた。其處に航海の終る客は荷物を取りまとめて嬉しげに上陸して行くのである。

外人は悉皆下りた。中に彼の獨逸の女は全く荷物らしい荷物もなく、ちひさな手鞄をぶらぶらさせながら、例の着たままの外套姿で、さつさと町の方に步いて行つた。

船底に博奕をうちつづけて來た一群の支那人も、異様な荷物をしよへる丈しよつて、ぞろぞろ上陸して行つた。

支那の老爺も若き妻と從者らしい少年を從へて船室を出て來た。若き妻は丸顔の小柄な、いかにも支那の金持の寢室にふさはしい姿だつた。しめつけた足の運びもたどたどしく、船と陸とにかけ渡した船梯子を危なさうに踏んで行くのを、人々は好奇の目を以て見送つた。少年はその後(うしろ)から手に鳥籠を提げてついて行つた。朱塗の籠の中には此の航海の間もその女の室の窓に置かれてゐたのであらう、青い鸚哥(いんこ)が靜に棲木(とまりぎ)にとまつてゐた。

午後、船客は皆上陸許可證を持つて市中見物に出かけるので、自分もその人々の後(あと)からついて行つた。二人三人とつれ立つて行く中には、思ひ切つて洋裝にはしたもののまだ帽子は買はないので日本風の大きな廂髮で歩いて行く女もあり、風邪氣だといふ傾斜女史は頸に半巾(ハンケチ)を巻き、わきあけに手をつつこみながら海老茶の袴に被布を着て臆面もなく行くのである。まだ海岸の人通りの少ないところながら、道行く人のすべてが物珍しさうにふりかへつて行くので自分は一足一足とゆるく歩いて道づれになるのを避けようと努めた。

日光は遮るものもない青空に高く輝き、乾燥した空氣はすべての物の形を明瞭に、すべての色

彩を鮮明に描いて見せる。九月二十八日、横濱を出た日から殆んど日光を浴びた事もなく、あけくれ灰色に曇つた空と、その下に鈍く光る海の他には目にふれるものも無かつた航海を終つて來た自分には、その強烈な色彩が肉體に押迫る力を以て展開された。空も海もあく迄青く、濱邊の砂は銀色に、貝殼は反射して金色に輝き、岬の切岸は黄色く、海に近い家々の芝生は濃緑に、並木の樹木の葉は早く紅葉して黄に紅に燃えるのである。手輕な木造のいかにも新開地らしい其處らの家のペンキの色も鮮かに、花園には秋草の花が咲亂れその間を目の覺めるやうな單純な色の光り輝く日傘をさして逍遙する女の雪白の衣服も、すべてくつきりと浮んで見える。

此の夏と秋とが同時に天地を覆つてゐる不思議に強烈な景色が目に痛き迄鋭く映じた。歩けば汗の出る程の日あたりをよけて木かげに入ると、脆く散り敷いた落葉の下に土は冷く秋を含んで涼しい風は皮膚に痛い。

兎にも角にも日本を出る時はまだ青々とした夏の名殘りに、山の手の庭は暗く茂つてゐたのに、それから全く水ばかり見て暮した自分の目の前に忽ち秋の迫つて來たのは、著しく感覺を驚かす事であつた。久しぶりで晴れわたつた景色に接して、胸の底迄風の吹き入る心地に屢々深く呼吸したが、此の國の空氣は乾いてゐて咽喉を通る時物のつかへる氣持がする。

兎角する間に先立ちになつてゐた連中の姿は町の方へ消えてしまつたので、自分は一人靜に氣ままな道を擇んで歩いて行く事にきめた。

ヴィクトリアの町は賑かに、車馬の往來がしげく思はれるので、その入口を覗いたばかりで引かへし、再び海岸の人氣少なく靜な住居のうちつづくほとりをあてどなく歩き廻つた。楓樹の葉は脆く、あるとしもない風に一葉二葉づつ止度なく散りかかり、何處ともなく花に群る羽虫のうなりの微かに聞えて來る靜けさであつた。ただ瞬間に通り過ぎてしまふばかりでも、忘れぬ印象を殘す風情ある景色が多かつた。しかも心に忘れられぬ束の間の景色は何れも色彩に富む繪であつた。

或家の窓からは洋琴の音が輕く流れて來た。ふと見ると、引きしぼつた白いカアテンの間から若い娘の細い手のいそがしく鍵盤の上を走るのが見えた。

或家のポオチには夏らしい籐椅子に長々と寢て、赤い表紙の小形の本を讀んでゐる女がゐた。

或家のヴェランダには日本の吉野すだれがかかり、その日かげに紅茶の卓を圍む女の一群があつた。

或家の戸口には白紫紅さまざまの花の色の咲きまじるスウイイト・ピイがまつはり、或家はそ

の窓ばかりを殘して、高い三階迄も蔓薔薇のはふがままに這はせ、そのちひさく赤い花は今をさかりに咲いてゐる。

長い航海の間に弱くなつた自分の足は著しく疲れて來た。自分はその豐富なる四圍の色彩を長く見るには堪へぬ心地で、海邊の低い砂山に休息の場所を求めて橫たはり、稅關らしい建物の屋根の向ふに林立する帆柱の間に自分の乘つて來た船の旗の風に飜へるのを懷かしく眺めた。細く襞をつくるさざ波に覆はれた海の上の靑空はほんとに靑く澄み渡り、遙に浮雲の流れて行く港外の沖に一筋のぼる船の煙も、すべての景色が秋であつた。自分は初めて故鄕の父母に遠い事を思つたのである。

殆んど半日其處に動かず寢轉んでゐたが、傾き初めた今日の日は次第に港の向ふ側の岬のかげに沈んで行き、湖よりも平らな海には何處からともなく夕靄が迫つて來る。その中に碇を下したかかり船のマストに赤く滲んだ灯が上つて行く。風は寒く身に沁み初め、町の方角は燈火の光を映してほのあかるく、物の遠音が空氣を震はして聞えて來る。自分は心細い氣持で船に歸つた。

夜、若い二人の船員に誘はれて又上陸した。此町には日本人もかなり多く集つてゐるから日本の料理屋もあるに違ひなく、其處で別れの酒を酌まうといふのであつた。

町中は夜も人足繁く、彼處此處の活動寫眞の入口に燈火の巷をゆく人の大半が流れ込むやうに思はれた。或小屋の前には「日本武士道の華、將軍乃木の切腹」といふ題が高く掲げてあつた。好奇心に驅られて入つてみると、ありふれた映畫の間に、英國皇帝戴冠式の寫眞で、それに參列した時の將軍の姿が一瞬間映し出されたばかりだつた。

同行の一人は常に英雄崇拜を口にし殊に乃木將軍の切腹を單純に熱心に讃美する男だつたから、其看板の仰々しさにひきかへてそれつきりのものだつたにも拘らず非道く興奮して、

「こんなところでまで乃木さんの寫眞を見るといふのは愉快ぢやあないですか。」

と云つては吾々の腕をつかんで振つた。

活動寫眞を出て再び町筋を歩きながら、二三人に日本の料理屋の所在を訊いたが誰も知らないと答へて行き過ぎた。とうとうあきらめて何處かカフヱにでも入らうかと云つてると、恰も一方の横町から出て來たのがたしかに日本人だつた。一人は直ぐとかけ寄つてその男に尋ねると、

「料理屋と云つて特別に料理屋らしい家はありませんが、大澤といふ旅館があります。そこなら貴方方がいらつしやつても立派なものです。」

と若い男は叮嚀な態度でその家に行く道まで敎へてくれた。

間も無く自分達は或横町の狹い露路口に、赤地に白く大澤と書いた軒燈を認めた。露路の奧は眞暗で、なんとなく物の煮える匂ひが漂つてゐたが、夜目にもむさくるしいその露路內に立派な旅館があらうとは到底想像出來なかつた。確に聞いて來た通り間違ひはない筈だから、兎に角入つてみる事にきめて三人は暗闇をどしどし進んで行つた。五六間も行くと直ぐに何かの倉庫らしい煉瓦造りの建物に突當つて進む事は出來なくなり、あたりには何處にも家の入口らしいものもないのである。三人は鼻を突き合せて佇んだ。

しかし物音は直ぐ左側の物置小屋らしい重い板戸の中から騷しく聞えて來る。その間には球つきの球と球とのかち合ふ響も絕間なく洩れて來る。

「球場(たまば)ぢやないか。」

一人はしめられたその板戸のすき間に顏を押つけて內部(なか)を覗かうとしたが、すき間はあまりに狹く僅に一筋のあかりを認めるばかりである。

「兎に角入(はい)つてみよう。」

さういふともうこつこつと戸を叩いた。

「Come in.」

と亂暴に怒鳴つた奴があつた。同時に戸は内部から押あけられた。入つてみると其處は板敷のただつ廣い部屋で、プウルの臺を圍んだ五六人の男が球をついてゐた。誰も相手にして口をきかうともせず、今戸をあけたのが誰だかもわからない。彼等はただ一心に球をついては球の行衞を見守つてゐる。その様子が支那人らしかつた。

「チャンちやないんですか。」

とささやくと、連の二人もうなづいた。さうして所在なくその球突を見て立つてゐた。

「しまつた。」

と突きそこなつた男が仰山に叫んだ。それは純然たる日本語だつた。三人はひそかに顔を見合せて笑つた。

「此の近所に料理屋はありませんか。」

と聞くと一人の男はそれには返事をせず、今迄は氣のつかなかつた次の部屋に通じる扉を押して奥に顔をつつこむと、

「おつかあ、お客だぜ。」

と怒鳴つた。

直ぐに五十かつかうの汚ない婆が更紗の洋服を着て前掛で手を拭きながら重い靴を引擦つて出て來た。

「お前さんたち、何か喰べるなら此方に來ておくんなさい。」

とその次の部屋に案内した。其處には三つ四つ頑丈な木造の卓が据ゑてあり、既に三四人一組の客が片隅の卓を圍んでひそひそ話しながら盃をやりとりしてゐた。何れも垢じみた連中で、思ひ掛けない新客を遠慮會釋もなくヂロヂロ眺めるのである。吾々は此の連中と反對の一隅に導かれた。其處からは隔障に下げた縄暖簾を越して狭い臺所が見透される。亭主らしい頬髯に埋まつた大男が無骨な手つきでしきりに庖丁を働かしてゐる。それも時々手を休めては吾々の方に凄い視線を投げるのである。

　誂へた刺身と松茸と、蟹を玉子でとじたものが大皿に盛られて出て來た。それをつつきながら盃を取上げたが、鼻につく惡臭と何かしら酒中に混じられた藥品の味が強くて到底飲む氣にはなれないのであつた。

　先客は酒も肴も盡して滿足さうに煙草を吹かしてゐたが、何處から持つて來たのか皿小鉢の片づけられた卓の上に蓄音機を据ゑて鳴し初めた。浪花節だ。彼等の或者は顏を卓上に伏せ、或者

は椅子の背に仰向けにもたれかかり、或者は平圓盤の廻るのを注視しながら、何れも一心に聞き惚れてゐる。

ひとくさり終ると感に堪へないらしい顔を見合せて何彼と評し合ふのであつたが、又別の聲がうたひ出すと沈默にかへつて熱心に聞き入るのである。曲譜はすべて浪花節で、あとからあとからあの苦々しい聲が續くのであつた。

ところへ一人の若い男がシャツの上に外套を引掛けたまま鼻唄で入つて來た。語りつづける浪花節はまだ半ばだつたのにも頓着せず、いきなり大きな聲で、

「オイ何よ、あのなんとか云やあがつたつけ、ソウソウ桃中軒の荒木奉書試合はねえのか。」

と喧嘩口調た。

「奉書試合。奉書試合たあ柳生の道場に押かけて行くところか。」

「ナアニさうぢやあねえやな。」

若いのは話しにもなんにもなりやあしないといつた風で舌うちした。

「ねえのかなあ、俺(おら)あ桃中軒の節が聽きてえんだ。」

云ひ殘すと左の肩を聳やかして書生らしい歩き方をしながら、

三田山上の秋月高く

と天井を仰いで得意さうにうたひながら室外に出て行つた。

自分は全く奇異な心地であつた。「三田山上の秋月高く」は、自分の母校の生徒が運動競技の應援の時うたふうたである。今の若者は自分と同じ學校に學んだ事のある一人なのだらうかと考へると、加奈陀の港町に勞働してゐる無賴漢の群の中に落ちて行く一靑年を、想像好きな自分の頭は直ぐと小說らしい筋道に描き出しつつ、旅愁に似たはかなささへ誘ふのであつた。

間も無く吾々は勘定を濟ましてその家を出たが、蓄音機はなほも取り替へひきかへ浪花節をうたひつづけてゐた。

夜更けて船に歸つたが自分は眠られなかつた。

「明日は愈々シアトルです。」

と二人の船員はどの客にもお愛想を殘して各自の室(へや)に別れて行つたが、自分はシアトルに着くのが厭で厭でたまらないので、その言葉もよろこびを持ち來さず、かへつて寂しいものに思はれた。

見渡しても見渡しても果てしのない北米合衆國に、矮小な黃色の民と生れて來たみすぼらしい

ジヤツプが、堂々と濶歩する白人にまじつて、罵しられ嘲られ石つぶてを打たれ唾を引つかけられたから、口惜しくても手出しの出來ない恥辱を堪へて生きてゐる慘澹たる有樣ばかりが目に見え、自分の旅の長閑さも上陸と共に終りを告げ、その瞬間から屈辱の身となる自分だとしか考へられなかつた。さうして自分の身の上がなさけなかつた。

その時自分の心には別れて來た故郷（ふるさと）の園がなつかしく浮んで來て、父母の家は何よりもあたたかく樂しく回想されるのであつた。

夜霧の中に遠く淡く消え消えにまたたいてゐる星の向ふに、その故郷の家はあるのだ。（大正九年秋）

船中

甲板に薄日を浴びながら今日も亦ぼんやりと海を眺めて居た。

夏の日の航海にも稀にしか日光を見ないと云ふ此の航路は、横濱を出た翌日から空も水も銀鉛色に鈍く曇つて朝から晩迄濕つぽい風の吹く日ばかり續いたが、今朝は珍しく東の空に雲切れがして、ほのかながらも秋らしく澄んだ空から斜にもれる日光に、海面も心もち蒼く輝いて來た。出立の前の日に友だちの一人が無聊の航海中に讀めと云つて呉れたじ教授の「新宗教の創造」を、今日こそは讀んでしまはうと思つて、日向に持出した安樂椅子に樂々と寢そべりながら、一二頁進んだが、父しても氣が乗らないので其の本を胸の上に置いたまゝ、愈々親しさを増して來た海原を眺めて居た。

どうしたものか船に來てからは、すべての事に對して根氣が無くなつてしまつた。見送りに來てくれた人には、それぞれ禮狀を出さなくてはならない、それも彼地に着いてからは忙しくなるであらうから船中で書くがいゝ、と何から何迄自分の爲に心配してくれる母は、こんな細かい注意迄も度々繰返した。新橋の停車場にも横濱の波止場にも想ひも掛けぬ多勢の見送りがあつた。

それは自分を見送つてくれた人であるか、自分の父や母に對する世間の禮儀として來た人であるか、それは知らない。中には曾て名前を聞いた事も無い人さへ居た。その人々に一々禮狀を出さなければならないと云はれたのであつたが、未だその仕事にも手をつけて居ない。「新宗教の創造」は横濱を出た日から讀み始めた。僅に三十頁足らずの小册子だから本來ならば一時間もかゝれば讀み了る筈なのに、さて頁を開いてみると、如何しても一行を終へて次の行に移つて行く氣がしないのであつた。それが決してつまらないからではない、日本の官僚政治が神道をひろめ、武士道を打ち建てるのに苦心してゐる、それを指して新宗教の創造と云ふらしく、また半分きり讀んで居ないからはつきりとはわからないが、隨分思ひ切つて書いてある。若しこれを日本人が書いたとしたら、近時殊に數を增して來た流行の功利的愛國論者から或は批難されるやうな事がないとも限らない。充分好奇の興味を引く力を持つてゐる筈だが、どうしても今の自分には文字を讀む努力が出て來ない。日に二三度は、今日こそ讀んでしまはうと思つて手に取るのであるが、直に又いやになつて、旣に第一頁を開いてから日を經ても、未だに半分きり進行しないのである。

　同船の客は皆無聊をかこちつゞけて居る。あけても暮れても雲と水の他には見るものも無い船の旅では、たまたま船の腹をかすめて飛ぶ一羽の鳥さへ、すべての人を甲板に馳け出させる程の力

を持つて居る。喫煙室や甲板で催される種々の遊技も、次ぎから次ぎと倦かれてしまふと、後は所在なさに足並み揃へて甲板を歩き廻るより詮方が無い。從つて一日も早く目的の陸地に着く事ばかり望んでゐるのであつた。けれども自分は此の人達とは全く違ふ心持を持つて居た。

自分は、父母の家を離れ、今迄身を置いた周圍の一切に別れて海に浮んでから、初めて此の年月古い人情のしがらみにとらへられ、思ひ切つて手足を動かす事を知らず、自分以外の人の爲に顧み勝に暮して居た姿が、客觀的に目に見えて來た。生れた家の爲に自分は意識しながらも、又は無意識にも、どれだけ自由を束縛されて居たか、全く服從しないにしても父母の名は自分の背に重壓を置いて居た。兄弟姉妹、それから數ある親類も亦自分にとつては桎梏ではなかつたらうか。一言しやべるにも一歩歩くにも父を思ひ母を思ふ事を忘れなかつた。その癖自分をいつくしむ事には極めて臆病だつた。

その昨日に遠ざかつて、今は自分を圍むものは此の見る限りの海原の他に何物もないと思ふと、つひぞ知らなかつた廣々とした長閑な世界が認められて來た。

それなのに自分はひどく疲勞してゐた。すべての煩累と別れたと同時に、すべてに張合ひが無くなつた。此の日頃自分の屡々陥つた過去の事將來の事など考へては、感傷的ななげきにひたる、

そんな氣持もなくなつた。何を考へる力も無く、何をしようと云ふ慾望も無く、たゞ心持よくぼんやりと、大洋の波濤のうねるまにまに揺られてゐる日の一日も長からん事が望まれるばかりである。毎日甲板の椅子に寢て、海と空を眺め暮し度い。

自分は生來海が好きだ。春夏秋冬を問はず暇さへあれば相模の海邊の家に水を見て暮すのを好んだ。殊に季節のうつりかはりの海の面（おもて）にも著しく現はれる頃は、肉體にもそのうつりかはりのしみじみ感じられる爲であらうか、その日その日の波の色と共に自分の心もうつろひ行く心地がした。白けた冬の海の色も次第に蒼く輝きを増して、ゆたかに潮の湧きかへる春さきを、終日（ひねもす）砂山の日あたりに寢て眺め暮した事も度々あつた。南風が吹き初めて、沖には兎波が踊り、水平線迄一色に眞靑に晴れ渡つた上に、まばゆく照りかへす強烈な日光を浴びて、水中に砂上に遊び疲れた長い夏も幾年かつゞいた。その夏も終りに近く、避暑地の人も大方は都に歸つて、再び水は冷く澄み渡り、水底（みなそこ）の貝殼の眞白に透いて見える頃も忘れられぬ。海月（くらげ）の漂ふ海面に北風の吹き渡る曉、夜の間に流れついた海藻に荒れた磯の、冷い砂を踏む心地のなんとも云へぬうら悲しさに涙ぐまれる事もあつた。自分の心は靜な海にも、暴風（しけ）の海にも、日に見る海にも、耳に聞く海にも、すべてに自分の感慨を寄せて友だちのやうになついて居た。

その爲でもあらうか船に來てからも自分は些かも無聊を感じなかつた。今迄見た海は、必ず陸地に限られた人里近い海だつたのに、今自分を圍んで起伏する海は、大なる圓を描いて空に連る水平線以外に何物にも限られぬ海である。そこに自分の知らなかつた新しい海の歡喜が自分を捕へてゐたにちがひない。

暫時の間、自分は珍しく透通つて見える海面を見て居たが、何時の間にか又空には暗い雲の影がはびこり、風も冷くなつて來た。それでも身體を動かすのが億劫なので、なほそのまゝ横になつて居た。

突然、コツコツと甲板を踏む足音が聞えたと思ふと、黒い服を着た牧師の姿が目の前に現はれた。

「Good Morning.」

といつものやうに英語で挨拶しながら近づいて來た。

「御勉強ですか。――The Invention of A New Religion――。貴方は宗教書物をお讀みなさるか。」

云ひながら自分が胸の上に置いた本を取上げた。

「宗教は僧侶のつくりしものなりと論じたるヴォルテア其他十八世紀の哲學者は皮相淺薄なりとて後代の學者の嘲笑するところとなりにき。然れども彼等の見解にも亦一理ある事なかりしか。吾人は目前に横たはる事實を見落す事なきか。近世の日本は此點に關して好適例を示すものなり。日本人は一般に宗教心なき國民なりと云はる。彼等自身も亦然し云へり。近世日本文明の先覺福澤は曰く、余は宗教心を缺く、嘗て一の宗教を信じたる事無し――」

どう云ふつもりなのか牧師は一度英文のまゝ聲高く讀み上げた後、かう飜譯して頗る滿足さうにうなづいた。

「これはいかん。福澤氏は成程明治の先覺には違ひないが、彼の人は所謂拝金宗の人たから此の場合の例として引くのは誤つて居る。」

牧師はいかにも福澤氏を憎む調子でかう云つたが、フトつかつかと向ふに歩いて行つた。そのまゝ部屋にでも歸つてしまふのかと思つたら、さうではなくて、彼も籐椅子を引張つて戻つて來るのであつた。今度は自分に近々と席を占めたので、寢て居るのも失禮と思つて自分も起上つた。

「こゝに云ふ日本の新宗教なるものは、勿論自發的に起りしものにあらず――二十世紀の〔八字略〕は全く新しきものなりか。ハハア New Religion と云ふのはさう云ふ意味でいふのですか。こ

れは面白さうだ」

と云つたが、その實牧師はつまらなさうに本をふせた。彼はそれが純粹の宗教の本ではなかつたので、期待がはづれた様子であつた。

「一體如何なる事が書いてありますか。」

彼は思ひついたやうに尋ねた。何か會話の緒口が欲いためである事は確かだつた。

「イヱ、私もまだ半分きり讀んでゐませんのですが、今迄のところでは此の新宗教は全然役人のこしらへたものだと云ふらしいのです。」

自分は會話の爲の會話、殊にそのために無理に話材をこしらへて話しかけられるのは堪へられない。それにその時あまり口をきゝ度くなかつたので、成るべく手輕に切抜け度いと思ふのだつたが、先方は如何にも興味を覺えると云ふ様子を示して、

「役人が宗教をつくつたと云ふと如何なる意味でせうか。」

「ほんとにまだすつかり讀んで居ないからわからないんですが、日本にも西洋の民主思想が流れ込んで來たので、役人達がどうかして此の潮流を防がうとするに日も足りないなんて云つて居ます。

「ハハアそんな事を云つてゐますか。それで。」
「それから、日本の歴史家だつて實は信じてはゐないんだけれど、うつかりすると妻子迄餓死する運命になるから、口をつぶつてゐるんだと突込んで居ます。役人はその權力を以て此の宗教を打建てるのに忙しいと同時に、之に反對する者を懲罰するのに忙しい。その癖此の國程尊き人をいぢめた國は無い、島流しになつた尊き人も、殺された尊き人もあるなどゝ怪しからん事を云つて居ます。武士道なんてものは千九百年以前の字引には何處にも見當らないと書いて居ます。」
「では全く宗教書物ではないのですな。」
「エヽ、基督教に關する本ではありません。」
「貴方は宗教書物はお讀みなさらんか。」
「私ですか。私も無信仰者の一人でせう。」
自分は一語一語に仰山にうなづいて相槌を打たれるのが氣になつてしかたがない。なんとかして話が途絶えてくれゝばいゝと思つて居た。さうして自分ながら少ししやべり過ぎたと思ふいやな氣持から口をつぐむと、何時の間にかうす氣味の悪い雲の影のはびこつた海の果に目をそらした。

「無信仰。」

牧師は自分の横顔に向つて吐息をするやうにつぶやいて、一人でうなづいた。自分はあまりすげない態度をとつた事に對して些かは悔いても居たが、ひけ目を見せないために強情に水平線を見詰めて居た。

水鳥が低く水をかすめて飛んで居る。

「いやな雲が出たな。」

彼は暫時して、取つてつけたやうにつぶやきながら立上つて、船端の欄干に身を寄せかけると、心配さうに雲行きを眺めた。直ぐと今度は姿勢を正して大またに歩き出した。狹い甲板の上を一定の歩調で進んで行き、行き盡すとクルリと廻轉して以前の位置迄戻る。幾度も單調な運動を續けるのである。

牧師は默々として規律正しい散歩を續けて居る。すぐれて脊の高い彼は猫背であつた。その首を前の方に突出して、牧師らしい姿勢をつくつてコツコツと歩き續けて居る。

空も海も見る間に暗くなつてしまつて、風も少し加つたらしく、波頭が白く亂れて來た。これを背景にして、無言で同一運動を繰返して居る牧師の黒い姿を自分は見守つて居た。

突然彼はピタリと足を揃へて立止つた、と思ふと兩手を大きく開いて五六遍深呼吸をした。

「ア、ア。」

滿足さうに呼吸づいて、又自分の傍の椅子に來て掛けた。膝の上に額をのせて、うつむいたまゝ動かない。何か默禱して居るのかと思つて、自分はそのかがまつた背中、うす汚れた襟から尖き出た不器用に頑丈な首筋を、見馴れないもののやうに見詰めた。

「貴方は無信仰と云はれたですね。」

牧師は落着いて同じ言葉を繰返した。

「エ、云ひました。」

簡短な答へをするつもりで云つたが、あまり智慧のなさ過ぎた返事だつたのを直ぐと後悔して、苦笑しながらつけ足した。

「そりやア今日でも時には何か絕對の力を信じてそれに縋り度いと思ふ感情の起る事もありますが、その對象が神と云ふ觀念を形づくる事は殆んどありません。ですから私は今日教會に集る人の口から聞かされる信仰は持つて居ません。」

「けれども人は信仰なくしては生きられるものではないです。貴方にしても基督教の神以外に何

か信仰を持つて居られるでせう。」

「神でなければ佛ですか。」

「イヤ佛とも限らない。たとへば聖經の教へでも、一般の道德でも、何かおのれを托する信仰がなければならない。」

「さういふ手近にある對象にはどうしても宗教的感情は起りません。」

「それは貴方が神を信じて居られないからだ。信ずる者の目は神の姿を見、信ずる者の耳は神の聲を聞く。」

牧師は俄に嚴かな口調になつて、會堂に集る信者に說く時の態度で自分の方に愈々近寄つて來るのであつた。

「現に私さへも一時は神の存在を疑つたのでした。しかしそれは私の信仰が足りなかつたので、眞に神を信ずる者に取つては神の存在は問題にはならないです。その人々は既に神と共に在るのですから。」

一句一句會得させようと力を込めて句切り句切り云ふのである。自分には牧師の云ふ事が今迄とは全く別の方向にむかつて行くのが感じられた。

牧師はぢつと空を仰いで目を閉ぢた。

「しかし貴方にしても神を求められる日が來るに違ひない。長き生涯の中には必ずその日が來るに違ひない。」

あまたたびうなづいて云つた。

「サアどう云つたらおわかりになるか。ひとつ私自身の經驗をお話して上げよう。」

「又始まりますかね。」

不意に異つた聲が聞えて、くつたくなささうに笑つた。シアトルの商人大島さんは、はち切れさうな酒肥りの顏を笑ひに崩して立つて居た。

牧師は自分の爲に特に身の上話を例にして求神の念を起させようと考へて居た穗尖を折られたので、一寸不快な顏をして大島さんを見上げたが、強ひて笑顏をつくつて挨拶した。

「どうです山川さん、僕なんかは同室のよしみで毎晩寢しなにお說教を聞かされる。一人坊主はいけないつてますが、いかさまほんとでさ。」

今日は朝から飮んだらしく見える。

「イエ大變面白いお話を伺つてゐます。これから牧師さんの信仰についての經驗談が始まるとこ

ふです。」

自分は氣の毒になつて、牧師のためにとりなさうとした。

「どうです、ゆつくり願ひませうか。」

と世辭心から促すと、牧師は果して勢ひを得て大きくうなづいた。

「話せば長いです。私の生れたのは山間の貧しい村里でした。私は今こそ御覧の通り壯健ですが、幼少の折は極めて虛弱だつたのです。そのために早く神を求むる心が起きたとすれば、私に取つてはそれも至大の幸福だつたかもしれません。」

今更神の下僕たる身の幸福を主に感謝する樣を形に示して、彼は一瞬間目を閉ぢた。

「成程ね。」

大島さんはつまらなさうにつぶやいたが、今度は、

「寒い寒い。」

と仰山に身震ひして見せて、そのまゝ喫煙室の扉を押して內に這入つてしまつた。

「私は今でもその時の心持を忘れんですが、私の家の前には瀬の早い川が流れて居ました。そしてたつた一枚の板橋が渡してあるばかりでした。私はそれを渡るのが怖くて怖くてしかたがなか

つた。若し此のまゝ水に落ちたら如何なるたらうと思ふと、そのやうな時には何時でも、神様！私の身を守つて下さい、と知らず知らず禱るのでした。」

そのかみを追想しながら、自分自身限りなき滿足を感じるらしく、次第に熱して來る語氣で續けるのである。

その間に他の船客も來て後に立つて默つて聽いて居た。

牧師は聽衆の殖えたため益々調子づいて、

「つまり私はその頃既に神に縋らなければ居られなかつたのですね。しかし勿論神と云つても、はつきりした考へがあつたわけではないが、間もなく小學校に通ふ頃に、私共の村に傳道に來た牧師さんがあつて、私はその牧師さんの子と同級だつた。度々その家に遊びに行く、するうちに基督教の神と云ふはつきりした對象が出來て來た。私は直ぐに洗禮を受けました。其の時分の事だから、私の村などでは切支丹と云つて非常に嫌つたものでした。牧師さんの子は學校でも耶蘇の子だと云つて、私の他にはあまり遊んでやる者もなかつた程です。であるから私は家の者には決して口外しなかつたが、かくすより現はるゝは無しで、或日お母さんが私を呼んで、お前は切支丹になつたさうだがそれは眞實か、と恐い顏して訊ねるのです。私はイヤそんな事はありませ

んと、口の先き迄出かゝつたが人を詐るのは罪であると考へて、お母さんの前にひれ伏し、實は私は洗禮まで受けた、しかし基督教は決してお母さんの思はるゝやうな惡いものではない、どうかお母さんも信者になつて下さいと云つて泣きました。」

大島さんが教へたのであらうか、喫煙室にゐたらしい連中がゾロゾロ出て來て彌次馬らしい笑顏で牧師の話を取卷いた。非番の船員の顏もその間にまじつて居る。談話者は一巡聽衆を眺め廻して、更に一段大きくうなづいた。

「その晩私はお父さんに非道く叱られたです。私のお父さんと云ふ人は、いつこくな人だつたから、私の襟首をつかんでからに、性根を入れかへてやると云つて折檻された。私は打たれながらも、神様！　どうぞ私のお父さんの心を和らげて、私と同じやうに貴方を信じる人として下され、と禱つて居つたです。」

話が全く身の上話に落て行つて問答を強ひられるわづらはしさのなくなつたため、自分は冷靜に牧師の態度を眺める事が出來た。

自分で自分の談話に一々うなづく彼の黄色い顏や、抑揚をつけた職業的な話し振りや、屢々厚い唇から唾を飛ばす事などを不快に思つた。一見してその容貌や態度で、その人となりの如何を

問はず、嫌ひな人がある、牧師はその部類に屬して居ると自分は考へた。

聽衆の中には椅子を運んで來て、悠々と落着いてしまつたのもあつた。なんとなく嘲笑を浮べた顏を此方に向けて、自分に對して意味あり氣に目くばせする人もあつた。

「恰度私が十四の年でした。大阪の或る牧師さんが村に來て傳道をされた事があつた。その時村の牧師さんの家で集會のあつた折、大阪の牧師さんの云はれるには、自分の監督して居る寄宿舍で受付を一人求めて居る、若し來る者があるならその人の勉強の出來るやうにはからつてやりもしようと云はれたです、私は直ぐにも、私を連れて行つて下さいと云はうとしたが、待て、私は兎に角親の許可を得なければならんと考へて、その日家に歸ると兩親の前に自分の希望を殘らず打ちあけました。私は大阪に行つて勉強して牧師さんになり度いと云ふと、お父さんは又非常に立腹されて散々に私は叱り飛ばされた。しかし一旦思ひ立つたからには如何にしても決行しなくてはならんと思つて、その晩は夜中寢もやらず神樣に禱つたです。神樣！　私は大阪に行つて學問して、一生涯貴方のために働かうと思ひます。しかしお父さんは許しません。私は如何すればよいのですか。私は一心に禱りました。すると、お前は正しき道のために飽迄も盡さんければならんと、私の心は答へるのです。それが神樣のお聲のやうに思はれた。私は或日お父さんが畑に

行かれた留守にお母さんに迫つて、どうしても大阪に行かして下さいと泣きながらお願ひした。お母さんは勿論いけないと云はれたですが、あまり私が熱心だつたので、遂にはそれではお前の勝手にしろ、私はお父さんに對しては濟まないけれど、知らぬふりをして居てやるから大阪へ走れ、それには愚圖々々して居つて故障が起るといけないから、一層今夜にも行つてしまへ、と云ふのです。そしてお母さんは私のために汽車賃をくれました。私は嬉しくて嬉しくてたまらなかつたが、人に氣取られてはならんと思つて、ふだんと變らぬ様子で牧師さんの家やなにかにそれとなく別れを告げに行きました。お父さんは夕方歸つて來ても、先の日の事があるので私に對しては不機嫌で居られる。濟まない事だとは思つても何喰はぬ顔して夜を待ちました。新しい草鞋を寢床の下にかくして床に入りはしたが、もうお父さんにもお母さんにも暫時は逢へないと思ふと涙が止度なく流れて來た。そのうちに皆が寢靜まつたので、私はそつと身支度して思ひ切つて家を忍び出ました。その晩はいゝ月夜で、今も忘れないが、前の川瀬の音が雨のやうに聞えた。私は板橋を渡ると、越えて行く山路の方に急いだ。峠の上にのぼつた時、ふりかへつて見ると、月を碎いて流れる川ばかりはつきりと見えて、私の家は森のかげにかくれて見えない。私は其處に坐つてしまつた。お父さんお母さんにお詫をし、氏神様にお禱りをした後で、今度は坂道を一

散に馳け下りました。」
牧師は語りながら自分の聲に醉つて居た。感慨に堪へぬらしく、夜逃げの顚末を終ると、叉も聽衆の顏をヅラリと見廻して、うなづいた。
「それから大阪に行つてその牧師さんを尋ね、その寄宿舍で働きながら勉強したです。」
「それでおうちの方は如何なりました。」
人々の背後から氣のいゝ船長がニコニコした首丈出して訊ねた。
「船長、貴方も聽いて居られたですか。」
彼は得意さうに笑顏になつて、
「家の方は手紙で散々詫をしました。遂にお父さんも我を折つて、では許すから偉い人間になる迄は家に歸つて來るなと云ふて來たです。」
牧師は叉ひとわたり、聽衆を見廻したが、今度は誰も相槌を打たなかつたので、物足りなさうだつたが思ひかへしてうなづいた。
「その後私は或る西洋人に知られて、その人から學資を出して貰つて同志社にはいりました。私が自分の弱い性質と戰つて之に打ち勝ち、叉神の存在を疑つて然る後に眞の信仰に入つたのも、

此の同志社時代です。」

と更に冒頭をかへて滔々と始まりさうに思はれた時、自分の隣りに腰掛けて居た一人が時計を出してパチンと云はせた。牧師は話の腰を折られてムツムツする唇をなめて默つたが、

「何時です。」

と釣込まれて訊ねるのであつた。

「もう直き正午です。」

とその人は答へた。

「ひとつ其の神の存在に疑ひを起されたかんじんのところを伺はうぢやありませんか。」

と聽衆の一人が後の方から聲を掛けた。

「では簡短にやりませう。」

牧師は又大にうなづいた。

「前にも云つた通り、私は身體が虚弱だつたが、そればかりでなく精神も弱かつた。私はお父さんが非常な酒のみだつたゝめか、どうも酒が飲みたくてたまらない。そして時々は人にかくれて飲みましたが又良心の苛責と云ふものは非常でした。で私は幾度も神に禱り、おのれを責めて、

遂に此の慾望を征服しました。その他さまざまの慾望が起る、それを悉皆退けたですが最も力強く私を苦しめたのは性慾でした。」

云ふ時牧師は顔を赤らめて伏目になつたが、思ひ切つて勇しく面をあげると、一同を見廻した。その時何時來て居たのか人々の間に女客が二人手を組合つて寄添ひながら傾聽して居たのにフト氣が付くと牧師は今の言葉に眞赤になつてしまつた。うつむいて膝頭を頑丈な手でこすつて居る。

「それでどうしました。」

意地の惡い笑顔をしながら訊ねた人があつた。牧師はドギマギしながら、

「それも亦苦闘の結果漸くに退けたです。」

と低い聲で答へた。一同は思はず顔を見合せて聲をもらして笑つた。

「サア續きを願ひませう。」

と又さつきの聲が促したので、牧師は赤く染めた顔を上げると、例よりも大きくうなづいた。

「その頃の同志社と云ふものは、新島先生のなくなられた後で、非常に紊亂して居つたです。或者は公然と一同の前に立つて、余は神の存在を否定すると宣言する、或者は神若しあらば我罪を罰せよと叫んで酒を飲む、あらゆる亂行が行はれた時代でした。私の信仰も何時か搖いでゐる、私

には果して神が在るかどうかわからなくなつて來た。こんな疑ひを起してはいかん、惡魔の誘惑に負けてはならんと思つて一心に禱らうとしても、心が亂れて居て禱れないのです。私は食事も出來ない程苦悶して日夜此の疑ひを打ち消さんがために鬪つたが、いかん。」

　牧師は興に乘じて身振りまでして物語るのであつたが、折柄ヅウンと頭の底迄も響く正午の食事を報じる鉦が鳴り渡つた。

「アヽ、お正午だ。」

とつぶやきながら、直ぐと聽衆は崩れはじめた。

「アヽ、一寸待つて下さい。もう直きですから。」

　彼はつゝしみを忘れて高く叫んだ。すると中には笑ひながら行つてしまつたのもあつたが、又踵をかへして來て聞くのもあつた。

「しかし私は遂に神樣のお聲を直接に聞いたのです。」

　牧師はその場合最も興味をつなぎさうな言葉を擇んだらしかつたが、なんとなく白けきつた事はどうする事も出來なかつた。

「或日私は又此の疑念に襲はれて靜座しては居られない程苦しくなつて來たので、野原を指して

馳け出した。恰度秋の事で空は青く晴れ、草むらには野萩が咲き亂れ、晝日中でも蟲が微かに啼いて居ました。私は其處に眞つしぐらに馳けつけると、いきなり原の眞中に倒れてしまつたです。底迄も澄み渡つた大空を仰いで、力の續く限り禱りました。これが最後だと思つて居つた。若し神様が眞にゐらつしやるならば、私の此の苦痛を救つて下さるに違ひない。若しかくまでに禱つても、此の苦痛がうすらがないならば、神様は此の世にはゐらつしやらないのだと考へたのでした。私は必死になつて禱つた。一時間二時間三時間、たぶん其の位は禱りつゞけたでせう。突然何處かにさわやかな聲がして、汝等心に憂ふる事勿れ、神を信じまたわれを信ずべし。」

牧師は一段と聲を莊重にして神の聲を繰返した。

「汝等心に憂ふる事勿れ、神を信じまたわれを信ずべし。約翰傳第十四章の第一句を、私はありありと此の耳に聞いたのです。同時になんとも云はれない清々しい心持になつて、今迄の胸の悶えは夢のやうになくなりました。たゞ神様を信じなければならない、すべてを主にお任せして只管信じなければならぬ。私は此處に眞の信仰を得たのであります。そしてそれからと云ふものは、私の信仰は微塵も搖いだ事がありません。」

から云つて一層力強く自らうなづいた。あまりに長い冒頭から想像した此の苦悶時代の告白が、

意外に簡短に終つてしまつたので、人々の間にはなほ後が續くのかどうかを疑ふ沈默が殘つた。

「それでおしまひですか。」

テキサスに行く青年が邪氣の無い眞面目で訊ねたのを、なんと云ふ事なしに傍の人は皆笑つた。牧師も釣込まれて一緒になつて笑つたが、直ぐと不快な顏になつて、答へもしなかつた。

「ぢやア御飯に行きませうか。」

誰かゞ促したまでもなく、人々は散りぢりに別れて食堂の方に歩き出した。

「山川さん、お食事です。」

食卓ボオイが喫煙室から顏を出して催促した。

「今行く。」

自分は云ひながら立ち上つた。

「どうも大變面白いお話でした。如何です、食事にいらつしやいませんか。」

と誘つたが、牧師は默然として動かうともしなかつた。たゞ一寸笑顏をして又大きくうなづいた。

海は眞暗に雨雲に包まれて、水の色が凄くなつて來た。數を増した海鳥の群はけたゝましく啼

きつれて船の周圍を飛び廻る。
自分が人々の後を追つて食堂の方に階段を下りて行く時、何處かで、
「今夜は暴風だぞ。」
と船員の聲高に語り合つて居るのが聞えた。
船はその夜から嵐の海を悲しげに警笛を鳴しつゝ進んだ。
二日三日、濃霧は船室の窓の外迄ヒシヒシと押迫つて、舷側を打つ波濤の音はすさまじく聞えながら目に見えるものは、霧の中に降りしきる雨の風に碎けるほの白さと、愈々高まる波頭の甲板にうちあげる重吹ばかりであつた。
自分は初めて船に乘るのだから、きつと船醉に苦しむ事と覺悟して居たのが、此の暴風の日の間にも少しもひるむ事無く、人影の少ない食卓にもかゝさず列つた。はげしく船體の傾くため、器物の滑り落ちて毀れないやうに框を張り廻したにもかゝはらず、卓上の皿やグラスが、アレと云ふ間も無く床に落ちて冴えた響を立てゝ碎けるのが、なんとも云へないいゝ氣持だつた。
自分は子供の頃癇癪が起ると茶椀や皿を叩きつけて滅茶々々に碎くのがおきまりだつた。後に

なつては自分の爲た事の普通はづれてゐたのが著しくなつて涙ぐまれもしたけれども、其の瞬間に於ては大概のムシヤクシヤは、二三枚の皿の白く散る響で、さつぱりと消えてしまふのであつた。流石に心が大人びてからは、さういふ亂暴な快感を味ふ事もなくなつたが、時には苛々した氣持の堪へ難く思はれる時二三十枚の大皿を手當り次第に粉微塵にしたら此の上もない嬉しい事だらうと想像する事もあつた。それが殆んど三度三度の食事の時に、彼方の食卓でも此方の食卓でも、何かしらころがり落ちてはチヤチヤランと鳴り響く、その度にいゝ音樂を聽く時の息の詰るやうな快感に襲はれると共に、子供の時分の事迄思ひ出してしめやかな氣持にもなつた。

　波濤は甲板を洗ふ程だつたから船の動搖はもとよりはげしかつた。大きなうねりの上にゆらゆらと乘り上げたかと思ふと、今度は又深く水底迄も沈めと搖り下す、その度に人々は互に顏を見合せて不安の色を漂はせたが、自分はそれさへかゝはりのない心地で過した。恐らくは若し波浪のために船の沈沒する場合に際しても、落着いて、船員のうたふ「神の身近に」の悲痛な歌の節をしみじみ懷しく聽き得るらしく思はれた。

　自分は喫煙室の長椅子に寢ころんでは、霧のために晝間も暗澹とした船室の寺院の中の壯嚴に似た靜けさを樂んだ。多くの人が船醉に臥床を離れないので、何時もはうるさい程賑はふその室も、

たまたまチラホラ人影のはいつて來る事はあつても直ぐに又引込んでしまふため、煙草の煙も漂はず森閑としてゐたのであつた。自分は緊張した氣分で「新宗教の創造」を苦もなく讀了し、引續いて同じく鞄の中に入れて來た「投資の目的としての保險」と云ふ數字づくめの本さへ一息に讀んでしまつた。

そのすさまじくも心地よかつた暴風雨も次第に凪いで、名殘りの風は帆柱につれなく鳴つてはゐるが雨はもう遠くに去つて、白浪の鮮かに碎けて散る大洋の霧はあけはなれてゆく。自分は日に幾度となく濡れた甲板に立つてはちぎれるやうに吹きつける風の中で變化の多い暴風の後の海を見て暮した。それは幾重の波の止度もなく高く重吹(しぶき)をあげて、斜めに傾いた船の甲板を洗ひ越すはげしかつた風雨の最中よりも、かへつて凄い景色だつた。深くはびこつた濃霧は吹き拂はれ、雲もちぎれちぎれに遠く消えて行くのであるが、廣い空の處々に暗くかたまつた黑雲は、なほ海面に重く影を落し、何處の海岸を洗つたのか波の上には夥しい芥が流れてゐる。飢ゑかつゑた海鳥の群は、忙しく羽ばたきしては船の廻りを啼きつれて飛び廻る。たまたま日ざしの落ちる時、カツキリと明暗を限る海の色の雲のかげになつたところは紫黑色にどんよりと重く、日光を受けた部分は透通つて靑く、何れも毒々しく底知れぬ恐怖の色に目に迫る。かゝる時海邊の民の慘(むご)し

く波に嵐に惱む姿を、物語や古い油繪に見聞きして幼時の頭に深く刻まれてゐた記憶もまざまざと甦つて來る。燈臺守の親子の哀れな話はナショナル・リイダアにあつたのだつたと思ふ。自分は欄干につかまつて海面を覗きながら、暴風の名殘りのむごたらしい景色の中にも自分の感情を浮べて居た。

今日は喫煙室の片隅に獨骨牌をやつてゐると、向ふの隅では紐育に雜貨店を持つてゐると云ふ田邊老人が例の如く船醫を相手に烏鷺をたゝかはして居る。時々船の動搖がはげしいと、盤面は崩れさうになつて、白と黑とが痙攣したやうに震へるけれど、入り亂れる程の事はないのである。

二人は全く無言た。ハチリパチリと置かれる石の響が細く澄んで聞える。

フト入口の扉があいて、大島さんを眞先きに四五人一かたまりになつて這入つて來た。

「サアサア、いゝ物をお目にかけます。」

と大島さんは一枚の紙片を、手を高くあげて振りかざしながら、少しは酒氣もあるらしいのが喜色滿面で叫ぶのである。

「何か號外でも出ましたかな。」

田邊老人ハチリと石を置きながら振り向いてお愛想を云つた。

「號外も號外、大號外です。坊主の正體は此の一枚の紙つきれですつかりわかつた。彼奴は大嘘つきですよ。」

彼は何時でも牧師を坊主と呼んで居た。その手にした紙片を中央の卓の上に置くと、側の椅子に腰を下して自慢さうにあたりを見廻した。

後からやつて來た船員や船客で珍しく賑かになつたゝめ、田邊老人も打止めて、人々と共に大島さんを圍んだ。自分も面白づくに其處に行つて肩越しに覗くと、人々は何か横文で刷つたものを爭つて讀んでゐる。

「マア讀んでごらんなさい。今迄坊主の云つてた事は悉皆出たらめだつた事がわかるから。」

大島さんは赤い鼻のさきを動かしながら落着き拂つたもので、人々に說明を與へて居る。

「あの先生も僕も横濱を出た日から同じ室に入れられたでせう。その晩から喧嘩でさ。僕がウイスキイの瓶をあけて寢しなに一杯やらうと思ふと、坊主め、此處で酒を飲まれちや困るつて云ふんだね。僕は飲まうと飲むまいと自分の勝手だ、君に干渉される事はないと云つて、癪に障つたから大に引掛けてやつた。」

ムクムク肥つた手で大に引掛けた眞似をした。

「その晩ですよ。」

人々にまじつて居た事務長もツイ誘はれてニコニコして云つた。

「牧師さんがやつて來られて、どうか私の室をかへてくれ、酒飲みと一緒は御免だと云はれるのです。」

「どうりで不意に室を出て行つたと思つたら、そんな事を云ひに行つたんですね。それでどうしました。」

「私はどうも他に空いた室はないから我慢して下さいと云つたのですが、なかなか承知されないのです。一日二日の航海ではない十四五日の長い間だと云ひ張られる。それでも實際他に室はないのですから拜むやうにして納得させましたがね、イヤ困りましたよ。」

事務長は職として客の噂をしては濟まないと思ふ氣もあるらしく、聲をひそめて云つた。

「ハヽヽ、ひどい奴だ。」

大島さんは愉快さうに笑つた。

「それから毎日お說教が始まつたものです。第一に酒の害を說く、耶蘇の功德を講釋するね、散々です。僕ア云つてやつたさ。酒を飲んで君に迷惑をかけるやうな事があつたら、いくらでもお

詫する。しかし一人で飲んで一人でいゝ氣持になつて居るばかりで、一度だつて管を卷いた事も無い。酒が悪いつてなア酒に飲まれるからいけないんだ、精神さへしつかりしてりやア悪い事はちつとも無い。ねえさう云つた理窟ぢやアありませんか。」

「さうですとも。」

「ところが坊主に云はせると、悪いものはあく迄退けなくちやアいけない、有毒な性質のものは何と限らず此の世からなくなさなくちやアならない。だから酒が害をなす場合が想像出來るなら斷然禁酒しろとかう云ひますさ。」

「そりやア極端だ。ナアニ貴方度を過しさへしなけりやア決して毒ぢやありませんよ。」

と船醫は相槌を打つた。

「イヤそりやアマアいゝさ。僕はそんな事はなんとも思はない。耶蘇の立場として船に乘つて西洋に行く途中でも人に禁酒をすゝめる、こりやア君、熱心がなくちや出來ないことさ。だがあの坊主はそれをダシに使つて自慢するからいやなんだ。二言目には、私が此度洋行するやうになりましたのは自分から希望したのではなく、信者が牧師さんに歐米を視察して來て貰つて、話を伺つたら、吾々平素職業にあくせくしてゐて到底西洋を見る機會のない者も、精神上得る處が多い

に違ひないと云つて、皆で金を出し合つて旅費をつくつてくれたと云ふんでせう、なる程こいつはありさうな話さ。」

「その話は私も聞きましたよ。」

「僕も聞いた。」

などゝ退屈まぎれに大島さんを取巻いて居る連中の誰彼が、同じ言葉をもらした。

「その通り皆さんに自慢したものだ。ところがどうです、それが眞赤な嘘なんだから。今朝食堂で、あの一番の室にゐる夫婦の毛唐と顔を合せると、いきなり此の紙つきれを出して、牧師がこれを見せて寄附してくれと頻に云ふが、此頃はブリッヂで負け續けてゐるから金は一文も無いと返事をしたつて云ふのさ。先生毎晩私と船長を相手に闘つて居るもんだから、そんな笑談を云つたんですよ。そこで私はその紙つきれを讀んで見ると、教會の信者が據金して洋行させて、精神上の利益を得るなんて目的ぢやなくて、大阪の教會會堂建築費が足りないんで、英米に金を集めに行くつて事がチヤアンと印刷してあるぢやないか。物質的の利益さ。」

「なる程此處に書いてある。」

田邊さんは叮嚀にその寄附金勸誘の主意書を讀み返してゐる。

「一體なんのつもりでそんな見え透いた嘘をついたものでせう。」
「自分が第一に神様の罰が當らうつてものでさ。」
「それにあの牧師さんは御婦人にばかり親切ぢやありませんか。」
「これは驚いた。」
ひとかたまりになつて其處にゐない者の噂をするのは時にとつての慰みであつた。いかにもカリホルニアに行きさうな人の形造つた船中の社交界も陸上のそれと變りはない。
「さう云へばさうですな。あの寫眞結婚の人としよつちゆう讃美歌を合唱したり、なかなか牧師さんも味をやりますよ。」
「そりやアまだいゝさ。四番の賣女(ぢごく)と口をきくのもあの坊主丈でさあね。」
大島さんはあくまでも毒々しく攻撃の火の手をあげる。
「へエこりア初耳だ。なんですか、室(へや)にでも訪ねて行きますか。」
「行きますとも。それがいゝや、チヤント聖書(バイブル)を持つて出掛けるからね。」
一時に皆笑ひ出した。更に又惡口が笑談(じやうだん)と入りまじつて室内をあかるく賑かにした。
人々にまじつてゐる中に自分は何とも云へない不快さに襲はれて來た。僅かに二三日ではあつ

たけれど暴風雨の間に持つたやうな落着いた平安な氣分はこはされてしまつた。自分とても牧師の粗野な態度や褊狹な性質を好んではゐなかつたけれど、かく多人數が一團になつて、どうでもいゝ事を兎や角云ひ罵るのを見て居ると、弱い者いぢめを見せつけられる不快さか堪へられない。常に自分の心の底にわだかまつてゐる人間厭忌性(ミザントロピイ)が頭を持上げて來た。

　自分はなほも罵り騒ぐ人々の間を拔けて、甲板に出た。そこでのぼせた頭を風に吹かせて居た。牧師が女客に親切過(すぎ)ると云ふのは夙くに問題になつてゐたが、貴女云々は初耳であつた。その女と云ふのは、若い亞米利加の女で、船員の語によれば、香港から來たのだが手荷物も何もなく、衣服も一枚着たきりである。その言葉に從へば加奈陀のヴイクトリアに夫が待つてゐる、荷物は初め他の船で行くつもりだつたので積込んでしまつたところ都合が惡くなつて、身體(からだ)丈遲れたと云ふのである。所持金も無いらしいのに酒も飲めば煙草も吸ふので、酒場(バア)の拂ひも出來ないで困つてゐると云ふ話も聞いた。

　自分が船に乘つた翌日の夜であつた。甲板に出て一人で欄干にもたれてゐるところにその女がやつて來て、肩もすれすれに並んで立つた。暫時(しばら)は默つて海を見下してゐたが、直ぐニコニコした顔をして話しかけて來た。思ひつきり肥つた赤ら顏の不別嬪だつた。ひどく早口にしやべるの

で、自分には大概聞き取れたかつたが、それでも何處に行くのか、何しに行くのかなどゝ云ふきまりきつた簡短な問答はしてのけた。よく見ると女の顏はたゞ美しくないばかりではなく、自分の最も嫌な猫に似た顏であつた。それで頰骨の出た顏の形や目尻にいやらしい皺の寄るのを見て居ると不愉快になつたが、そればかりでなく變に汗臭いにほひが絕えず肥滿した肉體から迫つて來る。どうかして機を見てはづさうと考へてゐるところに三等運轉士が通りかゝつて、變に意味ありげな笑顏を殘して行つた。

その晚前のやうな話を三等運轉士から聞いたのである。成程着のみ着のまゝでは臭ふ筈だと思つた。

女は大概船室に引籠つて居た。勿論食堂になんか一度も出て來た事が無い。たゞ夜になると、人氣の無い甲板の椅子に坐つて、煙草をふかしてゐた。自分は屢々波の音のみ鮮かに響く暗闇の甲板に、一點の煙草の火を認めて哀れに思つたが、あの猫の顏と汗の臭ひは忘れる事が出來なかつた。

その女の事なのである。まさか若い西洋の女の室に男の方から押掛けるとは思はれないけれど、あの第六感を缺く牧師の事だから、なんとも云へないかもしれない。彼がその慾情を征服するの

に最も困難を感じたと云つて赤面した時の樣子を思ひ出すと、思はずほゝ笑まれた。

「How do you do?」

恰度その時牧師は階段口から顏を出して呼びかけた。

「しばらくお見えになりませんでしたね。」

コツコツと一流の足取りで近寄つて來る彼に向つて自分は云つた。

「大分波も靜になつたやうですね。私は意氣地のない話ですが、全く弱つたです。船に乘つた最初の二三日も少し頭が重かつたが、その後船にも馴れたから、もう大丈夫と思つてゐたら今度の暴風で頭も上らない程惱みました。」

「それはお氣の毒でしたね。しかしもう御氣分もいゝんでせう。」

「Thank you.」

と云つたが牧師は急に沈鬱な顏つきをして、

「しかし私は貴方方に對しても恥かしいです。一昨日は日曜だつたのに、私の意氣地のないため日曜の集會をする事が出來ませんでした。私は私の信仰の足りない事を恥ぢ、神につかへる事のうすいのを歎きました。」

彼は又しても調子づいて來たが、その時喫煙室の窓の戸のあく音がしたので、口をつぐんでしまつた。

「牧師さんも山川さんも來て下さい。今、緊急動議が起きたのですから。」

テキサス行きの青年が其處から首を出して呼んだ。

「何ですか、緊急動議と云ふのは。行つて見ようではありませんか。」

牧師は人の集るところでは必ずその中心にならなければ承知しない性質だつた。彼はその欲求に驅られて、自分を促し立てゝ室內に這入つた。

煙草の煙にうす暗くなつた室(へや)の中には殆んど船客のすべてが集り、重だつた船員の四五人もまじつて皆改まつた顏つきで椅子に席を占めてゐた。

「サア、此處におかけなさい。實は今、大島さんの發起で、明日(あした)か明後日(あさつて)運動會をやらうと云ふ事になつたのです。」

田邊老人は待ち構へてゐて口を切つた。

「つまり此の長い航海中一つの船に乘り合せたと云ふのも何かの御緣だと思ふのです。で吾々がお互に愉快に暮して、間も無く無事に目的地に着く、それは結構な事だが、着くと同時に折角お

ちかづきになつた方々とゝもお別れしなければならないので、なにかその前に別れの會とでも云ふやうなものを催し、併せて船員諸氏の勞にも些か報いたいと思ふのです。で何かと云ふよりも一同で遊べる事がいゝから、晝は運動會をやり夜は演藝會を催しボオイの中の器用な連中に芝居でもやつて貰はうと云ふやうなわけです。」

老人は年長者として此の一組の人を代表した落着きを見せて、平生から念の入つた本來の調子を更に強めて述べるのであつた。

「つまるところ諸君の御贊成を得て、多少の御出金を乞ひ、それを萬事の入費にあて度いと云ふのであります。勿論御贊成下さる事とは存じますが、イヤまた船中の運動會も愉快ですからな。」

老人は時代から世話に砕けて最後を結んだ。

「どうです山川さん、ひとつ大にやらうぢやないか。」

大島さんは威勢よく云つて、又引掛ける眞似をした。

「エ、萬事よろしく願ひませう。」

自分はさう云つて、片隅の空椅子を求めて腰を下した。牧師は先刻から中央の大島さんの傍に席を占めて、一々うなづきながら聞いてゐた。

「いかがでせう、牧師さんにも是非賛成して頂き度いのですが。」
田邊老人は殊更ニコニコして云ふのであつた。
「ではなんですか、運動會を催し、又後では何か演劇やらの事でもありますのですか。」
「左様です、つまり一同樂みを共にし度いと云ふのが主意なのでして。」
「運動會はいゝですな。」
牧師は例の如くグツト大きくうなづいた。
「ですが一體その費用はどの位かゝりますか。」
「サアそれが第一の問題ですが、先づむづかしい事は云はないで、集つた丈使ふ事にしようと云ふのです。」
「使ふと云つて如何なる事に使ふのでありますか。」
牧師は如何にも考へ深さうに、ねつちりと質してかゝる。
「何もそんな面倒な事を云はたくたつていゝぢやないか。たかゞ一弗か二弗の頭割りなんだ。君なんか洋行までさせてくれる信者を持つてる人ぢやないか。」
大島さんは話をかきわけて口を出した。牧師のしんねりした態度に疳癪を起してゐるのは様子

に現はれて居た。牧師も大島さんの言葉にムツとして、相手を睨んだ。

「第一賞品がいらアね。煙草とか手巾(ハンケチ)とか、又は現金でもいゝさ。」

大島さんは構はずにたゝみ掛けてしやべらうとする。

「賞品なしではいかんものでせうか。」

牧師はかう云ふ時わざとらしく力を籠めて云つて、その顔を稍々(やゝ)仰向けにして昂然とした。

「ハヽヽ、馬鹿な事を。賞品の無い運動會があるもんか。ナニ君。賞品を賭けるつたつて、たかゞなぐさみぢやないか。何も弊害は無いさ。」

「イヤ實際そのしるしばかりの物でも何か賞品らしい物がありますとはずみが違ひますものでして。」

田邊老人はとりなし顔になだめて、愛想笑ひをした。牧師は默つてうなづいた。

「イヤ誤解なさらんやうに願ひます。私はたゞ成(な)るべく手輕にやり度いと思つたので。」

「勿論手輕さ。此の海の上で何が手輕でなくて出來るものか。賞品たつて實は名まへばかりのやうなものなんだよ。」

大島さんは又續ける。

「それから君、芝居をやる連中、いろいろ働いてくれる連中の慰勞會の爲にも若干入るし、景氣をつけるには是非とも麥酒位なくちや氣の毒だよ。ボオイの中には器用な藝人も多いし、それに二等の女客の中にも二三人三味線のひけるのがゐるさうだ。どうしてあの連中には下腹に毛の無い姐さんもまじつてるんだからね。」

「私は御免かうむりませう。」

大島さんが興に乘つてしやべつてゐる横から突然牧師は叫んで立上つた。人々の視線は驚きに輝いて彼の一身にそゝがれた。

自分は先刻からのなりゆきを無關心に眺めて居たが、些細な事に角目立ち、それも如何なる事に反對したいのか、つかまへどころもない程愚かしい牧師の態度を小面憎くも思つてゐた。

「御免かうむる。何故御免かうむるんだ。理由を聞かうぢやないか。」

大島さんも氣色ばんでなじるのであつた。

「理由は簡短です。私はさう云ふ催しを好かんです。」

「嫌ひだつて云ふんならしかたが無い。けれども、折角この船の人全體が氣を揃へて遊ばうつて云ふのに、君一人いやだつて云ふのも變ぢやないか。賞品を賭けるのがいけないつて云ふのか、

芝居をするのかいけないつて云ふのか、一體わけがわからないぢやないか。僕はむづかしい事は云ひ度くない。たゞ君がさう云ふ態度を取ると云ふのは、御職掌柄にも似合はないと思ふんだ。喰へず嫌ひはいけないよ。君が卑しむ事がどんなものかも知つて置かなくちやいけない。悉皆君、人生の事實なんだ。」

大島さんはいかにも堂々たる議論をしてゐるつもりらしく見えるのであつたが、人生と云ふやうな言葉を使ふ柄ではないので、なんとなくをかしかつた。

「イヤ私は人生の不潔な方面は見あきたです。」

牧師も亦一大問題の討議をしてゐる態度で熱心に云ひ張るのであつた。

「不潔。何が不潔なんだ。運動會をやるのが何處が惡いんだ。」

「イヤ誤解してはいけません。私は運動會を不潔だとは云はんです。」

「ぢやア何がいけないんだ。」

「私はその全體のやりかたが、貴方のおつしやる通りだと、面白くないと思ふのです。素性もわからぬ女に三味線をひかしたりなどして、一體芝居はあまりいゝ催しとは思ひません。殊に酒を飲まなければ樂しめんと云ふ理窟は無いですな。」

「何故芝居が悪いんだね。それこそ理窟がないぢやないか。それに今聞けば君は素性もわからない女とかなんとか云つたが、そりやア他人に對して失敬ぢやないか。一體全體變に窮屈な事を云つて、耶蘇でない者を見ると、無闇に罪の子だとかなんとか云ふんだらう。僕アよくは知らないが、耶蘇教は人を愛する教へだつて云ふんぢやないか。」

「左様です。しかし罪のある者清からざるものを憎む事は、私をして云はしむれば、基督教徒の特權である。あくまでも惡きものを排斥する。かくしておのれを清く、世を清く保つ事が、又吾々の義務である。」

牧師は全く說教をする時の調子で、ギゴチないヂェスチュアを用ゐながら云ひ切つた。

「しかし牧師さん。」

田邊老人は、大島さんが憤然として何か云はうとして訥つた時、柔く聲を掛けた。

「成程惡い事を退けると云ふのは結構だが、何もその慰みに芝居をやると云ふのが惡い事とは思へないし、又少し位お酒を出しても別段罪惡呼ばりするにも當らないかと、マア吾々は思ひますが。」

「そりやアさうですとも。一體私共は無學で耶蘇の方の事はわからないんだが、人間には樂みつ

て事がありまさアね。」

一人がたまりかねて口を出すと、又二三人同じやうな事を云ふので、

「ハハ、、牧師さん大分包圍攻撃を受けますな。どうです皆さんのおつしやる事だから贊成なさつては。」

と船長迄も笑談（じやうだん）めかして云ふのであつた。

「そいつはいけない。何も無理に贊成して貰ふには當らないんだ。」

大島さんは船長の言葉をひつたくつて、

「たゞ吾々は樂みを共にしようつて云ふんで一應皆に相談しただけの事で、何もわからない人間迄無理に贊成させようつて云ふんぢやないんだから。」

「イヤ私も遺憾です。折角諸君の計畫された事も、不幸にして目的をあやまつて居（を）るので贊成出來ません。」

「何が目的をあやまつてるんだ。自分のわからずやを棚にあげて。」

「わからずやですと。貴方は人を侮辱なさるか。」

牧師は一度坐つたのが、又勢ひよく立ち上つた。

「目的をあやまつて居るではありませんか。諸君。樂みを共にしようと思はるゝなら、他にいくらでも高尚な娯樂がありませう。一堂に會して清い談話を交換するとか、又は誰人かに有益な話をして貰ふとか。」

「馬鹿なッ。君の他にお說教なんかしたがる人間はゐやアしない。そんなに說教が好きな癖に、一昨日の日曜はサアヴイスがなかつたんだね。」

「お默りなさい。」

牧師は眞赤になつて怒鳴つた。

「惡口もいゝ加減になさらんか。」

「イヤ君、さう怒るものぢやないよ。」

大島さんはかへつてわざとらしく落着いて聲までもおだやかに、

「僕はたゞほんとの事を云つた丈なんだ。それに又たとへ惡口だつたにしてもだね、怒るつて事はないさ。耶蘇は右の頰つぺたを打たれても怒らないで、左の頰つぺたを敵に向けるつて云ふんぢやないか。こいつア此間の晩君に聞かされたんだから確かだ。その時僕が云つたさ。そんなべら棒な事があるもんか、そんなら君にもそれ丈の悟りがあるかつて云つたら、君は勿論だと云つ

たぢやないか。あれはほんとなんだらう。」
大島さんは意地の悪い笑ひを浮べながら、たゝみかけて問ひかける。牧師は怒をかくす事が出来ないで廣い額に筋を走らせて突立つてゐたが、此の時グツト落着きを見せて、稍々震へを帯びた聲で云つた。
「勿論です。吾々は如何なる迫害をも忍んで受けなければなりません。」
「それがほんとなら今僕が、いきなり君の横つ面を張り飛したらどうだね。それでも君は怒らないか。」
大島さんは牧師の目の前に顔をつき出して云つた。
「怒らんです。」
「きつとか。」
大島さんは突然叫んで拳を振上げた。ハツト思つた瞬間に、船長が危ふくその手を押へた。
「どうしたんです大島さん、そりやア亂暴過る。」
田邊老人もその他の人も、彼を抱きかゝへて、なじるのかなだめるのか、さゝやき聞かせる。
牧師はあつけにとられてキヨトンとして居た。

「ナニ放して下さい、構ふものか。當人が承知なんだ、一番試してみなくちやア。」
「そりやアいけない。牧師さんも亦大概になさりやアいゝのに。」
「イヤ私はあくまでも屈せんです。」
「それがおだやかでない。」
老人はオドオドして手ばかり振つて居た。
「サア兎に角貴方はお室の方に。」
事務長が人をかきわけて出て、牧師の手を取つて引張つた。引張られるまゝに牧師は喫煙室の外に出たが直ぐに其の姿は事務長と並んで船室に導く階段口に沈んで行つた。
後は又ひとしきり牧師を罵る嘲笑が何時盡るともわからずに、皆の口からほとばしり出るのであつた。
自分は芝居のはねた心地で立上ると、又甲板の潮風に吹かれに出た。
荒狂つた風雨のあとも殘り無く晴れた。そらぞらしく凪ぎ渡つた海面に、日光も光り輝いた日の午後から、甲板の上で運動會は催された。

世話好きの四等運轉士(フォスメイト)と物馴れた賄方(スチユワアド)を相手に、大島さんはシャツ一枚になつて準備をした。廣島山口あたりから、遙々亞米利加の野に働いてゐる見た事もない男の妻となりに行く寫眞結婚の女達も、穴藏のやうな船室から出て來て、火夫やボオイにまじつて、旗拾ひに綱引に笑ひ興じた。勝つた者は一段高いところにひかへた田邊老人の手から、それぞれ賞品を受け取つた。かゝる船中の小社會の長閑な集りの中にも、牧師だけは見えなかつた。時折、今日は人氣(ひとけ)の無い上甲板を聖書(バイブル)を手にしながら、何か禱るやうにつぶやきながら、コツコツと規則正しい歩調を取つて往きかへりする、彼の丈高い猫背の姿を認めた。

狹い船の上で、乏しい道具を巧みに用ゐて、さまざまの競技を仕組み、僅かな人の一團が長い海の旅の一日をこぞつて樂み遊ぶ有樣は、四方を圍む海洋の偉大なれば偉大なだけ、それだけ人間がちひさな哀れな、お互ひに縋り合はなければならないもののやうに思はれるためか、不思議に自分には嬉しかつた。何時になく、自分の方から人々の間にたちまじつて、その競技のをかしさに強ひても一緒になつて笑ひ度かつた。

さうしては又合間合間に、酒好きの船員と、今日ばかりは無禮講でなくてはならない氣がして、大つぴらに喫煙室で祝盃を擧げた。

「今日はお祭りですから。」

「やりませう、やりませう。」

などゝ邪氣の無い船の人々の高笑ひの中に捧げられるグラスにグラスを合せて飲んだ。

「山川さん、大島さんが探してらつしやつてよ。」

女客の一人が、恰も四五人で更に祝盃の數を重ねようとするところへ、扉口から顔を出して呼んだ。

「只今。」

さう云つて吾々はグラスを干して、打ち揃つて出て行つた。

「山川さん、君はいかんよ。先刻からまだ何もやらないぢやないか。今度は盲馬競爭つて云ふんだから是非出なくちやいけない。」

大島さんは待ち構へてゐて自分の腕をつかんだ。

「エヽ今に何かやりますよ。それよりも貴方がやらなくちやいけないぢやありませんか。」

「僕。僕はもう先刻から馳け通しだ。勿論今度もやるよ。君のやうに飲んでばかりゐられちやア困るね。」

「ナニ今一寸心祝ひをやつてゐたんです。」

「心祝ひもいゝ加減にしたまへ。」

大島さんは如何にも忙しいらしく早口に云ひ捨てゝ、一同の方に向き直ると、

「サア今度は盲馬競爭ですよ。」

と叫んだ。

船員や男客を一列に並ばせて、

「つまりこいつは一人が目かくしで馬になる、一人がそれにおぶさつて、向ふの旗迄行つて歸つて來るんです。乘手は口をきいちやアいけませんよ。たゞ馬の耳を引張る丈なんです。」

自分一人で考へ出したかのやうに彼は說明する。

「馬は役が惡過ぎますね。」

誰かゞ云ふと人々はわけもなくドツト笑つた。

「サア山川さん、君もやるんだ。僕も這入るから。」

「だつて私は馬は御免ですよ。」

「ナアニ君は馬だ馬だ。その身體だもの、馬には持つて來いだよ。」

云ひながら無理やりに自分の上着を脱がしてしまつた。

自分は人々の笑聲の中で目かくしをされて、小柄な船長をおぶつた。ひとつ思ひ切つて誰でも構はずぶつかつてやらうなど丶、酒機嫌は心地よくそ丶のかすのであつた。

合圖の笛と同時に向ふ見ずに馳け出した。何かに突當る迄行くに限ると思つた。滅茶々々に馳けた。乘手の船長が耳を引張つたので、方向を轉じて、又眞一文字に引かへした。途中で、誰だかわからないが二三人と、いやつて云ふ程ぶつかつた。相手は倒れたやうだつた。ガムシヤラに決勝點に飛び込んだ。

「一等々々。」

船長は目かくしを解いてくれながら、田邊老人の手から受け取つた敷島の箱を高く振り廻した。

「どうです。だから君は馬には持つて來いだつて云つたんだ。」

大島さんはハアハア息を切らしながら目かくしを取つた。

「サア祝盃々々。」

自分は自分でもをかしいと思ふ程はしやぎ切つて、又人々とうちつれて酒に走つた。

その夕ぐれ、海は疲れたる人々の心にやはらかに暮れて行つた。

暗い海を吾々の船は舳に一點の灯を高く揭げて進んだ。その船室の内部では、華かに燈火をつらねて、後部の廣い三等室に設けられた舞臺を前に、人々は笑ひさゞめいて居た。○○丸演藝會御中とうす墨の滲んだペラペラの引幕の奥から、浮氣な三味線のもれて來るのも、折柄なれば單純なしめやかさを添へて居た。

忠臣藏七段目をしくんだ茶番が濟むと、今度は何の芝居ともわからない斬つつ張つつの一幕が、始めから無邪氣に喝采の機會を待ち構へてゐる見物の拍手に値ひした。橋袂に傘の雫を切つて待ち伏せして居た百日かづらの男が、向ふから來る俠客らしいのを呼び止めると、うぬア何處其處の誰それだなと、俠客がせき込んで云つた。なんだかちつとも見當のつかないものだつたが、柔道の手を使つた猛烈な立廻りのあまり熱心なをかしさに、誰も彼も腹を抱へて笑つた。

少し酒氣を帶びた船員の足下の危ない劍舞に次いで、暇さへあれば讀書してゐる食卓のボオイが、琵琶をかゝへて出て來た。彼は洗ひざらしの浴衣に借物らしい短い袴をはいて、羞しさうに一禮した。蒼白い血色の悪い顔を仰向けに目をつぶると、慄へを帶びた聲でうたひ始めた。

その父は彼が母の胎内に在る間に行衞をくらました。その母は産後の病で死んでしまつた。ボオイは生れながらに父母を知らなかつた。年老いた祖母の手にはぐゝまれ、祖母の亡くなつた後

は、人々のなさけで育てられた。

「陸に上つてもつまりません。歸る家もありませんから。」

乘合ひの客に問はれるまゝ、彼は重い口で答へるのであつた。そのボオイにかくし藝があらうとは思はなかつた。自分は琵琶は好まないのだが、孤兒の聲は細く悲しく、その琵琶の聲も哀れなので、聽いてゐるうちにも親の無い子の生ひ立ちを思ふしめやかな心であつた。

それが終ると又落語材料(だね)の茶番があるのであつたが、晝の酔も覺め果て、なんとなく心ものうく、身體はだるく、睡氣(ねむけ)さへ催して來たので、一人ひそかに酒場(バア)を志して席をはづした。月の無い夜の海をつつむ空のあちこちに、細かい星屑のちらめくのを仰ぎ見ながら船橋(ブリッヂ)を上る時、欄干に置いた手の平に冷々と夜露が感じられた。

酒場の戸はしまつて居た。酒場ボオイも、今夜は茶番の手助けでもしてゐるのだらうと思つて、呼鈴(ベル)を押すのは思ひ止つた。

遙かなる空を見詰めてゐると、星あかりに心が引かれて行く。自分は左舷の欄干に寄つて、海の上の此の秋の一夜を云ふばかりなくなつかしいものに思つて佇んだ。

今立去つた船室から、かすかに夜風の持つて來る三味線にまじる鉦(かね)の音(ね)の、とぼけた拍子を耳

にしてゐると相模あたりの海邊の村にかゝる夜を寂しく過した日の事なども思ひ出されて來た。夏の間の繁昌もあわたゞしく過ぎて行けば、避暑地の町は土の底から悲しさが湧いて來るやうにひつそりする。夜毎夜毎鎮守の森で村の若衆の秋祭の囃子の稽古が始まり、鄙びた笛太鼓が冷やかに澄んだ空氣を通して聞えて來る。海邊の好きな身にも其頃の底の知れない寂寥には既に都戀しさがはげしくなつて、突然東京の家に歸つてしまふ事もあつた。

フトそんな氣持に想ひ沈つた自分は、それから引きつゞいて、海の向ふの遥かなる故郷の家の事なども想はれて來た。今は父が夜毎の寢酒の時間である。著しく量も減じ、直ぐに醉ひの現はれるやうになつた父の盃を持つ手は、僂麻窒斯の惱みで震へてゐるであらう。側には母が田舍に住む兄や姉の許にこまごました手紙を書いてゐるに違ひない。弟妹達は明日のリイダアの下調べも終つて、自分達の部屋に枕を並べて眠つたであらう。自分には慈愛深き父母であり、優しい妹であつた。我家にゐた時その人々につれなく、父の言葉には屢々背き、母をして自分の爲に心を配はして涙ぐませた不孝の子であり、弟妹にはつひぞ優しい言葉ひとつ掛けた事も無い氣むづかしい兄だつた事も、しみじみ悔まれて來た。かうして外國に出てしまつたら二度と家には歸るまいと時々は考へもした、そんな心をかりそめにも持つては濟まないと思ふと、愈々心弱くなつて、

中略

欄干に置いた自分の手の甲に額をつけて目を閉ぢた。此の頃の身に知らなかつた柔かななつかしさが自分を捕へて、海も空もすべてその心地の中にとけて流れ入るやうな氣がした。

暫時(しばらく)、其處にそのまゝ、舷側(ふたばた)に來ては碎けて引く波の音に聞くともなしに聞き入つた。

フトかすかに人の足音がした。自分は思ひも掛けなかつたので驚いて振りかへつたが、それは空耳だつたのか、あたりには誰人(だれ)の姿も見えない。波の音にまじつて、それよりもつと微かに茶番の囃子が聞えて來るばかりである。けれどもなんとなく心が亂れて動悸がして來た。

又暫時耳を澄して居ると、たしかに其處いらに人の氣配がする。どうしたのか其の時の自分には何か思ひも掛けない不祥な事が身近に起りつゝあるやうに感じられた。

自分は足音を忍んで喫煙室の窓の下に忍び寄つて、内部(なか)の氣配をうかがつたが、其處には誰もゐないらしい。ひそかに扉をあけて覗いても果して誰もゐなかつたが、その時少し聲高に何かさゝやき合つてゐる人聲と、右舷の甲板を歩く足音とが耳に近く迫つて來た。どうしても何か重大事が、自分の目の前に起りかけてゐるらしく思はれてしかたがなかつた。自分は自分の心を失つたものゝやうに、その物音に誘はれて喫煙室を横切ると、反對の側の窓の細目にあいてゐる透間から外を覗いた。

月空をうけてうすら蒼い水あかりの漂つてゐる甲板に、腕を組んでゐるのか肩と肩とを抱き合つてゐるのか、二人の人の一つになつた黒い姿が、此方に背をむけて動くともなく動いてゐた。と思つた瞬間に、その一人は彼の着のみ着のまゝの亞米利加の女だとわかつた。しかし相手は誰だらう。自分は好奇心に捕へられてしまつた。息を殺して見てゐると、人影は靜に、自分の位置から見える限りを遠ざかつて艫の方に行つてしまつた。それでも自分は再び其處に、自分の身を寄せた窓の前を通る二人を豫期して動かずに忍んでゐた。

間も無く又話聲が聞えて來た。それは女の早口な英語で、何かさゝやいてゐるのらしい。つゞいて前と同じ姿勢ではあるが、今度は此方に向つて引かへして來た二人が目にはいつた。男は牧師だ。うす暗がりではあるけれども、丈高い彼の特有の足取りが自分を驚かした。

牧師は肥つた女の肩を抱いてゐる。一歩一歩と運ぶのも、身を寄せかけた女の重さを支へる爲によろめくので、忍ぶ足音もあたりの靜寂な丈高く自分の耳を打つた。

自分は其場のなりゆきから、如何に次の瞬間が描き出されるかを注視しようとする熱心と、人の秘事を透見するのは卑しい事だと自分を責める氣持と入りまじつた混亂の中にあつた。自分が此處に透見してゐると云ふ事か、見つかりはしないだらうかと云ふ掛念もあつた。假に自分の身

をかくし度くなつた。それでもその場を立去るのには、あまりに好奇心が強かつたため、そつと窓際から顔を引込めると、室の片隅の長椅子に腰掛けて、様子をうかゞはうとする根性が又自分を誘つた。

うす暗がりを手探りで長椅子のところ迄たどつた時、その側に置かれた人造石の卓子（テエブル）に指先きがつめたく觸れた。その上に灰皿があつた。それに氣がつかずに、一度差し延べた手を引かうとした手首にかけて床の上に音高く落してしまつた。

銀製の物の音の石造の卓（たく）に觸れて響いた時、自分はそれを押へ止めようとしてあわてた拍子に椅子の脚を蹴飛ばした。いきなり喫煙室の扉をあけると、直ぐとつつきの階段口から船室の廊下に馳け下りた。誰も其處に居なかつたのでホツトした。ひどい動悸だ。自分はわざと平氣を装つて大またに歩いて自分の部屋に歸つた。

惡事の露顯したやうな胸のときめきと爲す可らざる事をしたために受ける恥辱の念とに惑亂してゐた。胸は高く波打ち、足はかすかに震へてゐた。

暗がりの室内の椅子の上に仰向けに寢ころんで、なほ聞き耳を立てゝ居た。甲板の二人はどうしたらうと思ふと氣がゝりだつた。まづい事をした後悔、逃げ出さなくてもよかつたと思ふ後悔

かこんからかつてしまつた。透見をした自分の下劣な姿がありありと見えた。

その時、廊下をあわてゝ逃げて行くやうに過ぎる足音がして、彼の女の部屋と思はれるあたりで、戸に觸れる鍵の音が聞えた。直ぐに又その戸のしまる音がした。さうしてひつそりした。

閉窓の外に近い波の音が又韻律的に聞えて來た。

フトその玻璃戸を透して、冷々とした秋の空に夜更けて數を增した星屑の輝くのが見えた。（大正元年起稿――中止――三年八月續稿、同月二十三日稿了）

附記。此の一篇を發表するのは自分にとつてかなり考へものだつた。大正元年の暮から二年の春にかけて亞米利加の學校町の下宿の二階で學業の忙しかつた間に八分まで書いた。しかし中途でいやになつてやめてしまつた。二年八月紐育のハドソンに近い宿の暑苦しい一室で英吉利に渡る準備の爲め旅鞄を整理した時その他にも夥しくあつた書きかけの原稿の大半は破いて川に流してしまつたが此の一篇はそのまゝ手もとに殘したばかりでなく不思議にも稿を續ける氣になつた。しかし稿了の後又いやになつて鞄の底に投げ込んだまゝ五年の秋歸朝した迄くすぶつてゐた。

自分は此の二三年初めて藝術の作品の價値がわかつたやうな氣がする。さうして自分の書いたものゝ下らなかつた事を恥ぢた。偉大なる作家の作品を讀めば讀む程自分に愛想がつきた。自分が何も書かなく

なつたのはそれからである。
今度歸つて來ても自分は當分何も書かないつもりだつた。ところが親友澤木梢氏が「三田文學」の編輯主任になつていろ〳〵計畫してゐて自分にも是非加勢しろといふのであつた。友だちの爲ならと思ふ自分の性狀はどうしてもいやと云はせない。しかし何も書きたくないので即ち此の五六年の間に書きちらしたもので偶然破棄されなかつた原稿數百枚を鞄の底から取出して全部澤木氏の手に任せる事にした。五年十二月の「三田文學」から連載しはじめた「海上日記」もその中の一篇である。「船中」もその中の一篇である。「中央公論」に寄稿するやうに依賴された時自分は今全く何も書けない、書きためたものは悉皆意に滿たない、さうしてそれはみんな「三田文學」に送る約束になつてゐるからとても駄目だと思つて頂きたいと述べた。ところが此の話を聞いた澤木氏はかへつて自分に寄稿應諾を勸めた。即ち此の一篇は同氏の厚意で「三田文學」から貰つたものである。久しぶりで讀み返して自分ながらまづいと思つた。一言にして云へば下らないのである。訂正する氣もないので今度はたゞ淸書したゞけだ。餘計な事だけれども自分の氣が濟まないからこれだけの事を書き足した。――大正五年十二月九日――水上瀧太郎

後記

本卷は作者二十五歳の明治四十四年四月の處女作から、概ね執筆の年次を追つて、豫定の紙員に達するまで十五篇の作品を收録した。

「山の手の子」

明治四十四年七月號「三田文學」に阿部省三の筆名で發表された處女作である。この「省三」が「肖三」の誤植であることは、この以前に雜誌「スバル」「昴」に發表された歌稿の筆名が阿部肖三となつてゐること、阿部家所藏の掲載誌にもわざわざ自筆の訂正が施されてゐることで明かであらう。小泉信三氏の記憶にも當時「日に三度省みるなど」といふのは道學者めいて不愉快だ」と語られたことがあつたさうである。この誤植は明治四十五年四月號「三田文學」所載の歌稿に再び見られ、こゝでも又自筆の訂正が施されてゐる。

「山の手の子」の以前に習作二篇があつたことは作者自ら記されてゐるが、(貝殼追放「「永井荷風先生招待會」)いづれも破棄されてしまつたので現存の創作ではこれが最も古く、且つ最初に公けにされた作品である。大正元年十一月十五日籾山書店發行創作集「處女作」の中では、本篇は「處女作」と改題されてゐる。

本卷で敢て右の改題名を採らず、當初の題名を採用したのは、作者自身その後「貝殼追放」中（大正二年「その春の頃の序」、大正三年「永井荷風先生招待會」、大正十五年「島崎藤村先生のこと」、昭和二年「原稿拜見」、昭和五年「澤木四方吉氏素描」、昭和八年「三田文學編輯委員隱居の辭」等）の隨處で「私の處女作『山の手の子』……」といふやうな言葉を使用され、明かに右を題名とされてゐるのに據つたものである。

創作集「處女作」は作者外遊中に（明治四十五年九月二十八日渡米）編纂上梓されたもので、作者は直接關與されず、句讀等の點でも掲載誌との間に著しい差異がある。この點につき當時その衝に當つた籾山仁三郎氏よりも「全集には單行本を採らずして三田文學所載の原文を採るべきにや」との注意があつたので、本卷の校合校正はすべて特に原據を尊重することにした。從つて本篇の校訂も、底本を創作集「處女作」に採つたが、掲載誌「三田文學」を原據として句讀措辭はすべて同誌により、且つ阿部家所藏の作者の補訂ある單行本並びに掲載誌を參照した。

「もの丶哀れ」

明治四十四年十一月號「三田文學」に「新次の身の上」の題名で發表され、創作集「處女作」に收められた際に改題されたものである。水上瀧太郎の筆名はこの時初めて現れたもので、爾來創作にはすべてこの筆名が使用されるやうになつた。この作品の發表された翌十二月號「三田文學」の卷末消息欄の最後に、「お斷りの事」と題して次のやうな一文がある。

「三田文學」十一月號所載小說「新次の身の上」は全く私の筆さきにてこしらへあげたお話なのに氣の早い方々は私の自傳として讀み且つ是非遊ばされ、中には新次の父母は小生の父母なりと斷定せられし方も有之頗る迷惑致しましたから貴重な紙上を拜借してお斷り致して置きます。あれは小說で御座いまして、三面記事では御座いません。新次は新次で御座いまして瀧太郎では御座いません。（十一月十日）水上瀧太郎

本全集では大體作品に附隨した前書や後書は本卷中に採錄する方針であるが、この場合は上記の如く月を異にして發表されたので採らなかつた。

本篇の校訂は「處女作」を底本とし、掲載誌を原據として採り、作者の補訂ある單行本並びに掲載誌を參照した。

「ぼたん」

明治四十五年二月號「三田文學」に發表。大正四年五月號「三田文學五週年記念號」に再出。創作集「處女作」の中に收めらる。校訂は掲載誌に據り、且つ作者の補訂ある「處女作」並びに右掲載誌、及び再掲載誌を參照した。

「うすごほり」

明治四十五年二月號（スバル）「昴」に發表。「處女作」の中に收めらる。校訂は掲載誌に據り、且つ作者の補

正ある「處女作」を參照した。

なほ創作集「處女作」は、前掲の四篇の外に「嵐」「いたづら」の戲曲二篇を收め、卷頭扉裏面に「小泉信三槇原可吉二氏に贈る」の獻辭がある。

「噂」

明治四十五年八月號(スバル)「昴」に發表。大正四年十二月十日籾山書店發行創作集「心づくし」の中に收めらる。校訂は「心づくし」を底本とし掲載誌を原據として、併せて作者の補正ある掲載誌を參照した。

「賢さん」

明治四十五年四月號「三田文學」に發表。「心づくし」の中に收めらる。「三田文學」には、これと同時に、阿部省三(前記の如く阿部家所藏の掲載誌には自筆で「宵」と訂正あり)の筆名で「かへらぬこと——故田中憲君のために」と題して、短歌二十首(本全集八卷收錄)が掲載されてある。本卷の校訂は「心づくし」を底本とし掲載誌を原據として、且つ作者の補正ある掲載誌を參照した。

「沈丁花」

明治四十五年五月號「新潮」に發表。大正二年一月二十日籾山書店發行創作集「その春の頃」に收錄。(右單行本中の執筆年月が明治四十四年となつてゐるのは、明かに明治四十五年の誤植である。)校訂は「その春の頃」を底本とし、掲載誌を原據として、同じく作者の補正ある單行本、並びに掲載誌を參照した。

「途すがら」

大正元年十月號「新小説」に發表。創作集「その春の頃」に收錄。校訂は「その春の頃」を底本とし揭載誌に據り、同じく作者の補正ある單行本並びに揭載誌を參照した。

「その春の頃」

大正元年十月號「三田文學」に發表。創作集「その春の頃」に收錄。校訂は「その春の頃」を底本とし揭載誌を原據として、作者の補正ある單行本を參照した。

なほ創作集「その春の頃」は前揭の三篇を收錄したもので、奧附に發行者の署名がなく代りに編輯者久保田万太郎と記されてあるのは、最初の創作集「處女作」と同じく、作者が當時渡米中のため發行書肆の便宜上なされたもので、實際の編輯にはすべて發行書肆が當つた由、久保田氏の證言があつたので序ながら附記しておく。

「心づくし」

大正二年四月號(スバル)「昴」に發表。創作集「心づくし」に收めらる。但し單行本には題名傍の獻辭がない。校訂は「心づくし」を底本とし揭載誌を原據として、作者の補正ある揭載誌を參照した。

「友たち」

大正二年六月號「三田文學」に發表。創作集「心づくし」に收錄。大正十二年六月五日大阪毎日新聞社發行創

作集「明窓集」に再出。校訂は掲載誌に據り、作者の補正ある掲載誌、及び再出本を參照した。

「世の中」

大正二年七月號「三田文學」に發表。創作集「心づくし」に收錄。但し「心づくし」集中には後書はない。創作集「明窓集」に再出。校訂は掲載誌に據り、作者の補正ある掲載誌、及び再出本を參照した。

なほ創作集「心づくし」は前揭の五篇の外に「評議員會」「良緣」の戯曲二篇を收め、卷頭扉には「梶原可吉氏に贈る」の獻辭がある。

「先生」

大正七年一月十八日より二月七日までの大阪每日新聞(この中一月二十一日、二十三日、二十六日、二十七日、二十九日、三十日、三十一日、二月一日の八回休載)並びに一月十三日より二月六日までの東京日日新聞(この中一月二十一日、二十七日、二十八日、三十日、二月二日、三日、五日の七回休載)に各十三回に亙つて連載されたもので、大正九年五月二十三日春陽堂發行創作集「大空の下」に收錄。執筆月日の不詳なのは、後出の「船中」後書や「海上日記序」(貝殼追放一)等に見られるやうな事情で、作者が渡米留學中の作品を後に到つて補正されたものではないかと推定される。本篇の校訂は「大空の下」を底本とし、掲載紙を參照した。

「海上日記」

大正五年十二月號「三田文學」より大正六年一月、二月、三月、四月、五月の六號に亙つて連載されたもの

で、「三田文學」目次には、六年二月號、三月號には「小品」、その他には「隨筆」と記されてある。この別は、作者自身の附されたものかどうか今明かに出來ないので、敢て本全集六卷の隨筆集とは別に本卷に收めた次第である。大正六年十二月十八日春陽堂發行の創作集「海上日記」に收めらる。校訂は「海上日記」を底本とし、掲載誌を原據とした。

「船中」

大正六年一月號「中央公論」に發表。創作集「海上日記」に收めらる。但し創作集「海上日記」には後書がない。校訂は「海上日記」を底本とし、掲載誌を原據とした。

なほ創作集「海上日記」には前掲の二篇の外に「同窓」「椋の樹蔭」の二篇が收められ、卷頭扉に「泉鏡花先生同奥樣にささぐ」との獻辭がある。

本卷の校合、校訂は、作者の最初期の作品集でもあり、且つ前述のやうに單行本と掲載紙誌との間に著しい差異も見られるので、本全集編纂の實行委員間で協議の結果、能ふ限り原據を尊重して最初期の作者の俤をとどめしめることとした。從つて「虫」と「蟲」、「爲」と「爲め」、「冷い」「冷たい」「冷めたい」の如き措辭の不統一は、個々の作品により掲載紙誌の異同によつてまぬかれ得なかつたし、又敢て補正することはつとめて避けた。この例は送假名、熟語に於いて特に甚しく、掲載誌によつては、明かに作者の慣用を無視したと

思はれるものもあつたが、さういふ個所でも、單行本にもまたそのまゝ踏襲されてゐるものは、すべて原據にしたがつた。ルビの使用は、校訂規約によつて「原」とすべきやうな個所にも附し、なほ作者の校訂本に自筆で補正のあるものは、煩を厭はず能ふ限りそのまゝ殘した。「ちゝはゝ」の如きはその例である。

本卷の校合校訂には萩野忠治郎、水木京太兩氏の多大な助力を得た。(平松幹夫)

精興社印刷　長濱製本

昭和十六年三月二十日印刷
昭和十六年三月二十五日發行

水上瀧太郎全集　一卷

著者　阿部章藏

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波茂雄

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者　白井赫太郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行所　岩波書店



